

**YAMAGUCHI UNIVERSITY
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.4**

CONTENTS

Chapter I	The project on the Yamaguchi University campus in the 2006 fiscal year 1
Section 1	General outline of the project on the Yamaguchi University campus in the 2006 fiscal year 1
Section 2	Excavation on the Yoshida campus "Yoshida site" 5
Section 3	Excavation on the Kogushi campus "Yamaguchidaigaku-Igakubukounai site" 153
Section 4	Excavation on the Tokiwa campus "Yamaguchidaigaku-Kougakubukounai site" 154
Appendix 1	The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2006 fiscal year 155
Appendix 2	List of researches in Yamaguchi University campus 158
Chapter II	Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities 178
Section 1	Exhibition activities 178
Section 2	Social education activities 183
Appendix	Sulfuric acid pot made in SanyoOnoda City and big pot-making of Iwami ware, Horikoshi ware 186

山口大学埋蔵文化財資料館年報

**山口大学埋蔵文化財資料館年報
—平成18年度—**

平成十八年度

Published by
Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 2010

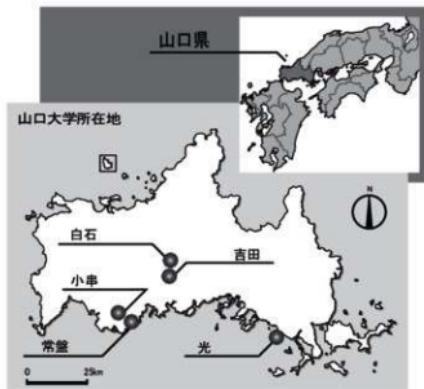
二〇一〇年

2010

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成18年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報
平成18年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2010

山口大学埋蔵文化財資料館

序

平成18年度は、昭和41年度から始まった山口大学の統合移転に伴い、吉田遺跡の発掘調査が初めて行われてから40年の節目にあたります。加えて、昭和54年度以降の当館による吉田遺跡の発掘調査件数も50件を超える少しずつではありますが、吉田遺跡の状況が明らかにされつつあります。特に平成18年度は、動物医療センター敷地で柱が残存した状態で奈良時代の掘立柱建物跡が検出されるという大きな成果がありました。

また、当館は大学情報機構に属する一組織として、吉田構内をはじめとする大学構内の調査研究成果を展示活動や公開授業など様々な形で、学内・地域社会の皆様に幅広く還元することを積極的に推進しております。

本書には、当館が平成18年度に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、館員の研究活動を収録しました。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願っております。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力をいただいた関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。あわせて、今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年2月

山口大学埋蔵文化財資料館長
糸長 雅弘

例言

1. 本書は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」と呼称）が平成18年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畠直彦（大学情報機構埋蔵文化財資料館助手）・横山成己（大学情報機構埋蔵文化財資料館助手）・有本浩紀（事務局学術情報部情報サービス課教務補佐員※当時）が担当した。
また、現地での調査に際しては、前田産業株式会社、株式会社クマヤ組、有限会社久富工務店に協力を依頼した。
3. 出土資料の整理は、平成18年度から平成21年度にかけて、資料館員である田畠・横山・植木美佳（事務局学術情報部情報サービス課教務補佐員※当時）・有本・乃美友香（事務局情報環境部学術情報課教務補佐員）・藤野好博（事務局情報環境部学術情報課教務補佐員）が担当した。
4. 発掘調査における現地での実測は田畠・横山・有本が、写真撮影は田畠・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を田畠・横山・藤野が行った。製図・整図は田畠・横山・藤野・乃美が行った。
5. 発掘調査に伴う事務は、事務局情報環境部学術情報課総務係（当時）が統括した。
6. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
7. 本文の執筆分担は目次に記した。第1章第2節2については、各項の文章末に執筆者を記した。
8. 本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、そのいずれもが文化財保護法（法律第214号）で示されるところの「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置している。山口大学各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡　　白石構内～白石遺跡　　小串構内～山口大学医学部構内遺跡
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡　　光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-24区南西隅を起点（構内座標 $x = 0$, $y = 0$ ）とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第III系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206,000$$

$$y = Y + 64,750$$

3. 平成18年度に実施した予備発掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。
吉田構内農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査……………YD2006-1
吉田構内農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査……………YD2006-2
教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査……………YD2006-3
吉田構内資料館（東亜経済研究所）新営工事に伴う予備発掘調査……………YD2006-4

4. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

堅穴住居……SB	土壙……SK	溝……SD
柱穴・ピット……Pit	落ち込み……SX	

5. 本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

6. 標高数値は海拔標高を示す

7. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

8. 遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器
断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

本文目次

第1章 平成18年度山口大学構内遺跡の調査

第1節 平成18年度に実施した遺跡調査の概要	(横山)	1
第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査		
1 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査	(横山)	5
2 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査	(横山・藤野)	11
3 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う立会掘調査	(横山)	114
4 教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査	(田畠)	115
5 教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う立会掘調査	(田畠)	126
6 資料館（東亞経済研究所）新営工事に伴う予備発掘調査	(田畠)	141
7 プレハブ倉庫移設工事に伴う立会調査	(田畠)	146
8 第一学生食堂改修その他工事に伴う立会調査	(田畠)	147
9 図書館前広場環境整備工事に伴う立会調査	(田畠)	148
10 プレハブ校舎新営工事に伴う立会調査	(田畠)	149
11 人文学部外灯用電源敷設工事に伴う立会調査	(横山)	150
12 テニスコートフェンス改修工事に伴う立会調査	(横山)	151
第3節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		
1 モニュメント設置工事に伴う立会調査	(横山)	153
第4節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査		
1 総合研究棟改修工事に伴う確認調査	(田畠)	154
付節1 平成18年度 山口大学構内遺跡調査要項		155
付節2 山口大学構内の主な調査		158

第2章 平成17年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告 (横山) 178

第1節 資料館における展示・公開活動

1 平成18年度常設展「山口大学の遺跡～吉田遺跡展～」を開催	(横山)	179
2 第22回企画展「吉田遺跡発掘調査速報展2006」を開催	(横山)	180
3 第2回～4回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催	(横山)	181
4 姫山祭にて「幕末期の吉田キャンパス展」を開催	(横山)	182

第2節 資料館における社会教育活動

1 第6回公開授業 「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－」を開催	(田畠)	183
2 山口市立平川小学校児童による集団見学	(横山)	185

付篇 小野田皿山の硫酸瓶と石見焼・堀越焼の大甕づくり－硫酸瓶の研究①－ (田畠) 186

挿図目次

第1章第1節 平成18年度に実施した遺跡調査の概要		
図1 山口大学吉田・白石構内位置図	2	
図2 小串・常盤構内位置図	3	
図3 光構内位置図	4	
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査		
図4 調査区位置図	5	
図5 調査区平面図・断面図	7	
図6 出土遺物実測図	9	
図7 調査区位置図	11	
図8 調査区平面図・断面図	13・14	
図9 調査区内土層断面図	15	
図10 据立柱建物跡1 平面図・断面図	17	
図11 据立柱建物跡2・3 平面図	20	
図12 据立柱建物跡2 柱穴土層断面図	21	
図13 据立柱建物跡3 柱穴土層断面図	21	
図14 溝・土壤断面図	25	
図15 出土遺物実測図（土器）①	31	
図16 出土遺物実測図（土器）②	33	
図17 出土遺物実測図（土器）③	35	
図18 出土遺物実測図（土器）④	37	
図19 出土遺物実測図（土器）⑤	39	
図20 出土遺物実測図（土器）⑥	41	
図21 出土遺物実測図（土器）⑦	43	
図22 出土遺物実測図（土器）⑧	44	
図23 出土遺物実測図（土器）⑨	45	
図24 出土遺物実測図（土器）⑩	47	
図25 出土遺物実測図（土器）⑪	49	
図26 出土遺物実測図（土器）⑫（石器）	51	
図27 出土遺物実測図（木製品）①	53	
図28 出土遺物実測図（木製品）②	55	
図29 出土遺物実測図（木製品）③	57	
図30 出土遺物実測図（木製品）④	59	
図31 出土遺物実測図（木製品）⑤	60	
図32 出土遺物実測図（木製品）⑥	61	
図33 出土遺物実測図（木製品）⑦	62	
図34 出土遺物実測図（木製品）⑧	63	
図35 出土遺物実測図（木製品）⑨	64	
図36 出土遺物実測図（木製品）⑩		65
図37 調査区位置図	114	
図38 調査区位置図	115	
図39 調査区平面図・断面図	117・118	
図40 Pit 1～6 断面図	117・118	
図41 古墳時代河川平面図・断面図	119	
図42 出土遺物実測図	122	
図43 調査区位置図	126	
図44 1区地区割図	126	
図45 2～5区詳細図	127	
図46 出土遺物実測図①	131	
図47 出土遺物実測図②	132	
図48 出土遺物実測図③	133	
図49 出土遺物実測図④	134	
図50 調査区位置図	141	
図51 調査区平面図	142	
図52 調査区土層断面図①	143	
図53 調査区土層断面図②	144	
図54 調査区位置図	146	
図55 調査区位置図	147	
図56 調査区位置図	148	
図57 調査区位置図	149	
図58 調査区位置図	150	
図59 調査区位置図	151	
図60 各地点土層断面模式図	152	
第1章第3節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査		
図61 調査区位置図	153	
第1章第5節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査		
図62 調査区位置図	154	
第1章付録2 山口大学の主な調査		
図63 山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図	171・172	
図64 山口大学白石構内(幼稚園・小学校)調査区位置図	173	
図65 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図	174	
図66 山口大学小串構内調査区位置図	175	

図67 山口大学常盤構内調査区位置図	176
図68 山口大学光構内調査区位置図	177
付録 小野田皿山の硫酸瓶と石見焼・堀越焼の大甕づくり －硫酸瓶の研究①－	
図69 関係諸窯位置図	187
図70 小野田皿山と周辺位置図	187
図71 硫酸瓶のねじ切り	191
図72 硫酸瓶・石見焼甕・堀越焼甕模式図	192
図73 硫酸瓶の変遷模式図	193
図74 日本工業規格 耐酸陶ビン	195
図75 リュウズ実測図	200
図76 堀越系甕実測図	200

写真目次

第1章第1節 平成17年度に実施した遺跡調査の概要	
写真1 吉田構内航空写真	2
写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校） 航空写真	2
写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校） 航空写真	2
写真4 小串構内航空写真	3
写真5 常盤構内航空写真	3
写真6 光構内航空写真	4
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査	
写真7 調査前近景	5
写真8 調査前遠景	5
写真9 調査区西部南壁土層断面	7
写真10 調査区東部南壁土層断面	7
写真11 調査区全景	7
写真12 出土遺物	10
写真13 調査区内土層観察用アゼ全景	15
写真14 東西方向アゼ	15
写真15 東西方向アゼ西端部	15
写真16 挖立柱建物跡1 Pt3埋土断面	17
写真17 挖立柱建物跡1 Pt2埋土断面	17
写真18 挖立柱建物跡1 Pt1埋土断面	17
写真19 挖立柱建物跡2・3柱穴群	22
写真20 挖立柱建物跡2 Pt1断面	22
写真21 挖立柱建物跡2 Pt2断面	22
写真22 挖立柱建物跡2 Pt3断面	22
写真23 挖立柱建物跡2 Pt4断面	23
写真24 挖立柱建物跡2 Pt5・6・SP2断面	23
写真25 挖立柱建物跡3 Pt5断面	23
写真26 挖立柱建物跡3 Pt6断面	23
写真27 挖立柱建物跡3 Pt1断面	23
写真28 挖立柱建物跡3 Pt2断面	23
写真29 挖立柱建物跡3 Pt3断面	23
写真30 挖立柱建物跡3 Pt4断面	23
写真31 槽2断面	25
写真32 土壌1断面	25
写真33 土壌2断面	25
写真34 土壌3・4断面	25
写真35 遺物包含層（L3）上面検出状況	27
写真36 水田暗渠（溝1）完掘状況	27
写真37 谷埋土上面検出状況	27
写真38 谷埋土掘削状況	27
写真39 谷埋土3層底面	27
写真40 谷埋土3層底面遺物出土状況	27
写真41 調査区東部遺構検出状況	28
写真42 調査区東部遺構半掘状況	28
写真43 調査区西部遺構検出状況	28
写真44 調査区西部遺構半掘状況	28
写真45 調査区全景	28
写真46 挖立柱建物跡2・3	28
写真47 調査区西端部流木出土状況	29
写真48 調査区南壁土層断面	29
写真49 調査区南壁土層断面	29
写真50 調査区南～西壁土層断面	29
写真51 記者発表の模様	29
写真52 記者発表の模様	29
写真53 出土遺物（土器）①	66
写真54 出土遺物（土器）②	67
写真55 出土遺物（土器）③	68
写真56 出土遺物（土器）④	69

写真57 出土遺物（土器）⑤	70	写真96 調査区西部遺物包含層検出状況	121
写真58 出土遺物（土器）⑥	71	写真97 調査区西部古墳時代河川完掘状況	121
写真59 出土遺物（土器）⑦	72	写真98 古墳時代河川東肩検出状況①	121
写真60 出土遺物（土器）⑧	73	写真99 古墳時代河川東肩検出状況②	121
写真61 出土遺物（土器）⑨	74	写真100 調査区中央部遺構完掘状況	121
写真62 出土遺物（土器）⑩	75	写真101 調査区東部遺構完掘状況	121
写真63 出土遺物（土器）⑪	76	写真102 Pit 1～3 半截状況	121
写真64 出土遺物（土器）⑫	77	写真103 Pit 4～6 半截状況	121
写真65 出土遺物（土器）⑬	78	写真104 出土遺物①	123
写真66 出土遺物（土器）⑭	79	写真105 出土遺物②	124
写真67 出土遺物（土器）⑮	80	写真106 1 A区北壁土層断面	128
写真68 出土遺物（土器）⑯	81	写真107 1 D区遺物出土状況	128
写真69 出土遺物（土器）⑰	82	写真108 1 D区土層断面	128
写真70 出土遺物（土器）⑱	83	写真109 1 G・H区北壁土層断面	128
写真71 出土遺物（土器）⑲	84	写真110 1 G区遺物出土状況	128
写真72 出土遺物（土器）⑳	85	写真111 1 G・H区北壁土層断面	128
写真73 出土遺物（土器）㉑	86	写真112 2 区南壁土層断面	128
写真74 出土遺物（土器）㉒	87	写真113 3 A地点南壁土層断面	128
写真75 出土遺物（土器）㉓（石器）	88	写真114 4 A地点西壁土層断面	129
写真76 出土遺物（木製品）①	89	写真115 4 B地点北壁土層断面	129
写真77 出土遺物（木製品）②	90	写真116 3 C地点南壁土層断面	129
写真78 出土遺物（木製品）③	91	写真117 3 D地点南壁土層断面	129
写真79 出土遺物（木製品）④	92	写真118 3 E地点南壁土層断面	129
写真80 出土遺物（木製品）⑤	93	写真119 5 A地点西壁土層断面	129
写真81 出土遺物（木製品）⑥	94	写真120 5 B地点西壁土層断面	129
写真82 出土遺物（木製品）⑦	95	写真121 5 C地点南壁土層断面	129
写真83 出土遺物（木製品）⑧	96	写真122 出土遺物①	135
写真84 出土遺物（木製品）⑨	97	写真123 出土遺物②	136
写真85 出土遺物（木製品）⑩	98	写真124 出土遺物③	137
写真86 A 地点土層断面	114	写真125 出土遺物④	138
写真87 E 地点土層断面	114	写真126 調査前全景	141
写真88 調査前全景	115	写真127 調査区全景	141
写真89 調査区全景	120	写真128 A 調査区全景	142
写真90 調査区北壁土層断面	120	写真129 B 調査区全景	142
写真91 調査区南西隅土層断面	120	写真130 A 調査区東壁(A-B)土層断面	145
写真92 繩文時代河川流木検出状況	120	写真131 A 調査区南西隅土層断面	145
写真93 調査区北西隅土層断面	120	写真132 B 調査区北西隅土層断面	145
写真94 調査区中央部北壁土層断面①	120	写真133 B 調査区東壁土層断面	145
写真95 調査区中央部北壁土層断面②	120	写真134 調査区全景	146

写真135 調査区北東隅土層断面	146
写真136 A地点土層断面	147
写真137 B地点土層断面	147
写真138 A地点全景	148
写真139 B地点土層断面	148
写真140 調査区北部土層断面	149
写真141 調査区東壁土層断面	149
写真142 調査風景	150
写真143 D地点土層断面	151
写真144 G地点土層断面	151
第1章第3節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査	
写真145 調査区土層断面	153
第1章第4節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査	
写真146 研究棟東側掘削状況	154
写真147 A地点土層断面	154
第2章第1節 資料館における展示公開活動	
写真148 平成18年度常設展ポスター	179
写真149 平成18年度常設展図録	179
写真150 平成18年度常設展の模様①	179
写真151 平成18年度常設展の模様②	179
写真152 第22回企画展ポスター	180
写真153 第22回企画展の模様①	180
写真154 第22回企画展の模様②	180
写真155 第22回企画展の模様③	180
写真156 第3回埋蔵文化財特別展の模様	181
写真157 第4回埋蔵文化財特別展の模様	181
写真158 展示ポスター	182
写真159 展示の模様①	182
写真160 展示の模様②	182
第2章第2節 資料館における社会教育活動	
写真161 田植え（5月27日）	184
写真162 除草（6月24日）	184
写真163 稲の観察（8月26日）	184
写真164 稒摘み（10月7日）	184
写真165 初入り（10月21日）	184
写真166 土器による炊飯（10月21日）	184
写真167 食事の模様（10月21日）	184
写真168 参加者の皆さん（10月21日）	184
写真169 火おこし体験の模様①	185
写真170 火おこし体験の模様②	185
写真171 展示見学の模様①	185
写真172 展示見学の模様②	185
付録 小野田皿山の硫酸瓶と石見焼・堀越窯の大要づくり	
－硫酸瓶の研究①－	
写真173 小野田皿山の製品	188
写真174 ドイツ瓶(1)と初期の硫酸瓶(2)	193
写真175 硫酸瓶	193
写真176 硫酸瓶のひじりづくり工程概略	199
写真177 リュウズ	200
写真178 堀越系窯	200

表目次

第1章第1節 平成18年度に実施した遺跡調査の概要	
表1 平成18年度山口大学構内遺跡調査一覧表	1
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査	
表2 出土遺物（土器）観察表	9
表3 出土遺物（土器）観察表	99
表4 出土遺物（石器）観察表	110
表5 出土遺物（木製品）観察表	110
表6 出土遺物観察表	125
表7 出土遺物（土器）観察表	139
表8 出土遺物（石器）観察表	140
表9 出土遺物（木器）観察表	140
第1章付録 山口大学構内の主な調査	
表10 山口大学構内の主な調査一覧表	158
第2章 山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	
表11 埋蔵文化財資料館利用者の推移	178
表12 平成18年度月別入館者数	178

第1章 平成18年度山口大学構内遺跡の調査

第1節 平成18年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連施設は、山口市（吉田・白石構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概略すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡・月待山遺跡内に位置している。

このような環境の下、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財を保護・調査・研究・活用する施設として、設立以来その重責を担い続けている。当館の平成18年度時の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体（山口県および各市）の指導により、埋蔵文化財保護の立場から本発掘・予備発掘・立会の三種の方法で調査を厳密に行っている。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設（職員宿舎等）敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して掘削時に資料館員が確認調査を行っている。

調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合には、同専門委員会が可能な限り、遺跡のさらなる現状変更を避けるべく厳密な協議を行っている。

上記の調査体制の下、資料館が平成18年度に実施した埋蔵文化財の調査は、下記の通り本発掘調査2件、予備発掘調査2件、立会調査9件、確認調査1件の計14件であった。

表1 平成18年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地図	構内地区割	面積(m ²)	調査期間	本書掲載頁
本発掘	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事	吉田	S-20	225	6月12日～8月11日	11～113
教育総合研究センター改修Ⅱ期工事	吉田	K・L-16	84	6月12日～8月8日	115～125	
予備発掘	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事	吉田	S-20	36	4月24日～4月28日	5～10
	資料館(東亞経済研究所)新営工事	吉田	L-20・21	100	12月5日～1月10日	141～145
立会	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事	吉田	S-20	19	11月10日	114
	教育総合研究センター改修Ⅱ期工事	吉田	J・K・L-16 [J・K・L-17]	480	9月11～13・15・20・26 ～28日、10月10～12・ 24・25・30日 1月9、15、16日	126～140
	プレハブ校舎移設工事	吉田	I-16	29	5月11日	146
確認	第一学生食堂改修工事	吉田	J-20	75	5月30日、7月3日	147
	図書館前広場護岸整備工事	吉田	L-20・21・17・18	55	7月7日、8月9日	148
	プレハブ校舎新営工事	吉田	F-14・15 G-15	400	7月21日、8月7日	149
	人文学部外灯用電源敷設工事	吉田	M-20	6	2月19日	150
	テニスコートフェンス改修工事	吉田	B-17 C-17 C-18	10	3月13・14日	151
モニメント設置工事	小串			6.25	6月4日	152
	総合研究棟改修工事	常盤		280	10月13・16日	153

吉田構内（本部、人文・文化・教育・経済・理・農の各学部：山口市吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

平成18年度は本発掘調査2件、予備発掘調査2件、立会調査8件を実施した。

農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う調査では、周辺地の既往の調査成果により古代の官衙に関する遺構等の発見が期待された。調査の結果、古代の遺物を多量に包含する埋没谷の下位に大型のものを含む掘立柱建物跡が3棟発見された。この内、大型掘立柱建物跡からは遺存状態の良い柱根3本が確認され、県央部の古代の歴史環境を復元する上で貴重な成果が得られた。

教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査、立会調査では、縄文時代から古墳時代にかけての旧河川が確認された。河川埋土からは縄文時代晩期から古墳時代前期を中心とする土器を中心に数多くの遺物が出土しており、吉田構内低地部における遺物分布に新知見が得られた。

キャンパス内経済学部校舎周辺は、既往の調査で東方および南方から複数の旧河川が集合する地帯であることが推測されていた。一方で西方約100m地点には、弥生時代中期から終末期にかけての集



写真1 吉田構内航空写真（南東から）



写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）
航空写真（南東から）



写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）
航空写真（南から）

落跡（遺跡保存公園）が確認されており、集落が営まれた微高地が東方に何処まで続くのかが問題視されていた。今回実施した資料館（東亜経済研究所）新宮に伴う予備発掘調査でも旧河川が確認されるに止まつたが、今後とも周辺地域での継続的な調査が必要である。

白石構内（教育学部附属山口幼稚園：山口市白石三丁目1-2、岡山口小学校：白石三丁目1-1、岡山口中学校：白石一丁目9-1所在）

平成18年度は、該当地での掘削を伴う開発等工事は計画されなかった。

小串構内（医学部、同付属病院：宇部市南小串1丁目1-1）

立会調査1件を実施した。モニュメント設置工事は医学部総合研究棟の南東に計画されたが、総合研究棟新宮に伴う発掘調査では、旧耕土下に縄文土器および須恵器、土師器を包含する砂層が確認されていた。今回の工事は造成土内の掘削に止まつたが、今後とも慎重に対応していきたい。

常盤構内（工学部：宇部市常盤台2丁目16-1、尾山宿駅：上野町中町2658-3所在）

確認調査1件を実施した。平成18年度より、山口県教育委員会により山口大学工学部構内遺跡の範囲が修正され、該当地は周知の埋蔵文化財包蔵地外となっていた。慎重を期して工事中の確認調査を実施したが、削平された地山を検出するに止まつた。



図2 小串・常盤構内位置図



写真4 小串構内航空写真（南東から）



写真5 常盤構内航空写真（南から）

光構内（教育部附属光小学校、同光中学校：光市宝積8丁目4番1号）

平成18年度は、該当地での掘削を伴う開発等工事は計画されなかった。

平成18年度は、地下の掘削を伴う工事が山口市所在の吉田構内に集中して計画されたため、埋蔵文化財調査も吉田遺跡に偏重した。吉田遺跡では、先史時代から古代にかけての遺構・遺物が多数発見され、県内有数の複合遺跡である吉田遺跡に重要な新知見を得るという成果があり、マスメディアにも大きく取り上げられるなど騒々しい1年となった。一方、白石遺跡、山口大学医学部構内遺跡、山口大学工学部構内遺跡、月待山遺跡、御手洗遺跡はまことに穏やかな1年となった。



写真6 光構内航空写真（北東から）



図3 光構内位置図

第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査

1. 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内S-20

調査期間 平成18年4月24日～28日

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真7・8)

山口大学吉田構内南東端部に所在する農学部附属家畜病院^北南面に新規建物を増設する計画が持ち上がったことを受け、工事予定地の南端部を対象として呼び発掘調査を実施することになった。

調査対象地は、吉田構内の南東にそびえる今山から北西に向かい舌状に派生する低丘陵上に立地する。大学移転前は一帯に棚田が営まれておらず、構内では比較的旧地形を良好に残す地点である。周辺での埋蔵文化財調査歴を紐解くと、調査対象地の北西約30m地点において平成14年度に実施した農学部校舎他改修(解剖実習棟校舎新設)に伴う発掘調査では、調査区の南西部において南東から北西方向に流れる旧河川の右岸部が検出されている。この河川埋土からは、平安時代を中心とする土器とともに「官」の墨書きがなされた須恵器坏蓋や縁袖陶器、六連式製塩土器などが出土している。更に輪羽口や鉈尾の未製品も出土していることから、調査地周辺に鑄造に関連する官衙施設が存在する可能性を示すものとして注目されている。この調査区の更に約20m北西において平成12年度に実施された総合研究棟新設に伴う発掘調査でもやはり南東から北西に流れる河川跡の下流部分が検出されており、埋土からは平安時代の土器とともに円面鏡、製塩土器などが出土している。また、昭和41年に実施された家畜病院建設に伴う発掘調査では、包含層と推定される黒色粘土層の分布が確認されている。調査は検出のみに止まったため、この黒色粘土層の性格に関しては不明であるが、分布が調査区(家畜病院建物)の西端部に限られていることから見て、平安時代の遺物を包含する旧河川右岸部の埋土である可能性を指摘できる。

調査面積 約36m²

調査担当 横山成己



図4 調査区位置図



写真7 調査前近景(南から)



写真8 調査前遠景(南西から)

以上の調査成果から、開発予定地においては埋蔵文化財が遺存している可能性が極めて高いと想定された。従って当調査では昭和41年に検出されている黒色粘土層（遺物包含層）の確認を目的として、開発予定地南端に南北幅1.5m、東西長24mのトレンチを設定した。

（2）基本層序（図5、写真9～10）

調査地周辺の標高は約29mを測る。調査対象地は病院玄関前ロータリーの中央にマウンド状に盛土を行なう緑地化している地点に当たるため、周辺地盤より最大で約0.6m高まりを有している。掘削開始後、造成土下に遺物包含層が確認されたため、これより下位の掘削は調査区南側幅0.6mに限り実施することにした。以下に確認した基本層序を記すが、調査区の東端部から西に約7m地点において吉田構内造成前に営まれていた棚田の段差部分が存在することから、調査区の東と西では堆積状況に大きな相違を見せており、ここでは、西方（棚田の低所部分）において確認された層序を示す。

第1層…表土（層厚約20～80cm）～第5図の1層

第2層…造成土（層厚約40～100cm）～第5図の2層

第3層…黒色(7.5Y2/1)粘質土（層厚約5cm）～第5図の3層（旧耕土）

第4層…オリーブ灰色(10Y5/1)粘質土（層厚約20～40cm）～第5図の7層（遺物包含層）

第5層…暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性砂質土（層厚約10～30cm）～第5図の13層

第6層…灰黄色(2.5Y7/2)粘性細砂（層厚50cm以上）～第5図の14層

また、調査区西部の第4層下にオリーブ黒色(10YR3/1)の堆積層を確認した。この層は第5層を切り込む形で埋積しており、掘り進めるに従い僅かではあるが土質に変化を見せる状況であった。この落ち込みは前述の農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新設）に伴う発掘調査において確認された旧河川に繋がるものと推察されたが、掘削幅を0.6mと限定したため床面の確認には至らなかった。また、第5層に関しては極少量ではあるが遺物の出土を見たため、旧河川埋積以前に形成された堆積層と判断した。第6層に関してもその脆弱な土質から明確な地山とは判断できず、本発掘調査に課題を残した。

（3）遺構（図5、写真11）

予備発掘調査により確認された遺構は、前述の旧河川と推察される落ち込みと、大学造成以前、棚田に付随して機能していたと考えられる暗渠1条のみである。この内、旧河川と推測される落ち込みに堆積する黒色土層は、その検出位置から見て農学部付属家畜病院新設時に確認され、掘削調査を実施することなく破壊された黒色粘土層に連なるものであろう。

（4）遺物（表2、図6、写真12）

遺物収容コンテナ（80cm×60cm×8cm）1箱分の遺物が出土した。遺物は大多数が包含層（基本層序第4層）および旧河川埋土からの出土であり、土師器と須恵器の小片が主体を占めている。所属時期は奈良時代から平安時代に該当するものが多く、少数ではあるが中世まで降るものも含まれる。

特徴的な遺物としては、旧河川埋土から六連式製塙土器部片（図6-6）が出土している。前述の平成14年度実施農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新設）に伴う発掘調査においても旧河川埋土から相当数の六連式製塙土器が出土していることからも、両者の強い関連性が認められる。

包含層出土瓦質土器甕（図6-17）は、須恵器甕の形態を色濃く残すものとして注目される。山口県内出土の瓦質土器甕を通観すると、岩崎仁志氏により初現期（13世紀）の瓦質土器と位置づけられた岩瀬遺跡SF-1出土甕に似た形態を見出すが、口縁端部形態や外側調整法（叩き目）において差異が見られるようである。ここに詳細を記すと、本資料の器面調整は、体部外面に格子タタキが、内面にヨコハケが施され、頸部から口縁部にかけての外側はタテハケ調整後ナデ消し、内面はヨコハケ後

吉田構内（古田遺跡）の調査

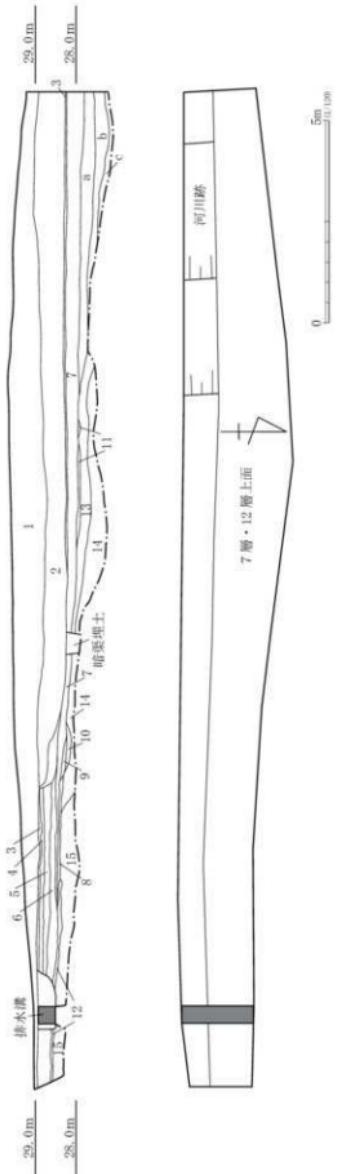


図5 調査区平面図・断面図



- 河川砂堆土
- a オリーブ褐色 (1072/1) 強粘質土
- b 黒色 (7, 872/1) 砂質土質土
- c オリーブ褐色 (7, 573/1) 強粘土

ナデ消しが行われている。口縁端部形態を除くとこれらは広島県福山市草戸千軒町遺跡等から出土している瓦質土器甕に見られる特徴と共通しており、さらに頸部から口縁までやや直立気味に立ち上がることを勘案すると、篠原芳秀氏編年^{II}期後半からIV期前半（14世紀後半～15世紀前半）に位置づけることが可能とも思われる。いずれにせよ県内出土瓦質土器では稀な特徴を有するのものであり、注意が必要であろう。

（5）小結

今回の予備発掘調査により、開発予定地内に重要な埋蔵文化財が遺存することが明らかとなった。特に旧河川と推察される落ち込みの埋土からは、限定的な掘削にも関わらず古代に属する須恵器と土師器を主体とした多量の出土遺物を見た。この落ち込みは、調査区北に隣接する現農学部付属家畜病院建設時に確認された黒色粘土層（遺物包含層）に続くものと考えられ、さらには北西に近接する農学部解剖実習棟校舎建設に伴う発掘調査により確認された、墨書須恵器、緑釉陶器、六連式製塩土器等古代官衙の存在を想像させる大量の遺物を包含した旧河川へと繋がるものと考えられる。この場合、当調査区は河川のより上游に位置することになる。

当調査では、調査結果により新営建物の設計等を変更する可能性も有すため、包含層以下の掘削は最小限度に止めた。そのため、土層断面観察による層序の確認を十分に行うことができず、地山層の確認等に問題を残した。本発掘調査実施の際には層序の確認を含めて慎重な掘削が必要である。

〔註〕

- 1) 平成19年1月1日に農学部附属家畜病院から山口大学動物医療センターに改称。本書では調査時の呼称「農学部付属家畜病院」を用いる。
- 2) a:田畠直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」,山口考古学会（編）『山口考古 第22号』,山口
- b:田畠直彦（2004）「第8章6. 平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 3) 田畠直彦（2004）「第8章4. 平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 4) 横山成己(2007)「付篇 吉田遺跡第II地区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口
- 5) 前掲註4 94頁65参照。
- 6) 前掲註2
- 7) 岩崎仁志（2004）「瓦質土器」,山口県（編）『山口県史 資料編考古2』,山口
- 8) 大村秀典、河村恒史、林修司、岩崎仁志（2001）,山口県埋蔵文化財センター（編）『岩瀬遺跡』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第24集),山口
- 9) 篠原芳秀（1987）「草戸千軒町遺跡出土の龜山焼甕」,日本中世土器研究会（編）『中世土器の基礎研究III』,高柳（大阪）

吉田構内(古田遺跡)の調査

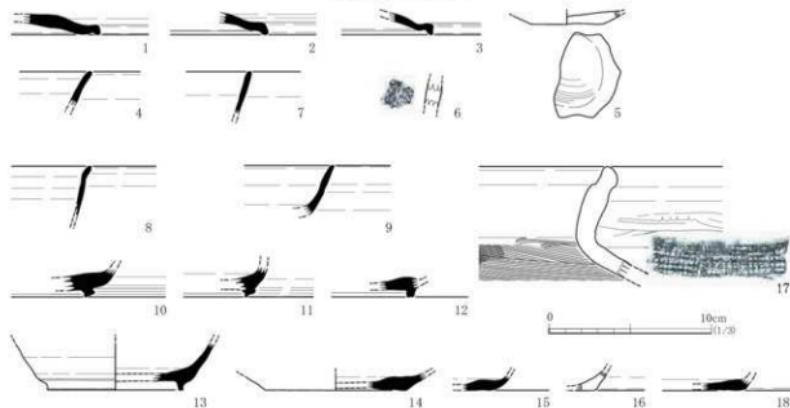


図6 出土遺物実測図

1 ~ 7 河川跡埋土
8 ~ 17 基本層序第4層
18 基本層序第5層

表2 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁部直径等高さ	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	河川跡	須恵器 壺蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗砂粒を含む	
2	河川跡	須恵器 壺蓋	口縁部		①灰白色(7.5Y6/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	0.5mm程の礫を多く含む	
3	河川跡	須恵器 壺蓋	口縁部		①灰色(N6) ②灰色(N5)	0.5mm以下の粗砂粒を若干含む	
4	河川跡	須恵器 壺身	口縁部		①灰色(N6) ②灰色(N6)	0.5mm程の粗砂粒を多く含む	
5	河川跡	土師器 盆	底部	②(4.4)	①②にぶい黄橙色(2.5Y6/3)	0.5mm以下の粗砂粒を多く含む	底部糸切刃
6	河川跡	製塙土器	体部		①②浅黃褐色(10YR8/4)	1mm以下の粗砂粒を多く含む	内面布目
7	河川跡	須恵器 壺身	口縁部		①②灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の粗砂粒を含む	
8	第4層	須恵器 壺身	口縁部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm程の粗砂粒を若干含む	
9	第4層	須恵器 壺身	口縁部～体部		①青灰色(5PB6/1) ②灰色(N6)	0.5mm程の粗砂粒を多く含む	
10	第4層	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗砂粒を含む	
11	第4層	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(N7)	1mm程の粗砂粒を若干含む	
12	第4層	須恵器 高台付壺身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	2mm以下の礫・粗砂粒を多く含む	
13	第4層	須恵器 高台付壺身	底部～体部	②(7.8)	①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm程の粗砂粒を若干含む	
14	第4層	須恵器 壺身	底部	②(8.8)	①②灰白色(N8)	1～2mm程の粗砂粒を若干含む	
15	第4層	須恵器 壺身	底部		①②灰白色(5Y7/1)	0.5mm以下の粗砂粒を含む	
16	第4層	土師器 壺	底部		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	精緻	
17	第4層	瓦質土器 壺	口縁部		①灰色(7.5Y6/1) ②暗灰色(N3)	0.5mm程の粗砂粒を多く、1mm程の粗砂粒を若干含む	
18	第5層	須恵器 壺身	底部		①緑灰色(10G6/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗砂粒を含む	

古田橋内（古田遺跡）の調査



写真 12 出土遺物

2. 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内S-20

調査面積 約225m²

調査期間 平成18年6月12日～8月11日

調査担当 横山成己

(1) 調査の経緯（図7）

農学部附属家畜病院南面に新規建物を増設する計画が持ち上がったことを受け、平成18年4月24日から28日にかけて実施した予備発掘調査成果が埋蔵文化財資料館専門委員会（平成18年度第1回専門委員会：平成18年5月8日開催）にて協議に付された。協議の結果、建設計画の変更が困難であること、着工の遅れが講義カリキュラムに多大な影響を及ぼすことなどを理由に、新規建物建設予定地全域に対して本発掘調査を実施することが決議された。

1) 本書第1章第1節1. 農学部附属家畜病院新設に伴う予備発掘調査 (p.5～10)

（横山）

(2) 調査の経過

調査は同年6月12日より着手した。予備発掘調査の成果から、調査対象地の地下の状況は東から西に傾斜する丘陵地であり、西端部では丘陵間を南東～北西方向に走る谷（旧河川）が埋存することが想定された。この谷の北西下流地点と推察される平成14年度実施農学部校舎改修（解剖実習棟校舎新設）に伴う発掘調査区では、旧河川埋土とされる黒色堆積土中から墨書き器や製塙土器を始めとする特徴的な遺物群が出土しており、河川堆積土除去後には地表面に縦柱立柱建物の柱穴群が確認された。さらに北西側にあたる平成12年度実施総合研究棟新設に伴う発掘調査区においてもこの旧河川は検出されており、その埋積土中からは円面鏡、製塙土器などが出土している。

以上の状況を鑑み、6月12日から着手した本発掘調査では、調査区西部の谷埋積土の調査を精密に実施するため、上位に堆積する遺物包含層は重機により掘削し、遺物の回収に努めた。

6月29日までに谷埋土および調査区東部丘陵地の遺構を検出し、以降谷埋土を層位的に掘削とともに遺構内埋土の掘削を行った。7月6日にはこれらの作業をほぼ終え、製図・写真撮影等の記録作業に入る状況であったが、最終的な確認として調査区南壁に沿って設けた排水溝をさらに掘り下げたところ、谷に埋積した黒色土の下位に確認された黄色土が地山ではなく、遺物を包含する堆積層であることが判明した。

以降、層位確認を行いながら調査区西部に堆積した遺物包含層を慎重に掘削し、下位に存在する遺構面を検出したのは8月3日のことであった。この遺構面を検出する作業中に、建物柱と推定される直立した木材を複数確認したため、7月25日に開催された埋蔵文化財資料館専門委員会において緊急報告を行い、今後の調査方針と埋蔵文化財の保護手段に関する討議を行った。その結果、やはり本学カリキュラムの関係上、8月中旬を超える調査の継続は困難との見解が示され、調査終了期限まで最大限



図7 調査区位置図

の文化財保護措置を講じることが承認された。

8月3日の検出により確認された谷部下位の遺構は、掘立柱建物3棟、溝1条、杭列であった。残された調査期間、これらの遺構群の調査を進行させると同時に本学開発部局と遺跡保護の手段を調整し、増築建物基礎杭の位置変更で保存可能なものは遺構を半截するに止め、変更不可で完全に破壊されてしまうものについては遺構の完掘を行った。記録的な猛暑の中、全ての掘削・記録作業を終えたのは調査期限である8月11日であった。

1) a:田畠直彦(2002)「山口大学構内古田遺跡－農学部校舎改修(解剖実習棟新設)に伴う発掘調査略報一」,山口考古学会(編)

『山口考古 第22号』山口

b:田畠直彦(2004)「第8章6. 平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口

2) 田畠直彦(2004)「第8章4. 平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口

(横山)

(3) 基本層序(図8・9、写真13~15、48~50)

調査区は家畜病院建物の南面に接して南北幅10m、東西幅25mの範囲に設けたが、調査区北側に関しては既存の建物工事により大きく攪乱を受けていた。その範囲は家畜病院建物南壁より南方約5.5mにまで及んでいる。筆者は以前、昭和41年に実施された家畜病院建設に伴う発掘調査の成果報告を行ったが¹²⁾、その際に記録に残る調査範囲と現状建物の平面積が大きく異なることを指摘した。この度の調査で図らずも当時の測量図が正確なものであったことが確認できた。

調査では、調査対象地の北半部が攪乱を受けているため、南壁と西壁を対象に土層断面図の作製を行った。ただし、調査中に南壁の土留めを行ったため、調査区内に東西および南北方向の土層観察用アゼ(図9)を設置し、掘削の基準とした。

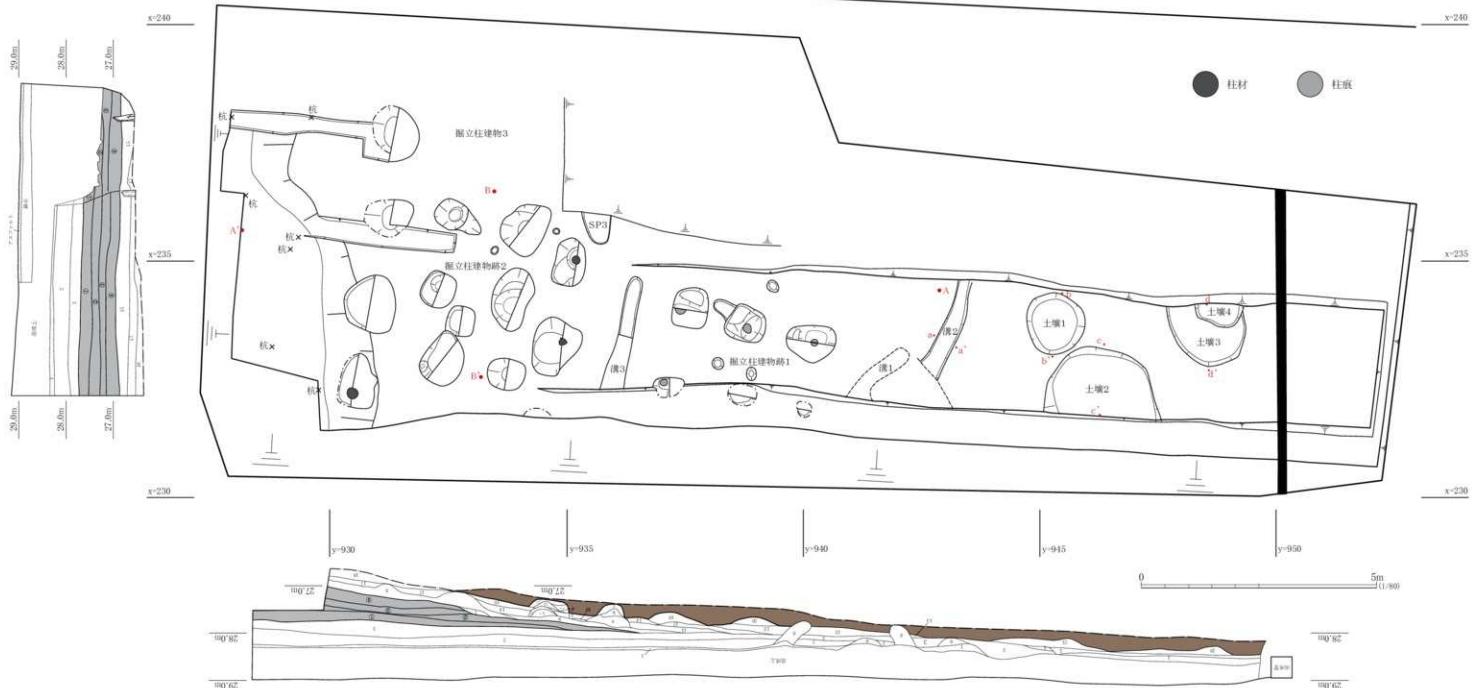
調査地点の旧地形は東部が丘陵台地、西部が北西に走る谷の右岸に当たるため、極めて複雑な層序を示している。ここでは特徴的な堆積層と遺物の取り上げ方法について記すこととする。

まず谷埋土検出面の上下で大別が可能である。上位には上から①造成土、②旧耕土(L1)、③旧床土(L2)、④暗灰黄色の遺物包含層(L3)が形成されている。これらの諸層は重機による掘削を行ったが、遺物は各層に分けて取り上げている。

調査区東部においては遺物包含層が地山となっている。問題となるのは調査区中位より西部であるが、この範囲には近接する過去の調査地でも確認されている谷(河川)埋土と、その下位に遺物包含層が存在する。調査では谷埋土を4層(NR1-L1~4)に識別した。最下層(谷埋土4: NR1-4)は急激な水流による砂礫堆積層であり、上位層は漸次谷の埋積が進行したことを示すものである。

谷埋土の基盤層となっている遺物包含層に関しては、地形が北東から南西に急激に降下するしているため、各堆積土の広がり及び上下関係の判断が非常に困難であった。調査時にはこれらを3層(L4~6)に大別し、遺物の取り上げを行っている。この内、L4・5はある程度の縮まりを有する堆積層であったが、L6は極めて縮まりの弱い堆積層であり、土中には多量の遺物(土器類・木製品)と流木(自然木)が含まれていた。遺構面直上の堆積土であることからも注意が必要である。

また、調査区中位から西部にかけて遺構を検出した基盤層は、黄褐色を呈しているが極めて薄く、直下に硬質の黒色シルト層が存在する。この黒色シルト層については、調査最終段階でサブレンチを複数本入れることによりその性格を把握しようと努めたが、下位層に達することが出来なかつた。掘削し



- 1 灰黃褐色 (10YR4/2) 砂質土 … 旧耕土「L.1」で遺物取り上げ
- 2 灰オーラーブ色 (7.5V5/2) 弱粘質土 … 旧床土「L.2」で遺物取り上げ
- 3 瞬黄褐色 (2.5V5/2) 砂質土 … 「L.3」で遺物取り上げ
- 4 瞬黄褐色 (2.5V5/2) 砂繊土 … 「L.3」で遺物取り上げ
- 5 にぶい褐色 (2.5V5/4) 砂質土 … 「L.3」で遺物取り上げ
- 6 黄褐色 (2.5V5/3) 砂質土に明黄褐色 (10YR6/8) 砂が混ざる … 田中壁塗埋土
- 7 灰黄色 (2.5V5/2) 砂質土
- 8 瞬黄褐色 (2.5V5/2) 砂繊土に小繊 (0.5 ~ 2 cmφ) 多く混ざる
- 9 にぶい黄褐色 (10YR8/4) 粘質土に炭化物少量混ざる … 「L.4」で遺物取り上げ
- 10 淡黄色 (2.5V5/3) 砂質土
- 11 明黄褐色 (2.5V6/6) 砂繊土に小繊 (0.5 ~ 1.5 cmφ) … 「L.4」で遺物取り上げ
- 12 瞬黄褐色 (2.5V5/2) 弱粘質土 … 「L.4」で遺物取り上げ
- 13 灰黄色 (2.5V6/2) に黄褐色 (10YR5/2) が混ざる砂質土 … 「L.4」で遺物取り上げ
- 14 にぶい黄色 (2.5V6/3) 弱粘質土に小繊 (0.5 ~ 1 cmφ) 少量混ざる … 「L.5」で遺物取り上げ
- 15 灰色 (5V4/1) 强粘質土 … 「L.6」で遺物取り上げ

- 16 瞬黄褐色 (2.5V4/2) 砂質土 … 「L.6」で遺物取り上げ
- 17 瞬黄褐色 (2.5V4/2) 强粘質土に木製品・自然木多量に混ざる … 「L.6」で遺物取り上げ
- 18 瞬黄褐色 (2.5V4/2) 砂土に木製品・自然木多量に混ざる … 「L.6」で遺物取り上げ
- 19 灰褐色 (2.5V6/2) 砂質土に小繊 (0.5 ~ 1 cmφ) 少量混ざる … 遺構埋土か
- 20 灰褐色 (2.5V6/2) 砂質土 … 遺構埋土か
- 21 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 … 整地土か

【遺構埋土】

- a 棕褐色 (10YR4/4) 弱粘質土 (締まりが極めて弱い) … 溝3 墓土
- b 淡黄色 (2.5V5/3) 弱粘質土に木繊 (0.5 ~ 1 cmφ) 少量混ざる … 溝3 墓土
- c 黄褐色 (2.5V5/3) 弱粘質土 … 淀3 墓土
- い 褐色 (10YR4/4) 弱粘質土 (締まりが極めて弱い) … 柱抜き取り穴埋土か?
- ろ 浅黄色 (2.5V7/3) 弱粘質土に小繊 (0.5 ~ 1 cmφ) 少量混ざる … 柱抜き取り穴埋土か?
- イロ 黄褐色 (2.5V5/3) 弱粘質土に炭化物多く混ざる … 柱穴理土
- ハ 黄褐色 (2.5V5/3) 弱粘質土に浅黄色 (2.5V7/4) 粘土混ざる … 柱穴埋土
- 二 黄褐色 (2.5V5/3) 弱粘質土に小繊 (0.5 ~ 1 cmφ) 少量混ざる … 柱穴埋土

図8 調査区平面図・断面図

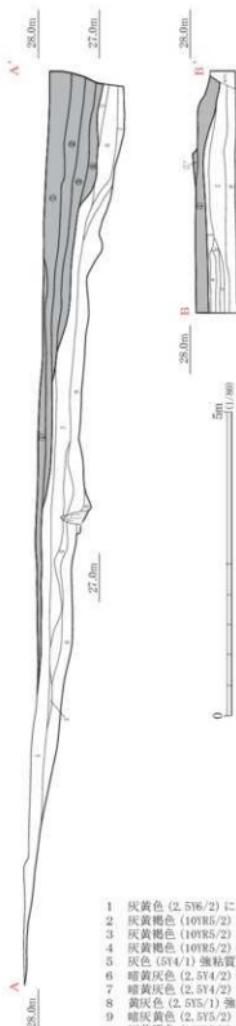


写真13 調査区内土層観察用アゼ全景（北東から）



写真14 東西方向アゼ（北から）



写真15 東西方向アゼ西端部（北から）

- 1 灰黄色 (2.5Y6/2) に黄褐色 (10YR5/2) が混ざる砂質土 … 「L.4」で遺物取り上げ（※調査区南壁 13 層に対応）
 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土 … 「L.5」で遺物取り上げ（調査区南壁 14 層に対応）
 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土に明黃褐色 (2.5Y7/6) 砂と炭化物が混ざる … 「L.5」で遺物取り上げ
 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 強粘質土に明黃褐色 (2.5Y7/6) 砂と炭化物が混ざる … 「L.5」で遺物取り上げ
 5 灰色 (5Y4/1) 強粘質土 … 「L.6」で遺物取り上げ（調査区西壁 15 層に対応）
 6 喙黃灰色 (2.5Y4/2) 強粘質土に木製品・自然木多量に混ざる … 「L.6」で遺物取り上げ
 7 喙黃灰色 (2.5Y4/2) 砂土に木製品・自然木多量に混ざる … 「L.6」で遺物取り上げ
 8 黄灰色 (2.5Y5/2) 強粘質土に炭化物・自然木等多量に混ざる … 「L.6」で遺物取り上げ
 9 喙黃灰色 (2.5Y5/2) 粘性砂質土 … 柱穴埋土
 10 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土に灰白色 (7.5Y8R/1) 粘土ブロック多く混ざる
 b 鹿褐色 (10Y4/1) 強粘質土
 c 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性砂質土に灰白色 (7.5Y8R/1) 粘土ブロック多く混ざる
- 【谷埋土】
- (1) 喙灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 … 谷理土 L.1
 - ① 灰色 (5Y4/1) 鹿粘質土 … 谷理土 L.1
 - ② 灰色 (5Y4/1) 粘性砂質土 … 谷理土 L.2
 - ③ オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘性砂質土 … 谷理土 L.3
 - ④ 灰色 (7.5Y5/1) 粘性砂質土に小礫 (0.5 ~ 2 cm φ) 多く混ざる … 谷理土 L.4

写真9 調査区内土層断面図

た範囲では黒色シルト層内に遺物は見られなかったものの、この層を地山と認定しうる状況ではなく、今後に課題が残る。

〔註〕

- 1) 横山成己（2007）「付篇 吉田遺跡第II地区の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報一平成17年度』、山口

（横山）

（4）遺構

調査区内において確認した主な遺構は、掘立柱建物跡3棟、土壙4基、溝3条、その他柱穴状遺構（SP）3基である。この内、土壙は全て調査区東部の丘陵台地上に、掘立柱建物跡は全て調査区中部以西の傾斜地に位置するという特徴を有する。また、調査区中央やや東よりで検出された溝1（写真35・36）は近代以降の水田暗渠であり、ここでは詳細を省く。

以下に個別解説を記すが、各遺構の位置関係については図8を参照されたい。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡1（図9、写真16～18）

調査区の中央部、西側谷への傾斜変換地に位置する。検出された柱穴は6基であり、現状で南北1間×東西2間に復元されるが、総柱建物として南方調査区外にまで建物規模が拡大する可能性も残す。建物軸は、座標を基準に西が北方に12度偏している。

柱穴の平面形は、長軸が0.8～1mの闊丸形または不整梢円形であり、規則的な平面形は有していない。柱穴内には腐食した柱根の痕跡が明瞭に残っており、建物廃棄時に地上で柱が切り取られたことが分かる。柱穴埋土は縮まりが弱くヘドロ状に変質していたが、これは谷の埋積により丘陵高所まで湧水が及んだことの影響と考えられる。一方で柱穴断面を観察すると、Pit1～3の埋土はいずれも大きな単位で3層に区分され、綿密に根固めを行っているとは言い難い状況である。このことから建屋の上部構造は比較的軽量のものであった可能性が高い。

またPit2に切られる形で北西端部に接するSP1は、検出当初は柱の抜き取り穴と考えたが、上記の通り柱穴に柱痕跡が遺存しているためこれは不当である。周間に対をなす遺構が見当たらないことから、当建物の建設に関連する掘り込みと想像されるが、その性格については不明と言わざるを得ない。

建物規模に関しては、掘削当初に調査区南壁に沿い排水溝を設けたため、建物の南側柱穴列の大半分は破壊してしまったが、僅かに残った柱根痕跡の測量結果から、東西・南北とも1間約1.5mの建物に復元される。

地形と建物の関係については、遺構検出時、検出面は東から西へ緩やかに傾斜していた。検出当初、安定的な丘陵台地上ではなく傾斜地に建物が配置されていることに疑問を感じ、上層からの掘り込みの可能性も考慮に入れたが、調査の結果、柱穴底面も傾斜に比例し東から西へと低下していることが判明した。これは建物建築時に当該地が平地化していた訳ではなく、依然傾斜地であった事實を如実に示している。

当遺構の保存については、開発工事による破壊を逃れるPit1およびPit3は半裁掘削に止め、他は完掘した。建物の所属時期に関しては、出土遺物が極めて乏しく、かつ細片であったため、比定が困難な状況である。器種等が判別できるものとしては、僅かにPit3から焼成不良の須恵器底部片1点を数えるのみである。高台付椀もしくは皿の底部と見られるが、形骸化した断面三角形の高台は10世紀以降の所産であることを示しており、建物の上限年代を推察する上で重要な資料となっている。

古田構内（古田遺跡）の調査

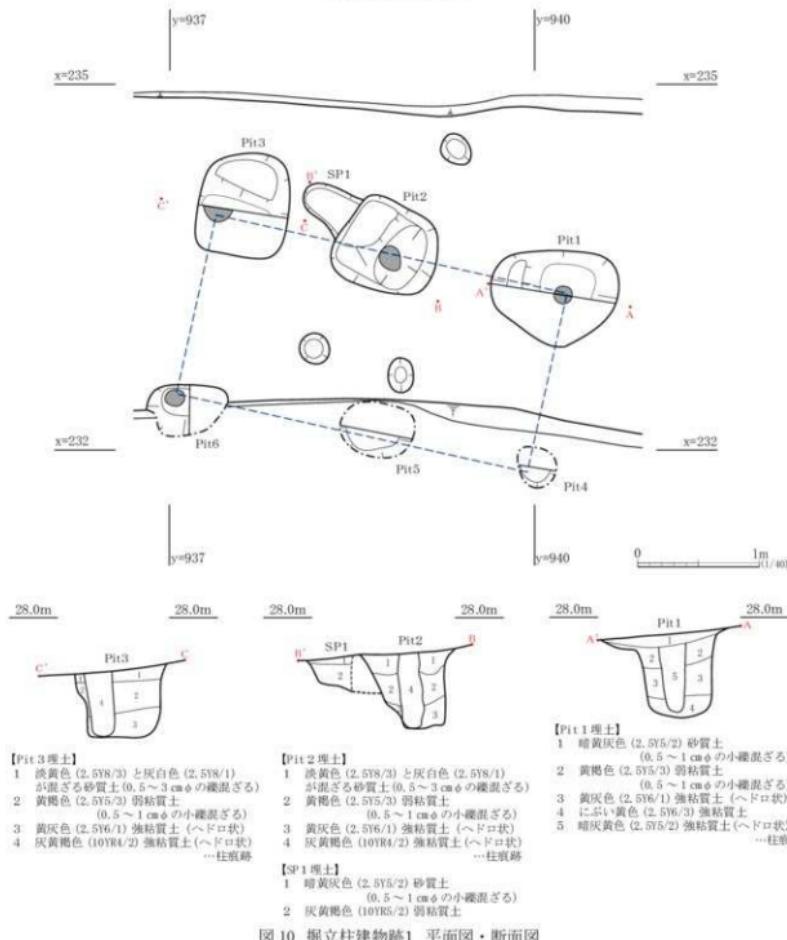


図 10 挖立柱建物跡1 平面図・断面図



写真 16 挖立柱建物跡1
埋土断面 (北から)



写真 17 挖立柱建物跡1 Pit 2
埋土断面 (北から)



写真 18 挖立柱建物跡1 Pit 1
埋土断面 (北から)

掘立柱建物跡2（図11・12、写真19～24・44）

掘立柱建物跡1の西側、南東から北西に走る谷の右岸傾斜地に位置する。後述する掘立柱建物跡3の内部に位置しており、掘立柱建物跡3に先行する建物である。検出された柱穴は6基であり、南北2間×東西1間に復元される。建物軸は座標を基準に北が東方に9度偏している。

各柱穴断面を観察すると、柱根痕跡は全く観察されず、建物廃棄時に全ての柱が抜き取られたものと推測される。Pit3・4・5の平面形が長軸約0.8mの隅丸長方形であるのに対し、Pit1・2・6が長軸約1.2mと大きく、平面形不整形であるのも、柱抜き取り時に柱穴周囲から大きく掘り込んだ結果と考えられる。Pit1・2は段状に掘り込まれているが、下段部分が本来の柱穴であったのだろう。

掘立柱建物跡1とは異なり、長軸（南北）の柱穴底面高は東側列、西側列ともほぼ一定である。該当地の地形は北東から南西への傾斜地であるが、高所に当たる東側柱穴列の方が柱穴底面が低いという特徴を有している。

建物規模に関しては、抜き取りのため従来の柱の位置を確定しかねるが、柱芯間約1.6mの建物と推定しておきたい。

また、Pit6に南端を切られる形で検出した柱穴SP2は、対応する他の遺構が存在しない。切り合ひ関係から掘立柱建物2に後出する遺構であり、後出の掘立柱建物跡3に関連する遺構であろう。その場合、間仕切り柱が考えられる。

確認した遺構の内、Pit4以外は開発工事による破壊を逃れるため、半裁掘削に止めている。出土遺物には土師器、須恵器、加工木などがある。器種が確認できるものとしては、須恵器には高杯、ハソウ、甕、土師器には甕がある。この内ハソウは底部が平底化した最終形態のもので、7世紀初頭～中頃に比定できる。しかしこれらの遺物は柱抜き取り時の混入である可能性が極めて高いもので、建物自体の年代を示すものではないことを付記しておく。

掘立柱建物跡3（図11・13、写真25～30・43～46）

掘立柱建物跡2の柱穴周囲を覆う形状で検出された大型建物跡である。確認された柱穴は7基だが、東側柱穴列の北端部に当たる位置は家畜病院建物工事によりすでに破壊を受けており、遺構の確認はできなかった。また同じく東側柱穴列の南端部に当たる柱穴は調査区南壁断面での確認である。

柱穴の配列から建物を復元すると、南北方向を主軸とし、南北3間×東西1間に復元されるが、南北とも更に建物が延長する可能性が残される。ここで留意すべき点は、柱間の距離である。計測値によると、想定される建物南北長は5.68mであり、1間の距離は約1.9mとなる。これに対し、東西幅は4.16mでこの距離を柱2本で賄っていることになる。掘立柱建物で1間が4mを超える建物はやや想定し難いため、現状ではこの建物は東西2間（1間2.08m）規模であり、建物南北端が調査区外にまで及んでいるものと判断している。このような大規模建物を復元した場合、掘立柱建物跡2で言及したSP2はやはり掘立柱建物跡3の間仕切り柱と考えるのが妥当であろう。SP2がPit6とPit3のほぼ中间に位置することもその可能性を高めている。

建物軸に関しては、座標を基準に北が東方に10度偏している。この値は掘立柱建物跡2に近似しており、両者の関係を考察する上で重要と言える。

掘立柱建物跡3の調査で特筆すべき点は、検出された7基の柱穴の内3基に柱根が遺存していたことである。発見経緯を記すと、これらの柱根は包含層掘削が遺構面に達する以前よりその姿を現していたものである（図9・写真14）、3本の配置からは建物の柱根である確証が得られなかった。その後掘削を進めると、柱穴の配列が徐々に明らかとなり、掘立柱建物を構成する柱であることが明らかとなった。

検出された柱穴は、いずれも不整な円形および楕円形を呈しており、径の長軸は1～1.2mを測る。柱根が依存している柱穴を見ると、柱は必ずしも柱穴中央に設置されてはいない。Pit5・6は、南側から傾斜をつけて掘り進めた穴の最深部（北側）に柱を配している。また3本の柱とも下部に礎石や礎板を設置していない。

各柱穴の底面高を標高で測ると、Pit5が26.95m、Pit6が26.84m、Pit1が26.73m、Pit2が26.72m、Pit3が26.66m、Pit4が26.56mとなり、北東から南西に向かい降下していることが分かる。これは掘立柱建物1同様、建物建築当時にこの場所が傾斜地であったことを示しており、換言すると「南東から北西に走る谷の右岸傾斜地」という不安定な場所に敢えて大型建物を建築したことを意味している。

次に柱穴埋土の状況を観察すると、柱の規模（直径約20cm）に比し、堅固な根固めを行っているとは言い難い。特にPit4・5は遺構の基盤土をそのまま埋め戻したかのような状況であり、土の締まり具合の差異で遺構壁面を探らなくてはならなかった。

掘立柱建物跡3を考察する上での問題点の一つとして、各柱穴における柱根の有無が挙げられる。現状で6基の柱穴の内3基に柱根が依存するが、遺存する柱根はいずれも保存状態が良好であり、特にPit4の柱根は成形加工痕が当時のままに残っているほどである。これは、該当地が埋没谷に当たることから、建物廃棄後も地下水脈の通り道であり続け、幸運にも有機物が非常に良好に保存される環境となったことに起因する。この状況を言い換えると、建物廃棄時に柱根が柱穴内に残されたとすれば、それは調査時まで必ず何らかの形で遺存していなければならない、という事を示している。現に、やや腐食の進行したPit6の柱根は、柱周囲に元来の柱の痕跡が土壤化して残っているが、柱根が遺存しない他の柱穴には柱底らしい土層は観察できない。

これらの事実から総合的に判断すると、Pit4・5・6の柱は建物廃棄時に上部で切り取られ、他の柱は廃棄時に抜き取られたものと推察される。それを裏付けるように、調査区南壁断面で確認されたPit7には、埋没した柱穴埋土を上層から掘り込んでいる状況が観察できる（図8、写真49）。それでは、同一建物であるにもかかわらずなぜ柱の処理にこのような差が生じたのであろうか。

この疑問に围绕り、遺構検出面直上の堆積土の詳細を記しておく。「基本層序」で言及したように、遺構面上直上の堆積土（遺物包含層L6）は極めて脆弱な土質であり、内部には多量の遺物（須恵器・土師器・木製品）と共に拳大の礫や自然木が多量に包含されていた（写真47）。その状況から、丘陵上部から土石流化した土砂が一気に流入し、堆積したものと判断された。この層を突き抜ける形で柱根3本は露出していた訳であるが、上記の理由から大型建物の基盤層となり得るものとは考え難く、実際に層上面で柱穴の輪郭等は検出されなかつた。

さらに柱穴堀方に目を向けると、柱の規模に比して柱穴深度が非常に浅いことが分かる。特に建物西側列のPit3・4では僅かに25～30cmを測るのみである。西側柱穴列に関しては柱穴の平面輪郭が明確でなく、検出時に遺構面を削り過ぎた嫌いもあるが、それも数cm程度の厚みに収まる。柱及び柱穴から復元される建物の規模を考えると、この深度では安定した建物を維持できるとも考えられないが、最も遺存状況が良いPit4の柱根を観察すると、柱根基部より上に約35cm部分から上方は風化が進行しており、下部は加工当時の姿を留めたままであった。当然柱の転用も考慮に入れなければならないが、この状況からは、遺跡調査時の状況としては柱穴埋土内に収まっていたのは最大で深さ約35cmまでと判断するのが妥当と考える。

確認した遺構に関しては、いずれも開発工事による破壊から逃れるため、調査を半裁掘削に止め埋め戻している。出土遺物に関しては、須恵器・土師器・木製品が出土しているが、いずれも小片であ

吉田橋内（古田遺跡）の調査

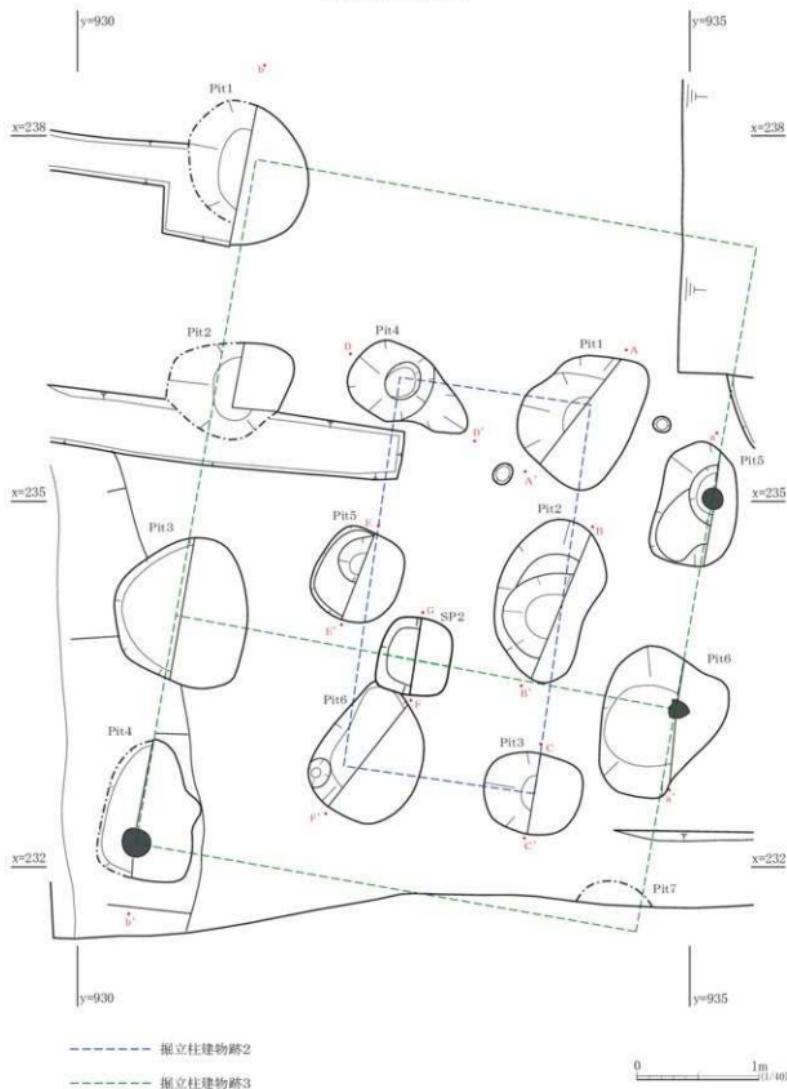
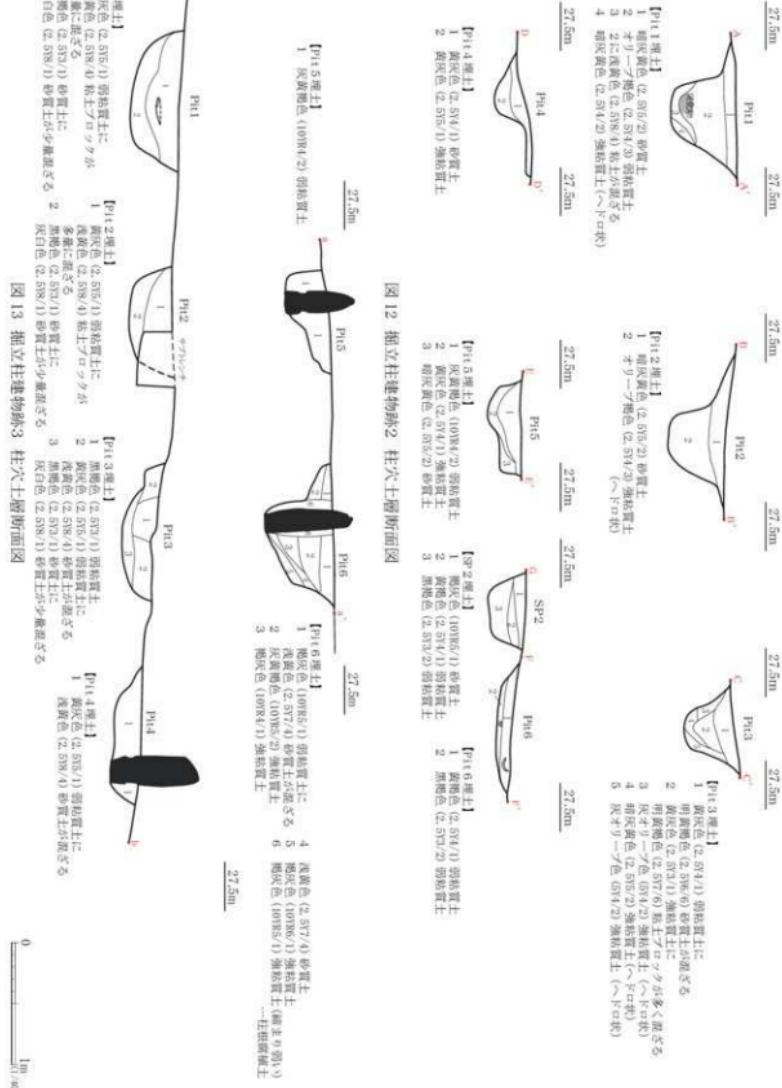


図 11 掘立柱建物跡2・3 平面図



り遺構の所属時期を知る手がかりとはならない。

以上、掘立柱建物跡3の性格をまとめると、当建物は南東から北西に伸びる谷の右岸、北東から南北へ降下する傾斜地に立地する。建物規模は東西2間、南北4間以上の大型建物であり、内部に間仕切りを有する。建物軸は掘立柱建物2と同様に北が東方に僅かに偏する。地盤の傾斜方向と建物軸が合致しないことは、この建物の特殊性を示すものと思われる。

掘立柱建物2と掘立柱建物3との間に明確な柱穴の重複関係はないが、建物の配置から掘立柱建物2の建て替えで掘立柱建物3が成立したと考えて間違いかろう。

確認された柱穴7基の内3基には柱根が良好に遺存していた。他の柱に関しては建物廃絶以降に抜き取られたものと判断できる。

当建物の廃絶に関しては、谷地に位置することが災いし、丘陵上部からの急激な土砂の流入が廃絶の契機になったものと推察される。土砂により埋没した建物柱について、抜き易いものは抜き取り、上部で切断した方が早いものについては切り取り回収したものと想像される。

また、柱穴深度の浅さに関しては、急激な土砂災害に伴い、建物基盤層もある程度流失した可能性を指摘したい。Pit4柱根の風化度の違いは、建物廃絶後に上部が一定期間露出していた為ではなく、接触していた土（柱穴内埋土と上部に堆積した土砂）の土質の違いに起因するものと考えている。

この他、建物西側、谷が更に下方に落ち込む部分に杭が7本確認されたが、配列に規則性が認めなかつた。建物と関係がある施設か、谷の護岸等に用いられたものか、その性格を把握できていない。

以上が掘立柱建物跡3棟の概要である。期日に迫られた調査となつたため、いまだ考察の及ばない部分が多々存在する。特に掘立柱建物2と3との間には建物規模において大きな隔たりがあり、単純に「建て替え」と判断して良いのか疑問が残る。今後の検討課題としている。



写真19 掘立柱建物跡2・3柱穴群（西から）



写真20 掘立柱建物跡2 Pit1断面（北西から）



写真21 掘立柱建物跡2 Pit2断面（西から）



写真22 掘立柱建物跡2 Pit3断面（西から）



写真 23 挖立柱建物跡2 Pit4断面（北から）



写真 24 挖立柱建物跡2 Pit5・6、SP2断面（北西から）



写真 25 挖立柱建物跡3 Pit5断面（西から）



写真 26 挖立柱建物跡3 Pit6断面（西から）



写真 27 挖立柱建物跡3 Pit1断面（西から）



写真 28 挖立柱建物跡3 Pit2断面（西から）



写真 29 挖立柱建物跡3 Pit3断面（西から）



写真 30 挖立柱建物跡3 Pit4断面（西から）

【溝】**溝2**（図14、写真31・42）

調査区中央東寄りで検出された。緩やかに湾曲しつつ南北方向に走る溝であるが、南端部は上層から掘り込まれた水田暗渠（溝1）により擾乱を受けている。

現状で最大幅約0.m、深さ0.12m。埋土は上下2層に分類可能であり、下層は砂礫層であり、水流が存在した可能性を示すが、検出長が短いため、水流の進路は不明である。

出土遺物には土師器および須恵器の小片があるが、図化可能なものは円面硯と見られる須恵器1点（図15-19）のみである。現状では明確に中世以降に時期が下る遺物が見られないため、古代に所属する遺構と見なしておきたい。

溝3（図8、写真44）

調査区中央西より、掘立柱建物1と掘立柱建物3の中間に位置する溝である。調査区南端部からやや東に偏して北に直線的に走るが、約2.5m地点で途絶えている。掘り込みは南壁断面11層および13層上面から行われており、幅約0.95m、深さ約0.5mを測る。埋土内から遺物の出土は見られず、所属時期不明である。溝の主軸が掘立柱建物群の主軸と近似値を示すため、何らかの関係性を窺わせるが、層位的には後出する溝である。

【土壤】**土壤1**（図14、写真32）

調査区東側、丘陵台地上に位置する土壤である。平面形は正円に近い楕円形であり、南北幅1.3m、東西幅1.24mを測る。深さは最深部で0.26mである。

出土遺物には土師器および須恵器の小片が見られるが、いずれも細片で図化不能である。断定はできないが溝2と同一時期のものである可能性が指摘できる。

土壤2（図14、写真33）

調査区東側の丘陵台地上、土壤1の南東側に近接する大型の土壤であり、東西幅2.5mを測る。深さは最深部で0.23mである。

出土遺物には須恵器の細片2点がのみであり、遺構の時期を特定することはできない。

土壤3・土壤4（図14、写真34）

調査区東側の丘陵台地上、土壤2の北東側に隣接しており、上下に重複する土壤である。土壤4が土壤3埋土を掘り込んで形成されている。いずれも病院建物建設時に遺構の北部を破壊されているが、土壤3は東西幅約1.6m、深さ0.16m、土壤4は東西幅約1m、深さ0.17mを測る。

土壤3からは遺物の出土は見られなかったが、土壤4からは土師器および須恵器の小片が出土している。この内図化が可能な1点は、須恵器平瓶の頸部から体部にかけての破片である（図15-18）。近接する溝2、土壤1と同一時期に形成された遺構である可能性がある。

【ピット】**SP3**（図8、写真44）

掘立柱建物3の柱穴であるPit5の北東に近接する遺構である。配置から見て掘立柱建物群に関連する遺構とは考え難く、独立した遺構と見なした。北半部は病院建物建設時に破壊されており、残存南北長0.66m、東西幅0.6m、最大深度0.23mを測る。

出土遺物は1点のみであり、土師器甕口縁部片である（図15-17）。



【溝2埋土】

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 剥離質土
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫土



写真 31 溝2断面（北から）



【土壤1埋土】

- 1 黒褐色 (10YR3/1) 剥離質土
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂礫土
(0.5～4cmφの礫混ざる)
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂礫土



写真 32 土壌1断面（西から）



【土壤2埋土】

- 1 褐色 (10YR4/4) 強粘質土
- 2 褐色 (7.5YR4/4) 砂礫土



写真 33 土壌2断面（西から）



【土壤3埋土】

- 1 棕褐色 (7.5YR5/4) 強粘質土
- 2 明黄褐色 (10YR6/6) 砂礫土

【土壤4埋土】

- 1 褐色 (7.5YR4/4) 強粘質土

0 1m (1/40)

図 14 溝・土壤断面図



写真 34 土壌3・4断面（西から）

【埋没谷】（図9、写真13～15・37～40）

ここで埋没谷としているのは、上部包含層（L2・3）下に検出した灰色およびオリーブ黒色の堆積土層を示す（図8・9の土層断面図灰色網掛部分）。谷埋土とした土層の下位に存在する堆積土も当然「谷埋土」とすべきであるが、平成14年度に実施された農学部校舎改修（解剖実習棟校舎新設）に伴う発掘調査において検出され、旧河川埋土として報告された堆積土層との類似から敢えて区分して設定したものである。

写真37から分かるように、谷埋土は調査区西部の広範囲に検出された。この状況は、昭和41年に実施された、本調査区に北接する家畜病院建設に伴う発掘調査で確認された遺物包含層（黒色粘土層）の分布範囲とも一致するようである。ただし、この調査では層上面の検出に止まつたため、河川埋土の掘削調査は実施されていない。

この3次に及ぶ調査では、いずれも谷（下流では旧河川）の右肩部を検出しているため、谷幅の全貌を把握できないが、本調査区では肩部から緩やかに北東から南西へ降下しており、調査区西端部においてやや傾斜を強め降下しつつも未だ谷底へとは達していないようである。この状況からして、本調査区地点で谷幅は少なくとも15m以上あるように推測される。

堆積時期に関しては、最上層（NR1-L1）に少数ながら瓦質土器が混ざることから、谷が完全に埋没する時期は中世にまで降るようである。また谷埋土下層（NR1-L3）に包含される遺物については、7世紀後半から8世紀前半の須恵器を主体としながらも8世紀後半の土器が散見され、上層（NR1-1・2）に包含される遺物には9世紀代の須恵器を主体としながら中世土器も散見される。いずれにせよ丘陵及び谷上部からの流入土であるため厳密な埋没時期の特定はほぼ不可能な状況と言える。

また、遺物相の特徴としては、下流に位置する解剖実習棟校舎新設に伴う発掘調査区では多量の製塙土器を始め縁軸陶器、輪羽口、墨書き土器など特徴ある遺物が数多く出土しているが、本調査区の谷埋土では遺物の総量に比するとこれらの遺物が極めて少なく、極少量の製塙土器、縁軸陶器、硯が見られるのみである。この様相が直接的に何を示すかは定かではないが、遺物の流入元となった周辺の集落構造の相違が反映されている可能性もあり、注意が必要であろう。

以上、確認した遺構等の概要を記した。調査区の北半部がすでに破壊を受けていたこともあり、限定的な範囲を対象としての調査となつたため、遺構の規模および配置関係に未だ不明確な点を数多く残す。北接する家畜病院建物下に遺構が存する可能性は極めて乏しいが、調査区南面に広がる空閑地（駐車場）下には良好に遺構・遺物が遺存する筈である。今後の調査において更に面的な遺構の確認を行う必要があろう。

〔註〕

1) a:田畠直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新設）に伴う発掘調査略報－」、山口考古学会（編）

『山口考古 第22号』、山口

b:田畠直彦（2004）「第8章6. 平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報 XVI・XVII』、山口

2) 横山成己(2007)「付篇 吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』、山口

（横山）



写真 35 遺物包含層（L3）上面検出状況（北東から）



写真 36 水田暗渠（溝1）完掘状況（南西から）



写真 37 谷埋土上面検出状況（北東から）



写真 38 谷理土振削状況（南東から）



写真 39 谷埋土3層底面（北から）



写真 40 谷埋土3層底面遺物出土状況（西から）

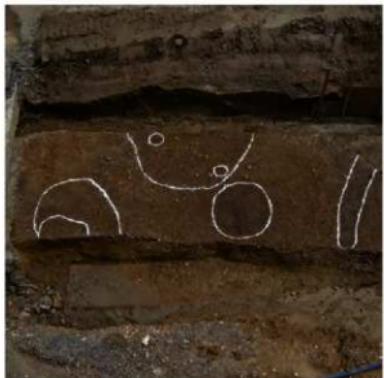


写真 41 調査区東部遺構検出状況（北から）



写真 42 調査区東部遺構半掘状況（西から）



写真 43 調査区西部遺構検出状況（北東から）

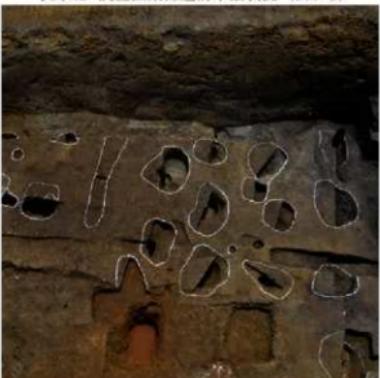


写真 44 調査区西部遺構半掘状況（北から）



写真 45 調査区全景（北東から）



写真 46 掘立柱建物跡2・3（南東から）

吉田橋内（古田遺跡）の調査



写真 47 調査区西端部流木出土状況 (南から)



写真 48 調査区南壁土層断面 (北東から)



写真 49 調査区南壁土層断面 (北から)



写真 50 調査区南～西壁土層断面 (北東から)



写真 51 記者発表の模様 (東から)



写真 52 記者発表の模様 (西から)

(5) 遺物 (図15~36、表3~5、写真53~85)

ここでは、本調査において出土した遺物を、土器・石器・木器の順に遺構・層位別に記述する。なお、調査地西部は傾斜地であるため、掘削時の遺物包含層の厳密な区分が困難であった。よって上下層どちらの所属とも判別がつかない場合は、「境界層」として報告を行う。

【土器】

掘立柱建物跡3 (図15-1~4、写真53)

1~3は須恵器。その内1・2は甌。2は外面に平行タタキ、その上からはハケがうっすらと確認される。内面には同心円文の当て具痕が見られ、擦り消しナデは見られない。当て具痕の溝は中心から外に向かって8本確認され、径は5.8cm以上。溝の深さは最大約3mm。3は皿蓋か。内面には幅5mm程の板状工具による不定方向のナデが確認される。4は土師器甌。口縁端面に浅い凹線を巡らし、端部は尖り気味におさめる。体部は内外面ともにハケ後、ナデ調整。(口縁部はヨコナデ調整。)

掘立柱建物跡2 (図5~15、写真53)

5~11は須恵器。5~8は高坏。調整はロクロナデ。5は裾を短く下垂せるもの。短く、やや尖り気味におさめる。6は脚端部内面に極浅い凹線を巡らし、裾をわずかに下方へ向かせて丸くおさめる。7も脚端部内面に極浅い凹線を巡らすが、裾は外方へ向く。8は脚端部を下方へ強く屈曲させた後に外反させるもの。裾は丸くおさめる。9は高坏か。口縁部外面上には横方向に走るカキ目が観察される。10は甌。外面には平行タタキの上にハケが観察され、内面には同心円文の当て具痕の上に擦り消しナデが確認される。当て具痕の溝は中心から外に向かって7本確認され、径は5.4cm以上。溝の深さは2mm前後。11はハソウ。調整はロクロナデ。ただし、底部外面は無調整。底部内面中央には、同心円文の当て具痕が残る。外面には凹線が4条確認され、肩部の凹線の上下には櫛描き列点文が施される。12~15は土師器甌。12は外面にハケが観察され、内面には指押さえ痕が残る。13は口縁部外端に鈍い稜が入る。体部にはハケ、口縁部にはヨコナデを施す。15は外面にはハケが観察されるが、内面は風化のため不明。

掘立柱建物跡1 (図15-16、写真54)

16は須恵器の高台付皿か。風化が著しく調整は不明。

SP3 (図15-17、写真54)

17は土師器甌。

土壤4 (図15-18、写真54)

18は平瓶。外面はハケ後、擦り消しナデ。内面はロクロナデ。内面中央には風船技法の痕跡が観察される。

溝2 (図15-19、写真54)

19は円面甌。肩部に低い突帶が付くもの。調整はロクロナデ。

NR1-L3・遺物包含層L4境界層 (図16-20~38、写真54・55)

20~32は須恵器。20~24は坏蓋。20は比較的高い器高を持つ。天井部から口縁部に向かって直線的に下がるため、台形状を呈す。口縁端部は少し肥厚する。天井部と口縁部との境の外面には鈍い稜が巡る。天井部外面はヘラ起こし後、一方向ナデ。他はロクロナデ。21はロクロナデ調整。22は小型の坏蓋。口縁端部が鋭く外方へ伸びるもの。天井部から口縁部との境までロクロヘラ削りを施す。23は特に扁平な天井部から下方へ強く屈曲させて口縁部に至る。口縁端部外面には段あり。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。短頸壺蓋の可能性もある。24は天井部外面に鈍い稜

古田橋内（古田遺跡）の調査

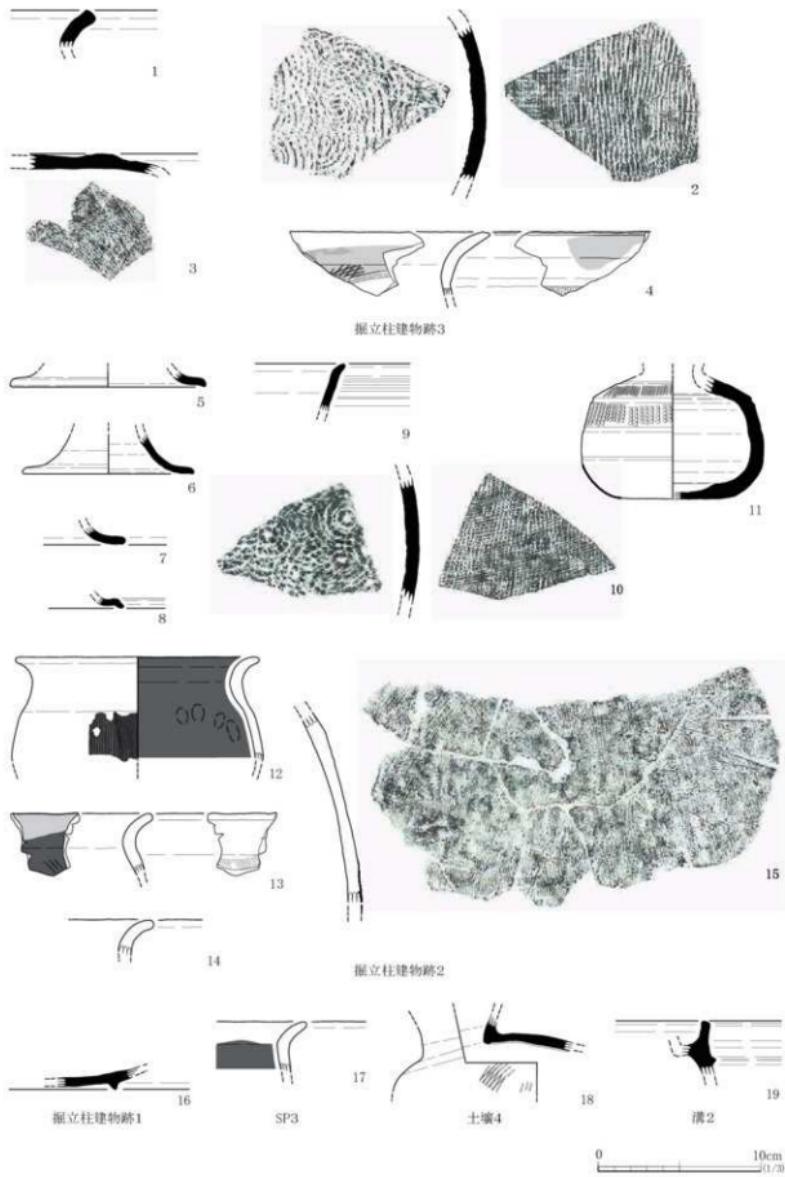


図 15 出土遺物実測図(土器)①

を持つ。天井部から口縁部とを分ける稜まではロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ調整のみ。**25～28**は高台付坏身。高台が高いもの(**26**)と低いもの(**25・28**)、小さい高台のもの(**27**)がある。**26**は歪みが目立ち、高台も片側に寄っている。底部が厚く特徴的。高台は外方に強く張り出するもので、高台内端は突出している。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、無調整。他はロクロナデ。**25**は体部の立ち上がりに稜が入る。調整はロクロナデ。ただし、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。内面には不定方向のナデを加える。**28**は高台内端を著しく突出させる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整か。底部外面にはヘラ記号を持つ。**27**は体部の立ち上がりに稜が入る。高台内端を突出させる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整か。**29**は高台付壺か。器壁が薄く、作りは丁寧。外方に張り出した高台を持ち、高台内端が突出する。底部外面はヘラ起こし後、無調整。底部内面は風化のため不明。他はロクロナデ。**30・31**は高杯。調整はロクロナデ。**30**は口縁端部が摩耗している。**31**は脚端部が下方へ屈曲した後に外反するもの。裾は丸くおさまる。**32**は高台付壺か。盤の可能性もある。調整はロクロナデ。内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、ロクロヘラ削り。**33～36**は土師器甕。**33・34**は直線的に外方に開く口縁部を持ち、端部を角張らせておさめる。内外面ともハケが観察される。**33**は口縁部端面に浅い回線を巡らし、口縁部内面には擦り消しナデを施す。**34**は口縁部端部の直下に極浅い回線が巡る。**33**と同一個体の可能性がある。**35**は口縁部が強く外反し、口縁部と体部との境の外面には稜が入る。体部外面にはハケが確認され、体部内面には指押さえと縱方向のナデが観察される。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。**36**は直線的に外方へ大きく開き、端部付近から外反する口縁部を持つ。風化のため調整は不明。**37・38**は弥生土器甕か。**37**は外面に粗いハケが観察され、体部内面には横方向のヘラ削りが見られる。**38**は体部が直線的に立ち上がり、口縁部から強く外反して尖り気味におさまる。体部内面には横方向のヘラ削りが施され、他はナデ調整。

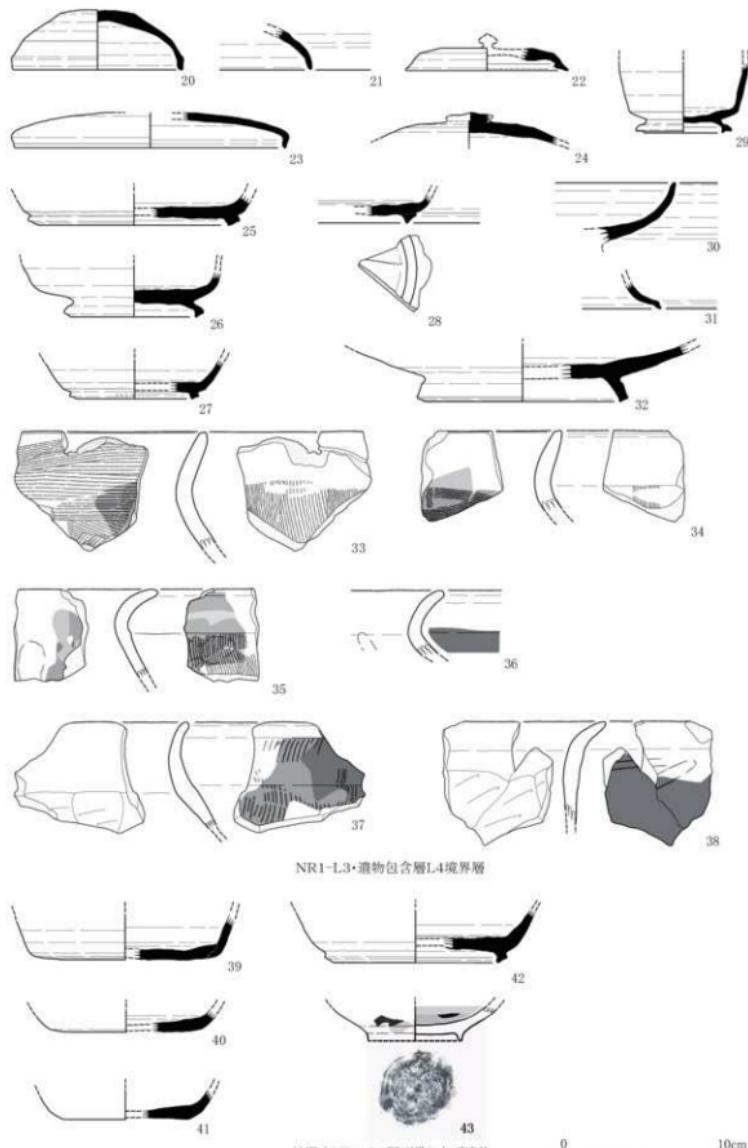
谷埋土NR1-L3団面取り上げ遺物（図16-39～43、写真55※出土状況は写真39・40）

39～42は須恵器。**39～41**は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整。**42**は高台付坏身。高台内端を突出させる。調整は**39～41**と同様。**43**は高台付土師器皿。高台は貼り付けられており、底部外面には糸切り痕が認められる。底部内面の中心に直径約1cm、深さ5mm程の凹みがあるが、意識的なものかは不明。破面から見て焼成後に穴が空いたと考えられる。内面と一部外面とに炭が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。

谷埋土NR1-L3底面（図17-44～85、写真56・57）

44～77は須恵器。**44～55**は坏蓋。**44**はドーム状を呈し、天井部と口縁部との境は不明瞭なもの。口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。天井部外面はヘラ起こし後、無調整であるが、摩耗して平滑になっている。**45～55**の調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。**45**は平坦な天井部を持ち、口縁部との境が括れるもの。口縁は嘴状を呈し、端部は尖り気味におさまる。口縁端部外面には鋭い稜が入り、その直下には回線が巡る。天井部外面にはうっすらとカキ目が観察される。**46**は平坦な天井部からゆるやかな曲線を描きながら下方へ伸びて口縁に至るもの。口縁端部外面に回線が巡り、端部は尖り気味に丸くおさまる。**47**は天井部と口縁部との境に段を持つもの。ボタン状の扁平なつまみが付く。端部外面には回線が巡り、端部内面には段が巡る。端部は丸くおさまる。天井部外面はヘラ起こし後、無調整か。**48**は非常に扁平な器形で、天井部と口縁部との境が不明瞭なもの。口縁端部は短く下垂し、尖り気味に丸くおさまる。**50**は皿の可能性もある。肩が張った天井部

古田構内（古田遺跡）の調査



谷埋土NR1-L3面取り上層遺物

図 16 出土遺物(土器)②

から直線的に伸びて口縁に至り、端部は尖り気味におさまる。内面に他の個体の熔着あり。**51**は平坦な天井部から曲線を描きながら下方へ伸びて口縁に至るものか。端部は丸くおさまる。天井部と口縁部との境の外面には極細い四線が巡る。**52**はゆがみが著しい。口縁端部外面には四線を巡らし、端部は丸くおさめる。天井部外面に他の個体の熔着あり。**53**は特に福平な天井部から下方へ強く屈曲し、口縁端部は尖り気味におさまる。**54**は口縁端部が尖り気味に丸くおさまる。天井部と口縁部との境の内面に極浅い四線が巡る。**55**はかえりが接地するもの。口縁端部は短く下垂して丸くおさまる。**56**～**61**は高台付坏身。高台の高いもの(**56**・**57**)、低いもの(**58**～**64**)、小さいもの(**65**)に分けられる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加えるものが多い。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**56**は福平丸底の底部から直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。体部の立ち上がりに鈍い稜を持つ。高台内端を突出させる。底部内面はロクロナデ調整のみ。**57**は全体的に器壁が薄く、丁寧な作り。**58**は平らな底部から内湾気味に立ち上がり、体部上半から直線的に伸びるもの。高台内端をわずかに突出させる。外面に他個体の熔着あり。**59**は高台内端を少し突出させるが、端部は厚く丸い。**60**は高台が体部の立ち上がりより内側に付く。高台の内端は著しく突出する。底部外面にヘラ記号あり。**61**は高台が体部の立ち上がりより内側に付き、内端は少し突出する。底部外面にヘラ記号あり。**62**は断面三角形に近い高台を持つ。**63**は高台内端を突出させ、端部は丸くおさめる。**64**は高台が体部の立ち上がりよりやや内側に付き、高台内端は少し突出する。**65**はやや小さい高台を持ち、高台は断面方形に近い。**66**は坏身。調整はロクロナデ。**67**は皿。平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部で外反して丸くおさまる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整。**68**～**72**は高坏。調整はロクロナデ。**68**は外面に1条の四線が観察される。**69**は脚部に1条の四線あり。**70**は強く屈曲した後に外反する脚端部を持ち、裾は丸くおさまる。**71**は脚端部が下垂するもの。裾はやや尖り気味におさまる。**72**は脚端部内面に四線を巡らし、裾を下方へ向けて丸くおさめる。**73**～**76**は甕。**73**は頸部外面に2条の四線と波状文を持つ。調整はロクロナデ。頸部内面には不定方向のナデを加える。体部内面には同心円文と思われる當て具痕が残る。**75**は風化のため調整は不明。**76**は口縁内端を少し突出させる。外面には平行タタキ、内面には同心円文の當て具痕が認められる。**74**は壺か。外面にヘラ記号有り。**77**は長頸壺。頸部上半に1条の四線が観察される。調整はロクロナデ。**78**～**81**は土師器。**78**は坏。内湾する体部から口縁部へと至る。体部内面にヘラミガキが観察される。**79**は高坏。**80**・**81**は甕。体部外面にハケ、口縁部にはヨコナデを施す。**80**は口縁部と体部との境の内面に稜を持つ。**82**は輪羽口。**83**は黒色土器椀。内黒。内湾して立ち上がり口縁部で外反して丸くおさまる。内面には幅3.5mm程の横方向のミガキが観察される。**84**は土師質土器か。ロクロを用いて作られたと考えられる。底部しか残っていないため器形は明確ではないが、高台付椀か。高台は体部の立ち上がり付近に貼り付けられている。底部中央には、焼成後に開けたと考えられる径1.5mm程の穿孔が観察される。調整はヨコナデ。**85**は白磁碗か。

谷埋土NR1-L3（図18-86～126、写真58・59）

86～**91**は須恵器。**86**は坏蓋。扁平で小さなつまみを持つ。調整はロクロナデ。**87**は坏身。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。**88**・**89**は高台付坏身。調整は底部内面に不定方向のナデ、他はロクロナデ。**88**は特に低い高台を持ち、高台内端を少し突出させる。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**89**は厚い底部と大きな高台を持っており、高台付壺の可能性もある。高台内端は突出させる。**90**は皿。扁平丸底の底部から外反して短く立ち上がり、端部は丸くおさまる。口縁部と底部との境の外面に稜が入る。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナ

古田橋内（古田遺跡）の調査

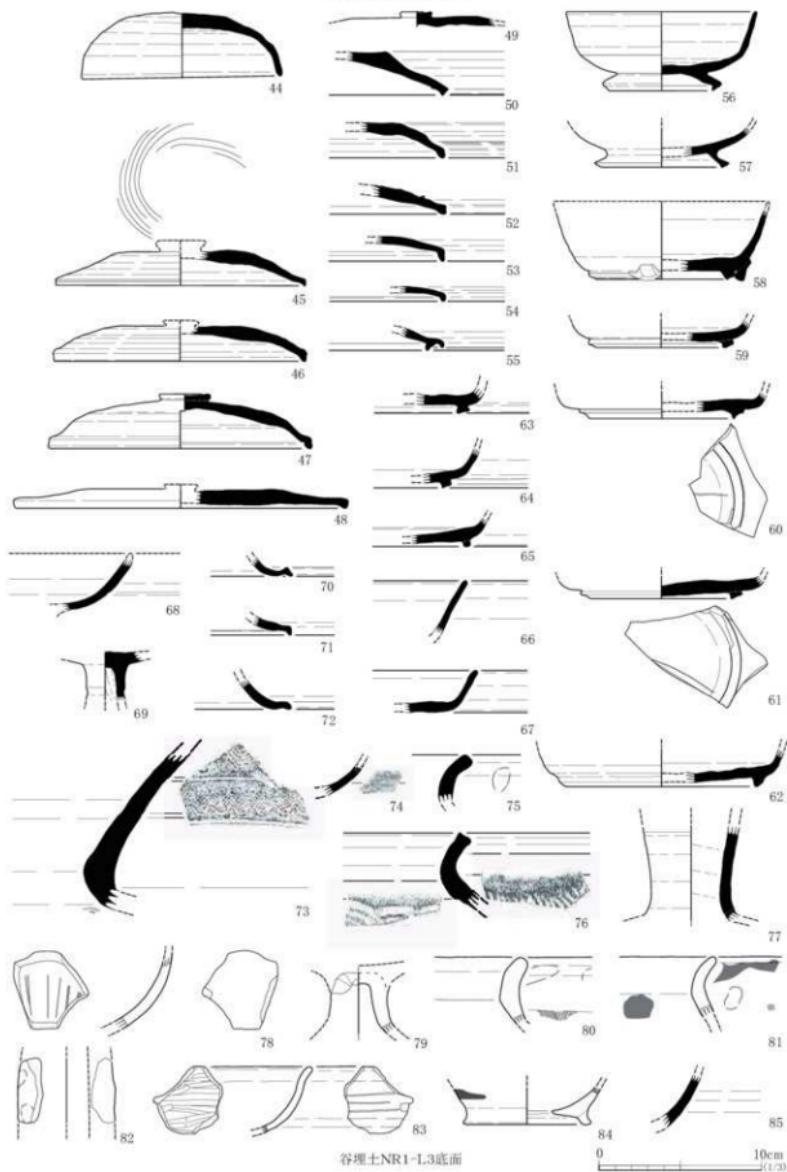


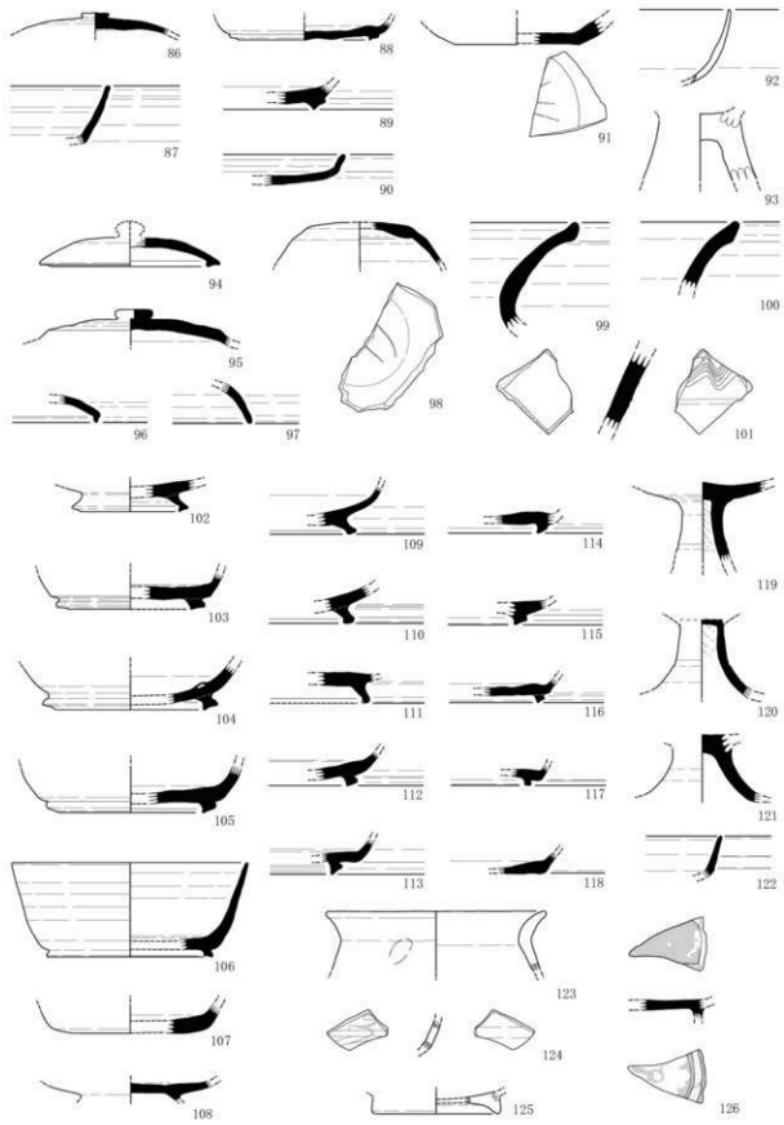
図17 出土遺物実測図（土器）

デを加える。**91**は器壁が厚く、壺か。内面はロクロナデ調整、外側は無調整のままか。底部外面にはヘラ記号あり。**92**は土師器坏。口縁部は薄く、尖り気味におさまる。風化が著しく調整は不明。**93**は弥生土器の支脚。風化が著しく調整は不明。**94～123**は須恵器。**94～98**は坏蓋。**94**は風化が著しいため器形が鈍く、調整も不明。**95**は口縁部と天井部との境の外面に段を持つものと思われる。天井部外面にはヘラ起こし後に粗いナデ、内面には不定方向のナデが観察される。**96**は口縁端部外面に凹線を巡らし、端部をやや内側に屈曲させて丸くおさめる。調整はロクロナデ。**97**はロクロナデ調整。**98**は蓋か。坏身の可能性もある。丸味を帯びた天井部から内湾気味に下がる。調整はロクロナデ。天井部外面にはヘラ起こし後、ナデを施す。天井部内面にヘラ記号あり。**99～101**は甕。調整はロクロナデ。**101**は頭部の破片か。外面に1条の凹線を巡らし、その上部に波状文を施す。**102～106・109～117**は高台付坏身。高台が高いもの(**102・109～111**)と低いもの(**103～105・112～115**)、小さいもの(**106・116・117**)に分けられる。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のものが多い。**102**は高台径が小さく、壺の可能性もある。外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を突出させる。底部外面はヘラ起こし後にロクロナデ調整か。**109**は外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を少し突出させるが、風化のために丸い。**110**は外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を少し突出させるが、端部は丸い。高台接合部外面に接合の際に用いたと思われる工具の痕跡が残る。**111**は高台付皿の可能性もある。**103**は体部の立ち上がりに棱が入る。**104**は高台が大きく、壺の可能性もある。高台内端を突出させる。全体的に焼きぶくれが目立つ。**105**は高台内端を少し突出させるが、風化が著しく全体的に鈍いため、詳細な形状は不明。**112**は高台内端を突出させず、端部は丸くおさめる。**113**は高台が体部の立ち上がりより内側に付く。高台内面に板状工具でナデ調整を施したと考えられる痕跡が残る。高台内端は強く突出する。**114**は高台内端が内湾気味に突出する。端部は摩耗している。**115**は特に低い高台を持つ。高台内端をわずかがら突出させる。**106**は底部からやや内湾気味に立ち上がり、体部上半からは直線的に外方に伸びてやや尖り気味におさまる。高台は外傾で、外端が接地するもの。**116**は高台内端が突出し、下端は摩耗している。**117**は高台の断面は方形を呈す。**107・118**は坏身。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。ただし、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**107**は底部外面が摩耗している。**108**は高台付皿か。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。自然釉が付着している。**119～122**は高坏。調整はロクロナデ。**119・120**は脚部に1条の凹線が巡る。**121**は短脚高坏。ロクロナデ調整は脚部内面全体に及ぶ。**122**は口縁部外面に2条の段を持つ。**123**は土師器甕。**124**は黒色土器椀。内黒。内面には幅3.6mm程の横方向のミガキが観察される。**125**は土師質土器か。貼り付け高台を持つ。風化のため調整は不明。**126**は綠釉陶器。椀か。平坦な底部と高い高台を持つものと考えられる。色調はオリーブ灰色(2.5GY5/1)で、これまでに吉田遺跡から出土した綠釉陶器と比較すると、釉薬の残存状況も良く、色調も濃い。

谷埋土NR1-L2 (図19-127～138、写真59)

127～133は須恵器。**127～129**は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**127**は平らな底部から直線的に立ち上がり、体部上半からは内湾気味に伸びて口縁端部は丸くおさまる。**130・131**は高台付坏身。ロクロナデ調整。**130**は底部から直線的に立ち上がり、体部上半からはやや外反して口縁端部は丸くおさまる。**131**は風化が著しく、全体的に鈍い。高台の接合痕が明瞭に残る。**132**は高台付皿。風化が著しいために全体が鈍く、調整も不明。**133**は蓋。口縁部を外反させて端部は尖り気味におさめる。天井部と口縁部との境まで、

吉田橋内(古田遺跡)の調査



谷理士NR1-L3



図18 出土遺物実測図(土器)④

外面にロクロヘラ削り後ロクロナデを施す。他はロクロナデ。**134～136**は土師器。**134**は皿。**135**も皿か。ともに風化が著しく調整は不明。**136**は高台付皿か。貼り付け高台を持つ。風化のため調整は不明。**137**は黒色土器椀。内墨。内面には幅3.5mm程の横方向のミガキが観察される。**124**と同一個体と考えられる。**138**は製塙土器。内面には非常に目の細かい布目底が観察される。

谷埋土NR1-L1 (図19-139～167、写真60・61)

139～161は須恵器。**139～146**は坏蓋。調整はロクロナデ。**141**は天井部と口縁部との境が括れる。口縁端部は嘴状を呈し、尖り気味に丸くおさまる。天井部外面中央はヘラ起こし後、無調整か。天井部内面には不定方向のナデが施されている。**142**は端部内面には凹線が巡る。**143**は口縁部外端に鈍い稜が入る。**144**は口縁部外端に鋭い稜が入る。**145**は口縁端部を丸くおさめる。**146**は口縁端部を尖り気味に丸くおさめる。**147～154**は高台付坏身。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。低い高台を持つもの(**147～151**)と小さい高台を持つもの(**152～154**)に分けられる。**147**は高台が体部の立ち上がりより内側に取り付き、体部の立ち上がりに鈍い稜が入る。高台内端は突出する。**148**は高台外面に工具で削った際に付いた痕跡なのか、粘土がよれた跡が残り、高台外端に鋭い稜が入る。高台内端は摩耗しているために丸い。**149**は風化が著しく全体的に鈍いため、詳細な形状は不明。**150**は高台を体部の立ち上がりより少し内側に貼り付ける。高台内端は突出する。**151**は特に低い高台が付く。貼り付け痕が明瞭に残る。高台は風化のために鈍く、詳細は不明。**152**は高台は断面方形に近い。底部と体部との境の内面に低い段あり。ナデに伴うものか。**153**は平坦な高台端面を持つ。**154**は高台内端を少し突出させる。**155～157**は坏身。**155**はロクロナデ調整。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**156・157**は風化のため調整は不明。同一固体の可能性あり。**158・159**は高坪。調整はロクロナデ。**158**は脚部に1条の凹線を持つ。**159**は脚端部が下方へ強く屈曲した後に外反する。脚端部外面に段あり。**160**は綠釉陶器椀か。色調はオリーブ黄色(7.5Y6/3)を呈し、釉薬の残存状況も良くなく、色合いは薄い。**161～164**は青磁。**162・163**は同安窯で生産されたものか。**165～167**は土師器。**165**は高台付坏身か。貼り付け高台を持つ。風化のため調整は不明。**166**は坏か。底部内面には不定方向のナデが確認され、他にはヨコナデが認められる。**167**は皿か。風化が著しく調整は不明。

谷埋土NR1-L1・L2境界層 (図19-168～171、写真61)

168～170は高台付坏身。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**168**は高台が体部の立ち上がりより内側に付き、高台内端は少し突出する。**169・170**は小さな高台を持つもの。高台の断面は方形に近い。**170**は高台端面の摩耗が著しく詳細不明。**171**は獸硯の脚部片か。

谷埋土NR1※層位不明 (図19-172～173、写真61)

172は坏蓋。天井部と口縁部との境に段を持ち、口縁端部は丸くおさめる。調整はロクロナデ。天井部内面は不定方向のナデ調整、天井部外面は無調整。**173**は高台付坏身。高台内端を突出させる。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向ナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整か。

谷埋土NR1検出時・上部包含層との境界層 (図19-174～177、写真61)

174は高台付坏身。高台の貼り付け方は粗い。底部内面には不定方向のナデを加え、他はロクロナデ調整。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**175**は皿。口縁部内面には1条の凹線が巡り、端部は尖り気味におさまる。調整はロクロナデ。**176**は皿か。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**177**は内面に付着した墨から蓋を転用

古田橋内(古田遺跡)の調査

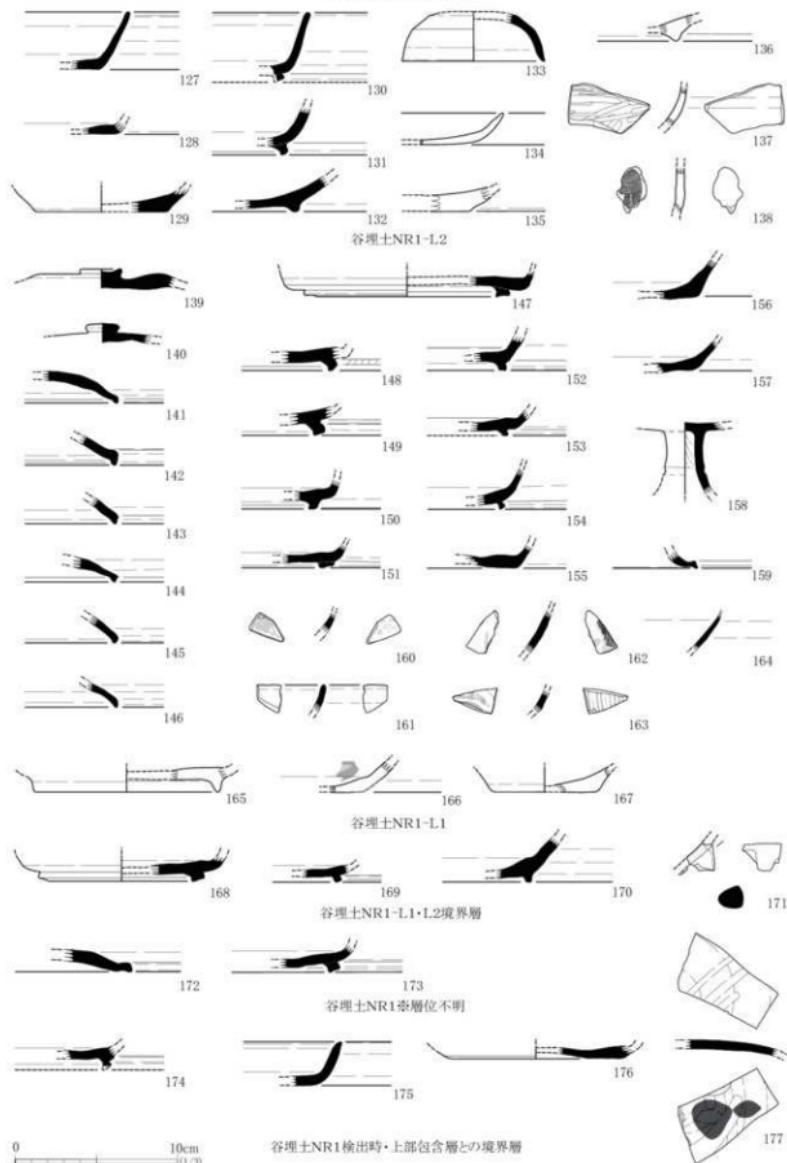


図 19 出土遺物実測図(土器)⑤

した硯と考えられる。外面にはロクロナデの上から幅3mm程のナデを加えた痕跡が観察される。内面は不定方向のナデ調整。

遺物包含層L6（図20～23-178～283、写真62～69）

178～257は須恵器。178～180、183～205は坏蓋。178～180・194はロクロナデ調整。天井部内面には不定方向のナデを加える。178はドーム状を呈するが、口径が比較的大きいため扁平な器形のもの。天井部から強く屈曲して、口縁端部は内面側にわずかに肥厚して尖り気味に丸くおさまる。天井部外面はヘラ起し後、無調整のまま。外面に墨らしき痕跡が残るが、明らかでない。179・180・194はドーム状を呈し、天井部と口縁部との境が不明瞭なもの。天井部外面にはヘラ起し後にナデを施す。179は口縁端部が外反して丸くおさまる。180・194は口縁端部が丸くおさまる。183～187・195～202はかえりを持つもの(183～186・195～199)と持たないもの(187・200～202)とに分かれる。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。183は天井部と口縁部との境が括れ、口縁は外方へ向く。天井部から括れにかけてロクロヘラ削り後にロクロナデを施す。184・185は器壁が厚く、かえりは短い特徴で共通する。184は天井部1/2にロクロヘラ削り後、ロクロナデ調整。185は天井部と口縁部との境が括れる。風化のため調整は不明。186は扁平な天井部を持つ。186は天井部と口縁部との境に2条の浅い回線を巡らし、括れを持たせる。口縁端部外面にも1条の極浅い回線を巡らす。天井部から括れにかけてロクロヘラ削りを施した後、ロクロナデを施す。端部は下垂させて丸くおさめる。195は口縁端部を下方へ屈曲させて丸くおさめる。口縁端部を除く範囲にロクロヘラ削りを施した後、ロクロナデを施す。196は口縁端部が外方へ伸び、丸くおさまる。197・198は尖り気味におさまる短いかえりを持つ。198は天井部外面ほぼ全体にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。199は口縁端部が下垂し、尖り気味におさまる。かえりが大きく特徴的。187は扁平な天井部から下方へ強く屈曲して丸くおさまる。天井部外面ほぼ全体にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。200は特に扁平な天井部から下方へ強く屈曲させて口縁部に至る。口縁端部外面には段あり。201は口縁端部が強く屈曲してやや尖り気味におさまる。202は口縁端部が弱く屈曲して丸くおさまる。焼き膨れが目立つ。188～205は小型の坏蓋。かえりが接地するもの(188～192・205)と口縁が接地するもの(193・203・204)に分かれる。口縁が接地するものには天井部内面に不定方向のナデが観察される。188・189は一段盛り上がった天井部にロクロヘラ削りを施して平坦な天井部を形成するもの。調整はロクロナデ。188は口縁端部は下方へ向く。鈍い宝珠形のつまみを持つ。189は口縁端部が外方に伸びて丸くおさまる。190は口縁端部が下方へ強く屈曲して尖り気味におさまる。かえりも下方へ伸びて尖り気味におさまる。調整はロクロナデ。191は口縁端部を丸くおさめるが、鋭いかえりを持つ。天井部外面3/4の範囲にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ。192は平らな天井部から口縁に向かって直線的に下方へ伸び、口縁端部は丸くおさまる。鋭いかえりを持つ。天井部外面3/4の範囲にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ。191と同一個体の可能性が高い。193は口縁端部を丸くおさめる。かえりはやや尖り気味におさまる。天井部1/2にロクロヘラ削り後、ロクロナデ調整。他はロクロナデ調整。天井部外面に他の個体の熔着あり。203は口縁端部とかえりとが下方へ向き、尖り気味におさまる。204は口縁端部が外方へ伸びるもの。口縁端部の器壁は薄く、かえりも鋭い。天井部1/2ほどの範囲にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。天井部内面には不定方向のナデを加える。205は器高が比較的高く、天井部と口縁部との境に段を持つ。口縁端部は下方に屈曲して丸くおさまる。かえりはやや尖り気味におさまる。口縁端部以外の外面にはロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察できる。天井部内面には不定方向のナデ、他はロクロナデ調整。181・182は短頸壺の蓋か。181は天井部と口縁

古田構内（古田遺跡）の調査

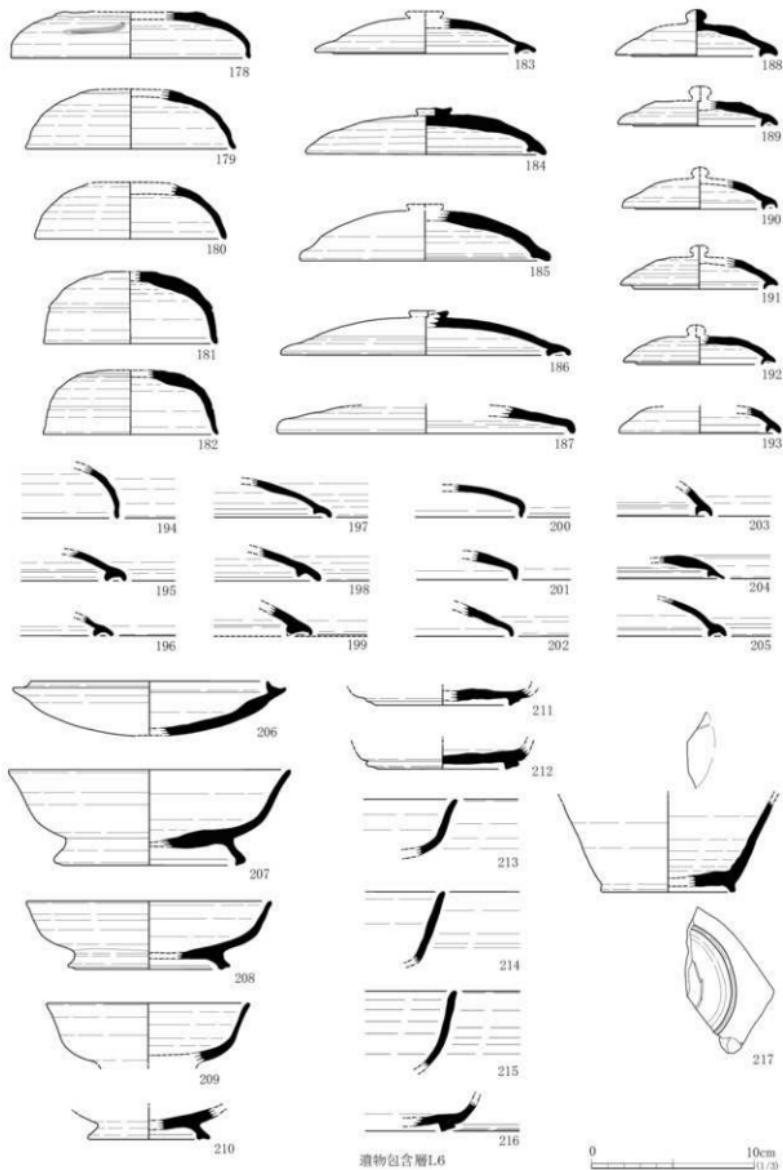


図 20 出土遺物実測図(土器)⑥

部とを分ける稜は突出させず、代わりに回線を巡らす。また、口縁部内面に面を持ち、器形は大阪府陶邑窑MT15型式の坏蓋と類似している。しかし181は口径が小さく、異なる。天井部外面にヘラ起こし後にナデを施し、他にはロクロナデを施す。182も181と似た器形を持つが、回線は天井部と口縁部との境より下で巡る。天井部外面中央にも1条の回線が走る。口縁端部は外反して丸くおさまる。調整は181と同様。206は坏身。立ち上がりは内傾し、受部は外方に伸びる。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデが認められる。焼き彫れが目立つ。207～212は高台付坏身。高い高台を持つもの(207・208・210)と低い高台を持つもの(211・212・216)に分けられる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。207・208は高台が体部の立ち上がりより内側に付く。207は扁平丸底を呈した底部から内湾気味に立ち上がり、体部上半からは外反して口縁端部は丸くおさまる。高台は外方へ強く張り出し、高台内端は突出する。底部内面に施された不定方向のナデは中央附近に限られる。208は扁平丸底を呈した底部から直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。外方へ強く張り出す高台を持つ。高台内端は突出するが、摩耗のため鈍い。高台の貼り付け痕が明瞭に残る。209は底部から直線的に立ち上がりさせ、口縁端部を外反させて丸くおさめる。210は外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を突出させる。211は高台が体部の立ち上がりよりやや内側に付き、高台内端を突出させる。212は高台内端をやや突出させる。213は口縁端部を外反させて丸くおさめる。214は口縁端部がやや尖り気味に丸くおさまる。風化が著しく調整は不明。215は内湾する体部から直線的に立ち上がり口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。楕の可能性もある。216は高台内端を少し突出させる。217は楕。平坦な底部から外方に開きながら直線的に立ち上がる。底部内外面ともにヘラ記号あり。218～242は高坏。調整はロクロナデ。坏部と脚部の両方が残る資料(218～225)、坏部のみの資料(228～230・235～241)、脚部のみの資料(231～234・242)がある。218は口縁端部が尖り気味に丸くおさまる。脚端部は下方に強く屈曲した後に外反するもの。裾は尖り気味に丸くおさまる。脚部中央辺りに1条の回線が巡る。坏部外面2/3はロクロヘラ削り後、ロクロナデ。219は口縁端部を丸くおさめる。坏部外面に1条の回線を巡らし、それより坏底部側にはロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。脚部中央辺りに1条の回線を巡らせる。220は脚端部が下方に強く屈曲した後にわずかに外反して、裾は丸くおさまる。脚部中央辺りに1条の回線が巡る。221は小さな坏部を持つ。平坦な底部からほぼ直角に立ち上がり、口縁端部は外反して尖り気味に丸くおさまる。坏部外面に段が3条巡り、脚部には回線が2条走る。脚端部は下方に強く屈曲してわずかに外反し、裾は尖り気味におさまる。223は分厚い坏底部を持つ。風化のため調整は不明で、脚部の回線も確認出来ない。224は脚部に浅い回線を巡らす。風化のため調整は不明。225は脚部に回線を巡らす。斜方向の浅い回線も巡る。ナデを強く施した痕跡か。226・227は短脚の高坏か。226は坏部内面に不定方向のナデを施す。227は坏部と脚部の接合痕が観察できる。228は口縁がわずかに外反して尖り気味におさまる。229は口縁端部がやや外反して丸くおさまる。230は扁平丸底の底部から直線的に外方へ開き、口縁端部でやや外反して丸くおさまる。外面には段を2条巡らす。235は口縁端部が肥厚して丸くおさまる。236は口縁端部を尖り気味におさめる。237は高坏か。口縁端部は丸くおさまる。坏底部と口縁部との境の外面には回線が巡る。238は器壁は薄い。口縁端部が尖り気味におさまる。239は外面に段が2条巡る。坏底部外面にはロクロヘラ削り後にロクロナデが施されている。240は高坏か。器壁が非常に薄い。口縁端部は外反して丸くおさまる。端部内面には鈍い稜が入る。241は高坏か。器壁が厚く、口縁端部はやや尖り気味におさまる。231は脚部に1条の回線が確認できる。脚端部は下方に強く屈曲した後にやや外反し、裾は丸くおさまる。端部の摩耗が確認される。232は脚部が直線的

古田橋内（古田遺跡）の調査

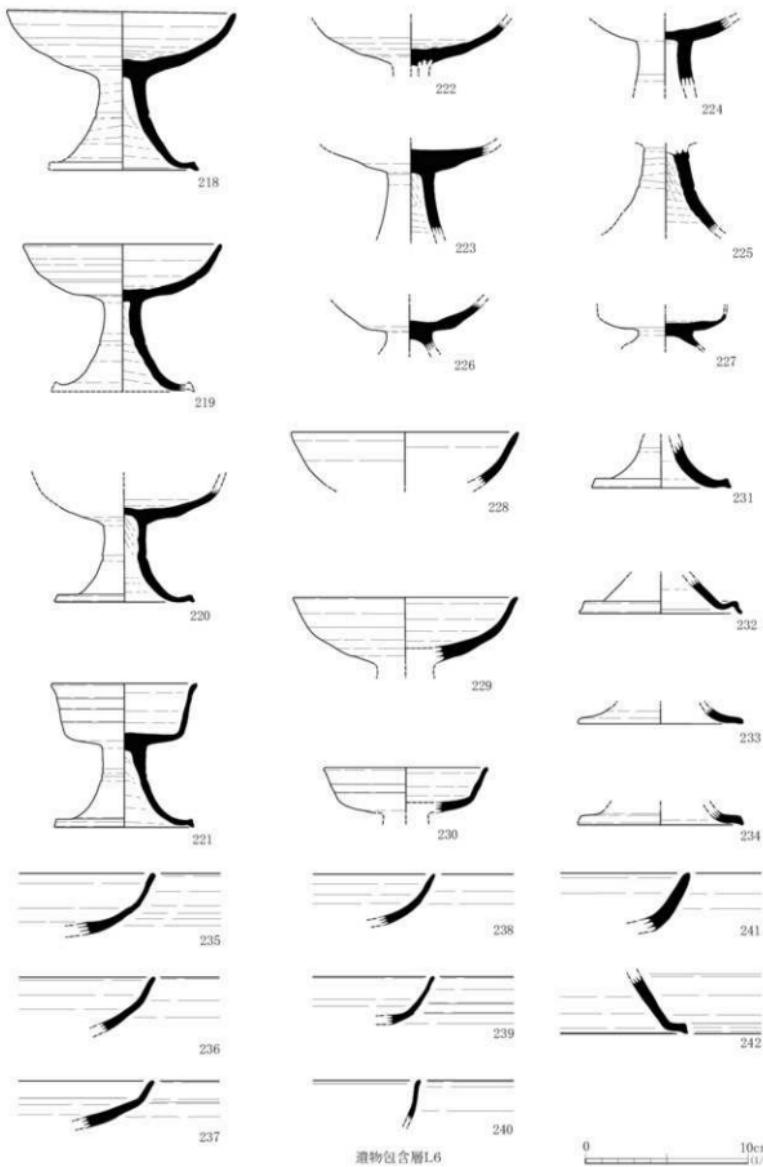


図 21 出土遺物実測図(土器)⑦

古田構内（古田遺跡）の調査

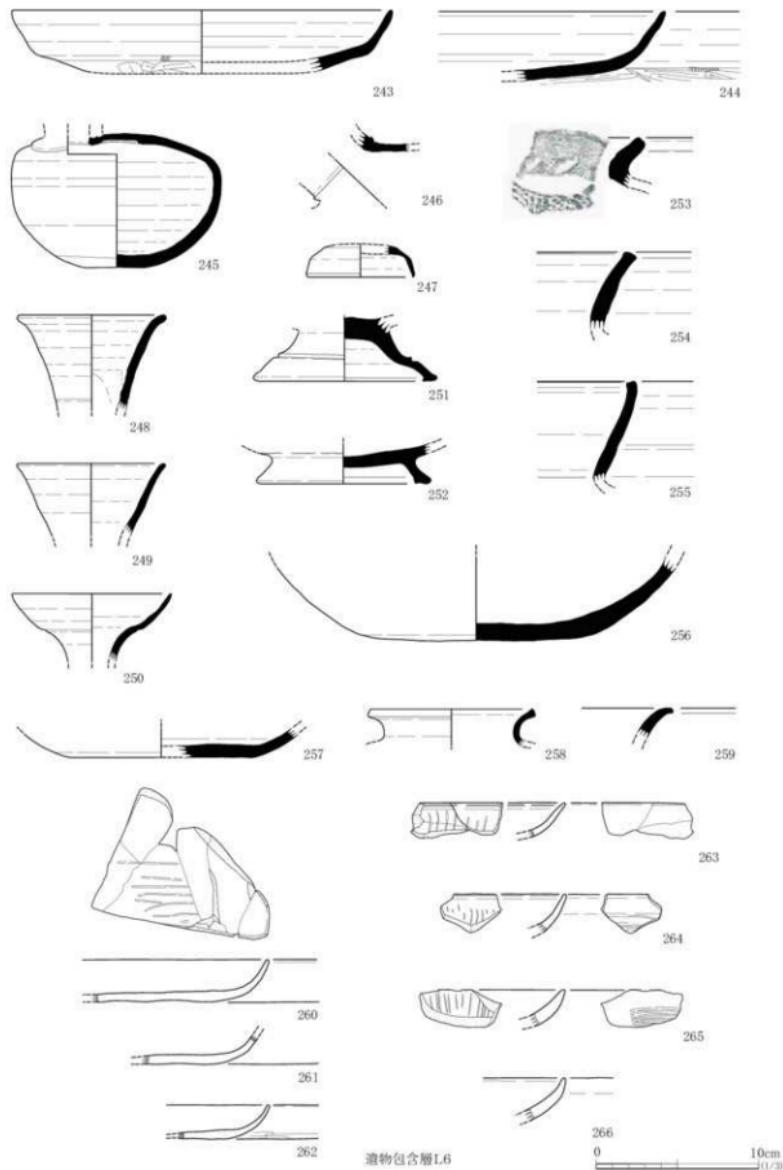


図 22 出土遺物実測図(土器)⑧

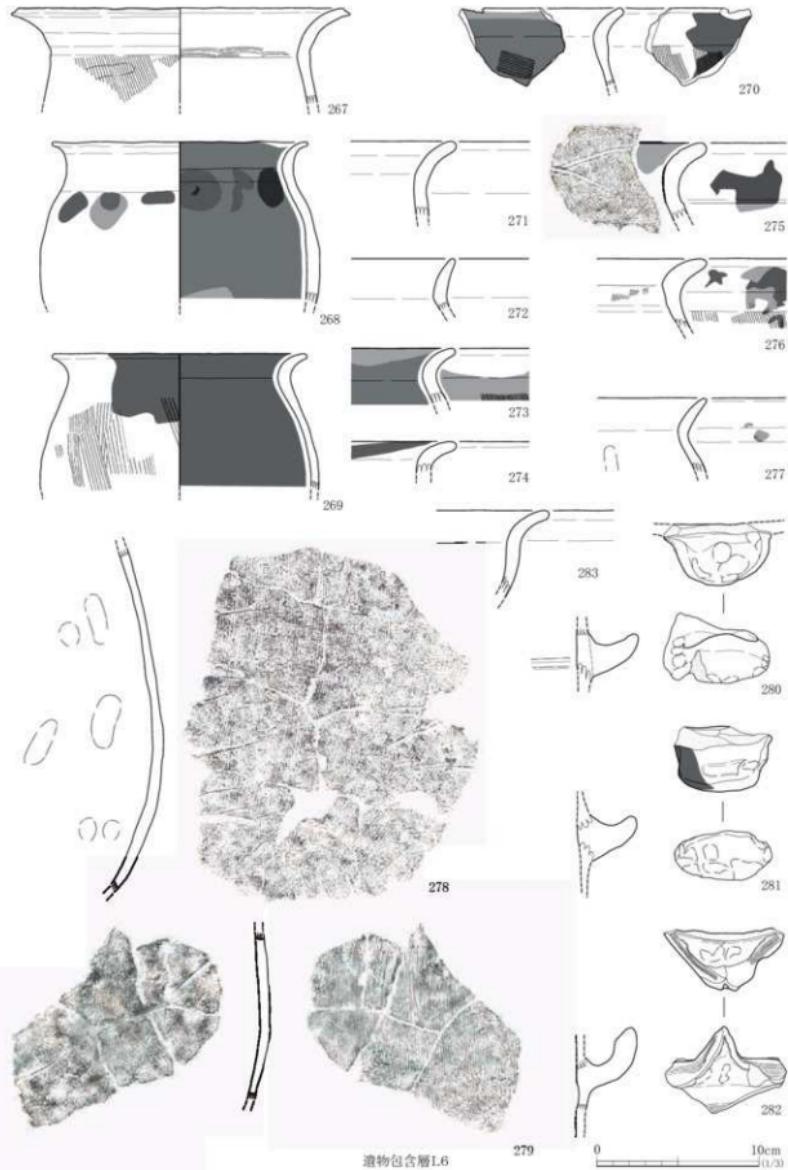


図 23 出土遺物実測図(土器)⑨

に開き、端部は下方へ強く屈曲した後に外反して、裾は丸くおさまる。**233**は脚短部内面に凹線を巡らし、裾を下方に向けて丸くおさめる。**234・242**は脚端部を短く下垂させるもの。裾をやや尖り気味におさめる。**242**は脚部に浅い凹線が巡る。**243・244**は皿。扁平丸底気味の底部から直線的に外方へ開いて口縁に至り、端部は尖り気味におさまる。底部外面には不定方向のヘラ削りを施す。他はロクロナデ調整で、底部内面には不定方向のナデを加える。**243**は底部内面に不定方向のナデを施す前段階において不定方向のヘラ削りを施す。**245**は平瓶。平らな底部から丸く立ち上がって肩部に至り、肩部からなだらかにおさまる。天井部内面中央に風船技法の痕跡が残る。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、ナデ。**246**は平瓶か。頸部外面に段を持つ。調整はロクロナデ。**247～253**は壺。**247**は蓋蓋か。天井部と口縁部とを明瞭に分かつ、口縁端部は尖り気味におさまる。天井部外面中央部にはロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察される。他はロクロナデ調整。**248～250**は長頸壺。調整はロクロナデ。**248**は頸部外面に1条の凹線を巡らす。口縁端部を強く外反させて丸くおさめる。**249**は口縁端部からわずかに外反させて丸くおさめる。**250**は頸部を強く外反させ、口縁部からは内湾させてやや尖り気味におさめる。頸部と口縁部との境に凹線を巡らす。頸部が細く、器壁は薄い。**251**は脚付壺。脚部外面中央に段を設けるもの。脚部内端は突出する。底部内面には一方向ナデを施し、他はロクロナデ調整。**252**は高台付壺。外方へ強く張り出す高台が付き、高台内端は少し突出する。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。**253～259**は甕。調整はロクロナデ。**253**は内面に当具痕が残る。**255**は口縁端面と頸部外面とに1条の凹線を巡らす。**256・257**は体部外面にロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察される。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、ナデか。**258・259**は小型の甕か。**260～266**は土師器。**260**～**264**は皿。**260**は平坦な底部から内湾して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部内面に暗文を持つ。風化が目立つ。**261**は**260**と同一個体の可能性がある。風化のため調整は不明。**262**は平坦な底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。口縁部内面にヨコナデ、底部外面にはミガキを施す。**263**は口縁端部が外反する。調整はヨコナデ。内面には暗文が入る。**264**は丸くおさまる口縁端部を持つ。内面には暗文が見られる。口縁部内面にヨコナデ、外面にはミガキを施す。**265・266**は坏か。尖り気味におさまる口縁端部を持つ。**265**は外面にミガキを施し、内面にはヨコナデを施す。内面に暗文が観察される。**266**は風化のため調整は不明。**267～282**は甕。体部にはハケ、口縁部にはヨコナデを施す。**267**は体部と口縁部との境の内面に稜を持ち、外反して口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。**268・269**は口縁部と体部との境の内面に鈍い稜を持ち、口縁部から強く外反して丸くおさまる。**268**は風化のため調整は不明。頸部内面に炭化物が付着している。**269**は体部外面にハケが観察される。**270**は内外面ともにハケが観察される。**275**は口縁部内面にヘラ記号がある。**276**は口縁部と体部との境の内面に稜が入る。口縁部内面が肥厚している。**278・279**は甕の体部片。外面にはハケ、内面には指押さえ痕が観察できる。**280～282**は甕の把手。**283**は鉢。調整は風化のため不明。

遺物包含層L6とL5の境界層（図24-284～292、写真70）

284～288は須恵器。**284**は短頸壺の蓋か。ドーム状を呈し、天井部と口縁部との境の外面に稜が入る。口縁部内面に面を持たせて端部は尖り気味に丸くおさめる。風化のために全体的に鈍い。調整はロクロナデ。天井部外面はヘラ起こし後、一方向ナデ調整。**285・286**は皿。扁平丸底を呈した底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。体部の立ち上がり付近に1条の凹線が巡る。底部内面に不定方向のナデを加え、底部外面にはロクロヘラ削り後にロクロナデを施す。他はロクロナデ。**287**は高杯。脚端部は下方へ強く屈曲した後に外反し、裾は丸くおさまる。調整は

古田構内（古田遺跡）の調査

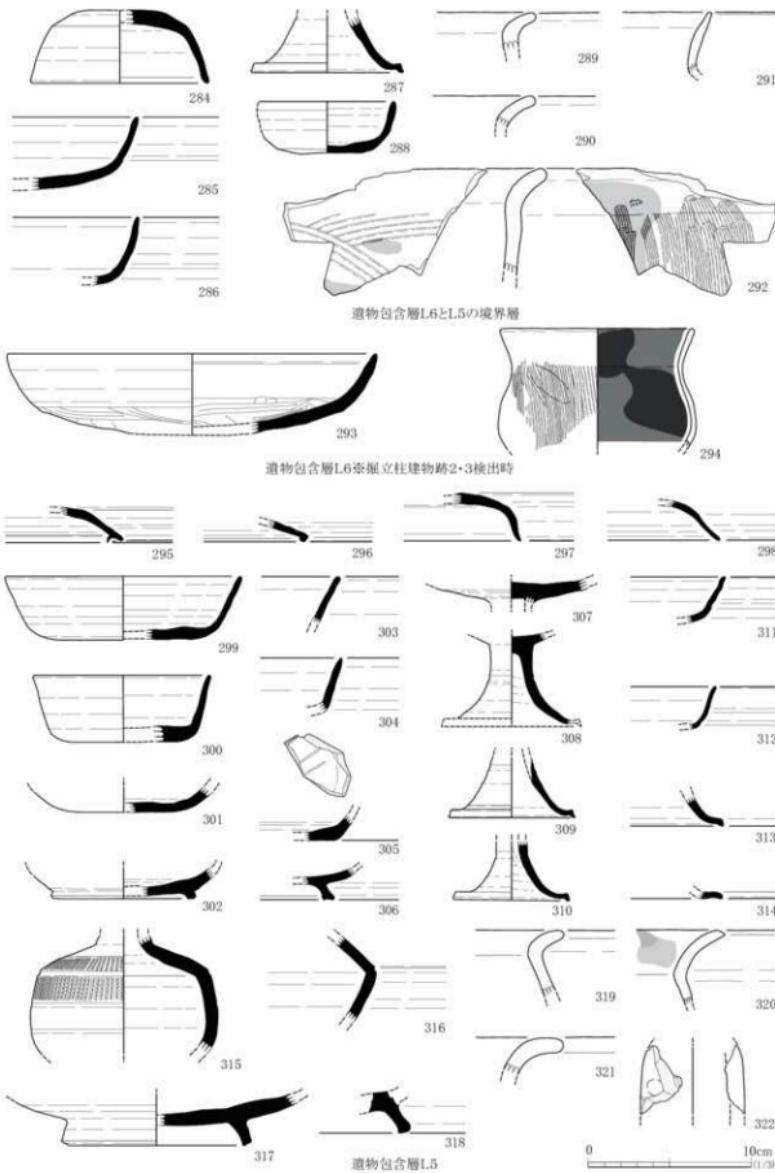


図 24 出土遺物実測図(土器)⑩

ロクロナデ。288は坏身。扁平丸底の底部から丸く立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。体部外面には、ロクロヘラ削りの後に、ロクロナデを施す。底部外面はヘラ起こし後、無調整。口縁端部はロクロナデ調整。内面はロクロナデ調整。ただし、底部内面には指押さえ痕が残る。289～292は土師器甕。292は体部にハケが観察される。

遺物包含層L6※掘立柱建物跡2・3検出時（図24-293～294、写真70）

293は須恵器皿。扁平丸底を呈した底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。底部内外面ともに不定方向ヘラ削りを施す。他はロクロナデ。294は小型の土師器甕。器壁が薄い。体部外面にハケが観察され、内面には炭化物の付着が確認される。

遺物包含層L5（図24-295～322、写真71・72）

295～318は須恵器。295～298は蓋。295・296は坏蓋。295はかえりが接地するもの。天井部に平坦面を持ち、口縁端部に向かって直線的に伸びて端部は丸くおさまる。外面にはロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ調整。296は口縁端部が内側に強く屈曲し、丸くおさまる。端部外面に回線が巡る。297は壺蓋か。口縁端部が外反して尖り気味におさまる。調整はロクロナデ。天井部外面はヘラ起こし後、ナデ。298は蓋か。調整はロクロナデ。299～301・303～305は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。299は平坦な底部から直線的に外方に開き、口縁端部は丸くおさまる。300は厚い底部から直角に近い角度で直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさまる。301は外面に不定方向のナデを施す。303は内面に粘土接合痕が明瞭に残る。304は口縁端部を尖り気味におさめる。305は内面にヘラ記号を持つ。302・306は高台付坏身。302は小さい高台を持つもの。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。306は外方に強く張り出した高台を持つもの。高台内端を突出させる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。307～314は高坪。調整はロクロナデ。307は分厚い坏底部を持つ。坏底部内面に不定方向のナデが確認される。308～310は脚部に1条の回線を持つ。309は脚端部が下方へ強く屈曲した後に外反し、裾は丸くおさまる。310は脚端部が強く下方へ屈曲した後に外反せず、裾は丸くおさまる。311は坏部外面に1条の回線を巡らす。312は坏部外面に段を2条持つ。口縁端部は外反して丸くおさまる。313は脚端部を短く下垂させ、裾は尖り気味に丸くおさめる。裾の摩耗が確認できる。314は脚端部内面に回線が巡り、裾を下方へ向けて丸くおさめる。315はハンソウ。外面には回線を4条巡らせ、肩部の回線を挟んだ上下に櫛描き列点文を施す。調整はロクロナデ。316～318は壺。316は長頸壺。強く張り出した肩部に深い回線が巡る。調整はロクロナデ。317・318は高台付壺。317は外面にはロクロヘラ削り後にロクロナデを施し、内面には不定方向のナデを施す。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。32と同一個体の可能性がある。318は底部内面には不定方向のナデを施す。他はロクロナデ調整。319～321は土師器甕。風化が著しく調整は不明。322は轆の羽口。

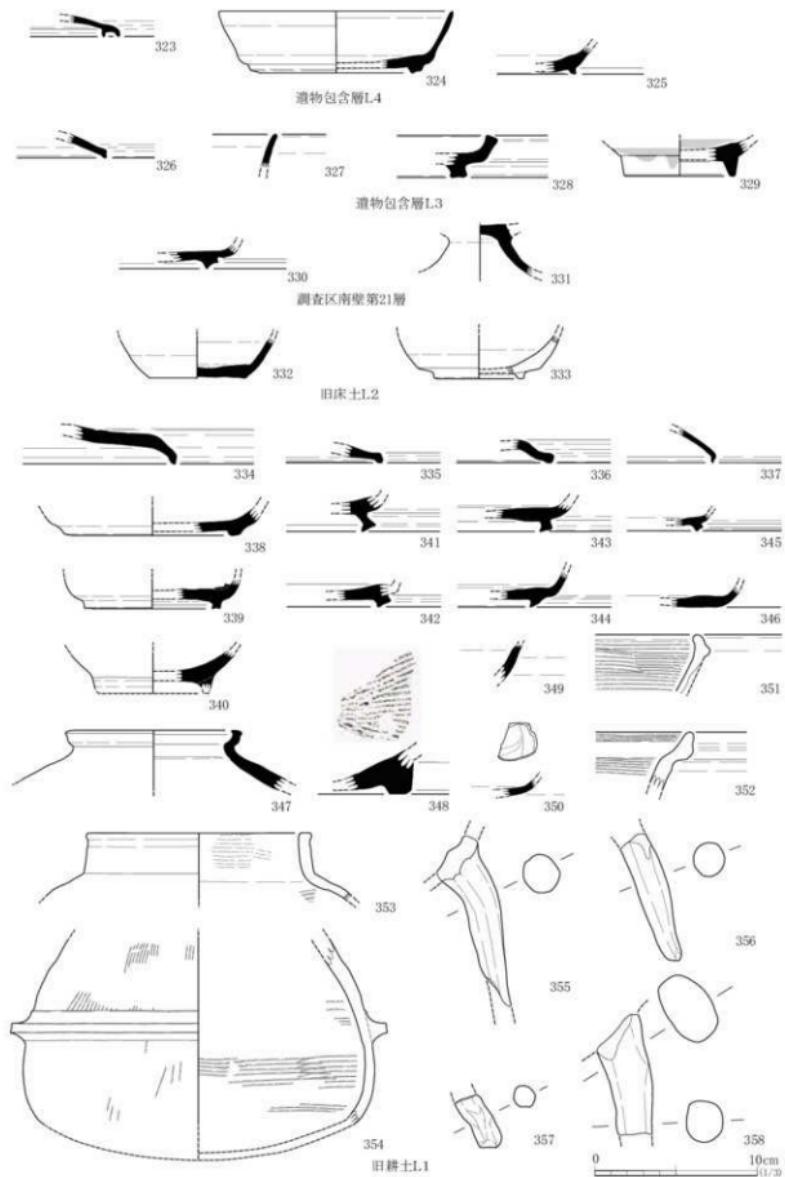
遺物包含層L4（図25-323～325、写真72）

323～325は須恵器。323は坏蓋。かえりを持つもの。口縁端部を下方へ屈曲させる。口縁端部とかえりとを丸くおさめる。調整はロクロナデ。天井部内面に不定方向のナデを加える。324・325は高台付坏身。324は底部から直線的に外方に開き、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。特に低い高台を持ち、高台内端がわずかに突出する。調整は風化のため不明。325は小さい高台を持つもの。高台は外傾する。ロクロナデ調整。底部外面はヘラ起こし後、無調整のままか。

遺物包含層L3（図25-326～329、写真72）

326～328は須恵器。326は坏蓋。口縁端部が短く下垂し、丸くおさまる。調整はロクロナデ。327は坏身。

古田橋内（古田遺跡）の調査



328は高台付皿。器高が低く、浅いもの。底部から内湾して短く立ち上がる。高台下端はわずかに突出する。**329**は黄釉陶器。高台は削り出している。

調査区南壁第21層（図25-330～331、写真72）

330・331は須恵器。**330**は高台付坏身。低い高台を持つもので、高台は体部の立ち上がりより内側に付く。高台の断面は三角形に近い。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。**60**と同一個体の可能性がある。**331**は短脚高坏。坏底部内面には不定方向のナデを施す。調整はロクロナデ。

旧床土L2（図25-332～333、写真72）

332は須恵器の坏身。椀の可能性もある。調整はロクロナデ。ただし、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**333**は高台付椀。土師質土器か。風化のため調整は不明。体部立ち上がりに稜が入る。小さな高台が付く。

旧耕土L1（図25-334～357、写真73・74）

334～347は須恵器。**334**は皿蓋か。天井部と口縁部とを明瞭に分かつ。口縁端部は短く下垂させて尖り気味に丸くおさめる。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。**335～337**は坏蓋。調整はロクロナデ。**335**は口縁端部を短く下垂させて丸くおさめる。**336**は口縁端部をわずかに下垂させて丸くおさめる。**337**は高い天井部を持つもの。器壁が薄い。口縁端部外面に段を持ち、端部は尖り気味におさめる。**338～345**は高台付坏身。調整はロクロナデ。底部内面に不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。高い高台を持つもの(**341**)と低い高台を持つもの(**338・340・342～344**)、小さい高台を持つもの(**339・345**)とに分けられる。**341**は外方に張り出した高台を持つ。高台内端を強く突出させる。**338・342**は風化が著しく全体が鈍いため本来の器形、調整とも不明瞭。**343**は高台内端を突出させる。**344**は高台が内湾し、断面は三角形を呈す。高台内端は摩耗している。114と同一個体の可能性がある。**339**は椀の可能性もある。高台内端を少し突出させる。内面に付着物が観察される。漆か。**345**は高台内端を少し突出させる。**346**は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。**347**は短頭壺。体部内面はヨコナデ。他はロクロナデ。**348**は陶器。擂鉢。鉗目は7本確認できる。**349・350**は青磁。**349**は椀。**350**は皿か。**351**は土師器鉢。内湾する口縁部を持ち、端部は丸くおさまる。**352**は瓦質土器鉢。**353・354**は湯釜。ハケの後、ナデを施してハケを擦り消そうとしている。**355～358**は足鍋の脚部。**357**は仕上げのナデを施していない。

旧床土L2・遺物包含層L3境界層（図26-359～362、写真74）

359・360は須恵器。**359**は高台付坏身。器形から椀の可能性もある。高台は断面方形を呈す。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを施す。底部外面はヘラ起こし後、ナデか。**360**は蓋か。外面はロクロヘラ削り後、ロクロナデ。他はロクロナデ調整。**361**は青磁椀。**362**は青白磁か。

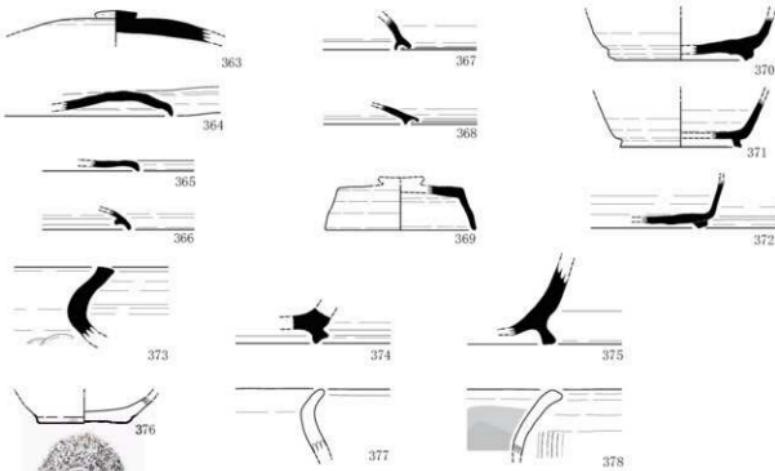
層位不明※調査区壁面精査中出土資料（図26-363～378、写真74・75）

363～375は須恵器。**363～367**は坏蓋。調整はロクロナデ。**363**は器壁が厚く、皿蓋の可能性もある。ボタン状の扁平なつまみを持つ。天井部外面中央部にはロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。天井部内面には不定方向のナデを加える。**364**は口縁端部が下方に屈曲し、尖り気味におさまる。天井部内面には不定方向のナデを加える。天井部外面はヘラ起こし後、ナデか。ゆがみが目立つ。**365**は口縁端部が短く下垂して尖り気味に丸くおさまる。**366**は短いかえりを持ち、口縁端部を丸くおさめる。**367**はかえりを持ち、口縁端部は丸くおさまる。**368**はかえりを持ち、口縁端部は丸くおさまる。外面

古田構内(古田遺跡)の調査



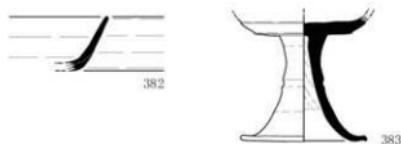
旧床土L2・遺物包含層L3境界層



層位不明発掘調査区壁面精査中出土資料



調査区北側家畜病院建物基礎塗方理土



表土・造成土

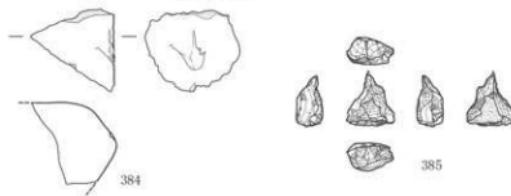


図26 出土遺物実測図(土器)⑫(石器)

0 10cm
(1/10)

はロクロヘラ削り後、ロクロナデ調整。他はロクロナデ調整。369は短頸壺の蓋か。平坦な天井部から下方へ強く屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。370～372は高台付坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。370は低い高台を持つもの。高台内端を少し突出させる。不定方向のナデは体部内面にまで及ぶ。371は小さく、外方に傾く高台を持つ。372は特に低い高台を持つもので体部の立ち上がりに稜が入る。体部の器壁は非常に薄く、器形から椀の可能性もある。373は甕。頸部外面には1条の凹線が巡る。体部内面には當て具痕がうっすらと残る。調整はロクロナデ。374・375は高台付壺か。調整はロクロナデ。374は高台内端を突出させる。375は外方へ張り出した高台を持つ。体部の立ち上がりに稜が入る。体部外面にはロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察される。内面は不定方向のナデを加える。376～378は土師器。376は土師器皿。底部に糸切り痕が観察される。調整はヨコナデ。377～378は甕。377は風化のため調整は不明。378は外面にハケが観察される。

調査区北側家畜病院建物基礎塙方埋土（図26-379～381、写真75）

379・380は高台付坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。379は高台内端を突出させる。380は体部の立ち上がりに鈍い稜が入る。高台内端がわずかに突出する。381は平瓶か。頸部に1条の凹線を巡らす。調整はロクロナデ。

表土・造成土（図26-382～383、写真75）

382は坏身。底部から直線的に外方に開いて丸くおさまる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。383は高杯。杯部には段を2条持ち、脚部には1条の凹線を持つ。脚端部は下方へ短く屈曲して丸くおさまる。調整はロクロナデ。

【石器】

遺物包含層L6（図26-384、写真75）

384は不明品。表面を研磨している。

表土・造成土（図26-385、写真75）

385は石鐵か。先端を欠く。材質は黒耀石。大分県姫島産と考えられる。

【木製品】

掘立柱建物跡3（図27～30-386～391、写真76・77）

386～388は掘立柱建物の柱。多角形に面取りしてある。面取りした器具痕が残る。386は二方向から面取って柱根基部を尖らす。基部付近には、掘り回めて、繩かけ溝を設けている。風化が著しいために断面は円形に近い。387は平らな柱根基部を持つ。386同様、繩かけ溝を持つ。388は平らな柱根基部を持つ。上部の欠損が著しいが、基部付近は残りが良い。389・390は不明品。391は木蓋か。平面が円形になるような加工が施されている。

掘立柱建物跡2（図30-392、写真77）

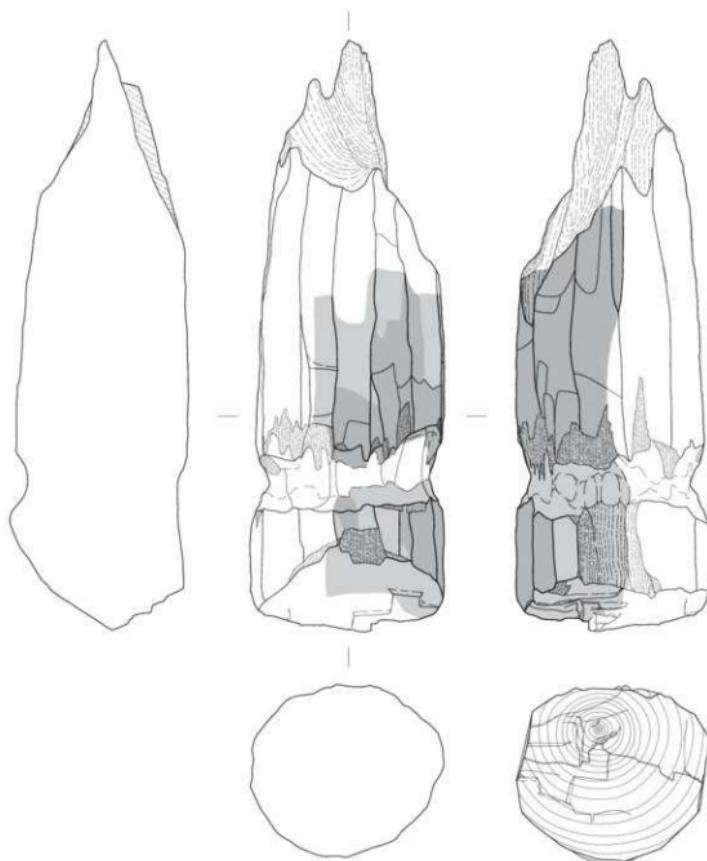
392は松明灯。断面は方形で、加工痕が残る。先端は焼けて丸い。

SP2※掘立柱建物3間仕切り柱か（図30-393、写真77）

393は角杭か。斜め方向の面を持たせ、先端を尖らす。

谷埋土NR1（図31-394～406、写真78・79）

394は不明品。直方体の木製品。未製品か。刻んだ跡が不定方向に残る。395も不明品。表面に均等



386

掘立柱建物跡3 Pit5

0 10cm
10/10

図 27 出土遺物実測図(木製品)①

な線が施されている。線間の幅は約3.6mm。欠損が著しく、器形は不明。396も不明品。397は円形曲物。398は松明灯か。先端の中央には溝を設けている。399・402～406は板材か。400・401は手斧か。斜め方向の面を持たせ、先端を尖らす。400にはベルトの役割を持っていたと考えられる木の皮が付着している。遺物包含層L6（図32～36・407～451、写真80～85）

407～409は断面多角形の杭。先端はやや尖らす。410は断面が楕円形の柱か。斜め方向の面を持たせて基部を尖らす。411・412は角杭。斜め方向の面を持たせて基部を尖らす。413は角杭か。細長い形状を持ち、先端は尖っている。414～416・418～420・423・424は丸杭。414・415は基部を多方向から削って尖らす。416も斜めから切って基部を尖らせている。423・424は一方向から切って面を持たせ、基部を尖らす。417・421は不明品。422は不明品。全体が炭化している。425～428は手斧か。斜め方向の面を持たせて先端を尖らす。428は側面を突出させている。429は不明品。430は剣物。断面台形に加工した角材の中央を彫り込んで成形している。431は丸杭か。432は棒材か。433は不明品。434～440は松明灯か。441～451は板材か。

【本調査地出土遺物について】

今回の調査地からは8世紀を中心とした土器が多く出土した。既往の発掘調査成果から、今次調査地が立地する丘陵上には古代官衙の存在が示唆されており、出土した土器の多くはそれに伴うものと思われる。ここでは、今回出土した土器の特徴を型式毎にまとめるところとする。ただし、土器類は状態の良いものが少ないため、須恵器のみを取り上げる。記載にあたっては、分類の定義や名称は奈良国立文化財研究所の分類に準拠した。（西1978）

坏H蓋

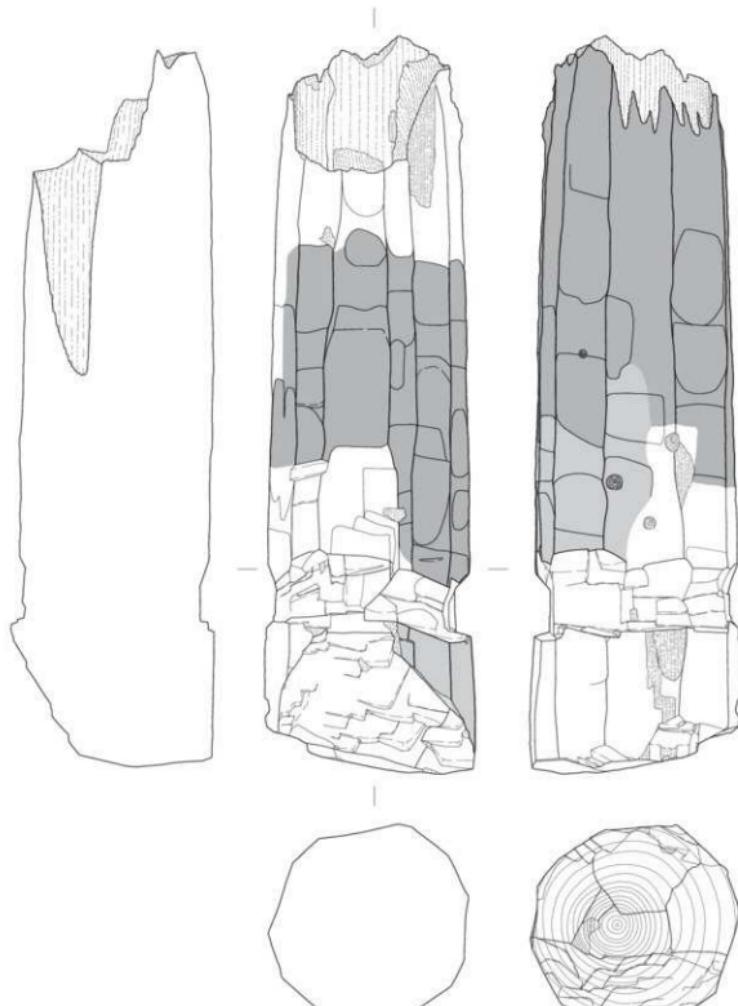
ドーム状を呈すもの(44・179・180)、ドーム状を呈すが扁平なもの(178)、天井部から直線気味に下がり、台形状を呈すもの(20)がある。器面調整はロクロナデ、天井部内面には不定方向のナデを加えるもの(178・179)と加えないもの(20・44・180)とがある。天井部外面はヘラ起こし後、無調整であり、全て共通している。

坏G蓋

口縁端部が下方向に向くもの(190・203・205)と外方に伸びるもの(22・94・188・189・191・192・193・295・204・295)とに分けられる。後者には、天井部の一段高まった部分にロクロヘラケズリを施して平坦にしているグループ(188・189・295)、器高が低く口縁端部が著しく突出するグループ(22・204)がある。器面調整はほぼ共通しており、天井部外面にロクロヘラケズリ後にロクロナデを施し、他にはロクロナデのみを施す。205のみ天井部内面に不定方向のナデが確認される。

坏B

完形資料は限られているが、底部の資料は豊富であるため高台に着目したい。高台の形状から大きくは4つにまとめられる。外方に強く張り出す高い高台をもつもの(26・56・57・102・109～111・207・208・210・306・341)、低い高台をもつもの(25・42・58・62・103～105・112～115・131・148～150・173・174・343・344・370・379・380)、特に低い高台をもつもの(28・59～61・63・64・88・151・168・211・212・216・324・330・342・372)、小さい高台をもつもの(27・65・106・116・117・152～154・169・170・302・325・339・345・359・371)である。低い高台のものと特に低い高台のものとには、断面三角形に近い高台を持つグループが認められる。高台の高さや形状は異なるものの調整技法は共通する部分が多い。底部内面にはロクロナ



387

掘立柱建物跡3 Pit 4

0 10cm

図 28 出土遺物実測図(木製品)②

デを施した後に不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のままのものが大部分を占める。

坏B蓋

かえりを持つもの(55・183～186・195～199・323・366)、かえりを持たないもの(23・45～47・51～54・141～146・200～202・296)、扁平なもの(48・172・187・335・336・365)に分けられる。かえりを持つものには、器壁が厚いグループ(184・185)、断面三角形の小さなかえりを持つグループ(197・198)がある。製作技法は全体的に共通しており、天井部内面にロクロナデの後に不定方向のナデを加え、他の部分にはロクロナデのみを施す。ただし、不定方向のナデを施す範囲は個体によって多少異なる。

高坏

半球状の坏部を持つもの(218～220)、平らな底部から急角度で立ち上がる坏部を持つもの(221)にまとまる。坏部の形状は異なるが、脚部の形状や調整技法は共通しており、脚部の中央付近に一条の凹線を巡らし、器面調整はロクロナデ。坏部内面には坏の底部内面に多く見られるような不定方向のナデは確認されない。ただし、219は坏部内面中央に一方向ナデが施されている。

以上、型式ごとに形態や調整技法に着目して規格の抽出を試みた。しかし、破片資料が多いために口径や全体的なプロポーションは考慮することができず、局部的な形態や調整技法など、部分的な視点に終始せざるを得なかった。それゆえ抽出した規格の妥当性には不安が残ることは否めないため、年代を絞り込むことは難しいと考える。特に山口県では、大林氏が「土器様相比較同一時期年代論」批判を声高に展開していることもある、一つの土器に含まれる様々な属性を局部的に取り上げて陶邑編年など他地域の須恵器編年の年代を当てはめることに慎重になりつつある。事実、今回出土したかえりを持つ坏B蓋のプロポーションやつまみを見てみても、他地域の編年の各型式における特徴と合わないものもある。陶邑編年をはじめとする既存の編年の各型式における特徴と一致する属性もある一方で、一致しない属性も含んでいるのが実態であると言えよう。すなわち、各属性の変化の方向は変わらないがその進み具合が各地域で異なっているのであろう。ここに、小単位の地域編年を打ち立てる意義があると考える。今後は生産地と消費地が明確な須恵器群を取り上げて、各属性の出土実態を根本に分析を試みていくたい。

【主要参考文献】

1. 青島啓(2007) 山口市教育委員会(編)『陶窯跡群II』、山口
2. 池田善文(1990)美東町教育委員会(編)『長登銅山跡I』、美東(山口)
3. 池田善文(1993)美東町教育委員会(編)『長登銅山跡II』、美東(山口)
4. 池田善文(1998)美東町教育委員会(編)『長登銅山跡III』、美東(山口)
5. 池田善文(2004)『須恵器』山口県(編)『山口県史 資料編考古2』、山口
6. 大林達夫(1999a)「周防国府の成立期の土器の年代観・序章」森郁夫先生還暦記念論文集刊行会(編)『瓦衣千年―森郁夫先生還暦記念論文集』
7. 大林達夫(2000)「第5章考察1周防国府の年代観・補足」防府市教育委員会(編)『敷山・末田須恵器窯跡調査報告』、防府市埋蔵文化財調査報告0001、防府(山口)
8. 大林達夫(2003)「第IV章考察」防府市教育委員会(編)『向山・柴山古墳群発掘調査報告』、防府市埋蔵文化財調査報告031、防府(山口)
9. 菊本裕美(2003)「山口市内出土の須恵器についてー防長地域の須恵器生産・流通の構造解明にむけてー」近藤義一先生退官記



388

掘立建物跡3 Pt6

0 10cm

図 29 出土遺物実測図(木製品)③

念事業会(編)『山口大学考古学論集－近藤翁一先生追官記念論文集－』、山口

10. 小林善也(2008)「須恵器初現期以降の古墳時代集落出土の土器編年論－周防西部地域－」山口考古学フォーラム(編)『古墳時代集落遺跡出土の須恵器・土師器』、山口考古学フォーラム調査報告書1、山口
11. 田辺昭三(1966)平安考古クラブ(編)『陶邑古窯址群Ⅰ』、奈良
12. 古代の土器研究会(編)(1992)『古代の土器1・都城の土器集成1』、奈良
13. 古代の土器研究会(編)(1993)『古代の土器2・都城の土器集成2』、奈良
14. 古代の土器研究会(編)(1994)『古代の土器3・都城の土器集成3』、奈良
15. 中村 浩(編)(2001)『和泉陶邑窯の歴史的研究』芙蓉書房出版、大阪
16. 西 弘海(1978)『土器の時期区分と形式変化』奈良国立文化財研究所(編)『飛鳥・平城宮発掘調査報告Ⅱ』、奈良

(藤野)

(6) 小結

吉田キャンパスは、旧石器時代から近世までの埋蔵文化財を包蔵する複合遺跡であるが、古墳時代前期までの遺構・遺物は主としてキャンパス西部に広がる沖積平地および微高地上に分布し、古墳時代中期以降はキャンパス東部の丘陵台地上に分布することが判明している。特に奈良時代から平安時代にかけての遺構の広がりは、今回の調査地である家畜病院敷地から総合研究棟、第2学生食堂、大学会館敷地という丘陵台地の先端部分に限定して確認されており、集落造営に一定の指針が定められていたことを示唆している。また、その集落跡からは「官」と記された墨書き土器や円面硯、木簡、帯飾り、製塙土器、鋳造関連資料など、官衙の存在を予測させる遺物が数多く出土しており、古墳時代までの建物数棟からなる小村から、公的な性格を持つ中心的集落へと大きく変貌して行く様相を見せている。

今回の調査では、キャンパス南東端部から北西へ走る埋没谷の右斜面に掘立柱建物群が存在することが明らかとなつた。これらの建物跡は時期を違えながら立て替えを行われたものらしく、現状では所属時期を断定できないが、掘立柱建物跡2が7世紀後半から8世紀前半にかけて、掘立柱建物跡3が8世紀後半以降に、掘立柱建物跡1が10世紀以降に成立したものと想定している。

この内問題となるのは、掘立柱建物跡3の性格である。掘立柱建物1・2は1間×2間の小型建物であるが、掘立柱建物3は柱間も大きく、2間×4間以上の建物が復元される。また、遺存していた柱根からも比較的大型の建物上部構造が予想され、なおかつ柱根基部付近に刻まれた縄かけ溝の存在は、遠隔地からの柱材の輸送を物語っている。

同一地での立て替えであるにもかかわらず^a、ある時期にのみ建物が拡大するという実相の背景を、当調査だけで解明することはできない。当調査地の南東に近接し、同じく古代の堅穴住居群や掘立柱建物群が発見されている神郷大塚遺跡^bとの検討も含めて、今後の調査研究の課題としたい。

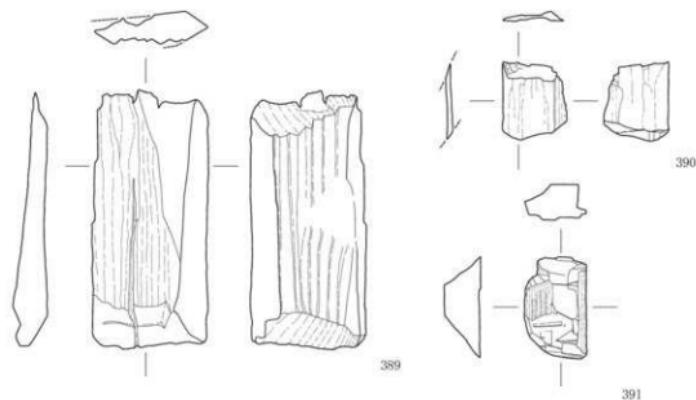
[註]

1) a:青島啓(2006)「神郷大塚遺跡第6次調査」、山口市教育委員会(編)『山口市埋蔵文化財年報5－平成16年度－』、山口

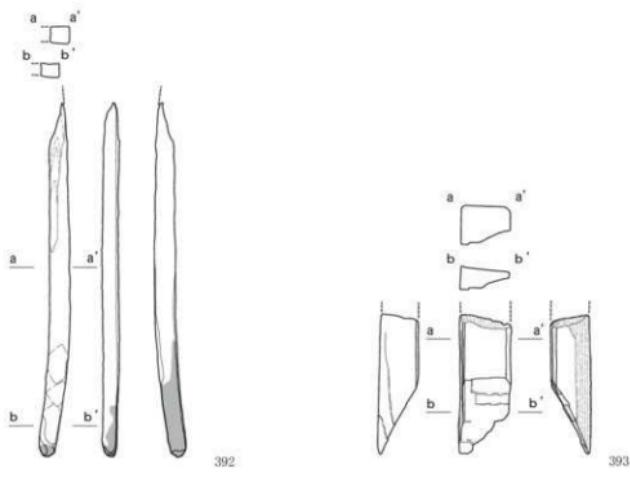
b:西尾健司(2007)「神郷大塚遺跡第6次調査」、山口市教育委員会(編)『神郷大塚遺跡IV』、山口市埋蔵文化財調査報告第96

集、山口

(横山)



掘立柱建物跡3



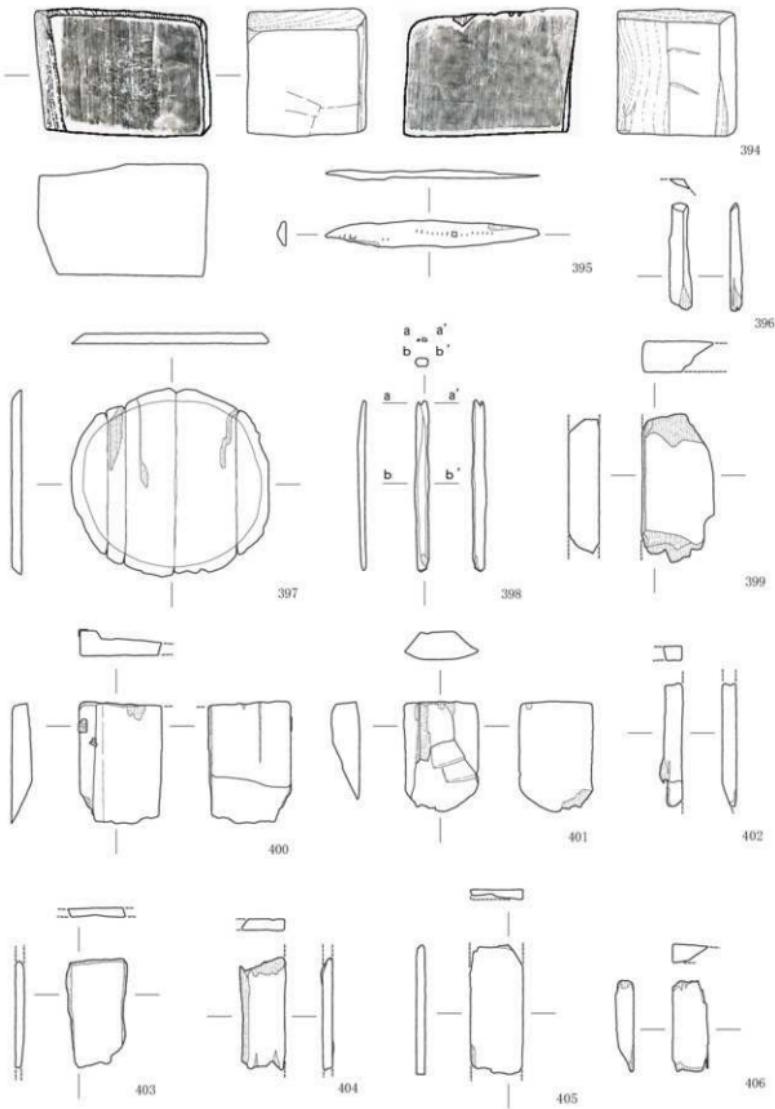
掘立柱建物跡2

SP2

0 10cm
(1/4)

図 30 出土遺物実測図 (木製品)④

古田構内(古田遺跡)の調査

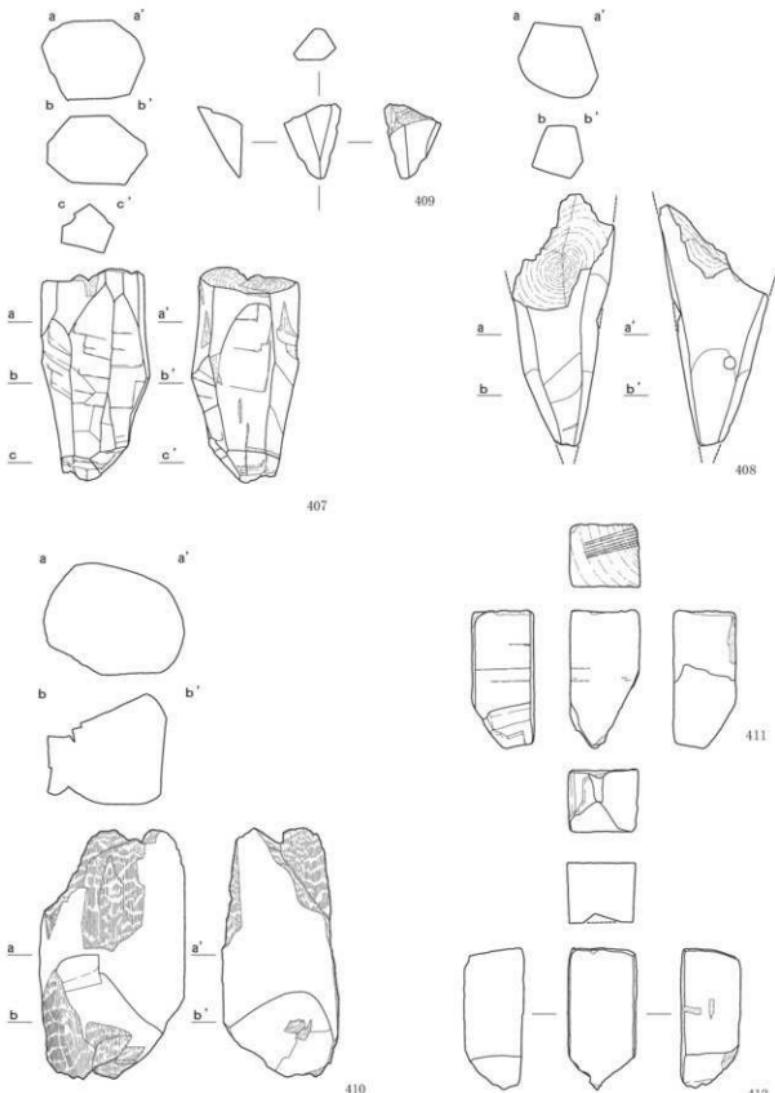


谷埋土NR1

0 10cm (1/40)

図31 出土遺物実測図(木製品)⑤

吉田構内(古田遺跡)の調査



遺物包含層L6

0 10cm

図32 出土遺物実測図(木製品)⑥

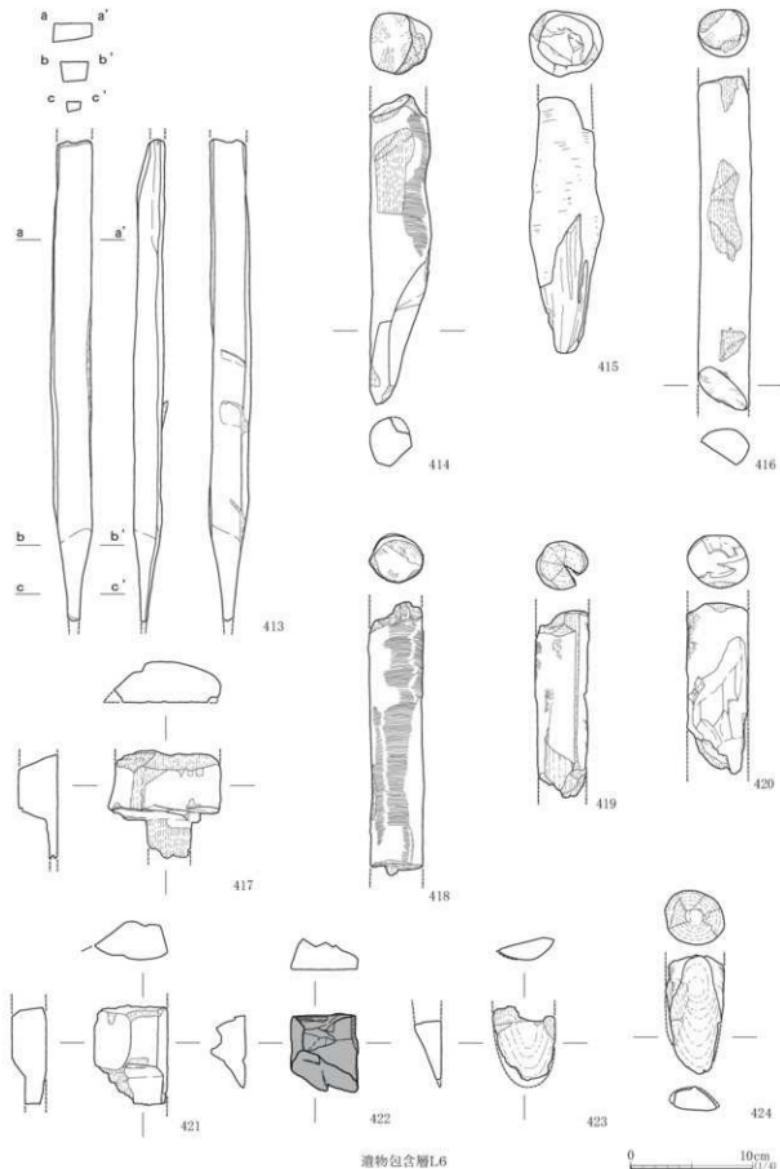
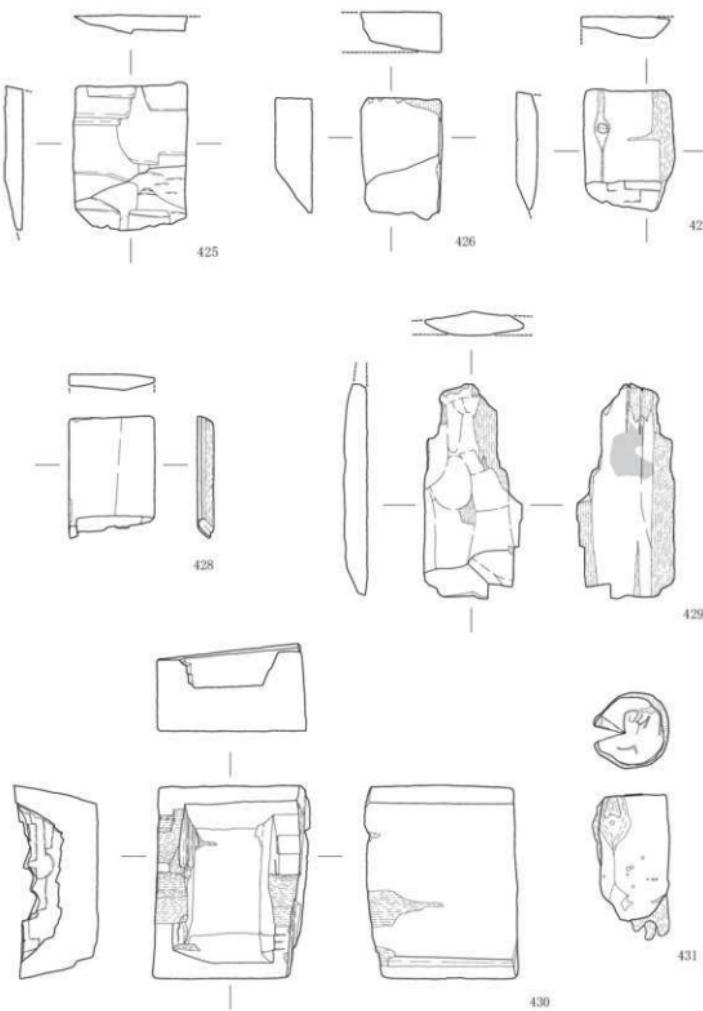


図 33 出土遺物実測図（木製品）⑦

古田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

図 34 出土遺物実測図 (木製品)⑧

0 10cm
(1/4)

古田構内（古田遺跡）の調査

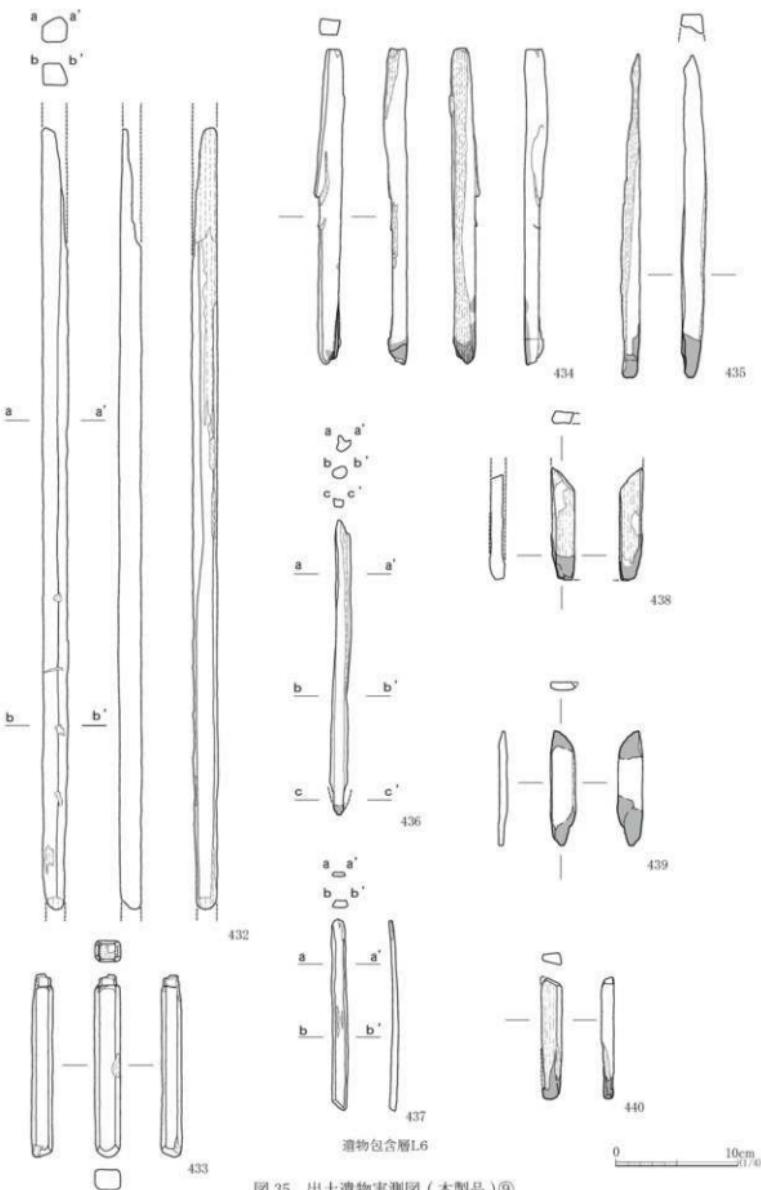
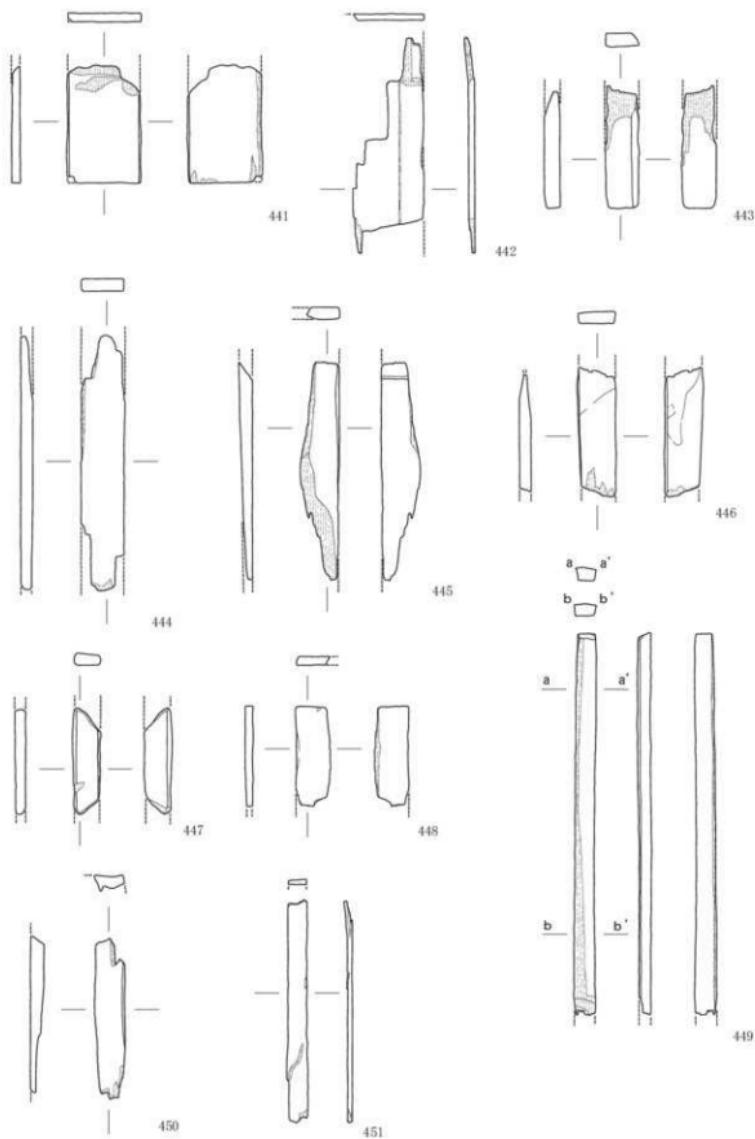


図 35 出土遺物実測図（木製品）⑨

古田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

図 36 出土遺物実測図(木製品)⑩



古田横内（古田遺跡）の調査



振立柱建物跡3



振立柱建物跡2

写真 53 出土遺物(土器)①

古田構内（古田遺跡）の調査



NR1-L3・遺物包含層L4境界層

写真 54 出土遺物(土器)②



谷埋土NR1-L3段面取り上げ遺物
写真 55 出土遺物(土器)③

古田横内（古田遺跡）の調査



谷埋土NR1-L3底面

写真 56 出土遺物(土器)④

古田横内（古田遺跡）の調査



谷理土NR1-L3底面

写真 57 出土遺物(土器)⑤

古田構内（古田遺跡）の調査



谷理土NR1-L3

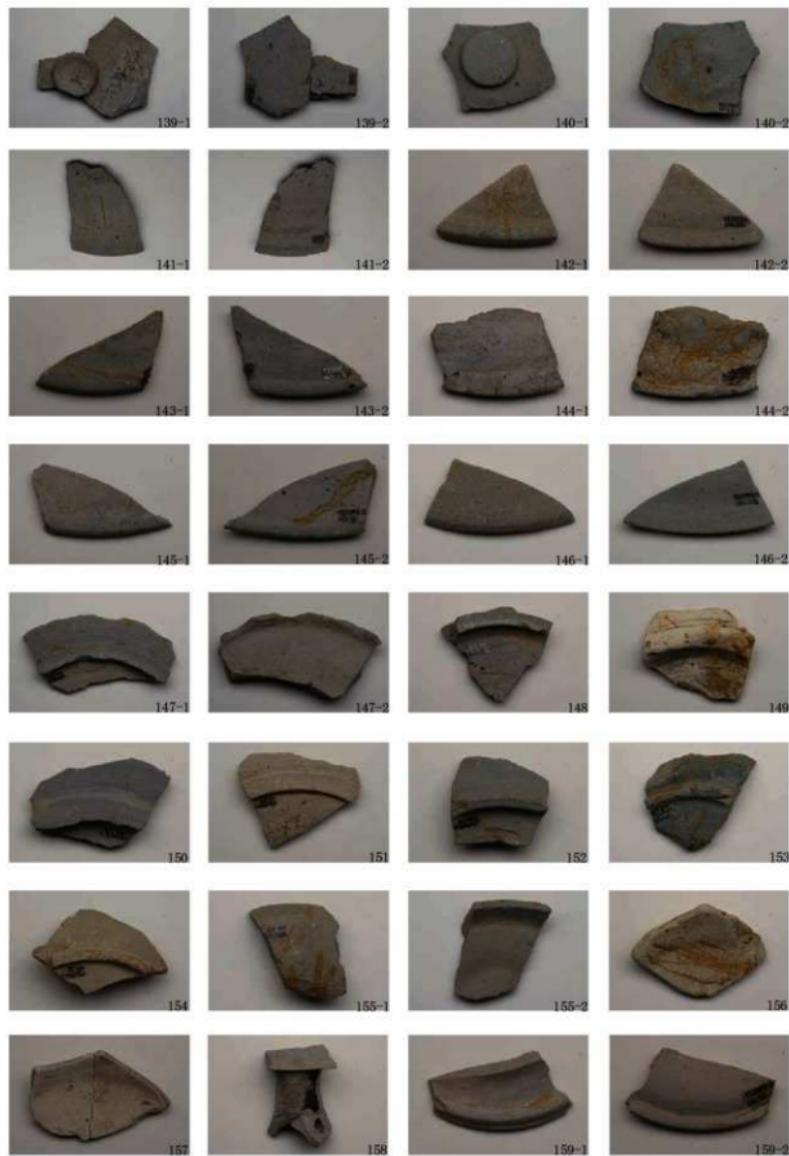
写真 58 出土遺物（土器）⑥

古田横内（古田遺跡）の調査



写真 59 出土遺物（土器）⑦

古田横内（古田遺跡）の調査



谷理土NR1-L1
写真60 出土遺物(土器)⑧

古田構内（古田遺跡）の調査



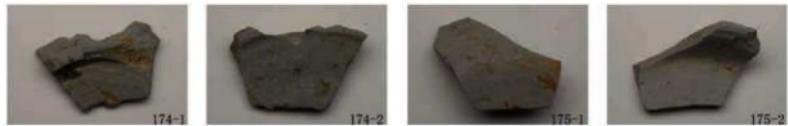
谷埋土NR1-L1



谷埋土NR1-L1・L2境界層



谷埋土NR1表層位不明



谷埋土NR1検出時・上部包含層との境界層

写真 61 出土遺物（土器）⑨

古田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 62 出土遺物(土器)@

古田構内（古田遺跡）の調査



写真 63 出土遺物(土器)⑪

古田横内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 64 出土遺物（土器）⑫

古田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6
写真65 出土遺物(土器)⑬

古田横内（古田遺跡）の調査



写真 66 出土遺物(土器)⑩

古田横内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 67 出土遺物(土器)⑫

古田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 68 出土遺物(土器)⑩

古田構内（古田遺跡）の調査



写真 69 出土遺物(土器)⑫

古田構内（古田遺跡）の調査



284



285



286



287



288



289



290



291

遺物包含層L6とL5の境界層



292-1



292-2



293-1



293-2



293-3

遺物包含層L6を掘立柱建物跡2・3検出時

写真 70 出土遺物(土器)⑧

吉田構内（古田遺跡）の調査



写真 71 出土遺物（土器）⑨

古田横内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L5



遺物包含層L4



遺物包含層L3



調査区南壁第21層



旧床土L2

写真 72 出土遺物(土器)②

古田横内（古田遺跡）の調査



写真 73 出土遺物(土器)21

古田構内（古田遺跡）の調査



古田構内（古田遺跡）の調査



層位不明査定区壁面精査中出土資料

写真 74 出土遺物（土器）22

古田構内（古田遺跡）の調査



層位不明※調査区壁面精査中出土資料



調査区北側家畜病院建物基礎塙方埋土



写真 75 出土遺物（土器）23（石器）

古田橋内（古田遺跡）の調査

○出土時の様子



掘立柱建物跡3Pit5



掘立柱建物跡3Pit4



掘立柱建物跡3Pit6

○高級アルコール法による保存処理後の様子



掘立柱建物跡3Pit5



掘立柱建物跡3Pit4



掘立柱建物跡3Pit6

写真 76 出土遺物(木製品)①

吉田橋内（古田遺跡）の調査



掘立柱建物跡2



掘立柱建物跡3

SP2

写真 77 出土遺物（木製品）②

吉田構内（古田遺跡）の調査



写真 78 出土遺物(木製品)③

古田橋内（古田遺跡）の調査



写真 79 出土遺物（木製品）④

吉田構内（古田遺跡）の調査



写真 80 出土遺物（木製品）⑤

古田橋内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 81 出土遺物(木製品)⑥

吉田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 82 出土遺物（木製品）⑦

古田橋内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 83 出土遺物(木製品)⑧

古田橋内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6

写真 84 出土遺物(木製品)②

吉田構内（古田遺跡）の調査



遺物包含層L6
写真 85 出土遺物(木製品)⑩

表3 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)			胎土	備考
				①口径	②底径	③器高		
1	新立社埋物群2 PH1	須恵器 壺	口縁部				①灰色(N4) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 風化が著しい
2	新立社埋物群2 PH1	須恵器 壺	体部				①②灰色(N4)	精緻
3	新立社埋物群2 PH6	須恵器 盖	天井部				①灰白色(N7) ②灰白色(N6)	3mm程の縫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む
4	新立社埋物群2 PH2	土師器 壺	口縁部				①②にぶい橙(7.5YR7/4)	2mm程の縫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を少々含む
5	新立社埋物群2 PH1	須恵器 高坏	脚部	②(12.0)			①②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む
6	新立社埋物群2 PH1	須恵器 高坏	脚部	②(10.4)			①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む
7	新立社埋物群2 PH2	須恵器 高坏	脚部				①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 風化が目立つ
8	新立社埋物群2 PH1	須恵器 高坏	脚部				①②灰白色(N7)	0.5mm以下の粗粒砂を含む 風化が目立つ
9	新立社埋物群2 PH1	須恵器 高坏	口縁部				①灰白色(N7) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む
10	新立社埋物群2 PH2	須恵器 壺	体部				①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を少々含む
11	新立社埋物群2 PH6	須恵器 ハソウ	底部～ 体部	②(7.6)			①青灰色(5PB5/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1～2mm程度の粗粒砂を若干含む
12	新立社埋物群2 PH2	土師器 壺	口縁部～ 体部	①(14.4)			①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②黒色(10VR2/1)	2mm程の縫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む
13	新立社埋物群2 PH2	土師器 壺	口縁部				①②灰白色(2.5Y8/1)	2mm程の縫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む
14	新立社埋物群2 PH1	土師器 壺	口縁部				①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 風化が著しい
15	新立社埋物群2 PH2	土師器 壺	体部				①にぶい黄橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	2～3mm程度の縫を含む 1mm以下の粗粒砂を含む
16	新立社埋物群2 PH6	須恵器 高台付壺	底部				①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を少々含む 風化が著しい
17	SP3	土師器 壺	口縁部				①にぶい赤褐色(2.5YR4/4) ②にぶい赤褐色(5YR4/3)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 2mm程の縫を若干含む
18	土壤4	須恵器 平瓶	体部				①灰色(N6) ②灰色(7.5Y5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む
19	溝2	須恵器 円面鏡	口縁部				①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む
20	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 坏蓋	完形 復元	①(10.4)③3.7			①②暗灰色(N3)	精緻
21	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 坏蓋	口縁部				①灰色(N4) ②灰色(N6)	精緻
22	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 坏蓋	口縁部	①(10.0)			①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む
23	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 坏蓋	口縁部	①(16.6)			①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 200と同一個体か
24	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 坏蓋	天井部				①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 風化が目立つ
25	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高台付环身	底部～ 体部	②(11.6)			①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	1～2mm程度の粗粒砂を若干含む
26	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高台付环身	底部～ 体部	②(8.6)			①②灰白色(N8)	1～2mm程度の粗粒砂を若干含む
27	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高台付环身	底部～ 体部	②(7.1)			①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む
28	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高台付环身	底部～ 体部				①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 底部外間にへラ記号
29	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高台付壺	底部～ 体部	②(4.8)			①青灰色(5PB6/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む 内面の風化が目立つ
30	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高坏	坏部				①②灰白色(N7)	0.5mm以下の粗粒砂を含む
31	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高坏	脚部				①②灰白色(N5)	精緻
32	NRI-1-2- 遺物出合群1	須恵器 高台付壺	底部	②(12.0)			①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む 317と同一個体か

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①	②			
33	NRI-1-3 遺物包含層A	土師器 壺	口縁部			①②浅黄色(2.5Y7/3)	3mm程の縫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を若干含む	34と同一個体か
34	NRI-1-3 遺物包含層A	土師器 壺	口縁部			①②浅黄色(2.5Y7/3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	33と同一個体か
35	NRI-1-3 遺物包含層A	土師器 壺	口縁部			①②にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を含む	
36	NRI-1-3 遺物包含層A	土師器 壺	口縁部			①②灰褐色(7.5Y4/2)	1~2mm程度の粗粒砂を多く含む	
37	NRI-1-3 遺物包含層A	弥生土器か 壺	口縁部			①②にぶい黄褐色(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
38	NRI-1-3 遺物包含層A	弥生土器か 壺	口縁部			①灰褐色(10YR4/2) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
39	NRI-1-3底面 上上げ遺物B	須恵器 环身	底部	②(10.9)		①②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
40	NRI-1-3底面 上上げ遺物C	須恵器 环身	底部	②(9.2)		①灰白色(7.5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
41	NRI-1-3底面 上上げ遺物D	須恵器 环身	底部	②(7.6)		①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
42	NRI-1-3底面 上上げ遺物E	須恵器 高台付环身	底部	②(10.0)		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
43	NRI-1-3底面 上上げ遺物F	土師器 高台付皿	底部			①②灰白色(10YR8/2)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部に糸切印痕
44	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	壳形	①(12.2)③4.2		①灰白色(N7) ②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
45	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部	①(15.3)		①明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
46	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部	①(15.5)		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
47	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	壳形 復元	①(16.0)③3.4		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
48	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部	①(20.6)		①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
49	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	天井部			①灰色(N6) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
50	NRI-1-3底面	須恵器 蓋か	口縁部	③2.7		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
51	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部	③2.2		①灰色(N6) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
52	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部			①②灰色(N6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	目立つ
53	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部			①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
54	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部			①灰色(N6) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
55	NRI-1-3底面	須恵器 环蓋	口縁部			①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
56	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	壳形 復元	①(11.6)②6.3 ③4.9		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	精緻	
57	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部	②(7.3)		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
58	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部	②(8.0)		①灰色(N6) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	接着した他個体あり
59	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部	②(7.8)		①灰色(N5) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
60	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部	②(8.9)		①青灰色(5PB6/1) ②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部外面上にヘラ記号
61	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部	②(8.7)		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部外面上にヘラ記号
62	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部	②(11.7)		①②灰色(N6)	1~2mm程の粗粒砂を若干含む	高台の貼り付け痕明顯
63	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部			①青灰色(5PB6/1)	若干含む	
64	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部			①青灰色(5PB6/1) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
65	NRI-1-3底面	須恵器 高台付环身	底部			①②灰白色(10Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
66	NRI-1-3底面	須恵器 环身	口縁部			①灰色(N6) ②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁部②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①口縁部	②底径	③器高		
67	NR1-L3底面	須恵器 盒	口縁部 ～底部	③2.6	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む		
68	NR1-L3底面	須恵器 高壺	環部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ	
69	NR1-L3底面	須恵器 高壺	脚部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
70	NR1-L3底面	須恵器 高壺	脚部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
71	NR1-L3底面	須恵器 高壺	脚部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
72	NR1-L3底面	須恵器 高壺	脚部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む		
73	NR1-L3底面	須恵器 壺	頭部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
74	NR1-L3底面	須恵器 盔か	体部		①②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	体部外間に ヘラ記号	
75	NR1-L3底面	須恵器 壺	口縁部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい	
76	NR1-L3底面	須恵器 壺	口縁部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
77	NR1-L3底面	須恵器 長頸壺	頭部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
78	NR1-L3底面	土師器 壺	体部		①②橙色(7.5YR7/6)	1～4mm程度の繩を若干含む		
79	NR1-L3底面	土師器 高壺	脚部		①橙色(5YR7/6) ②灰白色(2.5Y7/1)	精織		
80	NR1-L3底面	土師器 壺	口縁部		①②暗褐色(10YR3/3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
81	NR1-L3底面	土師器 壺	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒褐色(2.5Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
82	NR1-L3底面	輪 羽口	体部		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黄褐色(2.5Y5/1)	1～2mm程の粗粒砂を含む	風化が著しい	
83	NR1-L3底面	黒色土器 梗	口縁部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②黒色(10Y2/1)	1～2mm程の粗粒砂を若干含む		
84	NR1-L3底面	土師質土器 高台付楕か	底部	②6.9	①②にぶい黄橙色(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	焼成後に底部穿孔か 外側灰付着	
85	NR1-L3底面	白磁 楕か	体部		素地 灰白色(N8) 釉 灰白色(10Y8/1)	精織		
86	NR1-L3	須恵器 环蓋	天井部	つまみ径 1.7	①②明青灰色(5PB7/1)	2mm程度の繩を若干含む		
87	NR1-L3	須恵器 环身	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
88	NR1-L3	須恵器 高台付环身	底部	②(8.0)	①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
89	NR1-L3	須恵器 高台付环身	底部		①青灰色(5PB6/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
90	NR1-L3	須恵器 盒	口縁部 ～底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ	
91	NR1-L3	須恵器 盔か	底部	②(7.6)	①②青灰色(5PB6/1)	2～3mm程度の繩を若干含む	底部外間に ヘラ記号	
92	NR1-L3	土師器 壺	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精織	風化が著しい	
93	NR1-L3	弥生土器 支脚	脚部		①②にぶい黄橙色(10YR7/2)	1～2mm程度の繩を若干含む	風化が著しい	
94	NR1-L3	須恵器 环蓋	口縁部	①(10.8)	①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい	
95	NR1-L3	須恵器 环蓋	天井部	つまみ径 2.3	①②青灰色(B5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
96	NR1-L3	須恵器 环蓋	口縁部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
97	NR1-L3	須恵器 环蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
98	NR1-L3	須恵器 环蓋か	天井部		①灰色(10Y6/1) ②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	天井部内面 ヘラ記号	
99	NR1-L3	須恵器 壺	口縁部		①②灰白色(N7)	精織		
100	NR1-L3	須恵器 壺	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
101	NR1-L3	須恵器 壺	頭部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
102	NR1-L3	須恵器 高台付杯身 か	底部	②(6.1)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底径③高さ		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①口縁	②底径	③高さ		
103	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む	高台内端が 欠損
104	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部	②(9.1)		①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	精緻	焼き繕が 目立つ
105	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部	②(8.8)		①②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 目立つ
106	NRI-L3	須恵器 高台付环身	壳形 復元	①(14.4) ②(10.1) ③5.8		①青灰色(5B6/1) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
107	NRI-L3	須恵器 环身	底部	②(9.4)		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
108	NRI-L3	須恵器 高台付皿か	底部			①灰白色(5Y6/1) ②紫灰色(5P6/1)	精緻	自然軸が 付着
109	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	精緻	
110	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	精緻	
111	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	高台内端が 欠損
112	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 著しい
113	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
114	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①②灰白色(5Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	344と 同一個体か
115	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
116	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
117	NRI-L3	須恵器 高台付环身	底部			①青灰色(10BG6/1) ②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
118	NRI-L3	須恵器 环身	底部			①②灰白色(N6)	0.5mm以下の粗粒砂 若干含め	
119	NRI-L3	須恵器 高坏	脚部			①②灰白色(N7)	0.5以下の粗粒砂を 若干含む	
120	NRI-L3	須恵器 高坏	脚部			①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 目立つ
121	NRI-L3	須恵器 高坏	脚部			①②灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
122	NRI-L3	須恵器 高坏	口縁部			①②明青灰色(5PB7/1)	精緻	
123	NRI-L3	土師器 壺	口縁部 ～体部	①(13.3)		①にぶい 橙色(5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.5mm以下の粗粒砂 多く含め	
124	NRI-L3	黑色土器 梗	体部			①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒色(10Y2/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	137と 同一個体か
125	NRI-L3	土師質土器 高台付皿か	底部	②(7.6)		①②灰白色(10YR8/2)	1mm程度の粗粒砂を 多く含む	
126	NRI-L3	綠釉陶器 高台付楕	底部			素地にぶい 黄褐(10YR7/3) 釉 オリーブ灰(2.5GY5/1)	精緻	
127	NRI-L2	須恵器 环身	口縁部 ～底部			①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
128	NRI-L2	須恵器 环身	底部			①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
129	NRI-L2	須恵器 环身	底部	②(7.8)		①灰白色(10Y6/1) ②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
130	NRI-L2	須恵器 高台付环身	口縁部 ～底部			①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
131	NRI-L2	須恵器 高台付环身	底部			①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む 3mm厚の織を若干含む	風化が 目立つ
132	NRI-L2	須恵器 环	底部			①灰白色(5Y7/1) ②灰黄色(2.5Y4/1)	精緻	風化が 著しい
133	NRI-L2	須恵器 盖	口縁部	①(8.7)		①②青灰色(5PB6/1)	精緻	
134	NRI-L2	土師器 壺	口縁部 ～底部	③(2.0)		①にぶい 橙色(5YR7/4) ②にぶい 橙色(7.5Y7/4)	精緻	風化が 著しい
135	NRI-L2	土師器 皿か	底部			①②浅黄橙色(7.5Y8/3)	精緻	風化が 著しい
136	NRI-L2	土師器 高台付皿か	底部			①②浅黄色(2.5Y8/3)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 目立つ
137	NRI-L2	黑色土器 梗	体部			①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒色(10Y2/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	124と 同一個体か
138	NRI-L2	製塙土器	体部			①②明赤褐色(2.5YR5/6)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
139	NRI-L1	須恵器 环蓋	天井部	つまみ径 2.6		①灰色(N6) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①口縁	②底径	③器高		
140	NR1-L1	須恵器 环蓋	天井部	つまみ怪 2.1	①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む		
141	NR1-L1	須恵器 环蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
142	NR1-L1	須恵器 环蓋	口縁部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
143	NR1-L1	須恵器 环蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②青灰色(5P8/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
144	NR1-L1	須恵器 环蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
145	NR1-L1	須恵器 环蓋	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
146	NR1-L1	須恵器 环蓋	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
147	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部	②(11.0)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
148	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①青灰色(5B5/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	高台外面にしほり痕か	
149	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい	
150	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	精緻		
151	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ	
152	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
153	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①②青灰色(5B5/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	高台内端が欠損	
154	NR1-L1	須恵器 高台付环身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
155	NR1-L1	須恵器 环身	底部		①②灰色(10Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
156	NR1-L1	須恵器 环身	底部		①②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	157と同一個体か	
157	NR1-L1	須恵器 环身	底部		①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	156と同一個体か	
158	NR1-L1	須恵器 高坏	脚部		①②灰白色(N7)	精緻		
159	NR1-L1	須恵器 高坏	脚部		①②明紫灰色(5P7/1)	精緻		
160	NR1-L1	緑釉陶器 梗か	体部		素地 淡黄色(2.5Y7/3) 輪 オリーブ黄(7.5Y6/3)	精緻	風化が著しい	
161	NR1-L1	青磁 梗か	口縁部		素地 灰白色(7.5Y7/1) 輪 灰白色(7.5Y7/2)	精緻		
162	NR1-L1	青磁 梗か	体部		素地 灰白色(7.5Y7/1) 輪 灰オリーブ(7.5Y7/3)	精緻		
163	NR1-L1	青磁 梗か	体部		素地 灰白色(7.5Y7/1) 輪 灰白色(7.5Y7/2)	精緻		
164	NR1-L1	青磁 梗か	体部		素地 灰色(10Y5/1) 輪 灰オリーブ(5Y5/2)	精緻		
165	NR1-L1	土師器 高台付环身 か	底部	②(10.2)	①にぶい浅黄橙(10YR7/3) ②にぶい浅黄橙(10YR7/2)	精緻	風化が目立つ	
166	NR1-L1	土師器 杯か	底部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ	
167	NR1-L1	土師器 盆か	底部	②(6.3)	①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい	
168	NR1-L1+1.2 境界層	須恵器 高台付环身	底部	②(8.8)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の繩を若干含む		
169	NR1-L1+1.2 境界層	須恵器 高台付环身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む		
170	NR1-L1+1.2 境界層	須恵器 高台付环身	底部		①②灰白色(2.5Y5/3) ②青灰色(5PB6/1)	0.5mm以下の粗粒砂を含む		
171	NR1-L1+1.2 境界層	須恵器 欲硯か	脚部		①灰色(N5) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
172	NR1層位不明	須恵器 环蓋	口縁部		①②灰色(N5)	2mm程の繩を若干含む		
173	NR1層位不明	須恵器 高台付环身	底部		①②灰色(N6)	精緻		
174	NR1層位不明 上 須恵器含む 境界層	須恵器 高台付环身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
175	NR1層位不明 上 須恵器含む 境界層	須恵器 盆	口縁部 ～底部	③2.3	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
176	NR1層位不明 上 須恵器含む 境界層	須恵器 盆	底部	②(10.0)	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		

遺物番号	遺構・部位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外側 ②内側	胎土	備考
				①口縁	②底径③器高			
177	須恵器 転用硯	天井部		①②灰色(N6)		精緻		内面に墨付着
178	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(14.6)	①灰色(N6) ②明青灰色(5PB7/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		外面に墨付着か
179	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(12.8)	①明青灰色(5PB7/1) ②明紫灰色(5P7/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
180	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(11.6)	①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
181	包含層L6 須恵器 短頸壺蓋か	口縁部	①(10.6)③4.5	①灰色(N4) ②灰色(N5)		2mm程の纏を若干含む		
182	包含層L6 須恵器 短頸壺蓋か	口縁部	①(10.7)	①灰白色(N8) ②灰色(N5)		0.5mm以下の粗粒砂を若干含む		
183	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(12.4)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
184	包含層L6 須恵器 砕蓋	壳形 復元	①(14.6)③2.9 ②(2.2)	①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
185	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(7.6)	①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		風化が目立つ
186	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(17.7)③2.8	①②灰白色(N8)		精緻		
187	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(18.0)	①②灰白色(N8)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
188	包含層L6 須恵器 砕蓋	壳形 復元	①(10.0)③2.9 ②(1.2)	①②青灰色(5PB6/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
189	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(9.7)	①②灰白色(N7) ②暗灰色(N3)		1mm以下の粗粒砂を含む		
190	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(9.5)	①②灰色(N6)		2mm程の纏を若干含む		
191	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(9.5)	①灰色(N4) ②黒褐色(2.5Y3/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む	192と 同一個体か	
192	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(9.2)	①灰色(N4) ②オリーブ黒色(7.5Y3/1)		1mm以下の粗粒砂を含む	191と 同一個体か	
193	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部	①(9.8)	①②青灰色(5PB5/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
194	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①灰色(N6) ②暗灰色(N3)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
195	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②灰白色(N8)		精緻		
196	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
197	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①灰色(N5) ②灰色(N6)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
198	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①灰色(N5) ②灰白色(5Y8/1)		2mm程の纏を若干含む		
199	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②灰白色(N8)		1mm以下の粗粒砂を含む	かえり端部 が欠損	
200	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②明紫灰色(5P7/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む	23と 同一個体か	
201	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
202	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N5)		精緻	焼き彫れが目立つ	
203	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
204	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②青灰色(5PB5/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
205	包含層L6 須恵器 砕蓋	口縁部		①②灰色(N6)		精緻		
206	包含層L6 須恵器 砕身	口縁部 ～底部	①(16.8)	①暗灰色(N3) ②灰色(N6)		0.5mm以下の粗粒砂を若干含む	焼き彫れが目立つ	
207	包含層L6 須恵器 高台付环身	口縁部 ～底部	①(17.3)②(10.6) ③5.9	①②灰色(5Y7/1) ②灰白色(10Y7/1)		精緻		
208	包含層L6 須恵器 高台付环身	口縁部 ～底部	①(15.0)②(8.9) ③4.2	①②灰白色(N7)		2mm程の纏を若干含む		
209	包含層L6 須恵器 高台付环身	口縁部	①(12.5)	①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
210	包含層L6 須恵器 高台付环身	底部	②(7.2)	①②灰白色(N7)		1mm以下の粗粒砂を含む		
211	包含層L6 須恵器 高台付环身	底部	②(8.3)	①②青灰色(5PB6/1)		1mm以下の粗粒砂を含む		
212	包含層L6 須恵器 高台付环身	底部	②(7.9)	①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)		1mm以下の粗粒砂を若干含む		
213	包含層L6 須恵器 砕身	口縁部		①②灰色(N6)		精緻		

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①口縁	②底径	③器高		
214	包含層L6	須恵器 环身	口縁部			①②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む	風化が 著しい
215	包含層L6	須恵器 梗か	口縁部			①灰色(N4) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	
216	包含層L6	須恵器 高台付环身	底部			①明青灰色(5PB7/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
217	包含層L6	須恵器 梗	底部	②(7.8)		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	底部内外面 ヘラ記号
218	包含層L6	須恵器 高坏	壳形 復元	①14.0②(8.9) ③9.8		①灰白(5Y7/1) ②灰色(N6)	精緻	
219	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部 ～脚部	①(10.1)		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	精緻	
220	包含層L6	須恵器 高坏	脚部 ～环部	②(8.5)		①灰色(N4) ②灰色(5Y4/1)	精緻	
221	包含層L6	須恵器 高坏	壳形 復元	①(8.8)②(8.5) ③8.9		①灰色(N6) ②灰白色(10Y7/1)	精緻	
222	包含層L6	須恵器 高坏	环部			①灰色(N4) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
223	包含層L6	須恵器 高坏	脚部 ～ 环部			①暗灰色(N4) ②灰白色(N8)	精緻	風化が 目立つ
224	包含層L6	須恵器 高坏	脚部 ～ 环部			①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 目立つ
225	包含層L6	須恵器 高坏	脚部			①②灰白色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
226	包含層L6	須恵器 短脚高坏か 小口	脚部 ～ 环部			①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	精緻	
227	包含層L6	須恵器 短脚高坏か 小口	脚部 ～ 环部			①灰色(N5) ②灰白色(N7)	1mm程の繊を若干含む	
228	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部	①(13.9)		①暗灰色(N3) ②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
229	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部	①(13.7)		①灰色(10Y4/1) ②灰色色(N7)	精緻	
230	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部	①(10.0)		①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
231	包含層L6	須恵器 高坏	脚部	②(8.4)		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
232	包含層L6	須恵器 高坏	脚部	②(9.9)		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
233	包含層L6	須恵器 高坏	脚部	②(10.0)		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒色(10Y2/1)	0.5mm以下の粗粒砂を 含む	
234	包含層L6	須恵器 高坏	脚部	②(10.2)		①灰白色(N8) ②灰色(N4)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
235	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部			①②灰白色(N6)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
236	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部			①灰色(N5) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
237	包含層L6	須恵器 高坏か	口縁部			①②暗灰色(N3)	精緻	
238	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部			①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
239	包含層L6	須恵器 高坏	口縁部			①灰色(N6) ②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
240	包含層L6	須恵器 高坏か	口縁部			①暗灰色(N3) ②灰白色(N8)	0.5mm以下の粗粒砂を 若干含む	
241	包含層L6	須恵器 高坏か	口縁部			①②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
242	包含層L6	須恵器 高坏	脚部			①灰白色(N8) ②灰色(N4)	精緻	
243	包含層L6	須恵器 皿	口縁部 ～底部	①(23.3)		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む 2～3mm程の繊を含む	
244	包含層L6	須恵器 皿	口縁部 ～底部			①灰色(N5) ②灰色(N6)	精緻	
245	包含層L6	須恵器 平瓶	底部 ～ 体部			①灰白色(7.5Y7/1) ②灰白色(N7)	精緻	
246	包含層L6	須恵器 平瓶か	頭部			①②暗灰色(N3)	精緻	
247	包含層L6	須恵器 蓋	口縁部	①(6.5)		①灰色(N4) ②灰色(10Y4/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
248	包含層L6	須恵器 長頸壺	口縁部	①(8.9)		①②灰色(N4)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
249	包含層L6	須恵器 長頸壺	口縁部	①(9.0)		①②青灰色(5PB4/1)	2mm程の繊を若干含む	

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁部②底部③器高		色調 ①外顔 ②内顔	胎土	備考
				①	②			
250	包含層L6	須恵器 長頸壺	口縁部	①(9.8)		①灰色(N6) ②灰色色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
251	包含層L6	須恵器 脚付壺	脚部	②(10.8)		①灰白色(N7) ②灰白色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む	
252	包含層L6	須恵器 高台付壺	底部	②(10.2)		①灰色(N5) ②灰色色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
253	包含層L6	須恵器 壺	口縁部			①灰色(N5) ②灰白色(N8)	精緻	風化が著しい
254	包含層L6	須恵器 壺	口縁部			①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
255	包含層L6	須恵器 壺	口縁部			①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む 3mm程の礫を若干含む	
256	包含層L6	須恵器 壺	底部	②(14.0)		①②灰白色(N8)	2mm程の礫を若干含む	風化が著しい
257	包含層L6	須恵器 壺	底部	②(11.1)		①灰色(N6) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
258	包含層L6	須恵器 小型焼か	口縁部	①(9.9)		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
259	包含層L6	須恵器 小型甕か	口縁部			①②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
260	包含層L6	土師器 盆	口縁部～底部	③(2.6)		①橙色(5VR6/6) ②浅黄色(10YR8/3)	1mm以下の粗粒砂を含む	261と同一個体か
261	包含層L6	土師器 盆	底部～体部			①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄色(10YR8/3)	精緻	260と同一個体か
262	包含層L6	土師器 盆	口縁部～底部	③(2.2)		①橙色(5V6/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
263	包含層L6	土師器 盆	口縁部			①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR7/6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
264	包含層L6	土師器 盆	口縁部			①②にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
265	包含層L6	土師器 环か	口縁部			①②にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
266	包含層L6	土師器 环か	口縁部			①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
267	包含層L6	土師器 壺	口縁部	①(19.9)		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	
268	包含層L6	土師器 壺	口縁部～体部	①(15.6)		①にぶい黄褐色(10YR4/3) ②黒褐色(10YR3/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 内面に炭化物付着	
269	包含層L6	土師器 壺	口縁部～体部	①(15.4)		①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②黒褐色(10YR3/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 2mm以下の礫を若干含む	
270	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①灰褐色(7.5YR4/2) ②黒色(10YR2/1)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	風化が目立つ
271	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①②橙色(7.5YR6/6)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 3～3mm程の礫を若干含む	風化が目立つ
272	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①灰黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.57/2)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
273	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①褐黄色(10YR4/1) ②黒褐色(10YR3/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
274	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①褐黄色(10YR3/1)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を多く含む	
275	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰褐色(7.5YR6/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	口縁部内面 ヘラ記号
276	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①②灰褐色(2.5Y7/2)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む	
277	包含層L6	土師器 壺	口縁部			①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	
278	包含層L6	土師器 壺	体部			①②暗赤褐色(5YR3/4)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 2～4mm程の礫を若干含む	
279	包含層L6	土師器 壺	体部			①②にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を含む 2～3mm程の礫を含む	
280	包含層L6	土師器 壺	把手	6/4	7/2	①にぶい黄橙(10YR7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
281	包含層L6	土師器 壺	把手			①にぶい褐黄色(7.5YRS/3) ②浅黄色(2.5YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を含む	
282	包含層L6	土師器 壺	把手			①②浅黄色(2.5Y7/3)	2mm程の礫を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①	②			
283	包含層L6	土師器 鉢	口縁部	①②にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm程の繩を多く含む			風化が著しい
284	包含層L6+1.5cm界層	須恵器 短頸壺蓋か	口縁部～底部	①(10.8)③4.5	①②灰白色(N8)	2mm以下粗粒砂を若干含む		
285	包含層L6+1.5cm界層	須恵器 盆	口縁部～底部		①②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を含む		
286	包含層L6+1.5cm界層	須恵器 盆	口縁部		①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(N8)	1mm以下粗粒砂を若干含む 2mm程の繩を若干含む		
287	包含層L6+1.5cm界層	須恵器 高壺	脚部	⑦(9.2)	①灰白色(N7) ②灰色(N5)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
288	包含層L6+1.5cm界層	須恵器 壺身	完形復元	①(8.2)③3.2	①②灰色(N6)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
289	包含層L6+1.5cm界層	土師器 壺	口縁部		①②黒褐色(2.5Y3/1)	1mm以下粗粒砂を含む 2mm程の繩を若干含む		
290	包含層L6+1.5cm界層	土師器 壺	口縁部		①②灰黃褐色(10YR5/2)	1mm以下粗粒砂を含む 2mm程の繩を若干含む		風化が著しい
291	包含層L6+1.5cm界層	土師器 壺か	口縁部		①②橙色(7.5YR7/6)	2mm程の繩を含む		風化が著しい
292	包含層L6+1.5cm界層	土師器 壺	口縁部		①灰黃色(2.5Y7/2) ②灰黃色(2.5Y6/2)	1mm以下粗粒砂を多く含む 2～3mm程の繩を多く含む		
293	L6少底正柱頭 約60cm×50cm	須恵器 盆	口縁部～底部	①(22.7)	①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(N8)	1mm以下粗粒砂を含む 3mm程の繩を若干含む		
294	L6少底正柱頭 約60cm×50cm	土師器 小型壺	口縁部～体部	①(11.7)	①黒褐色(7.5YR3/2) ②黑色(10YR2/1)	1mm以下粗粒砂を含む 2mm程の繩を若干含む		内面に炭化物付着
295	包含層L5	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
296	包含層L5	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
297	包含層L5	須恵器 壺蓋か	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
298	包含層L5	須恵器 壺蓋か	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
299	包含層L5	須恵器 壺身	口縁部～底部	①(14.4)②(8.4) ③4.0	①②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を含む		
300	包含層L5	須恵器 壺身	口縁部～底部	①(11.0)②(6.6) ③4.2	①②灰白色(N7)	2mm以下粗粒砂を含む		
301	包含層L5	須恵器 壺身	底部	②(6.1)	①②明紫灰色(5P7/1)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
302	包含層L5	須恵器 高台付壺身	底部	②(8.0)	①②灰色(N6)	1mm以下粗粒砂を含む		
303	包含層L5	須恵器 壺身	口縁部		①②灰色(N6)	1mm以下粗粒砂を若干含む		粘土難ぎ日 明顯に残る
304	包含層L5	須恵器 壺身	口縁部～体部		①灰色(N5) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下粗粒砂を含む		
305	包含層L5	須恵器 壺身	底部		①②灰色(N6)	1mm以下粗粒砂を含む		底部内面 △記号
306	包含層L5	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
307	包含層L5	須恵器 高壺	壺部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下粗粒砂を含む		
308	包含層L5	須恵器 高壺	脚部		①灰色(N6) ②灰白色(N8)	1mm以下粗粒砂を若干含む 4mm程の繩を若干含む		
309	包含層L5	須恵器 高壺	脚部	②(7.7)	①暗灰色(N3) ②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
310	包含層L5	須恵器 高壺	脚部	②(7.0)	①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
311	包含層L5	須恵器 高壺	口縁部		①灰色(N5) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
312	包含層L5	須恵器 高壺	口縁部		①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下粗粒砂を含む		
313	包含層L5	須恵器 高壺	脚部		①灰色(N6) ②灰色(10Y5/1)	0.5～1mm程の粗粒砂を含む		
314	包含層L5	須恵器 高壺	脚部		①②灰白色(N8)	1mm以下粗粒砂を多く含む		
315	包含層L5	須恵器 ハソウ	体部		①灰白色(N8) ②灰白色(N7)	1mm以下粗粒砂を若干含む		
316	包含層L5	須恵器 長頸壺	体部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	精緻		

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口徑②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外側	②内面		
317	包含層L5	須恵器 高台付壺か	底部	②(10.7)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む	32と 同一個体か	
318	包含層L5	須恵器 高台付壺	底部		①灰白色(N8) ②明青灰色(PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
319	包含層L5	土師器 壺	口縁部		①②にぶい黄褐色(10YR5/3)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む		
320	包含層L5	土師器 壺	口縁部		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	風化が 著しい	
321	包含層L5	土師器 壺	口縁部		①②褐色(7.5YR4/4)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む 2mm程の礫を若干含む		
322	包含層L5	輪 羽口	体部		①橙色(5YR6/6) ②青灰色(SPB6/1)	精緻		
323	包含層L4	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
324	包含層L4	須恵器 高台付壺身	口縁部～底部	①(14.3)②(9.4) ③3.8	①②灰白色(N8)	2mm以下の粗粒砂を含む 1mm以下の粗粒砂を含む	風化が 目立つ	
325	包含層L4	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(N7.5)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
326	包含層L3	須恵器 壺蓋	口縁部		①青褐色(5B7/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
327	包含層L3	須恵器 壺身	口縁部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
328	包含層L3	須恵器 高台付壺	口縁部～底部	③2.6	①②青灰色(5B5/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
329	包含層L3	陶器 高台付壺	底部	②(6.2)	素地 淡黄色(2.5Y8/4) 輪 淡黄色(2.5Y8/4)	精緻		
330	測定区南壁 第2層	須恵器 高台付壺身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	60と 同一個体か	
331	測定区南壁 第2層	須恵器 短脚高壺	脚部		①②灰白色(N8)	精緻	風化が 著しい	
332	旧床土L2	須恵器 壺身	底部	②(5.9)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む		
333	旧床土L2	土師質土器か 高台付壺	底部	②(5.2)	①浅黃褐色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	1mm以下の粗粒砂を含む		
334	旧耕土L1	須恵器 壺蓋	口縁部		①青灰色(10GB6/1) ②青灰色(SPB6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
335	旧耕土L1	須恵器 壺蓋	口縁部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む		
336	旧耕土L1	須恵器 壺蓋	口縁部		①②灰褐色(10Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む		
337	旧耕土L1	須恵器 壺蓋	口縁部		①灰色(10Y6/1) ②明青灰色(5B7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
338	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部	②(9.8)	①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が 著しい	
339	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部	②(7.3)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	内面に 付着物あり	
340	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
341	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部		①明青灰色(5PB7/1) ②灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の粗粒砂を含む		
342	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 著しい	
343	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む		
344	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	114と 同一個体か	
345	旧耕土L1	須恵器 高台付壺身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
346	旧耕土L1	須恵器 壺身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む		
347	旧耕土L1	須恵器 短頸壺	口縁部	①(9.8)	①明青灰色(5B7/1) ②灰白色(N7/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	鉛目7 反時計回り	
348	旧耕土L1	陶器 描鉢	底部		①②赤褐色(7.5YR3/3)	精緻		
349	旧耕土L1	青磁 梗	体部		素地灰白色(5V8/1) 輪 オリーブ灰(2.5GY4/1)	精緻		
350	旧耕土L1	青磁 黒か	底部		素地 灰白色(5V8/1) 輪 灰白色(5V7/2)	精緻		
351	旧耕土L1	土師器 脼	口縁部		①②灰白色(10YR8/1)	2mm以下の粗粒砂を 若干含む		

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底径③器高		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
				①	②			
352	旧耕土L1	瓦質土器 鍋	口縁部		①②灰色(10Y4/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
353	旧耕土L1	瓦質土器 湯釜	口縁部	①(12.3)	①②黒色(N2)	精緻		
354	旧耕土L1	瓦質土器 湯釜	体部		①②黒色(N2)	精緻		
355	旧耕土L1	瓦質土器 足鍋	脚部		①②オリーブ黒色(10Y3/1)	精緻		風化が目立つ
356	旧耕土L1	瓦質土器 足鍋	脚部		①にぶい黄橙色(10YR6/4)	1mm以下の粗粒砂を含む		風化が目立つ
357	旧耕土L1	瓦質土器 足鍋	脚部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	精緻		風化が目立つ
358	旧耕土L1	瓦質土器 足鍋	脚部		①灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む		風化が著しい
359	旧耕土L2-包含層L3	須恵器 高台付环身	底部	②(8.0)	①灰色(N6) ②灰色(N7)	精緻		
360	旧耕土L2-包含層L3	須恵器 盆か	底部		①灰色(10Y5/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む マンガンを多く含む		
361	旧耕土L2-包含層L3	青磁 梵	体部		素地灰白色(7.5Y7/1) 輪 明青オリーブ(7.5Y6/2)	精緻		
362	旧耕土L2-包含層L3	青白磁 梵	体部		素地 灰白色(5Y8/2) 輪 明緑灰色(10GY7/1)	精緻		
363	層位不明	須恵器 壱蓋	天井部	つまみ径 2.6	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
364	層位不明	須恵器 壱蓋	口縁部		①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		歪みが大きい
365	層位不明	須恵器 壱蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
366	層位不明	須恵器 壱蓋	口縁部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
367	層位不明	須恵器 壱蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を多く含む		
368	層位不明	須恵器 壱蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
369	層位不明	須恵器 短頸壹蓋か	口縁部	①(4.6)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の縫を若干含む		
370	層位不明	須恵器 高台付环身	底部	②(8.0)	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む		
371	層位不明	須恵器 高台付环身	底部	②(7.3)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
372	層位不明	須恵器 高台付环身	底部		①②灰色色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		
373	層位不明	須恵器 壴	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
374	層位不明	須恵器 高台付壹蓋か	底部		①青灰色(5PB6/1) ②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 0.5mm以下の粗粒砂を含む		
375	層位不明	須恵器 高台付壹蓋か	底部		①青灰色(5B6/1) ②青灰色(5PB6/1)	若干含む 2~3mm程の縫を若干含む		
376	層位不明	土師器 罐	底部	②(5.8)	①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄褐色(10YR4/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	底部外面に 糸切り痕	
377	層位不明	土師器 罐	口縁部		①浅黄橙色(10YR8/3)	精緻		風化が著しい
378	層位不明	土師器 壴	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む		
379	家畜飼育基礎堆土	須恵器 高台付环身	底部	②(8.3)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む		
380	家畜飼育基礎堆土	須恵器 高台付环身	底部		①②明青灰色(5PB7/1)	精緻		
381	家畜飼育基礎堆土	須恵器 平瓶か	口縁部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む	粘土難化目 明顯に残る	
382	造成土	須恵器 壱身	口縁部～底部	③(3.4)	①②暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1)	精緻		
383	造成土	須恵器 高壺	脚部～ 壺部	②(7.7)	①灰白色(N7) ②オリーブ黒色(10Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を含む		

表4 出土遺物(石器)観察表

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
384	包含層L6	不明品		表面を研磨している
385	造成土	石鏟か	残存長3.1 幅3.0 厚み1.7	先端が欠損

表5 出土遺物(木製品)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
386	新立柱建物跡3 PH5	柱	残長60.5 最大径19.7	表面に煤が付着している
387	新立柱建物跡3 PH4	柱	残長75.7 最大径21.5	表面に煤が付着している
388	新立柱建物跡3 PH3	柱	残長69.8 最大径20.3	表面に煤が付着している
389	新立柱建物跡3 PH1	不明品	残長20.2 残幅9.2 厚み1.9	
390	新立柱建物跡3 PH1	不明品		
391	新立柱建物跡3 PH1	木蓋か	残長8.3 残高3.0	
392	新立柱建物跡2 PH6	松明灯	残長29.0 残幅1.6 厚み1.4	一方の先端に煤が付着している
393	SP2	角杭	残長11.3 残幅4.0 残厚3.2	
394	苔埋土N83	不明品	長さ10.5 幅13.9 厚み9.2	不定方向に切り込み痕が残る
395	苔埋土N83	不明品	残長17.5 幅2.1 厚み0.7	
396	苔埋土N83	不明品	残長8.8	
397	苔埋土N83	円形曲物	最大径16.1 厚み0.9	
398	苔埋土N83	松明灯か	長さ13.9 幅1.1 最大厚0.6	一方の先端に煤が若干付着している
399	苔埋土N83	板材か	残長12.1 残幅5.8 厚み2.5	
400	苔埋土N83	手斧か	残長10.0 残幅6.7 最大厚2.1	ベルトの役割をしたと考えられる木の表皮が付着している
401	苔埋土N83	手斧か	長さ8.0 幅6.1 最大厚2.3	
402	苔埋土N83	板材か	残長10.0 残幅1.5 厚み1.2	
403	苔埋土N83	板材か	残長4.1 残幅4.7 厚み0.7	
404	苔埋土N83	板材か	残長8.2 残幅3.5 厚み0.9	
405	苔埋土N83	板材か	残長10.6 幅4.3 厚み0.7	
406	苔埋土N83	板材か	残長7.5 残幅2.9 厚み1.5	
407	包含層L6	杭	残長17.4 幅8.9 厚み6.4	
408	包含層L6	杭	残長19.6 残幅7.6 残厚6.1	
409	包含層L6	杭か	残長6.1 残幅4.6 厚み4.6	
410	包含層L6	柱か	残長20.5 幅11.9 厚み9.0	
411	包含層L6	角杭	残長11.3 幅5.7 厚み5.0	
412	包含層L6	角杭	残長11.6 幅5.6 厚み4.9	
413	包含層L6	角杭か	残長39.4 幅3.1 最大厚1.6	
414	包含層L6	丸杭	残長25.3 最大径5.0	
415	包含層L6	丸杭	残長20.9 最大径6.0	

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
416	包含層L6	丸杭	残長27.3 最大径4.2	
417	包含層L6	不明品	残長8.8 残幅8.8 厚み3.2	
418	包含層L6	丸杭か	残長22.4 最大径4.5	
419	包含層L6	丸杭	残長15.3 最大径4.2	
420	包含層L6	丸杭	残長14.0 最大径5.0	
421	包含層L6	不明品	残長8.1 残幅6.0 残厚3.1	
422	包含層L6	不明品	残長6.3 残幅5.5 残厚2.8	全体が炭化している
423	包含層L6	丸杭	残長6.0 最大径5.1	
424	包含層L6	丸杭	残長9.7 最大径4.8	
425	包含層L6	手斧か	残長22.1 残幅9.2 残厚1.5	
426	包含層L6	手斧か	残長10.0 残幅6.6 厚み3.3	
427	包含層L6	手斧か	残長9.9 残幅7.2 最大厚1.7	
428	包含層L6	手斧か	残長10.0 幅7.0 厚み1.2	
429	包含層L6	不明品	残長12.4 残幅8.0 最大厚2.0	表面に煤が付着している
430	包含層L6	剝物	長さ15.8 幅12.3 厚み6.9 深さ2.7 内法 上端長さ13.1 上端幅8.0 下端長さ8.5 下端幅5.4	
431	包含層L6	丸杭か	残長11.9 最大径6.5	
432	包含層L6	棒材か	残長64.0 幅2.0 厚み1.8	
433	包含層L6	不明品	残長25.9 幅1.8 厚み1.3	
434	包含層L6	松明灯か	残長25.1 残幅1.2 残厚1.0	一方の先端に煤が付着している
435	包含層L6	松明灯か	残長31.2 幅1.8 厚み0.9	一方の先端に煤が付着している
436	包含層L6	松明灯か	残長26.5 残幅1.9 残厚1.6	一方の先端に煤が付着している
437	包含層L6	松明灯か	長さ15.0 幅2.1 厚み1.6	
438	包含層L6	松明灯か	残長15.7 幅1.1 厚み0.6	一方の先端に煤が付着している
439	包含層L6	松明灯か	残長17.2 幅1.5 厚み0.4	両端に煤が付着している
440	包含層L6	松明灯か	残長13.0 残幅2.5 残厚1.3	一方の先端に煤が付着している
441	包含層L6	板材か	残長9.6 幅6.0 厚み0.7	
442	包含層L6	板材か	残長17.6 残幅5.8 厚み0.5	
443	包含層L6	板材か	残長10.0 幅1.7 厚み1.3	
444	包含層L6	板材か	残長20.7 幅3.5 厚み1.0	
445	包含層L6	板材か	残長17.8 残幅3.2 厚み1.0	
446	包含層L6	板材か	残長10.6 幅3.1 厚み1.0	
447	包含層L6	板材か	残長8.7 幅2.3 厚み1.0	
448	包含層L6	板材か	残長8.2 残幅2.8 厚み0.7	
449	包含層L6	板材か	残長9.3 残幅2.0 厚み0.7	一方の先端に煤が付着している
450	包含層L6	板材か	残長9.2 幅1.9 厚み1.0	
451	包含層L6	板材か	残長10.0 幅1.6 厚み1.0	

(6) 付篇

山口県吉田遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は山口県吉田遺跡（平成18年度実施農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査：山口大学吉田キャンパス）から出土した建築部材3点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis*, SP)

(遺物 NO.1-1(瓶立柱建物跡3P15出土資料), 1-2(瓶立柱建物跡3P16出土資料), 2(瓶立柱建物跡3P14出土資料))

(遺物 NO.1-1(瓶立柱建物跡3P15出土資料), 1-2(瓶立柱建物跡3P16出土資料), 2(瓶立柱建物跡3P14出土資料))

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて單列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載I~V」 東京大学木質科学研究所 (1999)

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編I・II」 保育社 (1979)

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」 (1985)

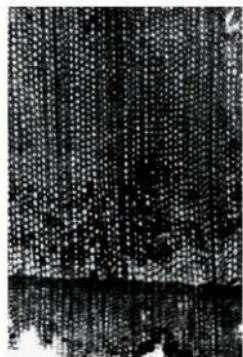
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」 (1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

山口大学吉田遺跡出土木製品同定表

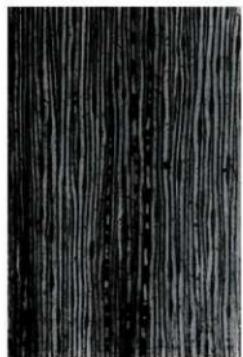
No	品名	樹種
1-1	柱材	ヒノキ科アスナロ属
1-2	柱材	ヒノキ科アスナロ属
2	柱材	ヒノキ科アスナロ属



NO.1-1 ヒノキ科アスナロ属
木口 ×40



糸目 ×100



板目 ×40



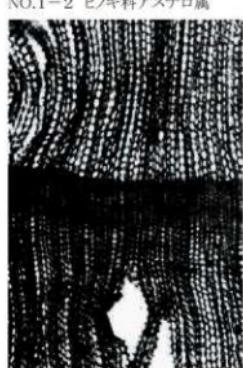
NO.1-2 ヒノキ科アスナロ属
木口 ×40



糸目 ×100



板目 ×40



NO.2 ヒノキ科アスナロ属
木口 ×40



糸目 ×100



板目 ×40

3. 農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内S-20

調査面積 約19m²

調査期間 平成18年11月10日

調査担当 横山成己

調査結果 農学部附属家畜病院南面に建物が増築されたことに伴い、新規の配管工事が実施されることとなった。その掘削深度から、造成土下の遺物包含層および谷埋土を破壊する可能性があり、工事立会を行うこととなった。調査対象地は、病院建物南西側の幅0.6m×長さ31m区間である。

土層断面記録は図37のA地点を基準とし、H地点までの8地点で行っている。調査地は南東から北西へ急傾斜で降下しているため、ここでは標高により報告を行う。

A地点は地盤高27.706m、以下はアスファルト及び造成土、27.011mで明黄色の地山が検出されている。3.5m先のB地点は地盤高27.98m、以下アスファルト及び造成土、27.2mで遺物包含層上面を確認した。6.5m先のC地点は地盤高28.036m、以下アスファルト及び造成土、27.409mで遺物包含層上面を確認。11m先のD地点は地盤高28.351m、以下アスファルト及び造成土、27.634mで遺物包含層上面を確認。16m先のE地点は地盤高28.648mで以下造成土、28.305mで旧耕土上面、28.17mで旧床土上面、28.057mで遺物包含層上面、27.707mで谷埋土上面を検出した。23m先のF地点は地盤高28.924mで以下表土及び造成土、28.333mで旧耕土上面、28.253mで旧床土上面を確認。29m先のG地点は地盤高29.332mで以下表土及び造成土、28.369mで旧耕土上面、28.208mで旧床土上面を確認。31m先のH地点は地盤高29.369mで以下表土及び造成土、28.27mで旧耕土上面を確認した。この結果、調査区北西端部は大学移転前の耕土及び床土が削平を受けているが、全面にわたり遺構・遺物が埋存する可能性が高いことが判明した。今後周辺で更なる開発等が実施される場合は遺跡調査が必要である。



図 37 調査区位置図



写真 86 A地点土層断面（南から）



写真 87 E地点土層断面（南から）

4. 教育総合研究センター改修II期工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内K・L-16区

調査面積 約84m²

調査期間 平成18年6月12日～8月8日

調査担当 田畠直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図38、写真88)

平成17年度に行った予備発掘調査の結果、共通教育本館南東部に設定したD～F調査区で遺構と遺物包含層が確認されたため、工事に先立って本発掘調査が実施されることが決定された(平成18年5月9日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)。これを受けて今回、埋蔵文化財資料館が本発掘調査を行った。

(2) 基本層序

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(層厚約5～30cm)

第2層 造成土(2-1～4に細分、層厚約30～70cm)

第3層 旧耕土(水田耕土か、3-1～2に細分、層厚約5～20cm)

第4層 遺物包含層(4-1～3に細分、層厚約5～40cm)

第5層 弥生時代以降の遺構面形成層(5-1～5に細分、層厚約10～20cm以上)

第6層 地山(6-1～15に細分、層厚10cm以上)



図38 調査区位置図



写真 88 調査前全景(西から)

調査区は建物建設時に大規模な擾乱を受けている。調査区東部では第2層の直下が遺構検出面であり、y=558以西で第4層が残存している状況であった。また、調査区中央部からやや西寄りにかけては浄化槽・既設配管による擾乱が著しいため、東西方向の土層を連続的に確認することができなかった。5層は從来地山と捉えられてきた土層と近似するが、B-B'断面で5-1層が縄文時代河川埋土の上面に堆積している状況が確認できた。このため、5層は弥生時代以降の遺構面形成層と捉え、これに近い標高で検出された東側の5-2～4層も5層に位置づけたが、上記の擾乱により5-1層との対応関係が不明確であるため、5-2～4層は6層に含まれる可能性がある。

(3) 遺構

調査の結果、縄文時代河川1条、古墳時代の河川、ビット、杭列、水田暗渠を検出した。

縄文時代河川

調査区西端部で、後述する古墳時代河川掘削後に検出した。同河川検出面が縄文時代河川最上層に相当する。この層はオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトに黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含

んでいたことから、古墳時代河川完掘後、確認のためアウトフレームの基礎掘削が予定されていたA-A'断面以東についてさらには掘削を行い土層の確認を行った。その結果、最上層からは遺物は出土しなかったものの、その下のオリーブ灰色（2.5GY5/1）粗砂は流木などの植物遺体を含んでいた（写真92）。また、これより下位の土層（図39キ～シ）はシルトと粗砂の互層となっており、次第に湧水が顕著となつた。なお遺物として、縄文時代晚期の土器が最下部（図39コ・サ・シ）から出土したが、これらの層は特に湧水が激しかったため、出土層位を明確に確認することができなかつた。

縄文時代河川はごく一部の調査にとどまつたため、その規模不明であるが、B-B'断面で東肩が確認できた。以上からこの河川は少なくとも幅約7.5m、深さ約1.1mの規模であり、さらに調査区西側に広がっていると考えられる。今回調査区と調査区西端から約4m西側に位置する予備発掘調査のD調査区では、古墳時代河川検出面が近似していることから、少なくともここまで広がる可能性が高い。また、調査区から南西約70mに位置する教養部複合棟（現メディア基盤センター）敷地、南東約60mに位置する教育総合研究センター渡り廊下新設地点で縄文時代晚期の河川が検出されており、同一の河川である可能性が考えられる。

古墳時代河川

上記のように調査区西部では縄文時代河川最上層を検出面とする。また、その上面に堆積する遺物包含層である4-1層：黒褐色（10YR3/1）シルトは予備発掘調査のD調査区の5-1層と同一層と考えられる。ただし、予備発掘調査のD調査区では、5-1層が古墳時代河川の検出面であったが、今回の調査区では古墳時代河川の埋土上に堆積している点が異なる。両調査区間を調査していないため、両者が別の土層である可能性も残るが、河川の開析、埋没が繰り返されていたことを示す可能性が高い。

調査区西部で検出した河川は西側から北東方向へ流路方向を持つ。調査区内で確認できた最大幅は約1.4m、深さは約0.45mである。埋土は粗砂、シルトの互層であり、埋土下部を中心に弥生土器・土師器、須恵器片などが多数出土した。

一方、調査区東部、Y=555付近でも古墳時代河川の東肩を検出した。水田暗渠、既設配管による擾乱を受けているため、検出幅は南北方向約1.8mにすぎない。また、河川の肩から西側は浄化槽による擾乱がみられるため、調査区西部の河川と同一なのか、別の河川なのか定かではない。加えて、調査区東部では遺物が少ないため、調査区西部との時期差も定かではない。このため本報告では両者を古墳時代河川と一括し、西・東で区別しておく。

ピット

ピットは調査区東部で7基検出した。Pit1は直径約24cm、深さ4.7cm。Pit2は平面規模10×14cm、深さ7.0cm。Pit3の平面規模は12×13cm、深さ7.9cm。Pit4は直径15cm、深さ4.3cm。Pit5は直径10cm、深さ11.9cm。Pit6の平面規模は24×42cm、深さ10.5cm。Pit7の平面規模は20cm×不明、深さ2.0cm。

埋土はPit1が黒褐色（10YR3/1）シルト、Pit2～3が黒褐色（10YR3/1）シルトとオリーブ黄色（5Y6/3）シルトとのブロック土、Pit4～7が黒褐色（10YR3/1）粘質土と灰黄色（10YR4/2）粘質土とのブロック土であった。いずれのピットも深さは10cm前後と浅く、遺物も出土していないが、埋土の色調から弥生時代～古代に属する可能性が高い。

その他の遺構

その他の遺構として、y=555～558付近で水田暗渠・杭跡を検出した。水田暗渠は統合移転直前まで使用されていたものである。また、杭列も水田暗渠に並行していることから水田暗渠とほぼ同時期のものと考えられる。

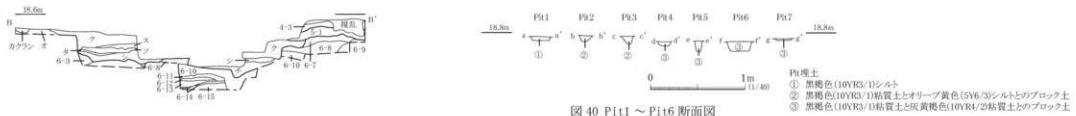
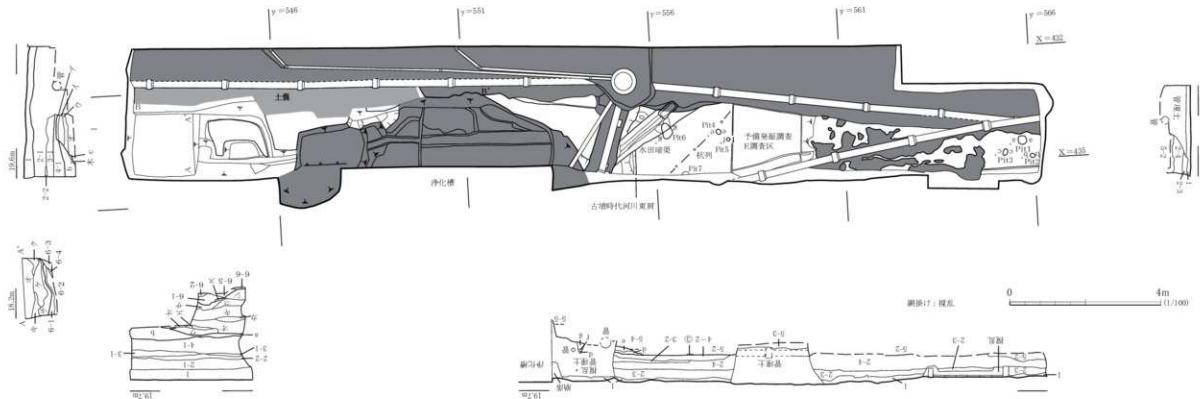


図 40 Pit1 ~ Pit6 断面図



表土(セミ中)
2-1 造底土 黒色(SV4/1)土、耕土・床土を含む～5cmの大粒の礫を含む
2-2 造底土 黒色(SV4/1)土、耕土・床土を含む(礫をほとんど含まない)
2-3 造底土 マサ土
2-4 造底土 暗緑灰色(7.5GY4/1)土にマサ土を含む
3-1 耕土 黒色(7.5LY5/1)シルト
3-2 耕土 黒色(7.5LY5/1)シルト
4-1 遺物包含層 黒褐色(10YR3/1)シルト
4-2 遺物包含層 黄灰土(2.5YV1/1)シルト
4-3 遺物包含層 黑褐色(10YR6/1)リルト
5-1 弥生時代以降遺構形成層 黄色(2.5Y7/3)粘土
5-2 弥生時代以降遺構形成層 黄色(2.5Y6/2)シルト
5-3 弥生時代以降遺構形成層 黄オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
5-4 弥生時代以降遺構形成層 オリーブ色(5Y6/6)細砂
5-5 弥生時代以降遺構形成層 淡黄色(2.5Y7/3)粘土

6-1 地山 青灰色(20E6/1)粗砂(3cmの大粒の礫を多く含む)
6-2 地山 灰色(SV6/1)粗砂
6-3 地山 青灰色(10HG6/1)粗砂
6-4 地山 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
6-5 地山 オリーブ色(5Y6/6)粗砂
6-6 地山 明黄色土(2.5Y6/6)シルト
6-7 地山 黄褐色土(2.5Y6/6)シルト
6-8 地山 オリーブ色(5Y6/6)粗砂
6-9 地山 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
6-10 地山 青灰色(20H6/1)粗砂
6-11 地山 青褐色(5Y6/6)粗砂
6-12 地山 黄褐色土(2.5Y6/6)シルト
6-13 地山 青灰色(5Y6/1)粘土
6-14 地山 オリーブ色(7.5Y6/3)シルト
6-15 地山 オリーブ色(10Y6/2)粗砂

古墳時代河川敷上
a 黒褐色(2.5Y3/1)シルト(同色の粗砂、植物遺体を含む)
b 黒褐色(2.5Y3/1)シルト、暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂の互層(植物遺体を多く含む)
c 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂
d 黑褐色(2.5Y3/1)粘質土
e 灰色(7.5Y4/1)粗砂と灰色(7.5Y6/1)粘土のブロック土
f 灰色(7.5Y4/1)粗砂
g 黑褐色(10Y3/1)粗砂
h 黑褐色(2.5Y3/1)シルト

古墳時代河川敷上
イ オーラーブ灰土(2.5GY6/1)シルトに黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含む
ウ オーラーブ灰土(2.5GY6/1)シルト
ウ 黑褐色(10YR2/1)シルトに青灰土(5BG6/1)シルトを少量含む
エ 布筋灰黄色(2.5Y5/2)粗砂
オ 青褐色(3B6/1)シルト
ア オーラーブ灰土(2.5GY6/1)粗砂(植物遺体を含む)
キ 黄色(7.5YV1/1)粗砂
ク 黑色(10YR2/1)シルト
ケ 青褐色(5BG6/1)粗砂
コ 白灰色(7.5Y7/1)粗砂
モ 黑褐色(2.5Y3/1)粗砂
シ 黑色(5YR1/1)粗砂、黒色(10YR2/1)シルト・青褐色(5BG6/1)シルト・ブロック土を含む
チ 青褐色(5BG6/1)粗砂
セ オーラーブ灰土(2.5GY6/1)粗砂
ソ 黑色(10YR2/1)シルト・同色の粗砂、植物遺体を含む
ヲ 青褐色(5BG6/1)粗砂、植物遺体を含む
チ 黑褐色(10YR2/1)シルトと青灰土(5BG6/1)シルトとの互層(植物遺体を含む)

図 39 調査区平面図・断面図

古墳構内（古墳遺跡）の調査

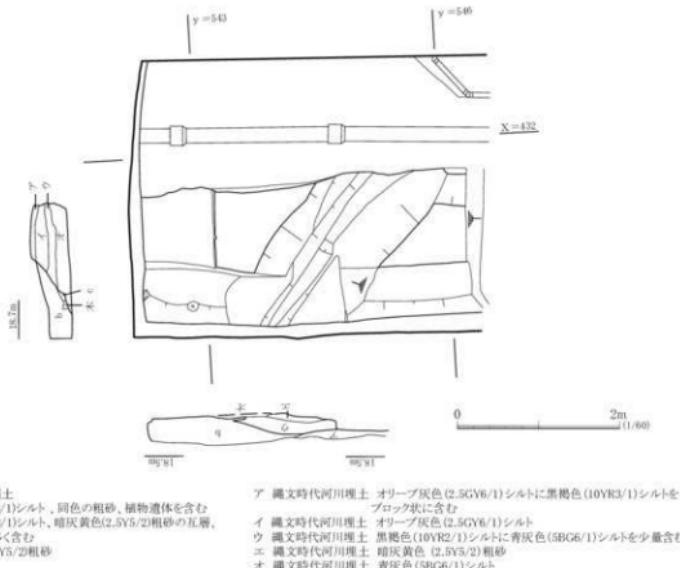


図41 古墳時代河川平面図・断面図

(4) 遺物

縄文時代河川、古墳時代河川、遺物包含層などから縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出士した。大半は図化できない小片であり、摩滅した土器片が目立つ。

1~7は縄文時代河川出土遺物でいずれも縄文時代晩期の土器である。1は縄文時代晩期中葉の深鉢口縁部、2は縄文時代晩期末の刻目突帯文土器深鉢口縁部。3は深鉢口縁部。4は深鉢胴部で外面に二枚貝条痕を施す。5は浅鉢胴部で上半で屈曲する。6は深鉢底部である。7は丸底の深鉢底部。外面はタテミガキ、内面はナデを施す。

8~21のうち、8(浄化槽掘乱清掃時出土)、9(4~2層出土)のほかは、古墳時代河川出土遺物である。なお、8は出土状況から本来は古墳時代河川埋土に含まれていた可能性が高い。

8・9は弥生時代中期の垂下口縁壺口縁部で口縁部外面に山形文を施す。10は弥生時代中期の跳ね上げ口縁の甕。11は弥生時代前期の甕頭部。頭部に削出突帯を施し、突带上に沈線を1条以上施す。12は弥生時代中期の垂下口縁部の頭部で、内面にM字状突帯を施す。また、外傾接合が確認できる。13は弥生時代中~後期の甕胴部で外面に5条の沈線を施す。14は弥生時代後期の甕頭部で外面に列点文を施す。15は弥生時代中期の甕もしくは鉢の底部である。厚底で外面が張り出す。16は弥生時代中期の甕の底部。17は弥生時代前~中期の甕底部。外傾接合が観察できる。18は古墳時代中期の土師器甕口縁部。内外面にナデを施し、先端を外面に折り曲げる。19は古墳時代中期の土師器高环口縁部で、ヨコナデにより口縁部外面を緩やかに外反させる。20は須恵器坏蓋片。21は須恵器坏身片。20は古墳時代後期前半~中頃、21は古墳時代後期後半頃に属するものと考えられる。



写真89 調査区全景（西から）



写真90 調査区北壁土層断面（南西から）



写真91 調査区南西隅土層断面（北東から）



写真92 繩文時代河川流木検出状況（北東から）



写真93 調査区北西隅土層断面（南東から）



写真94 調査区中央部北壁土層断面①（南西から）



写真95 調査区中央部北壁土層断面②（南西から）



写真96 調査区西部遺物包含層検出状況（北東から）



写真97 調査区西部古墳時代河川完掘状況（北東から）



写真98 古墳時代河川東肩検出状況①（北東から）



写真99 古墳時代河川東肩検出状況②（南西から）



写真100 調査区中央部遺構完掘状況（北から）



写真101 調査区東部遺構完掘状況（北東から）



写真102 Pit1～3半裁状況（北から）



写真103 Pit4～6半裁状況（北から）

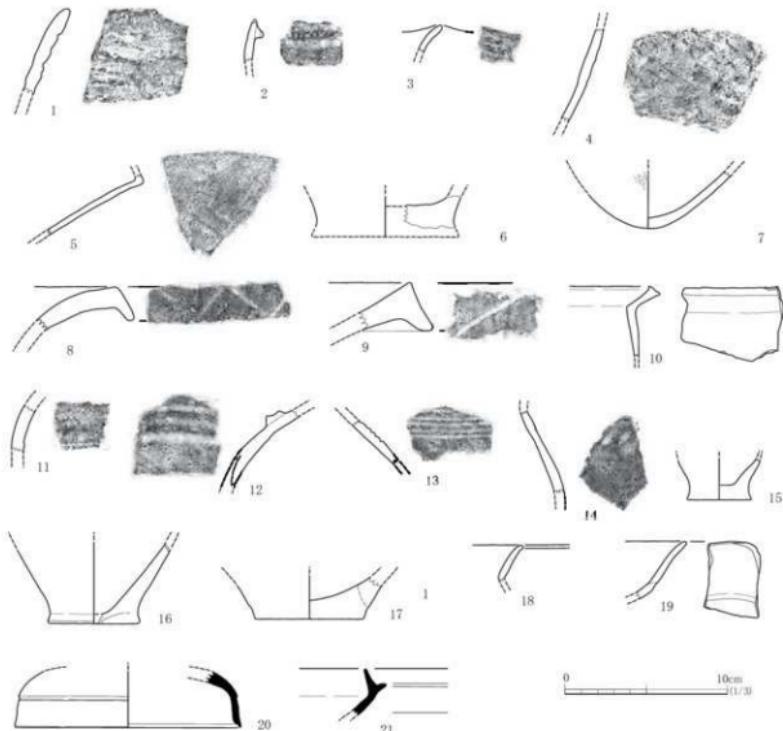


図42 出土遺物実測図

(5) 小結

今回の調査区のうち大半は擾乱を受けていたが、縄文時代河川、古墳時代河川、弥生時代～古代のものと考えられるピットなどを検出した。縄文時代河川は教養部複合棟（現：メディア基盤センター）敷地、教育総合研究センター渡り廊下新設地点で検出された縄文時代河川と同一の可能性が考えられる。また、古墳時代河川については西部・東部との関連は明らかにできなかったが、いずれも本館北側で検出された河川と一連の河川であろう。一方、調査区東部ではピットが検出されていることから、本来は微高地であり、居住域であった可能性が指摘できよう。

以上、予備発掘調査に続き、今回の本発掘調査においても吉田構内中心部における埋蔵文化財の状況を明らかにする上で大きな成果があった。調査区周辺では今回検出した河川、関連遺構等が分布していることは確実であり、今後も慎重な調査が必要である。

なお、上記の調査結果を受け、埋蔵文化財資料館専門委員会で今回の調査区における埋蔵文化財の保護について審議・判断した結果、調査区全体において擾乱が激しく、遺構等の残存状況が不良であることから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

古田構内（古田遺跡）の調査



写真 104 出土遺物①



写真 105 出土遺物②

[註]

- 1) 田畠直彦(2007)「第1章第2節5教育総合研究センター改修II期工事に伴う予備発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』山口
- 2) 前掲註1
- 3) 河村吉行(1988)「第3章 吉田構内敷地部複合棟新設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内道路調査研究年報VII』山口
- 4) 本書次節参照
- 5) 本書次節参照

表6 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構	器種	部位	法量(cm)			出土	備考
				①口径	②底径	③器高		
1	縄文河川	縄文土器 深鉢	口縁部				①(4に)ぶい黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
2	縄文河川	縄文土器 深鉢	口縁部				①灰黄褐色(10YR5/2) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
3	縄文河川	縄文土器 浅鉢か	口縁部				①灰黄褐色(10YR5/2) ②灰黄灰色(10YR6/2)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
4	縄文河川	縄文土器 深鉢	胴部				①浅黄褐色(10YR8/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
5	縄文河川	縄文土器 浅鉢	胴部				①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
6	縄文河川	縄文土器 深鉢	底部				①浅黄色(2.5Y8/3) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1~5mmの砂粒を 多く含む
7	縄文河川	縄文土器 深鉢	底部				①灰黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y5/1)	0.1~1mmの砂粒を 多く含む
8	淨化槽覆瓦 清掃時	弥生土器 壺	口縁部				①(2に)ぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
9	4~2層	弥生土器 壺	口縁部				①(3に)ぶい黄褐色(10YR7/2) ②(3に)ぶい黄褐色(10YR6/3)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
10	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	口縁部				①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
11	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	口縁部				①②浅黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
12	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	胴部				①②(3に)ぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
13	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	口縁部				①(2に)ぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
14	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	胴部				①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(2.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
15	古墳河川(西部)	弥生土器 壺または鉢	底部	②(5.2)			①(3に)ぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
16	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	底部	②(7.6)			①②灰白色(5Y7/1)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
17	古墳河川(西部)	弥生土器 壺	底部				①(3に)ぶい黄褐色(10YR7/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
18	古墳河川(西部)	土師器 壺	口縁部				①黄褐色(2.5Y4/1) ②(3に)ぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~5mmの砂粒を 多く含む
19	古墳河川(西部)	土師器 高壺	口縁部				①橙色(5Y6/6) ②黄褐色(10YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を 多く含む
20	古墳河川(東部)	須恵器 壺蓋	口縁部				①灰色(N4/0) ②灰褐色(N5/0)	精緻
21	古墳河川(西部)	須恵器 壺身	口縁部				①②灰色(N4/0)	精緻

5. 教育総合研究センター改修II期工事に伴う立会調査

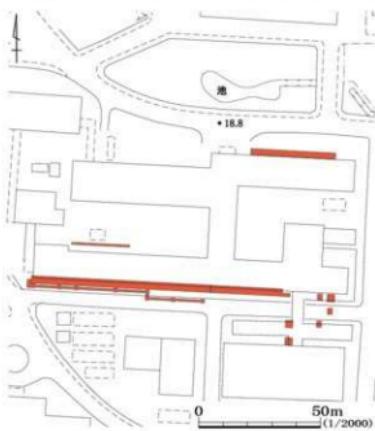


図43 調査区位置図



図44 1区地区割図

発掘時に検出した河川を検出した。また、埋土からは弥生土器、土師器、石器、建築部材と思われる木製品などが大量に出土した。出土遺物は弥生時代中期～古墳時代前期までの土器が主体で、須恵器や古代以降の土器の土器は含まれていない。河川埋土の上層が削平を受けているため下限は確定できないが、本館南側で検出された河川から出土した遺物と同時期の遺物を含む。

IA～G区では現地表下約70～120cmまでが造成土でその直下で河川を検出した。河川の埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト、粗砂、灰色(5Y6/1)粗砂、もしくはこれらのブロック土が主体である。また、IE～H区東部を除く地点では、現地表下約140～170cmで青灰色(5B6/1・7/1)シルトもしくは粗砂の地山を検出した。IH区では現地表下60cm付近まで旧水田床土であるオリーブ灰色(5Y6/3)シルトが残

調査地区 吉田構内J・K・L-16区、I・J・K・L-17区

調査面積 約480m²

調査期間 平成18年9月11～13、15、20、26～28、10月10～12、24、25、30日、平成19年1月9、15、16日

調査担当 田畠直彦

調査結果

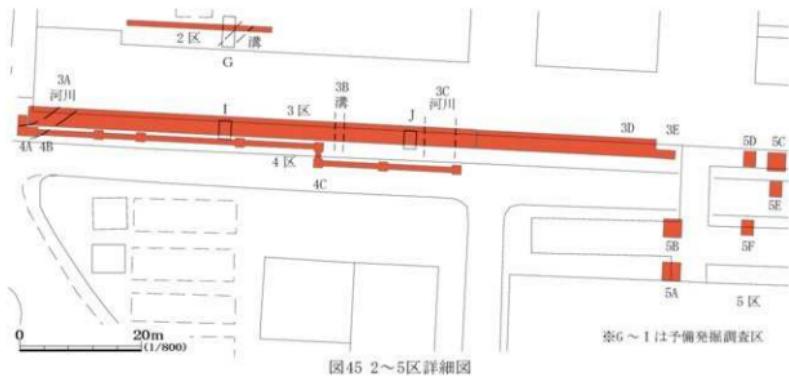
(1) 調査の経緯 (図43～45)

平成17年度に行った予備発掘調査の結果、共通教育本館北側(A～C調査区)、共通教育講義棟北側(G・H調査区)、共通教育講義棟南側(I・J)調査区については、工事施工時に立会調査が実施されることが決定された(平成18年5月9日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)。これを受け今回、埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。なお、調査区は広範囲に及ぶため、以下では1～5区に分けて報告を行う。

(2) 1区

共通教育本館北側の調査区である。予備発掘調査時には弥生土器、土師器を含む河川が検出されたが、既設の共同溝による搅乱が著しかったことから立会調査を行うこととなった。工事は、既設の基礎(4m間隔)の北側にアウトフレーム用の基礎を新設するものである。また、掘削は最大で現地表下約170cmにまで及ぶため、掘削後に壁面に鋼管を打ち込み、その間に板を入れることにより壁面を補強する方法で行われた。以上の工程から調査にあたっては、4m間隔の基礎を基準に1A～1Hの地区に分けて行った。調査の結果、調査区全体で予備

吉田橋内（古田道路）の調査



存しており、その直下で河川埋土が検出された。なお、IH区西部では現地表下約142cmで緑灰色(5G6/1)シルトの地山を検出した。

調査の結果、河川はIE～H区東部にかけて深くなつており、地山を確認することができなかつた。上記の地区のほぼ南側に本発掘調査時に検出された河川が位置することからも、今回検出した河川と本発掘調査で検出した河川が一連であることはほぼ確実と考えられる。

(3) 2区

共通教育講義棟北側の調査区である。工事は既設の排水管と同じ位置で排水管を新設するものであったが、G調査区で検出された弥生時代中期後半の溝の延長部分が検出される可能性が考えられた、H区の北側で立会調査を行つた。その結果、G調査区の北東において幅約270～300cmの溝の延長部分を確認し、埋土上面からは弥生土器の小片が2点出土した。

(4) 3区・4区

共通教育講義棟南側の調査区で、基本層序は予備発掘調査のI、J調査区と同じである。3区はアットフレームの基礎の新設、4区は排水管の新設に伴い掘削が行われた。両区は隣接しているため、まとめて報告を行う。3A地点では現地表下約70cm、4A、4B地点では現地表下約100cmで同一と考えられる河川検出した。幅は3m前後と推測される。3A地点では河川直上までが造成土で、黒褐色(10YR3/1)粗砂の河川埋土が厚さ20cm以上あることを確認した。また、この層からは須恵器壺口縁部片が出土した。一方、4A地点では現地表下約105cmまでが造成土、約105cmから154cmまでが河川埋土である灰黄褐色(2.5Y6/2)粗砂、約154cm～173cmまでが褐灰色(10YR5/1)シルト、約173cm～190cmが灰黄褐色(10YR5/2)シルトであった。また、4B地点でも現地表下約120cm～150cmで灰色(7.5Y5/1)粗砂、黄灰色(2.5Y4/1)シルト、黒褐色(10YR3/1)シルト、灰オーリーブ(7.5Y5/3)粗砂の河川埋土を確認したが、地山が確認できなかつたため、深さは不明である。

3B地点では現地表下約134cmで幅約125cm、深さ約25cmの溝を検出した。埋土は灰色(10Y5/1)粗砂で、出土遺物はない。3C地点では、幅約5.5m、最深部約43cmの河川を検出した。埋土は灰色(10Y6/1)粗砂、オーリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトなどからなり、I、J調査区でも検出された黒褐色(10YR3/1)シルトを検出面とする。出土遺物はない。地山は黄橙色(10YR7/8)粘土である。



写真106 1A区北壁土層断面（南から）



写真107 1D区出土状況（南から）



写真108 1D区土層断面（南東から）



写真109 1G・H区北壁土層断面（南西から）



写真110 1G区出土状況（南西から）



写真111 1G・H区北壁土層断面（南西から）



写真112 2区南壁土層断面（北東から）



写真113 3A地点南壁土層断面（北西から）



写真114 4A 地点西壁土層断面（東から）



写真115 4B 地点北壁土層断面（南東から）



写真116 3C 地点南壁土層断面（北東から）



写真117 3D 地点南壁土層断面（北から）



写真118 3E 地点南壁土層断面（北から）



写真119 5A 地点西壁土層断面（東から）



写真120 5B 地点西壁土層断面（東から）



写真121 5C 地点南壁土層断面（北から）

4C地点では、現地表下約112cmでにぶい黄橙色（10YR7/3）シルトの地山を検出面として、12×22cmの楕円形のピットを検出した。深さは3cmで埋土は褐灰色（10YR4/1）シルトであった。出土遺物はなく時期は不明である。

3C地点以東3D地点までは造成土、耕土、黒褐色シルト、地山を確認したが、3E地点では現地表下約50～130cmで緑灰色（5G6/1）シルト、青灰色（5B6/1）シルト、灰色（10Y6/1）シルト、オリーブ黄色（7.5Y6/3）シルトの堆積を確認した。これらの層から遺物は出土しなかったが、縄文時代以前の河川堆積によるものと考えられる。

（5）5区

渡り廊下の基礎が新設される5A～5F地点で調査を行った。5A地点は現地表下約52cmまでが造成土である。以下の2層は縄文時代以前の河川埋土で、約52～63cmが青灰色（5B6/1）シルト、約63～127cmが浅黄色（2.5Y7/3）細砂、粗砂との互層（暗灰黄色（2.5Y4/2）シルトをブロック状に含む）である。その直下、約127cm～167cmが地山である黄橙色（10YR8/6）粘土であった。5B地点は5A地点とはほぼ同じ層序であった。5C地点は現地表下12cmまでが造成土で、約12～20cmが3・4区で検出された黒褐色（10YR3/1）シルト、約20～25cmが遺物包含層の可能性があるオリーブ灰色（2.5GY4/1）シルトである。以下の6層は縄文時代以前の河川埋土で、約25～32cmが青灰色（5B6/1）シルト、約32～40cmが緑灰色（5GY6/1）シルト、約40～54cmがオリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト、約54～83cmが灰黄色（2.5Y7/2）粗砂、約83～119cmが暗灰黄色（2.5Y5/2、7/2）シルト・粗砂の互層、約119～140cmが黄褐色（2.5Y5/4）粗砂である。その直下、約140～160cmが地山である灰白色（2.5Y8/1）粘土であった。5D～5F地点でも現地表下7～37cm以下で縄文時代以前の河川堆積土を確認し、5E地点では現地表下152cm、5F地点では134cmで地山を確認した。なお、5D地点では現地表下164cmまで掘削したが、地山は確認できなかった。また、5D地点では南壁で河川最上層である灰黄色（2.5Y6/2）シルトを検出面として、幅約130cm、最深部約21cmで埋土が黒色（2.5Y2/1）シルトの遺構断面を確認した。

遺物は5A地点で河川埋土から土器片が2点出土したに過ぎない。これらは小片のため時期等は不明である。

（6）遺物

今回の立会調査では1区河川から大量に遺物が出土した。2～5区から出土した遺物は少ない。
 1は3A区河川出土の須恵器口縁部。2以下は1区河川出土遺物である。2は弥生時代前期の壺頭部。3は弥生時代前期の壺胴部で、貝殻腹縁による綾杉文を施す。4は弥生時代中期の垂下口縁壺の口縁部で1条単位の山形文を施す。5は弥生時代中期の須玖系壺の頭部である。2条のM字状貼付突帯を施す。6は弥生時代中期の広口壺である。口縁部は大きく外反し、頭部に断面三角形の貼付突帯1条を施す。外面はタテハケを施す。口縁部・頭部内面はヨコハケ、胴部内面はタテハケを施す。7、8は弥生時代中期の垂下口縁壺の頭部で、断面三角形の2条の貼付突帯を施す。なお、8は粘土帶接合部分で剥離しているのが確認できる。上部が欠損しているが、剥離面の長さは現状で約7.5cmを測ることから、やや太い粘土紐を用いていたものと考えられる。また、剥離面にもタテハケが施されている。9は弥生時代中期の跳ね上げ口縁の壺口縁部。10は弥生時代前期～中期の鉢口縁部。外傾接合であることが確認できた。11・12は弥生時代前期～中期の壺底部。13は弥生時代前期～中期の壺もしくは鉢の底部。14・15は弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部。14は立ち上がり部分で剥離している。外面にヘラ描による鋸歯文を施す。16は弥生時代終末期の高坏口縁部。外面にタテミガキ、内面に左上がりのミガキを施す。17は弥生時代後期～終末期の高坏脚部。18は弥生時代後期の壺。胴部外面には荒いタテハケ・

古田橋内（古田遺跡）の調査

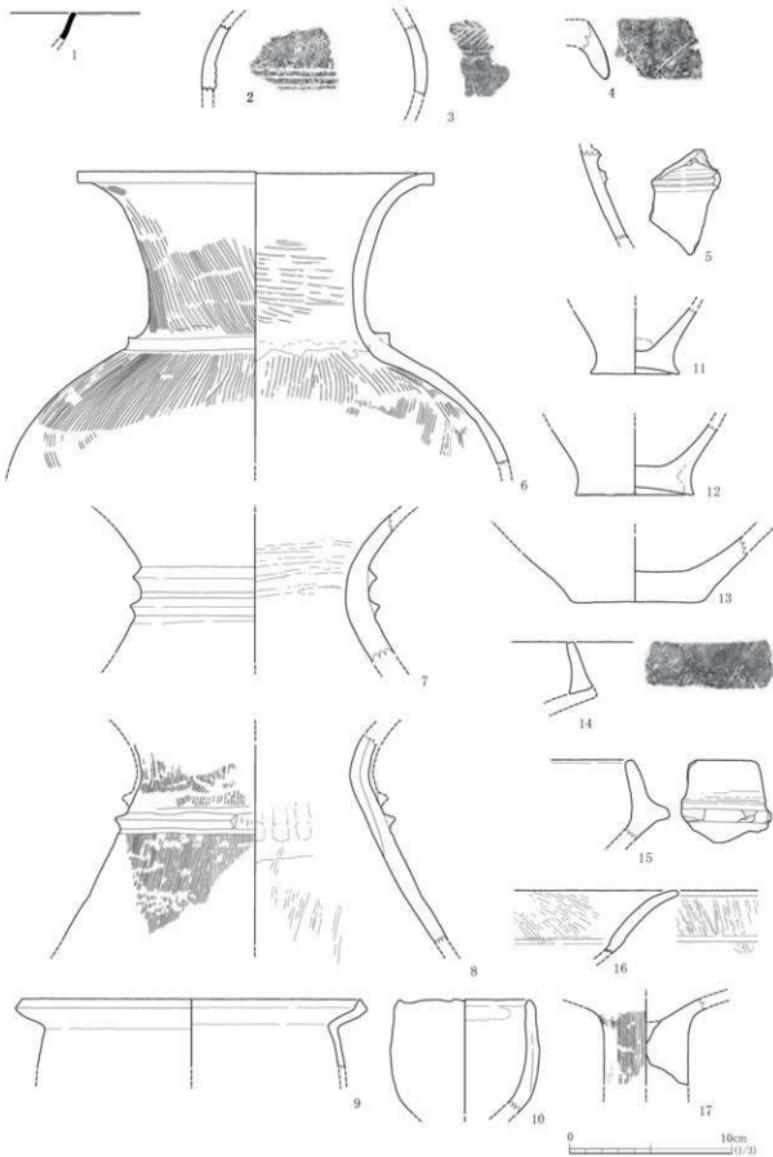


図 46 出土遺物実測図①

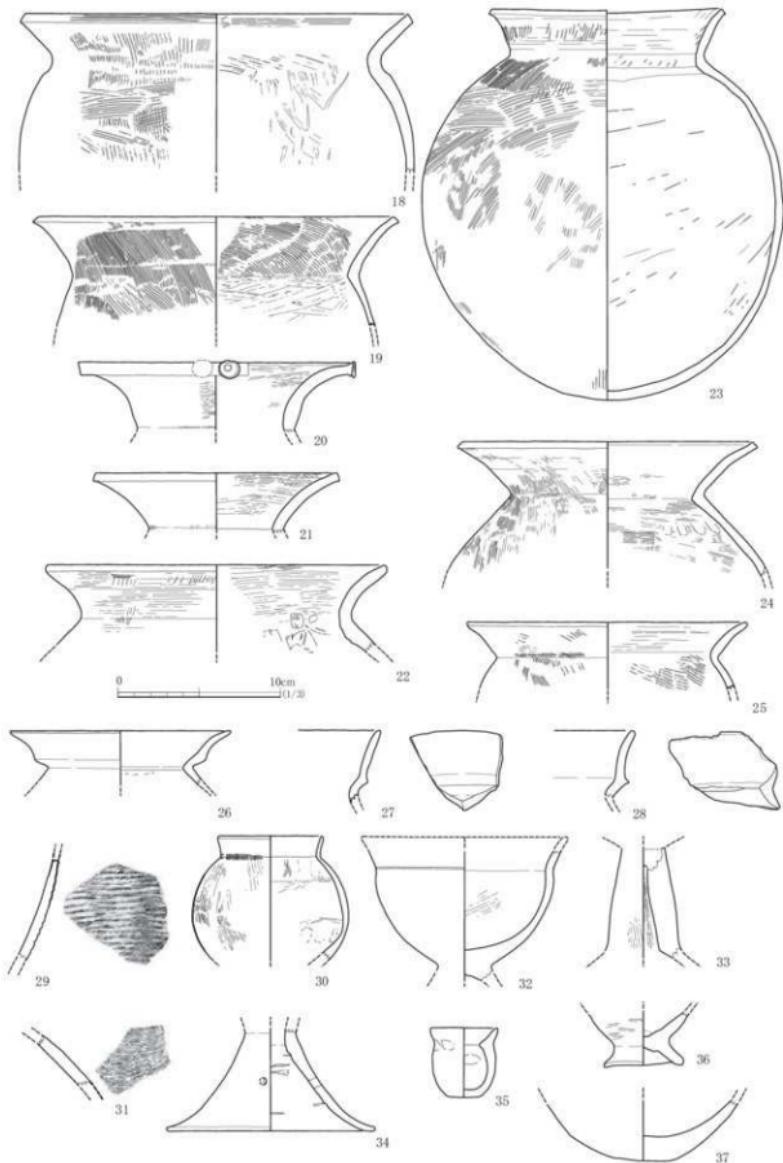


図 47 出土遺物実測図②

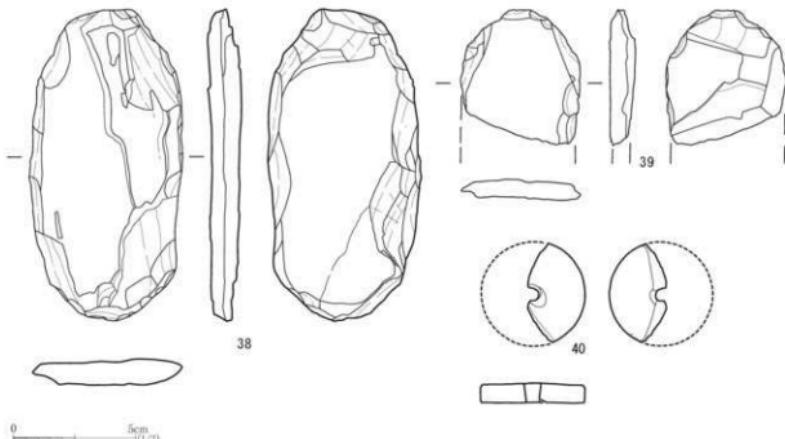


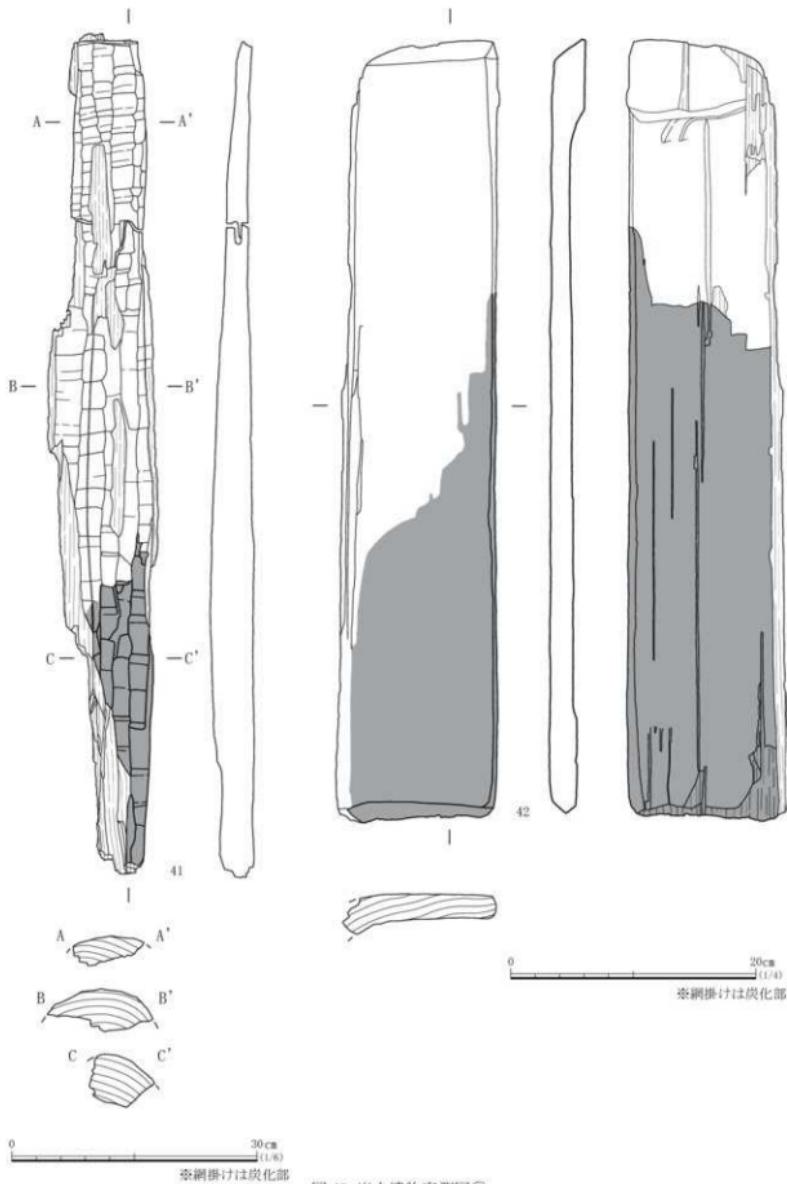
図48 出土遺物実測図③

ヨコハケ、内面には荒いケズリを施す。19は弥生時代終末期の甕。口縁部は舌状に外反し、外面にはタテハケ、口縁部内面には左上がりのハケ、胴部内面には斜方向のケズリを施す。20、21は土師器壺口縁部。21は口唇部に2個単位の円形浮文を施す。現状では1個のみが残存している。上記を含めて、以下の土師器の時期は全て古墳時代前期に位置づけられる。22は土師器甕口縁部で、内外面に入念なヨコナデ、胴部内面に荒いケズリを施す。23は土師器甕。ほぼ完形に近い状態で出土した。胴部は丸底で下半部は被熱により赤変しており、口縁部外面へ胴部上半外面はススが付着している。外面にはタテハケ・斜方向のハケ、胴部内面にはケズリが施される。24、25は土師器甕。24は布留系甕の口縁部を模倣するが、胴部内面にはヨコハケを施す。26～28は弥生時代終末～古墳時代前期の山陰系の甕。いずれも風化が激しい。29は土師器甕胴部。外面に横方向のタタキを施し、ススが付着している。30は土師器短頸壺で球状の胴部に短い口縁部がつく。外面はタテハケの後、細かなタテミガキを施す。31は土師器壺胴部。12条単位の櫛描直線文・波状文を施す。32は弥生時代終末～古墳時代前期の台付鉢。33は土師器高杯脚部。34は土師器高杯脚部で、1個単位の透かし穴を施す。35はミニチュア土器。弥生時代後期～古墳時代前期か。36は弥生時代終末～古墳時代前期の台付鉢底部。胴部外面に横方向のタタキが施される。37は弥生時代終末～古墳時代前期の甕底部。底部はほぼ丸底化しており、底面を中心に被熱している。

38・39は結晶片岩製の打製石斧。38はほぼ完形で正面・裏面に素材面をそのまま残す。39は下半部が欠損している。40は角閃石安山岩製の紡錘車。

41は柱材で、樹種は針葉樹である。中心部は欠損しているため、直径は不明。手斧痕が残存するほか、上端部を1段低く削込んでいる。また、下端部は被熱により炭化している。42は用途不明の板材で、樹種は針葉樹である。裏面は上端から約6cm以下を1段低く削込んでいる。正面は約1/2、裏面は約2/3が被熱により炭化している。41・42とも時期は不明。

吉田橋内（古田遺跡）の調査



古田構内（古田遺跡）の調査



写真 122 出土遺物①

吉田構内（古田遺跡）の調査



写真 123 出土遺物②

古田構内（古田遺跡）の調査



写真 124 出土遺物③

吉田橋内（古田遺跡）の調査



写真 125 出土遺物④

表7 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	地区	構造	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
					①口径	②底径			
1	3A	河川	須恵器 壺	口縁部			①②灰白色(N7/0)	精緻	
2	1B・C	河川	弥生土器 盆	頸部			①②にぶい黄褐色 (10YR7/3)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
3	1D	河川	弥生土器 盆	胴部			①②にぶい黄褐色 (10YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
4	1C	河川	弥生土器 盆	口縁部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
5	1A	河川	弥生土器 盆	頸部			①灰黄褐色(2.5Y5/2) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.1~3mmの砂粒を少量含む	
6	1D	河川	弥生土器 盆	口縁部 ~胴部	①(21.9)		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
7	1E・F	河川	弥生土器 盆	頸部			①褐灰色(10YR6/1) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
8	1B・C	河川	弥生土器 盆	頸部			①灰黄褐色(2.5Y6/2) ②灰黄褐色(10YR5/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
9	1G・H	河川	弥生土器 壺	口縁部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
10	1C	河川	弥生土器 鉢	口縁部 ~胴部			①黄灰色(2.5Y6/1) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1~4mmの砂粒を多く含む	
11	1G・H	河川	弥生土器 壺	底部	②(5.4)		①明褐色(7.5YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~2mmの砂粒を多く含む	
12	1G・H	河川	弥生土器 壺	底部	②(7.2)		①浅黄色(2.5YR7/3) ②灰白色(2.5YR3)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
13	1B	排土 採集 遺物または鉢	弥生土器 壺	底部	②(8.2)		①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②黄褐色(2.5YR5/1)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
14	1G・H	河川	弥生土器 盆	口縁部			①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
15	1C	河川	弥生土器 盆	口縁部			①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
16	1C・D	河川	弥生土器 高壺	壺部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②灰黄色(2.5YR6/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
17	1D・E	河川	弥生土器 高壺	脚部			①にぶい橙色(7.5YR7/3)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
18	1E	河川	弥生土器 壺	口縁部 ~胴部	①(23.6)		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
19	1D	河川	弥生土器 壺	口縁部 ~胴部	①(21.8)		①灰黄色(2.5Y7/6) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
20	1F	河川	土師器 盆	口縁部	①(17.0)		①褐色(7.5YR7/6) ②浅黄色(10YR8/4)	0.1~3mmの砂粒をごく少含む	
21	1D	河川	土師器 盆	口縁部	①(14.9)		①灰黄色(2.5Y6/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
22	1B・C	河川	土師器 壺	口縁部 ~胴部	①(20.6)		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
23	1D・E	河川	土師器 壺	口縁部 ~底部	①(14.2) ③(24.1)		①黒色(2.5Y2/1) ②にぶい黄褐色(7.5YR7/4)	0.1~5mmの砂粒を多く含む 外側スズ付着	
24	1C・D	河川	土師器 壺	口縁部 ~胴部	①(17.2)		①灰白色(2.5Y6/2) ②暗灰褐色(2.5Y5/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
25	1B・C	河川	土師器 壺	口縁部 ~胴部	①(17.2)		①灰黄色(2.5Y6/2) ②暗灰褐色(2.5Y5/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
26	1A	河川	土師器 壺	口縁部 ~胴部	①(13.6)		①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を多く含む 山陰系か	
27	1D	河川	土師器 壺	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
28	1F	河川	土師器 壺	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1~1mmの砂粒を多く含む 山陰系	
29	1D	河川	土師器 壺	胴部			①褐灰色(10YR5/1) ②灰黄色(2.5Y5/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
30	1E	河川	土師器 盆	口縁部 ~胴部	①(6.6)		①浅黄色(10YR8/4) ②浅黄色(7.5YR8/4)	0.1~1mmの砂粒を少含む	
31	1E・F 採集	土師器	土師器 壺	胴部			①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	
32	1G・H	河川	弥生土器または 土師器 鉢	口縁部 ~底部			①にぶい黄褐色(2.5Y6/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~6mmの砂粒を多く含む	
33	1G・H	河川	土師器 高壺	脚部			①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~1mmの砂粒を少含む	
34	1D	河川	土師器 高壺	脚部	③(9.0)		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を多く含む	

吉田構内（古田遺跡）の調査

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	粘土	備考
					①口径	②底径	③高さ		
35	1E・P	河川	弥生土器または土師器ミニチュア	底部	①3.9	②(2.2)	③(4.2)	①に赤い黄褐色(10YR7/4) ②浅黄褐色(10YR8/4)	0.1~3mmの砂粒を少量含む
36	1A	河川	弥生土器または土師器 鉢	底部	④4.9			①灰黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を多く含む
37	1G・H	河川	弥生土器または土師器 鋼	底部				①に5%黄褐色(10YR7/2) ②黄灰色(10YR8/3)	0.1~4mmの砂粒を多く含む

表8 出土遺物(石器)観察表

遺物番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	法量()は復元値		
					重量(g)	材質	備考
38	1H	河川	打製石斧	全長12.8 最大幅6.3 最大厚1.4	147.2	結晶 片岩	
39	1G・H	河川	打製石斧	最大長5.5 最大幅4.9 最大厚1.1	35.72	結晶 片岩	
40	1D	河川	紡錘車	全長2.8 最大幅1.2 最大厚0.8	8.73	角閃石 安山岩	

表9 出土遺物(木器)観察表

遺物番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	法量()は復元値		
					材質	備考	
41	1A	河川	柱	最大長103.7 最大幅13.3 最大厚6.2	針葉樹	一部炭化している	
42	1A	河川	板材か	最大長64.3 最大幅13.2 最大厚2.8	針葉樹	一部炭化している	

(7) 小結

今回の立会調査では、本発掘調査の成果と合わせて、これまで状況が不明確であった吉田構内中心部の埋蔵文化財の分布を探る上で大きな成果を得ることができた。1区では本発掘調査で検出した河川と一連と考えられる河川を検出し、弥生時代前期～古墳時代前期の遺物が多量に出土した。時期は不明であるが、柱材や板材などの木製品が出土したことも注目されよう。遺物は本発掘調査出土遺物と比較して、残存状況が良好な物が多いことからも主に調査区北側に位置する丘陵部から廃棄されたものと推測される。2区では予備発掘調査で検出した弥生時代中期後半の溝の延長部分を検出し、3・4区では時期は定かでないが溝、河川を検出した。また、3区の東端、5区では縄文時代と推測される河川を検出した。この河川は本発掘調査で確認された縄文時代河川と同一である可能性が高く、メディア基盤センター敷地で検出された縄文時代河川に連なると推測される。以上により、調査区周辺においては今後の地下掘削工事においても埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要である。

[註]

- 1) 田畠直彦(2007)「第1章第2節5教育総合研究センター改修II期工事に伴う予備発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』山口
- 2) 前節参照
- 3) 河村吉行(1988)「吉田構内教養部複合棟新宮に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』山口

6. 資料館（東亜経済研究所）新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内L-20・21区

調査面積 約100m²

調査期間 平成18年12月5日～平成19年1月10日

調査担当 田畠直彦

調査結果

（1）調査の経過

経済学部商品資料館北側の空閑地に資料館（東亜経済研究所）新営工事が実施されることを受け（発掘調査を要する工事計画として、平成18年6月6日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認）、工事予定期の予備発掘調査を実施することとなった。

平成5年に実施された商品資料館敷地における試掘調査では、南北に長い調査区が設定され、古墳時代以前と考えられる2条の河川が検出されている。今回も調査区設定にあたっては、南北に長い調査区を設定した。A調査区は幅2m、長さ28m、B調査区は幅2m、長さ22mである。A調査区は商品資料館敷地のC調査区の約9m北側、B調査区は商品資料館敷地のB調査区の約2.5m北側に位置する。調査面積は約100m²である。なお、調査前まで調査区内には盛土が施され、多数の樹木が植栽されていたため、これらを除去した後に調査区の掘削を行った。

（2）基本層序

調査区の基本層序は下記の通りである。

第1層 造成土

第2層 旧水田耕土

第3層 旧水田床土

第4層 旧水田床土ないし耕土

第5層 河川堆積土

第6層 地山

A調査区では、統合移転時の造成土と考えられる第1層の下に第3層・第4層があり、第2層は削平されている。B調査区では第2層が比較的良好に残存していた。第4層は統合移転直前まで存在した水田以前の耕作に伴う土層と考えられる。出土遺物がないため時期は不明であるが、近世以降の可能性が高い。

第5層はA調査区でのみ確認した。河川堆積土と考えられるが、出土遺物がないため時期は不明である。第5層上面の検出標高は約19.7mで、A調査区北端における層厚は約0.2m、中央部における層厚は約0.3m、南端における層厚は約0.8mと北から南にかけて厚くなる。河川床面となる第6層上面の標

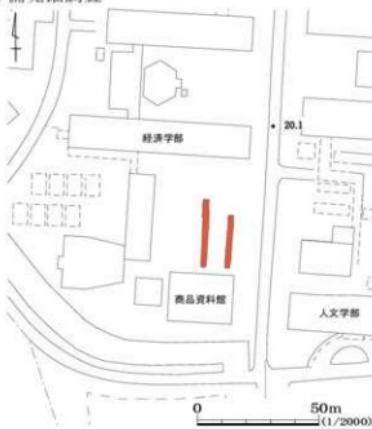


図50 調査区位置図



写真 126 調査前全景（北から）



写真 127 調査区全景（北から）

吉田橋内（古田遺跡）の調査

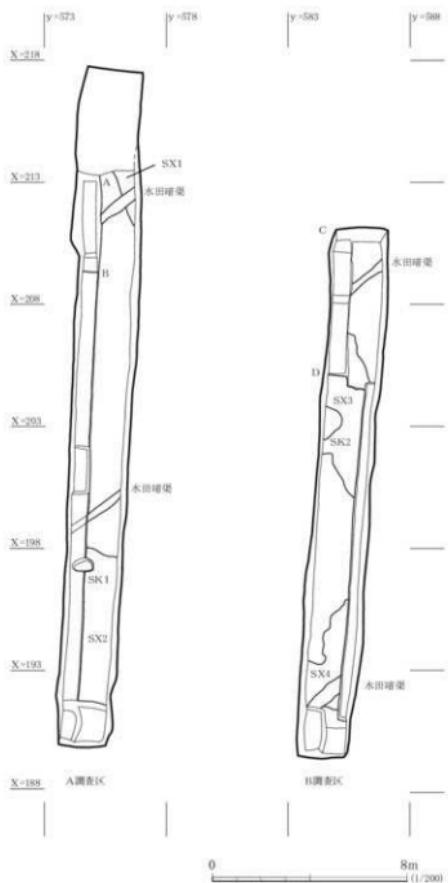


図 51 調査区平面図



写真 128 A調査区全景（北東から）



写真 129 B調査区全景（北西から）

高はA調査区北端部で、約19.3m、A調査区中央部で約19.3m、A調査区南端部で18.9mである。この河川は商品資料館敷地E調査区で検出された河川と同一である可能性が高い。なお、B調査区では標高19.7mで検出されるのはいずれも第4層であることから、第5層は水田耕作に伴う造成により削平されたと考えられる。

第6層は地山でいざれも硬くしまりのある粘土・シルト・砂層の互層となっており、河川堆積に由来する土層である。第6層上面の検出標高はB調査区北部で19.5m、B調査区南部で約19.8mである。商品資料館敷地の調査成果でも指摘されているように、自然地形は東から西へ、また南から北へ傾斜しており、河川は南東から北西方向に流れていたと考えられる。

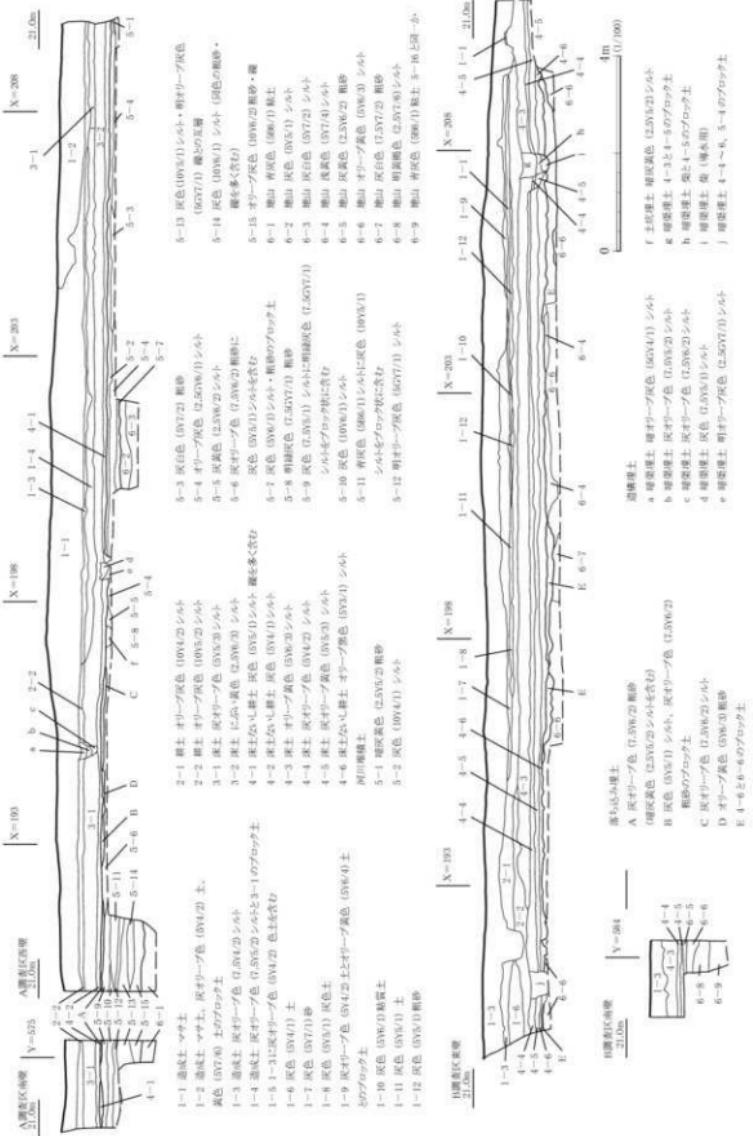


図 52 調査区土層断面図①

吉田構内（吉田廻路）の調査

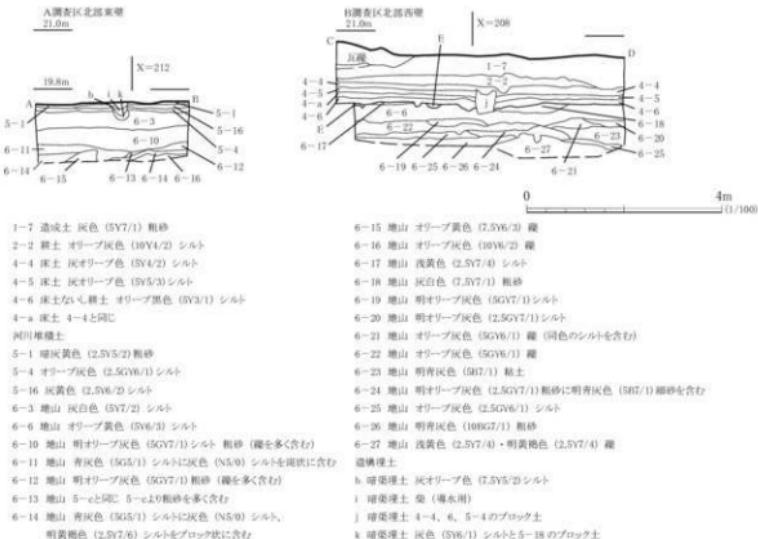


図 53 調査区土層断面図②

(3) 遺構・遺物

第5層上面で時期不明の落ち込み4基と土壌2基、統合移転前の水田暗渠4条を検出した。落ち込みのうち、SX-1・2は灰オリーブ色・灰色・オリーブ黄色の粗砂・シルトが埋土である。いずれも部分的な検出にとどまったため、幅は不明である。このうち掘削を行ったSX-2の検出標高は約19.7mで、深さは削平を受けているため、約0.1mであった。このため遺構の性格が不明であるが、恐らく本来は河川であった可能性が高い。商品資料館敷地で検出された河川も幾度もの流路が切り合っていたことが指摘されているが、今回調査区でも同様な状況であったと推測される。

SX-3～5の検出標高は約19.6mで、最深部の深さは0.3m以上である。また、SX-3は幅約3.2mである。埋土は旧水田床土ないし耕土と考えられる4-6層：オリーブ黒色シルトと地山である6-6層：オリーブ黄色(5Y6/3)シルトとのブロック土である。このため、整地等、耕作に伴う構造である可能性も考えられる。SX-1～5からは遺物は出土しなかった。

土壤はA調査区でSK-1、B調査区でB調査区でSK-2を検出した。共に遺物は出土しなかった。SK-1は直径約0.88m、短径約0.48m、深さ約0.1mで、埋土は灰褐色（7.5YR4/2）シルトであった。近代以降の遺構と考えられる。SK-2は一部を検出したのみで規模は不明である。埋土は4-5層と同じ灰オーリーブ黄色（5Y5/3）シルトであり、水田耕作に伴う遺構と考えられる。掘削は行っていない。

水田暗渠は検出した4条全てが北東—南西方向に掘削されており、商品資料館敷地で検出された水田暗渠とも方向が一致する。



写真130 A調査区東壁(A-B) 土層断面(西から)



写真131 A調査区南西隅土層断面(北東から)



写真132 B調査区北西隅土層断面(南東から)



写真133 B調査区東壁土層断面(北西から)

(4) 小結

平成6年度に発掘調査が行われた商品資料館敷地では、今回調査区とほぼ同じ標高で東－西方向に流れている河川が2条検出され、埋土からは土器片が1点出土している。また、今回調査区から約50m西に位置する経済学部講義棟敷地では、「小規模な沼沢地あるいは谷状のやや落ち込んだ地形」が検出されており、埋土から土器が少量出土している。この講義棟の南東側に隣接する経済学部プレハブ校舎新営に伴う試掘調査でも河川堆積土から縄文時代後・晚期の土器、古墳時代土師器、須恵器が出士している。^{註1}しかし、今回の調査で検出した遺構・河川から遺物は出土しなかった。また、A調査区で3ヶ所、B調査区で2ヶ所において深掘りを行って第6層を精査したが、遺物は全く出土しなかった。

ただし、上記の河川についてはまだ不明な点が多く、調査区周辺における今後の地下掘削工事においては埋蔵文化財の保護と遺存状況に十分配慮する必要がある。

【註】

- 1)豆谷和之（1994）「第4章第1節 経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』、山口
- 2)河村吉行（1992）「第3章 第1節吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』、山口
- 3)田畠直彦（2004）「第8章5 平成13年度山口大学構内遺跡調査の概要」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』、山口

7. プレハブ倉庫移設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内I-16区

調査面積 約29m²

調査期間 平成18年5月11日

調査担当 田畠直彦

調査結果 教育総合研究センター改修II期工事に伴い
プレハブ倉庫の移設が計画された。工事は同センター
東端にあるプレハブ倉庫を100m離れた北西側へ移設
するというものである。調査区は平成17年度に調査を行った教育総合研究センター改修I期工事に伴う予備
発掘調査区の東隣にあたり、遺構・遺物の存在が予想
されたため、立会調査を行った。

調査の結果、掘削深度は現地表下約30cmであったため造成土の範囲内にとどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。

今回の工事では埋蔵文化財は確認されなかったが、上記の平成17年度の調査から、調査区の現地表下1m前後で埋蔵文化財が存在する可能性が高く、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

〔註〕

- 1) 田畠直彦（2007）「第1章第2節1 教育総合研究センター改修I期工事に伴う予備発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』、山口



図54 調査区位置図



写真 134 調査区全景（西から）



写真 135 調査区北東隅土層断面（南西から）

8. 第一学生食堂改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内J-20区

調査期間 平成18年5月30日、7月3日

調査面積 約75m²

調査担当 田畠直彦

調査結果 第一学生食堂の改修工事が計画された。工事は食堂内の売店を撤去して、食堂スペースを拡張し、教育学部美術科実習棟の南側隣接地に売店用のプレハブ建物を新設するというものである。

第一学生食堂拡張工事に伴い、昭和43年に吉田遺跡調査団によって実施された発掘調査では、「狭い小川跡や湿地があつて、弥生式土器や土師器が数多く流れ込んでいた」と報告されている。また、昭和56年に実施した同実習棟新営工事に伴って実施された発掘調査では、河川、溝、土坑、柱穴等が検出され、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。このため調査区内においては、遺構・遺物の存在はほぼ確実と推測されたが、掘削が小規模であるため立会調査を行うこととなつた。

調査の結果、プレハブ建物予定地（A地点）では掘削が現地表下約20～50cm、配管工事に伴う掘削は現地表下約60～110cmであったが、大半が造成土の範囲内であった。しかし、A地点では現地表下35cmで層厚14cmの黒褐色（2.5Y3/1）シルト、その下位で、層厚14cmのオリーブ灰色（2.5GY6/1）シルトを検出した。これらは河川ないし溝の埋土と考えられる。黒褐色シルトからは土器片が1点出土した。

今回の調査で確認された埋蔵文化財は僅かであったが、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

〔註〕

1) 小野忠熙（1970）「山口大学構内 吉田遺跡の性格」、山口大学（編）『学園だより』、山口

2) 河村吉行（1982）「第3章第4節教育学部構内J-19・20区の発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報1』、山口



図 55 調査区位置図



写真 136 A 地点土層断面（南西から）



写真 137 B 地点土層断面（北から）

9.図書館前広場環境整備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内L-17・18区

調査面積 約55m²

調査期間 平成18年7月7日、8月9日

調査担当 田畠直彦

調査結果 工事は図書館前広場の人工池を埋め立てて広場として整備するととともに、広場の北西側に階段（A地点）、南西側（B地点）にスロープを造成するものである。また、これに付随して案内板を移設する工事が行われた（C地点）。

人工池並びにこれに隣接する図書館敷地では、いずれも工事にあたって発掘調査は行われておらず、図書館前広場における地下の状況は不明確であったため、立会調査を行った。

調査の結果、A地点では現地表下約120cm、B地点では約68cm、C地点では約53cmまで掘削が行われたが、いずれも造成土の範囲内にとどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。

また、過去の工事図面から図書館前広場では人工池の造成に伴い、大規模な掘削が行われたことが判明している。このため、埋蔵文化財が存在したとしても相当な破壊を受けていることが推測される。ただし、農学部連合獣医学科棟、メディア基盤センター（旧教養部複合棟）で検出されている縄文時代河川の延長部分が存在する可能性もあり、今後とも引き続き埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

〔註〕

1)豆谷和之（1994）「第2章 吉田農学部連合獣医学科棟新館に伴う発掘調査」、山口大学理蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報X II』、山口

2)河村吉行（1988）「第3章 吉田構内教養部複合棟新館に伴う発掘調査」、『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』、山口



図56 調査区位置図



写真 138 A 地点全景（北から）



写真 139 B 地点土層断面（南東から）

10. プレハブ校舎新営工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内F-14・15、G-15区

調査期間 平成18年7月21日、8月7日



図 57 調査区位置図



写真 140 調査区北部土層断面（南西から）



写真 141 調査区東壁土層断面（北西から）

調査面積 約400m²

調査担当 田畠直彦

調査結果 教育総合研究センター改修工事に伴い、工事の間講義室が不足するため、サークル棟とプールの間にプレハブ講義棟（改修工事終了後はサークル棟として使用）の新営工事が計画された。この場所は盛土により西側のグラウンドよりも約1m高い。このため、工事による埋蔵文化財への影響は極めて少ないものと推測されたが、掘削範囲が広範囲に及ぶため、立会調査を行うこととなった。工事による掘削は建物の基礎部分が現地表下約60cm、配管・樹設置工事による掘削が現地表下約75~105cmであった。

調査の結果、掘削範囲内はすべて造成土の範囲内であり、埋蔵文化財への支障はなかった。調査区の西側では、平成7年度に公共下水道布設に伴う発掘調査で弥生時代前期の遺構が多数検出されている。¹⁾ 調査区内においてもこれらと一連の遺構が分布している可能性があるため、埋蔵文化財の取り扱いには十分な注意が必要である。

〔註〕

- 1) 田畠直彦（2004）「第8章 1 平成7年度山口大学構内遺跡調査の概要」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報XV・XVI』、山口

11. 人文学部外灯用電源敷設工事に伴う立会調査



調査地区 吉田構内M-20区

調査面積 約6m²

調査期間 平成19年2月19日

調査担当 横山成己

調査結果 人文学部と理学部校舎の中間に位置する外灯に電源施設を敷設する工事計画が立案された。掘削深度は現地表下40cmと浅く、開発範囲も狭いものであったが、埋蔵文化財資料館専門委員会により立会調査が必要と判断された。

当開発地周辺では、昭和58年に理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査が実施されている。今回の開発地と位置的に交錯するF区の調査成果では、地表下に旧耕土と地山を確認したと報告されているが、旧耕土以下地山までの層位に不明確な点があるため、工事掘削時に立会調査を行った。

調査の結果、現地表下40cmまでは表土及び造成土であることが確認されるに止まった。本来であれば部分的に深掘りを行い、造成土以下の層位を確認すべき事案であるが、工事自体が重機を用いずの掘削であることからこれを断念せざるを得なかつた。今後、調査区周囲に開発の手が及ぶ場合は旧耕土以下の層位の確認が必要と考える。



写真 142 調査風景（北から）

[註]

- 1) 沢村吉行 (1985)「第9章昭和58年度山口大学構内の立会調査、第1節吉田構内の立会調査、1理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、山口

12. テニスコートフェンス改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内B-17、C-17、C-18区

調査面積 約10m²

調査期間 平成19年3月13・14日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内西端部に位置するテニスコートの防球フェンス改修工事が計画されたことを受け、工事掘削時に立会調査を実施した。

当該地周辺では過去に本発掘調査が実施されておらず、地下の状況に不明確な点が多い。立会調査の記録を辿ると、平成6年に実施されたテニスコート改修工事に伴う立会調査並びに公共下水道接続工事（汚水管雨水排水施設設置）に伴う立会調査が数少ない調査成果と言える。報告によると、テニスコート敷地ではその南半部において現地表下0.5~0.8mで緑灰色粘土もしくは暗褐色粘土の地山が検出されており、地山上には水田耕土が0.1~0.4mの厚みで残存すると記述されている。また、テニスコートの南東に接する陸上競技場の西端部では、現地表下約1.6mにおいて旧河川の堆積層が確認されている。この堆積層からは弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土しており、河川の所属時期を把握する上で貴重な資料となっている。

今回の開発工事では、テニスコート南西側道路沿い10ヶ所（A～J地点）に、フェンスの支柱埋設のため、各所直径約0.8mの範囲で、現地表下約3.2mの深度までボーリング掘削が行われた。立会調査では、掘削範囲が狭小であるため、手の届く範囲での断面精査と土層の肉眼観察しか実施できなかったが、以下にその成果を記す。

調査地点の標高は約17mを測る。A地点では、現地表下約0.6mまでは確實に造成土であることを確認しており、以下の堆積状況については不明であるが、九田川の護岸工事に伴う埋土と推測される。B・C地点では現地表下0.9mまでは造成土であり、以下は不明。ただし、ボウリング掘削により排出された土を観察すると深部には地山が存在

するものと思われる。D地点では現地表下0.75mまでが造成土であったが、下位に約0.15mの厚みの旧耕土、0.05mの厚みの旧床土を確認することができた。床土以下は断面精査が行えなかったが、青



図 59 調査区位置図



写真 143 D地点土層断面（南西から）



写真 144 G地点土層断面（南西から）

灰色粘土が排出されていることから、テニスコート南半部で確認されている層位と同じ状況と推察される。E地点もほぼ同様であり、現地表下0.7mまでが造成土、その下位に灰オリーブ粘質土を確認した。F地点では現地表下0.95mまでが造成土、下位に0.13m厚の旧耕土、0.05m厚の旧床土、さらに遺物包含層の可能性を含む0.15m厚以上の黒褐色粘土層を確認した。G地点では現地表下0.85mまでが造成土、下位に0.15m厚の旧耕土、0.1m厚の旧床土を確認した。床土以下の層序については、排出土の土質から上部に青灰色粘土が、下部に拳大の川原石を含む砂礫層が堆積しているものと考えられる。H地点では現地表下1mまで造成土である。下位に旧耕土および旧床土が存するようであり、現地表下1.2m付近から青灰色粘土層に変化しているものと思われるが詳細は不明である。I地点は現地表下0.4mまでが造成土、以下は灰オリーブ弱粘質土、さらに最深部付近では砂礫層に変化しているようである。J地点は現地表下1.2mまでが側溝の堀方埋土であり、以下は灰オリーブ粘性砂質土であった。

以上、各地点の調査成果を記した。排出土中に遺物は確認できなかったが、河川堆積土もしくは遺物包含層の可能性を残す堆積層も確認されており、周辺での開発工事計画には注意が必要である。

〔註〕

- 1) 豊谷和之・村田裕一（2000）「第5章平成6年度山口大学構内の立会調査、第1節吉田構内の立会調査、3テニスコート改修工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報 XIV』、山口
- 2) 豊谷和之・村田裕一（2000）「第5章平成6年度山口大学構内の立会調査、第1節吉田構内の立会調査、17公共下水道接続工事（汚水管雨水排水施設設置）に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報 XIV』、山口

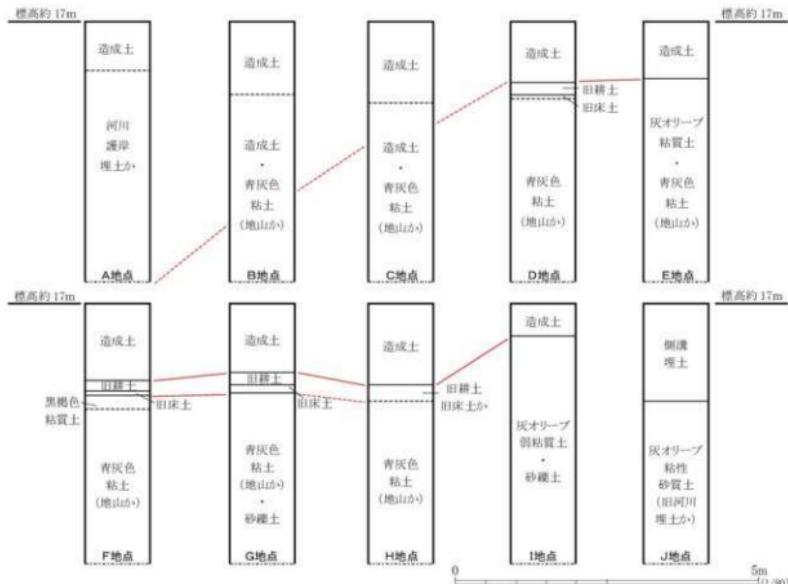


図 60 各地点土層断面模式図

第3節 小串構内（山口大学医学部構内遺跡）の調査

1. モニュメント設置工事に伴う予備発掘調査

調査地区 小串構内総合研究棟南側空閑地

調査期間 平成18年6月4日

調査結果 小串構内総合研究棟南面の芝生公園にモニュメントが設置される計画を受け、立会調査を実施する運びとなった。掘削工事は1辺2.5m角、現地表下0.95mの規模である。

当該地周辺では、平成14年に総合研究棟新館に伴う試掘調査が実施されている。今回調査地は、総合研究棟建設計画地の四隅に設けられた試掘調査区の南東側トレンチ（Dトレンチ：約100m²）のさらに南東に位置する。Dトレンチで確認された基本層序は、現地表下約1mまでが造成土であり、以下に層厚約0.15mの旧耕土、約0.25mの暗黃褐色粘土、約0.2mの暗灰黄色粘質砂、約0.35mの暗灰黄色粗砂、0.25m以上の青黃褐色硬シルトである。調査者によると、旧耕土からは磁器・陶器・土師器などの遺物が出土しており、旧耕土直下の粘土は無遺物層、下位の砂層からは縄文土器・土師器・須恵器・瓦質土器・土師質土器・磁器など多様な遺物が出土したと報告されている。また所属層位は不明であるが、山口県の古代製塙土器である六連式土器も出土している。

以上の調査成果から、当開発工事は掘削深度が現地表下約0.95mであり、磁器・陶器・土師器を包含する旧耕土に到達する可能性を排除できないものと判断し、掘削時の立会を行った。

調査の結果、掘削は造成土内に止まるものであり、地下の埋蔵文化財に影響が及ぶものではないことが確認された。

[註]

1) 村田裕一（2003）「小串総合研究棟新館に伴う試掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会資料（2003年5月29日開催）

調査面積 約6.25m²

調査担当 横山成己



写真145 調査区土層断面（南東から）

第4節 常盤構内（山口大学工学部構内遺跡）の調査

1. 工学部総合研究棟改修工事（II期）に伴う確認調査

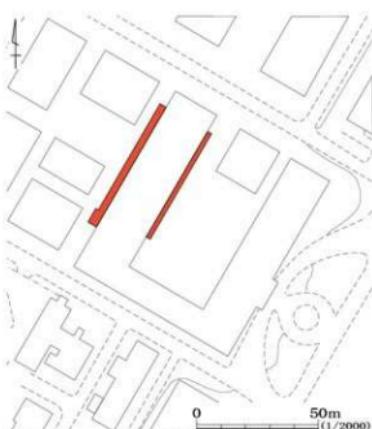


図62 調査区位置図



写真146 研究棟東側調査区全景（北東から）



写真147 A地点土層断面（北西から）

調査地区 常盤構内

調査面積 約280m²

調査期間 平成18年10月13・16日

調査担当 田畑直彦

調査結果 工学部総合研究棟改修工事（II期）に伴い、I期工事と同様に建物改修工事と配管工事が計画された。工事では幅約3mで、研究棟東側が長さ約50m、西側が約57mの範囲で、現地表下約130～150cmまで掘削が行われた。調査の結果、研究棟東側、西側ともほとんどが造成土の範囲内であった。ただし、研究棟東側のA地点では、現地表下43cmで黄褐色（10YR7/8）シルト、81cmで灰白色（10YR7/1）シルトの地山を確認した。

以上により、今回の調査区内においても平成15年度の調査と同様に構内造成時の削平が著しいことが判明した。

〔註〕

- 1) 田畑直彦（2005）「第1章第5節 工学部本館改修工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』、山口

付箇1 平成18年度 山口大学構内遺跡調査要項

山口大学大学情報機構規則

改正 平成18年3月14日規則第27号

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則（平成16年規則第1号）第9条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学（以下「本法人」という。）の大学情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学大学情報機構（以下「機構」という。）に関し必要な事項を定める。

(組織)

第2条 機構は、次の施設をもって組織する。

(1)図書館

(2)メディア基盤センター

(3)埋蔵文化財資料館

2 前項の施設に關し必要な事項は、別に定める。

(業務)

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1)大学情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に關すること。

(2)大学情報及び情報基盤の整備の施策及び実施に關すること。

(3)情報セキュリティの施策及び実施に關すること。

(4)その他機構が必要と認めた事項に關すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究施設及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

(運営委員会)

第4条 機構に、機構の管理及び運営に關する事項を審議するため、山口大学大学情報機構運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報セキュリティ委員会)

第5条 機構に、情報セキュリティに關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会（以下「情報セキュリティ委員会」という。）を置く。

2 情報セキュリティ委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報基盤整備委員会)

第6条 機構に、情報基盤の整備に関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会（以下「情報基盤整備委員会」という。）を置く。

2 情報基盤整備委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(機構長)

第7条 機構に機構長を置き、学術情報担当副学長をもって充てる。

2 機構長は、機構の業務を統括する。

(副機構長)

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教授のうちから機構長が指名した者をもって充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である副学長の任期の終期を超えることはできない。

5 副機構長に欠員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の残任期間とする

(専任大学教育職員)

第9条 機構に、専任大学教育職員を置く。

2 専任大学教育職員の選考は、運営委員会の議に基づき、学長が行う。

3 専任大学教育職員の選考に關し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 機構に關する事務は、情報環境部情報企画課において処理する。

(運営)

第11条 この規則に定めるもののほか、機構に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館規則

平成16年4月1日規則第148号

改正 平成17年3月24日規則第52号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報情報規則（平成16年規則第139号）第2条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）の組織及び運営に關し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づき、国立大学法人山口大学（以下「本法人」という。）に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収蔵・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

- (1) 本法人構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究
- (2) 本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行
- (3) その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

- (1) 館長
 - (2) 副館長
 - (3) 資料館所属の専任大学教育職員
 - (4) その他必要な職員
- 2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の議に基づき、館長が委嘱する。

(館長)

第5条 館長は、大学情報機構長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任教授のうちから山口大学大学情報機構運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に次員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に關し、館長を助けるものとする。

(事務)

第7条 資料館に關する事務は、情報環境部情報企画課において処理する。

(趣則)

第8条 この規則に定めるものほか、資料館に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 第5条第1項の規定にかかわらず、当分の間、館長は、大学情報機構副機構長のうちから大学情報機構長が指名した者をもって充てる。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規

(組織)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構運営委員会（平成16年規則第140号）第8条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会（以下「専門委員会」という。）の組織及び運営に關し必要な事項を定める。

(審議事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に關し、次の事項について審議する。

- (1) 管理及び運営に關する事項
- (2) 整備充実に關する事項
- (3) 予算に關する事項
- (4) その他資料館に關し必要な事項

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 機構長
- (2) 副機構長
- (3) 館長
- (4) 副館長
- (5) 資料館所属の専任大学教育職員
- (6) 考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員
- (7) メディア基盤センター所属の専任大学教育職員のうち館長が指名した者
- (8) 施設環境部長
- (9) 情報環境部長

平成18年度山口大学構内遺跡調査要項

(10)情報環境部情報企画課長	委員会に出席させることができる。
(11)発掘調査地に間違のある部局の事務部の長	(部会等)
(任期)	第7条 専門委員会は、必要に応じて部会等を置くことができる。 2 部会等に關し必要な事項は、専門委員会が別に定める。
第一条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が 生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。	(事務)
(委員長)	第8条 専門委員会の事務は、情報環境部情報企画課において処理する。
第五条 専門委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。	(雑則)
2 委員長は、専門委員会を招集し、その議長となる。	第9条 この内規に定めるものほか、専門委員会の運営に關し必要な事項は、専門委員会が定める
3 委員長に事故あるときには、副館長がその職務を代行する。	附 則
(委員以外の者の出席)	この規則は、平成18年4月1日から施行する。
第六条 専門委員会が必要と認めたときは、専門委員以外の者を専門	

平成18年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員	福政 修（大学情報機構長・工学部教授）	
	三池 秀敏（大学情報機構副機構長・工学部教授）	
委員長	糸長 雅弘（埋蔵文化財資料館長・大学情報機構副機構長・教育学部教授）	
委員	中村 友博（副館長 人文学部教授）	村田 裕一（人文学部講師）
	王 輝 路（メディア基盤センター助教授）	郡田 等（施設環境部長）
	大場 高志（情報環境部長）	板谷 茂（大学情報機構情報企画課長）
	田畠 直彦（埋蔵文化財資料館助手）	横山 成己（埋蔵文化財資料館助手）

付録2 山口大学構内の主な調査

表10 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地図割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第I地区A・B区	L~N-15	1	30?	土壇・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠郎	年報X I
	第II地区家畜病院新営	R-20・21 S-T-19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	#	#	年報4
	第II地区		3			弥生土器、土師器	試掘	#	
	第IV地区牛舎新営	S-T-10・11	4	300	弥生溝・土壇、古墳窓穴住居、中世住跡、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	#	
	第IV地区		5				試掘	#	
	第III地区杭杭区 おとこ隣上陸技術場	D-19・20 E-17・19~21 F-17~18	6	1,600	杭列、弥生窓穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	#	
	第III地区南区	G-21~23 H-22	7		河川路、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	#	#	
	第III地区北区	H-20 I-19~21 J-20・21	8	1,400	窓穴住居、溝、土壇、柱穴		#	#	
	第III地区東南区	G-23 H-23・24 I-J-24 K-23・24 L-23	9		弥生窓穴住居	弥生土器	#	#	
	第III地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	#	
昭和42年	第V地区学生食堂	J-20 N-14 P-18	11		弥生溝、古墳土壤	弥生土器、土師器	事前	#	
	第V地区		12		河川路、柱穴、土壤	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田遺跡調査会	
	第I地区C1区大学本部新営	K-L-14	13	600	窓穴住居、溝、土壤	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	#	
	第V地区教育学部				河川路	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	#	
	第I地区D1区第1地点	L-13	14		近世大廈	弥生土器、木灰層	#	#	
昭和46年	第I地区D1区第2地点	L-13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	#	#	
	第I地区D1区第3地点	M-13・14	16		土壤、柱穴	弥生土器、瓦質土器	#	#	
	第I地区D1区第4地点	M-N-14	17		土壤、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	#	#	
	第I地区D1区第5地点	L-12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	#	#	
	第I地区D1区第6地点	M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	#	#	
	第I地区D1区第7地点	M-N-13	20			須恵器	#	#	
	第I地区E1区第2学生食堂新営	M-N-14・15 O-15	21	900	古墳窓穴住居、土壤溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鐵製品	事前	#	年報X II
昭和50年	第II地区					弥生土器	試掘	#	
	第III地区				窓穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	#	#	
昭和51年	人文学部校舎新営	M-N-21	22	160			#	調査担当 近藤義一	年報X
	教育学部附属養護学校新営	A-20・21 B-19・20 C-19	23	410	溝、土壤	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵文化財資料館	年報IX
昭和54年	理学部校舎新営	N-O-19-20	24	250			#	山口市教育委員会	年報X
	農学部動物学新営	P-19	25	380			#		
	本部管理棟新営	L-14	26	740	溝、土壤、柱穴、中世井戸、土壤墓、住跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報9
昭和55年	経済学部校舎新営	K-21	27	66			試掘		
	農学部農業機械実験施設新営	P-Q-15	28	50	溝、土壤		事前		年報X
	本部環境整備	E-14~16 F-15-16	29				立会		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10・11 P-9・10	30				#		年報X
	教育学部校舎新設	H-19	31		弥生堅穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		
	教育学部音楽棟新設	H-16	32		溝		#		
	教育学部美術棟新設	J-K-19・20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	#		
	正門橋脚新設	I-11	34					立会	
	時計塔設置	I-14	35				#		
	本部構内擁壁取設	K-I-13・14	36				#		
	教育学部構内擁壁取設	I-15・17 J-17	37				#	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J-M-15 M-N-16	38				#		
	農学部中庭整備	N-O-17	39				#		
昭和56年	暖房施設改修	O-16	40				#	工法等変更	年報Y
	学生部文化会車庫新設	M-8・9	41				#	工法等変更	
	学生部馬場整備	M-N-8・9	42				#		
	附属図書館増築	L-M-16	43	600	弥生～古墳、土壤、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		
	大学会館新設	M-N-14・15	44	130	弥生堅穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属施設	A-B-21	45	890				立会	
	放射性同位元素総合実験室	O-18	46	2			#		
	講水園同位元素総合実験室								
	教養部自転車置場	L-17	47	10			#		
	附属口新宮								
昭和57年	教養部中庭環境整備	J-K-16	48	150			#		年報Z
	大学会館新設	M-N-12・13	49	2,000	古墳井戸、土壤、柱穴、中世井戸、屋上柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、縄文陶器、木簡、石器	事前		
	ラグビー場防球ネット新設	G-18・19 H-19・20	50	114	弥生層、弥生～古墳堅穴住居、土壤	弥生土器、土師器、石製品	#	堅穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新設	M-N-20	51	409				立会	
	正門・南門・輪車庫	I-J-12・13 H-23	52	183			#		
	学生部アーチェリー場の台・籠柱設置	N-8・9	53	33			#		
	学生部飯舎整備	M-7・8	54	1,6			#		
	学生部野球場散水栓取設	I-21 K-22	55	1				立会	
	教養部庭園整備	I-15・16 J-15 K-17・18 L-18	56	81			#		
	学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E-15・16 F-16	57	12			#		
昭和58年	大学会館ケーブル敷設	N-12	58	160	弥生土器、柱穴	弥生土器	事前		年報A'
	大学会館排水管布設	J-L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壤、古代～中世土壤、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	#		
	学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16・17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K-19・21	61	8				立会	
	大学会館環境整備	L-14・15 M-N-15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生堅穴住居、土壤、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鐵器、雷擊	試掘		
	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5				立会	
	農学部附属農場肥料園								
	排水溝復整備	R-17～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、縄口、石器、鉄斧	#		
	農学部附属農場農具改修	V-15～17	65	325			#		
	教育学部前庭環境整備	I-J-19	66	430			#		
昭和60年	中央ボイラー棟車止設置	O-P-16	67	2,5		須恵器	#		年報V

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、桃石、鉄滓	#		年報V
	交通標識設置	J-20 N-14 P-18	69	3			#		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験施設・運動場設置)	Q-18	70	16			#		
	理学部環境整備(緑化設置)	N-21	71	4			#		
昭和61年	農学部附属畜病院舎装	S-T-19	72	270			#		年報VI
	国際交流会館新館	M-22・23 N-22	73	76	弥生～古墳河川跡 中世～近世墓	弥生土器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鐵瓶玉、加工痕のある剝片	試掘		
	山口銀行現金自動支払機設置(電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T-U-19	75	165	中世墓、柱穴	土師器、瓦質土器	# 工法変更		
	農学部附属農場農道規制(監説ボール設置)	M-10 P-15 Q-15～17	76	12			#		
	正門横(木田町)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		#		
	経済学部環境整備(樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			#		
昭和61年	吉田構内交通標識設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市道神籠1号線および 開田神籠線の送水管設置	B-17・18 C-18・19 D-19・20 E-20・21 F-21・22 G-22・23 H-23・24 I-J-K-24 L-23・24 M-N-23 O-22・23 P-Q-22 R-21・22 S-21 T-20・21 U-19・20 V-18・19 W-X-18	80	2,100	古墳・弥生墓、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、 須恵器 (墨書きのもの含む) 瓦質土器、製塙土器、 石斧、板石	立会 山口市教育 委員会 山口大学埋蔵 文化財資料館		
	敷葉部自動販売機設置(屋根設置および複数台移動)	K-L-18	81	3.5			#		
	教養部身体障害者用スロープ設置	L-15・16	81	3			#		
	経済学部散水鏡設置	L-20	83	4			#		
	吉田構内木氷プール 改修等	E-15 F-15・16 H-15	84	26.5	包含層		#		
	農学部附属農場 木道管理設置	S-12	85	3			#		
	吉田構内汚水排水管等 整修改修	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	#		
	本部身体障害者用スロープ 設置	L-14	87	12			#		
	経済学部身体障害者用 スロープ設置	K-18～20 L-18	88	78			# 工法変更		
昭和62年	閉風園書館荷物運搬用 スロープ設置	L-16	89	8		弥生土器	#		年報VII
	教養部57番教室改修	K-16	90	1			#		
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新設	J-K-18・19	91	240		ブランク、削器、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新館	J-K-17	92	35	埋甕上墻、溝、柱穴	土師器、須恵器、 土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新館	I-J-16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J・K-17・18	94	900	郭・穴、河川跡、 窓穴、柱根、土壙、溝、 井戸、堆積土壌、 孤立柱脚跡、 古状造構、柱穴	縄文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石器、石斧、 木製品	事前		年報Ⅲ
	九田川局部改修	B-16・17 C-16	95	20			立会	山口県教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	国際交流会館新営	M-N-22・23	96	195			#		
	教育学部附属養護学校 自転車置場設置	B-20	97	1			#		
	農芸部附属農場G7園場 排水管設置及び E6園場進入路幅	L-N-12	98	55	中世土壤層か	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 国産磁器、磁石	#		
	農学部植栽	N-17	99	3			#		
	経済学部集水樹設置	J-20	100	0.5			#		
	教養部複合棟新営に伴う 自転車置場設置	I-16	101	1	包含層か		立会		
	国際交流会館新営に伴う 排水管設置	N-O-22	102	35	河川跡(溝か)、 包含層	弥生土器、須恵器	#		
	教養部複合棟新営に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			#		
昭和63年	サッカーラグビー場改修	F-19・21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	#		年報Ⅳ
	消防用水設置	K-M-22	105	7.5			#		
	木銀灯新営	J-L-15	106	4	古墳状造構柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、 六連式製塗土器	事前		
	種野寮ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H-22 I-21・22 J-K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	#		
	防火水槽配管布設	K-21・22	109	15	柱穴		#		
	吉田寮ボイラー設備改修	M-8	110	4			#		
	体育施設系給水管改修	G-H-16	111	50		陶器	# 工法等変更		
	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			#		
	吉田寮ボイラー棟 地下貯油槽設備改修	M-8	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 剝片、 二次加工のある剥片	#		
平成元年	第2武道場排水槽新営	G-15	114	2	溝		#		年報Ⅴ
	案内標識設置	I-14 I-18	115	0.5			#		
	本部庫給水管改修	L-13	116	6.5		弥生土器	#		
	大学会館前庭環境整備	N-14・15	117	35	中世溝		#		
	大学会館前庭簡便整備	M-15	118	2			#		
	第1学生食生活設備改修	J-I-19	119	7			#		
	教育学部附属養護学校案内板設置	E-20	120	1			#		
	農芸部連合宿医学科棟新営	O-P-17	121	76	縄文河川	縄文土器、石器	試掘		
	農芸部仮設プレハブ倉庫設置	P-17	122	6		須恵器	立会		
	農芸部微生物実験室 その他施設替換機器設備改修	P-17	123	8			#		
平成2年	大学会館前記念植樹	L-M-15	124	2			#		年報Ⅵ
	サークル棟新営	F-14	125	1			#		
	農芸部連合宿医学科棟新営	O-P-17	126	980	縄文河川	縄文土器、石器	事前		
平成3年	交通規制標識及びバリアー設置	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20	127				立会		年報Ⅶ
	吉田構内道路 (南門ロータリー)改設	H-23	128	40			#		
	ボイラー蓄給水管漏水補修	O-16	129	4			#		
	農芸部附属農場ガラス室新営	S-14	130	3.5			#		
	大学会館前記念植樹	L-M-15	131	3			#		
	東町平川駅緊急地方道路整備工事 及び山口大学吉田団地 環境整備(正面周辺)	E-11・12	132				#		
	東町平川駅緊急地方道路整備 (信号機設置)	I-11	133	7			#		
	本部裏給水管設置	K-M-13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石質模造品	事前		
	人文学部・理学部講義棟新営	M-20	135	4			試掘		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成5年	第2屋内運動場新設	G・H-16	136	144	護	弥生土器、須恵器、砾石	#		年報XIII
	農学部給水管理設	N～P-18	137	9			#		
	基幹整備 (屋外施設改修)	L-15 M-17～18	138	16			立会		
	農学部連合歯医学科棟新設	O-16	139	4			#		
	大学会館前庭アーチー設置	N-14	140	1			#		
	大学会館記念植樹	L-15	141	1.6			#		
	九田川河川局部改良	C-16 D-15～16	142	40			#		
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2			#		
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10			#		
	教育学部給水管理設	H-19	145	15			#		
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13～15 N-14～15	146	140.9			#		
	H-20	I-19～21 J-20～21	147	361			#		
	環境整備(遺跡保存地区)	G-13 H-12	148	350			#		
	グランド屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18～22 H-19～20 I-21	149	600	鷺文河川、弥生住居、護、土坑、弥生～古墳河川、近世護	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砾石、磨石、鐵石	事前 工法等変更		
	第2屋内運動場新設	G-I-15～16	150	726	弥生～古代護、貯蔵穴、土坑、弥生～近世護、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砾石、磨石、鐵石、片貝、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、下駄	#		
平成6年	グランド屋外照明施設配線埋設	F-21 G-20～21 H-19～20	151	200	鷺文河川、弥生住居、護、土坑、弥生～古墳河川、近世護	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砾石、磨石、鐵石	# 工法等変更		年報XIV
	経済学部商品資料館新設	K-1～21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験際液処理施設新設	H-12～13	153	2	河川		#		
	体育器具庫及び便所新設	G-17～17	154	60	河川		# 工法等変更		
	経済学部商品資料館 仮設電柱設置	L-22 M-22～23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K-23 L-22～23	156	6			#		
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F-19	157	2			#		
	テニスコート改修	C-17 C-16～18 D-15～17 E-15～16	158	15			#		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設棟新設	B-20～22 C-20	159	16			#		
	陸上競技場整備(透水管埋設)	C-18 D-18～19	160	200			#		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30			#		
	野球場フェンス改修	H-22 I-21～22	162	3			立会		
	基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川付		#		
	九田川河川局部改良	D-15 E-14～15	164	100			#		
	第2屋内運動場電柱設置	G-14～15	165	0.5			#		
	教養部水道管破裂修理	I-16	166	2			#		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E-20 F-20～21 G-18～19～22 H-19～20 I-20～21	167	150			#		
平成7年	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水設置)	A-21	168	4			#		年報XIV
	サークル棧橋給水管設置	F-14	169	1			#		
	プール新設給水管設置	E-15 F-15～16	170	10			#		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水設置)	C-18	171	6	河川	土師器	#		
	教育学部ロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10			#		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成 7年	農学部附属農場新設	Q・R-17	173	75	近世溝	磁器	試掘		
	農学部附属農場新設	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C-D-18 D-E-17 E-F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新設	T-10	177	22			試掘		
	施設宿舎改修	N-O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N-O-15	179	48	柱穴、包含層	石器	試掘		
	第2号内連動器外周照明施設新設	G-15-16	180				立会		
	機器分析センター新設工事用電柱取設	O-19~21 P-22	181				〃		
	農学部附属家畜病院バリカ新設	S-20	182				〃		
平成 8年	吉田寮可燃ゴミ置場新設	N-10	183				〃		
	農学部附属農場研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q-R-17	184				〃		
	情報処理センター新設	O-19	185				〃		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	F-19-20 F-18-19 G-18	186				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-15-16 J-20 K-19 M-10-11 N-12 O-16~18-20 P-18-19 Q-17-18	187				〃		
	基幹環境整備(施設宿舎・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報 XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H-I-21-22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附属農場排水管布設	S-10-11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
	地上・壁・鉄棒取設	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水渠改良	R-11	192	2.2			〃		
平成 9年	種野寮バリカ新設	O-20-21	193	7			〃		
	サッカーフィールド水管取替	H-I-19-20 I-19	194	12	包含層		〃		年報 XVI
	基幹環境整備(共通教育センター新設)	J-K-17	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	〃		
	丸田川河川局部改良	E-14	196	18			〃		
	農学部附属農場道路舗装	K-12-13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	〃		
	本部裏排水管取替	K-14	198	2			〃		
	農学部附属農場家畜病院整備会場取設	S-T-19	199	1			〃		
	農学部附属農場堆肥合新設	S-10	200	41.5			試掘		
	農学部ハイ才環境新御施設新設	Q-15-16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塙土器、石器	試掘		
	カープミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
平成 10年	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 K-L-22 L-23	203	23.5	包含層		〃		年報 XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			〃		
	丸田川河川局部改良	E-14	205	48			〃		
	本部2号館西側バリア新設	L-13	206	0.5			〃		
	教育学部附属農場学校給食室改修	D-21	207	1.4	包含層	土師器	〃		
	基幹環境整備(教育学部附属農場学校排水管取替)	C-D-21	208	17	河川		〃		
	基幹環境整備(施設裏表土すきり)	O-16	209	40			〃		
	第2学生食堂増築及び改修	N-O-15	210	730	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、鉄製品	事前		
	教育学部附属農場学校給食室改修	C-21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	丸田川河川局部改良	E-F-14 F-13	212				立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(バリカー新設)	H-15 I-J-20 O-16-18	213				#		
	農学部動物用棧却舎改修	Q-18	214				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17-19 M-N-18	215				#		
	理学部スクープ新設	M-18	216				#		
	ステンレス回転モニメント新設	M-13	217				#		
平成11年	第2学生食安施設の他に伴う 屋外電力線路施設整備	O-14~16	218	包含解、柱穴、河川	土師器、須恵器	#			
	九田川河川局部改良	F-G-13 G-H-12	219				#		
	第2学生食安北西擁壁新設	N-14	220				#		
	サッカーフィールド防球ネット新設	G-H-22	221				#		
	第1体育館・共通教育本館 スロープ新設	H-15 K-16	222				#		
	I-12 K-L-18	223					#		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-15 M-N-17					#		
	総合研究棟新設	Q-18 R-17~19	224	250	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新設	Q-R-18~19	225	830	河川、土坑	織文土器、土師器、 須恵器、製塙土器、 瓦質土器、石器	事前		
	販賣及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
平成12年	O-15 P-15~16 Q-14~15*	227			包含解		#		
	架空電線取り外し埋設	18-19 R-13-14 R-5-19 S-14							
	九田川河川局部改良	H-I-11~12 I-10~11 J-9~10 K-L-9	228				#		
	山口合同ガスガバナー室新設 及びガス配管布設	O-P-22	229				#		
	基幹環境整備 (バリカー新設)	N-22 M-10 V-17	230				#		
	あずまや新設	L-18	231				#		
	共通教育センター空調設備 新設	J-16	232				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	J-K-21 M-10	233				#		
	経済学部校舎改修 (プレハブ校舎新設)	K-21	234	40	河川	織文土器	試掘		
	九田川河川局部改良 (平成12年度工事追加分)	L-S-9	235		河川		立会		
平成13年	総合研究棟新設屋外配管布設	Q-18	236				#		
	M-18~19 M-N-20 N-19	237					#		
	九田川河川局部改良	L-R-9	238				#		
	J-14~15 J-15 K-L-M-15 N-16 Q-T-V-17	239		河川			#		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室 配管布設	M-19	240				#		
	理学部校舎改修2期工事 自転車置場新設	N-20	241				#		
	第1学生食堂イレ改修	I-J-19	242				#		
	経済学部校舎改修(プレハブ 校舎新設配管布設)	L-21	243				#		
	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新設)	R-S-19	244	520	柱立柱建物、柱穴、 土坑、包含層、河川	土師器、須恵器 (墨書き土器)、 製塙土器、錐袖陶器、 瓦、輪印、銅鈴石	事前		
	農学部附属農場実験圃整地	O-14	245				立会		
平成14年	農学部校舎改修	N-Q-17~18	246		河川	織文土器	#		
	理学部改修3期工事(薬品庫揭示板) 自転車置場新設	N-O-19 M-19~20	247				#		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成14年	東アジア研究科 プレハブ校舎新設	N-21	248				"		年報1
	農学部校舎改修(解剖実習棟 プレハブ校舎新設)	R-S-19	249		河川、包含層		"		
	教育学部トイレ改修	I-18	250				"		
平成15年	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O-P-16 Q-15	251	12	河川		立会		年報1
	教育学部附属農場給食調理員専用トイレ新設	C-21	252	1.7			"		
	農学部鹿屋城跡湖更衣室南側溫室	P-Q-15	253	52			"		
	理学部中庭通路階級新設	N-19	254	5.8			"		
	理学部中庭あづまや新設	N-20	255	6.8			"		
	基幹環境整備(外灯)	F-16, H-14 G-13~15+18 I-16~19 J-19, L-12 Q-15	256	11.5	河川		"		
平成17年	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J-K-16	257	130	ビット、河川	弥生土器、土師器	予備		年報3
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I-I-K-16 H-12, E-20	258	580	ビット、河川	弥生土器、土師器 須恵器	立会		
	日本・古代学会 水田土壌の断面調査	R-16	259	3.1	河川		立会		
	基幹環境整備(外灯)取扱	H-17~22, 23	260	7.7			立会		
平成18年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16, K-17 J-16~17	261	92	ビット、溝、河川	弥生土器、土師器 石器	予備		年報4
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	262	36	包含層・谷	土師器・須恵器 製塙土器	予備		
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	263	225	壁立柱建物跡、溝、土壤	土師器、須恵器 縄袖陶器、木製品(柱根)	本		
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	264	19	包含層		立会		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K-L-16	265	84	ビット、河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器	本		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J-K-L-16 I-J-K-L-17	266	480	ビット、河川、溝	弥生土器、土師器 打製石斧、柱材	立会		
	資料館(東亞経済研究所)新設	L-20~21	267	100	土壤、落ち込み、河川		予備		
	プレハブ倉庫移設	I-16	268	29			立会		
	第一学生食堂改修	J-20	269	75			立会		
	図書館前広場環境整備	L-17~18	270	55			立会		
	プレハブ校舎新設	F-14~15, G-15	271	400			立会		
	人文学部外灯用電源敷設	M-20	272	6			立会		
	テニスコートフェンス改修	B-C-17, C-18	273	10	河川、包含層		立会		

白石構内

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳堅穴住居、溝状造構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校 體校改修 教育学部附属山口中学校 球技場・整備		2	1			立会		年報V
昭和61年	教育学部附属山口小学校 運動場整備		3	2			〃		
昭和61年	教育学部附属山口小学校	幼稚園・ 小学校部分	5	57	中世土塙&	調文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師土器。	試掘		年報VI
	汚水排水管布設	中学校部分		20	河川跡か杭列	陶磁器、不明鉄製品、石礫、剝片。植物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校 電柱設置		6				立会		年報VII
昭和62年	教育学部附属幼稚園 更衣室改修		7	40			〃		年報VIII
昭和63年	教育学部附属山口中学校 屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剝片	〃		年報IX
平成元年	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳堅穴住居、 土塙、講、柱穴、 河川跡	調文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、 瓦質土器、 須恵質陶器、 黑色土器、綠器、 二次加工のある剝片、 使用痕のある剝片、 剝片、石様。砾石	事前		年報IX
平成2年	教育学部附属幼稚園 パーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・ 山口小学校汚水管布設		11	170	弥生溝状造構	弥生土器、土師器、 打製石斧、 削器、剝片、石核	〃		
平成6年	教育学部附属山口小学校 汚水排水管布設		12	70	溝状造構	調文土器、弥生土器、 土師器、瓦質土器、 不明鉄製品、石礫、 砾石、扁平打製石斧、 砾石、剝片	事前		年報X
平成7年	教育学部附属山口中学校 自転車置場新設		13	130		弥生土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 瓦質土器、 国产陶磁器、 扁平打製石斧、砾石	立会		
平成10年	教育学部附属山口小学校 給食室改修		14	3			〃		年報XIV
平成12年	教育学部附属山口中学校 防球ネット新設		15	7			〃		
平成14年	教育学部附属山口中学校 運動場整備		16				〃		
平成15年	教育学部附属山口幼稚園庭新設 山口小学校スロープ新設		17				試掘		
平成16年	教育学部附属山口小学校事務室新設 窓		18				立会		
平成17年	白石地区市道歩道改築	幼稚園・ 小学校部分	19				〃		年報1
	教育学部附属山口小学校事務室新設 窓	幼稚園・ 小学校部分	20	河川、柱穴	土師器	〃			年報2
	教育学部附属山口幼稚園・小学校 フランク・通用門改修	幼稚園・ 小学校部分	21	27.7			立会		
	教育学部附属山口幼稚園・小学校 給水管改修	幼稚園・ 小学校部分	22	1 河川			立会		年報3
	教育学部附属山口小学校改修	幼稚園・ 小学校部分	23	101 河川、土壤または漢			〃		
	教育学部附属山口幼稚園・小学校 給水管改修	幼稚園・ 小学校部分	24	11			〃		
	教育学部附属山口幼稚園・小学校 給水管改修	幼稚園・ 小学校部分	25	10			立会		

小串構内

調査年度	調査名	構内地図割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部書齋増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			"		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	"		
	医学部基幹整備 (特高受電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
昭和60年	医学部臨床講義棟 病理解剖棟新営		7	38			"		年報V
	医学部附属病院 外来診療棟新営		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	"		
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	"		
昭和61年	医学部看護宿舎改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		年報VI
	医学部看護宿舎改修		11	20			"		
	医学部附属病院 整備(樹木移植)		12	40			"		
昭和61年	医学部附属病院 外来診療棟新営		13	5			"		年報VI
	医学部附属病院 外来診療棟周辺 環境整備等(活木埋設)		14	18			"		
	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			"		
昭和62年	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、鐵石刃核	試掘		年報VII
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある削片、使用痕のある削片、 削片、礫石、磯、原石、土師器、土師質土器、 瓦質土器、陶磁器	立会		年報VIII
	医学部附属病院運動場整備		18	220			"		
平成元年	医学部附属病院MRB棟新営		19	45		削器、細石刃、 二次加工のある削片、 削片、石核	試掘		年報IX
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報X
平成4年	施却棟地盤調査		22				"		年報XI
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他 (洗却棟新営)		23	9			"		年報XII
平成6年	医学部附属病院 MRI-CT装置棟新営		24	6			"		年報XIII
平成7年	看護宿舎新営		25	300			"		年報XIV
平成8年	医学部附属病院 屋外排水管布設		26	40			試掘		
平成9年	医学部歴史講義・納骨堂新営		27	6			立会		年報XV
平成10年	基礎環境整備 (看護宿舎含む)		28	15.2			試掘		
平成11年	医学部附属病院 施設移設		29	4			立会		
平成12年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		30	10			"		
平成13年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線・医学校 敷地西側特殊道路)		31	134	包含層、近世～ 近代用水路	削片、弥生土器、 土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成14年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		32	379	包含層、近世～近代溝	削片、圓文土器、 弥生土器、土師器、 陶器、磁器	"	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成15年	宇部市土地区画整理事業 (柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世～近代用水路、 土坑	陶器、磁器、鐵製品	"	宇部市教育委員会と 共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	圓文土器、土師器、 陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院高ニネルギー 棟新営		35	13.25			"		
平成15年	総合研究棟新営		36	382	包含層	圓文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器	"		
平成15年	基幹環境整備(連突)新営		37	76			試掘		年報I

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成16年	医学部基幹環境整備 (地下オイルタンク他)		38	144		縄文土器、土師器、陶器、磁器、石斧	試掘		年報2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器	#		
	医学部総合研究棟北側 道路用蓋り施設取設		40	40.6			立会		
平成17年	医学部附属病院基礎環境整備 (冷熱源設備改修)		41	37			#		年報3
	医学部南側通用門施設取設		42	30			#		
平成18年	モニュメント設置		43	6.2			#		年報4

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報III
	工学部図書館増築		2	70			#		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報IV
	工学部尾山宿舎棟壁取設等			65			#		
昭和60年	工学部前水槽改修		3	1.5			#		年報V
	工学部尾山宿舎排水管改修			6			#		
昭和61年	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			#		年報VI
	情報処理センター(常盤センター) 空調設備取設		5	30			#		
昭和63年	工学部後却坪上屋新営		6	225			#		年報VII
平成元年	工学部夜間明かり装置 及び防犯ネット設置		7	2			#		年報IX
	工学部記念植樹		8	2.5			#		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			#		年報X
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			#		年報XI
平成4年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		11	6			試掘		年報XII
	工学部・工芸短期大学部の 改組再編・博士課程設置に伴う 建物等の新営		12	40			#		
	工学部および工芸短期大学部 職員宿舎取設		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			#		
	工学部プレハブ研究・実験棟新営		15	12			試掘		
平成5年	工学部地域共同研究開発 センター新営		16	16			#		年報XIII
平成7年	工学部国際交流会館新営		17	8		石鏡	#		
平成8年	工学部国際交流会館新営		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、剥片	事前		年報XVI
平成12年	工学部福利厚生棟新営		19	38.5			試掘		
平成13年	工学部インキュベーション センター新営		20	60			#		
平成14年	総合研究棟新営		21	13.5			#		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報I
平成16年	工学部定塗度応力顕微剤 実験室新営		23	20			試掘		年報2
	工学部半導体電子実験室新営		24	52.5			#		
平成17年	工学部雨水幹線工事		25	9			立会		年報3
	工学部職員宿舎排水施設改修		26	65			#		
平成18年	工学部会議棟身障者スロープ設置 (総合研究棟改修工事 (Ⅱ期・本館北))		27	38			#		年報4
			28	280			#		

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積 (m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅹ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 施設改修新設		2				立会		年報Ⅺ
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	#		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(フロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	#		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	#	御手洗清採集	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	#		年報Ⅷ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土鍋	#	御手洗清採集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 旅館陶器、磁器、 土鍋、片手、範、摩	試掘	御手洗清採集 遺物含む	年報Ⅸ
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土壤	土師器、須恵器、 須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新設		10	38	土壤、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報X
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石鍋	立会		
平成4年	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	#		年報X
	教育学部附属光中学校 武道館新設		13	500	土壤、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新設その他		14				立会		年報X
	教育医学部附属光小・中学校 「ゴール新賞給排水管理設		15	6			#		
平成6年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		16	19			#		年報X
	教育学部附属光小・中学校 「開拓外周フェンス・防球ネット」設置		17	7		陶磁器	#		
平成10年	教育学部附属光小学校 給食室改修		18	6			#		年報X
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壤	土師器、須恵器、 韓式系土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		年報X
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21				#		
平成15年	教育学部附属光小・中学校エレベーター 新設		22	169	ビット、土壤、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報I
	教育学部附属光小学校 体育器具新設		23	53		土師器、須恵器 磁器陶	予備		
平成17年	教育学部附属光小・中学校護岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		年報II

その他構内

調査年度	調査名	構内地区別	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート部庫 合宿研修所整備	宇部市大字小野 宇土井	0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット部庫 合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町 東字中道				#		
昭和60年	熊野在給湯機器取扱	山口市熊野町3-21	7			#		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉 6丁目8-29	35	杭		#		年報VI
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市姐通り 2丁目3-32 山口市 水の上町6-9	1 7		土師質土器 瓦	# #	6号宿舎 2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石 二丁目8-7	1		須恵器、土師器、 土師質土器、 瓦質土器、陶磁器	#	7号宿舎探査	年報VII
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町 6-1	1			#	1号宿舎	年報VIII
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石鶴音町 1-25	1.2		陶磁器	#	7号宿舎	年報IX
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町 3-1	0.5			#	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水 その他改修	山口市湯田温泉 6丁目	30			#		年報X I
	経済学部6号職員宿舎 電柱設置	山口市姐通り 2丁目3-32	0.5			#		
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花 932-2	1			#		
平成4年	上小路共同下水管布設	山口市上小路 宇久保7-4	7			#		年報X II
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続 及び排水施設改修	山口市湯田温泉 6丁目8-29	44			#		年報X IV
平成15年	ボート部合宿所給排水整備	宇部市大字小野 宇土井	80			確認		年報1
平成16年	湯田宿舎B棟自転車置場新設	山口市湯田温泉 6丁目8-29	11			確認		年報2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フーンス取扱 工事部職員宿舎(尾山) 排水施設改修	山口市水の上町6-9 平島市上野中町 1-33-34	1 15			確認		年報3

※文献① 山口大学吉田遺跡調査団「吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し隨時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の

吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。



図63 山口大学吉田構内地図および主な調査区位置図

山口大学構内の主要調査区

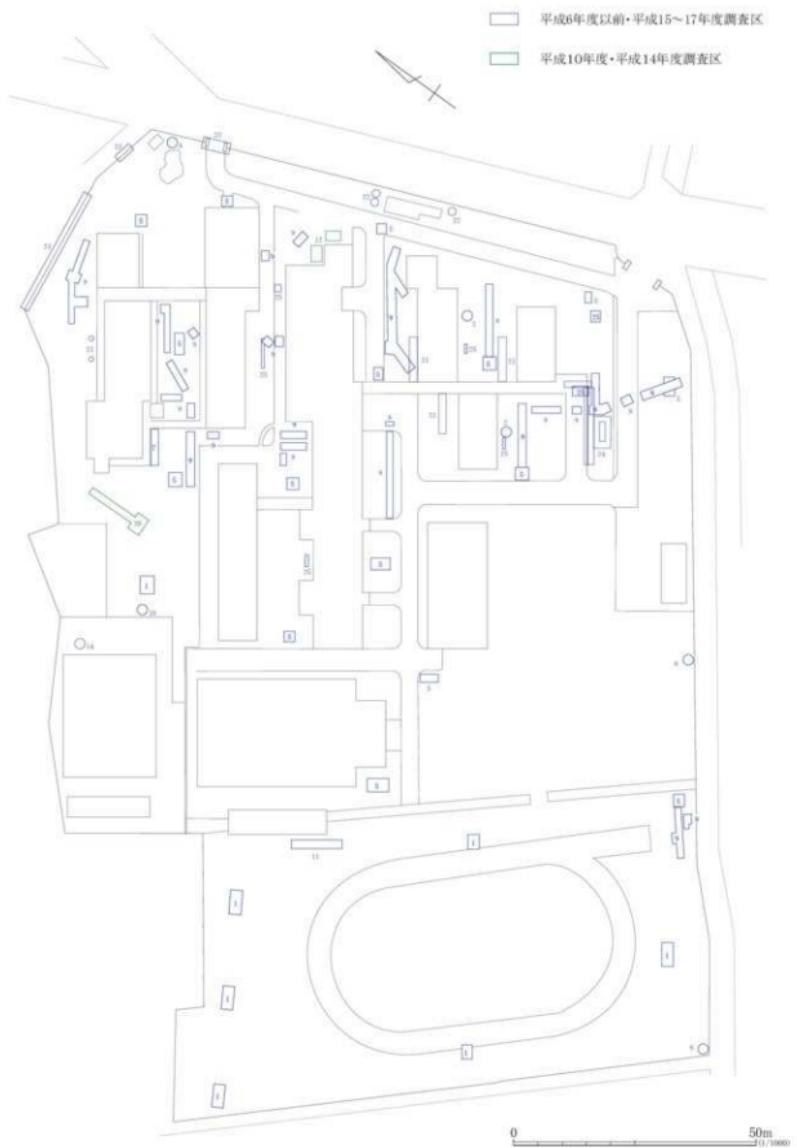


図 64 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

山口大学構内の主な調査

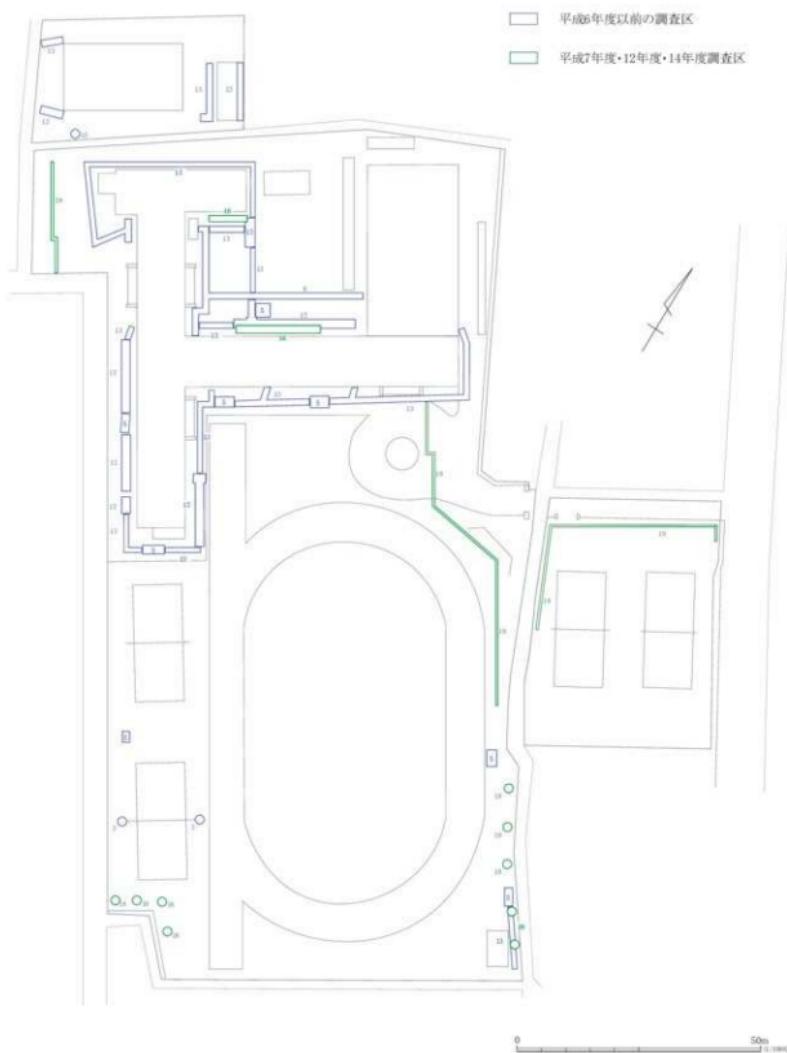


図65 山口大学自石構内（中学校）調査区位置図

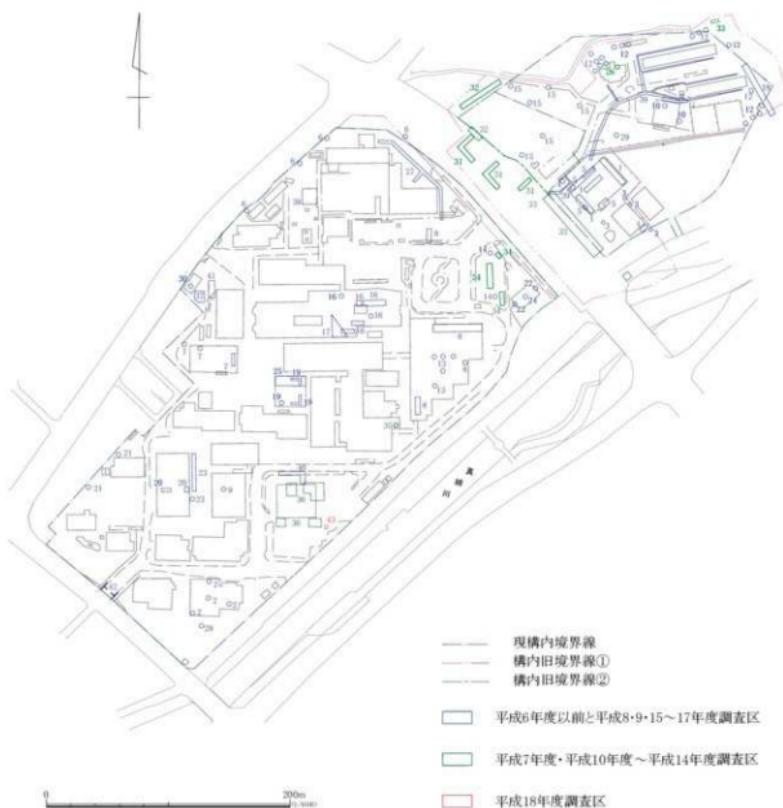


図66 山口大学小串構内調査区位置図

山口大学構内の主な調査



図67 山口大学常盤構内調査区位置図

山口大学構内の主な調査区



図 68 山口大学光構内調査区位置図

第2章 平成18年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室における常設展示の他に年に1~2回の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、また学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。その他にも、学内外のニーズに応じ、随時展示解説会や出前授業などを行っている。

平成18年度は、展示・公開活動として、常設展『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』、第22回企画展『吉田遺跡発掘調査速報展2006』を開催した。さらに資料館展示室以外での展示活動として、吉田構内総合図書館入退館ゲート前にて『大学情報機構埋蔵文化財特別展』を、山口大学吉田地区大学祭「姫山祭」でのイベントとして図書館2階閲覧室にて『幕末期の吉田キャンパス』を開催した。また平成17年度より再開した資料館広報誌『埋蔵文化財資料館通信 てらこや埋文』を季刊で発行した。

社会教育活動としては、山口大学教育学部との共催により第6回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－』を開催した。この他、山口市立平川小学校の依頼により、6年生児童の集団展示見学を受け入れ、火起こし体験等を実施した。

国立大学法人化後、大学に蓄積されている学術知識・資料を広く社会に還元することを目的とした地域連携・社会貢献活動がより強く求められている。当館は学内有数の小組織ではあるが、昭和63年以降継続して展示活動及び社会教育活動を展開している。「地域に開かれた大学」を小規模ではあるが具現化し続けたその誇りを胸に、今後とも社会の要求を適切に判断し、内容ある活動を行う所存である。

表11 埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1,157

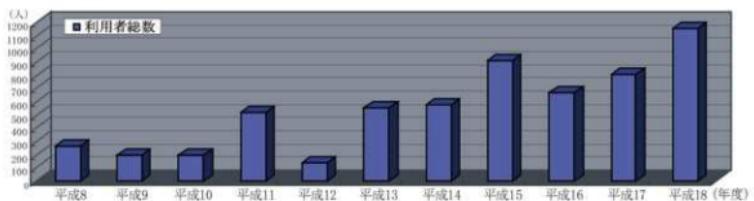
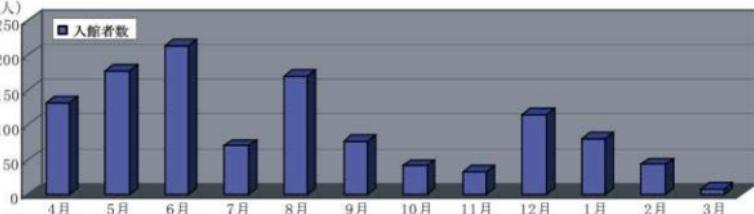


表12 平成18年度月別入館者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入館者数	132	178	214	70	170	76	41	32	114	80	43	7



第1節 資料館における展示公開活動

平成18年度常設展『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』を開催

平成18年度の常設展示として、山口大学吉田構内（山口市吉田）が所在する吉田遺跡を素材に『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』を開催した。吉田遺跡の発見は古く、昭和初期に遡る。現在の大学敷地周辺が棚田を中心とした一面の田畠であった当時、しばしば土器や石器などが発見されていた。これらの出土品は現在山口県立山口博物館および山口市歴史民俗資料館等に収蔵されているが、この地で最初に調査の鍼が入れられたのは昭和42年（1967）のことである。各地に散在していた山口大学の各学部の吉田地区への統合移転に先立ち、前年から開始されたキャンパスの造成工事や建物建設工事中に多量の土器や石器が発見されたことを受け、学長を団長とし学内外の関係学問分野の研究者を調査員とした「山口大学吉田遺跡調査団」が結成された。調査団による発掘は統合移転が完了した昭和48年（1973）に一応の終了を見たが、キャンパスのほぼ全域に埋蔵文化財が遺存する状況を鑑み、以後諸開発計画に対する埋蔵文化財保護業務を計画的に実施するため埋蔵文化財資料館が設立された。

本学による40年におよぶ継続的な調査により、吉田遺跡は旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物が埋存する県内でも有数の複合遺跡であることが確認されている。今回は、各時代を代表する資料を選定し、「時代の変化とともにうな土地活用の変遷」を主題に展示構成をおこなった。

4月3日から9月29日までの開催期間中、881名の入館者を迎えた。多くの方から展示内容につきご好評をいただく一方で、アンケート調査により新入生ばかりでなく大多数の本学生が吉田キャンパスを遺跡地として認識していない状況が浮かび上がった。この調査結果は、本学地下に眠る貴重な学術資料を学生の教育・研究に対して十分に活用できていない実事を表すものと考える。当館の展示公開活動の方針を策定する上で、広報形態の見直しなど改善を図っていきたい。



写真 148 平成 18 年度常設展ポスター



写真 149 平成 18 年度常設展図録

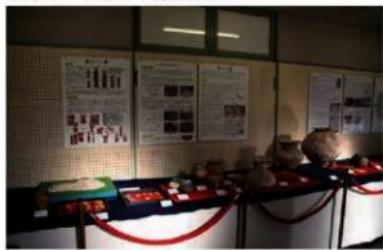


写真 150 平成 18 年度常設展の模様①



写真 151 平成 18 年度常設展の模様②

第22回企画展『吉田遺跡発掘調査速報展2006』を開催

本年度は、本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡にて2件の本発掘調査を実施した。各々の調査成果については、本書所収の通りいざれも吉田遺跡の性格把握ばかりでなく地域史研究上極めて重要な資料が多数出土したため、即時的な公開が必要と判断し、調査速報展を開催した。

展示内容としては、吉田構内教育総合研究センターⅡ期工事に伴う発掘調査出土品（主として弥生時代から古墳時代にかけての土器資料）と、吉田構内農学部附属家畜病院（現：動物医療センター）改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査出土品（主として飛鳥時代から奈良時代にかけての土器資料と木製品）を中心に、過去に吉田遺跡から出土した関連資料を用い、該当時期の吉田遺跡の集落構造の復元等を行った。また、発掘調査の記録映像を上映し、実際の遺跡の様子とともに発掘調査の手法を公開した。

平成18年11月20日から平成19年3月2日の開催期間中、276名の入館者を迎えることができた。アンケート調査によると、印象に残った展示物としては「奈良時代の柱」との回答が最も多く、その他の木製品も注目を集めていた。これらの資料は出土直後のため水漬け状態で公開を行ったが、その状況がかえって「生の埋蔵文化財」という印象を強めたようである。また、発掘調査風景の動画公開は、遺跡を身近に感じじができるコンテンツとして概ね好評であった。

当館の性格上、即時性のある埋蔵文化財資料の公開を計画的に行なうことは困難であるが、発掘調査成果を常に発信し続ける工夫が必要という思いを強める結果となった。

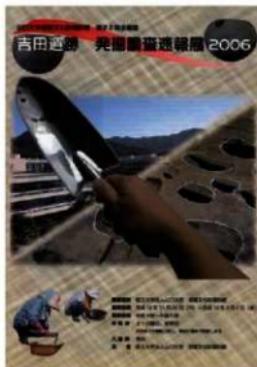


写真 152 第22回企画展ポスター



写真 153 第22回企画展の模様①



写真 154 第22回企画展の模様②



写真 155 第22回企画展の模様③

第2回～第4回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

当展示は、平成17年度より本学吉田キャンパス総合図書館入退館ゲート前にて「学術情報機構埋蔵文化財特別展示」という名称で開始したものであるが、平成18年度の組織名変更に伴い展示名を「大学情報機構埋蔵文化財特別展示」とした。

第2回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『山口県遺跡めぐりシリーズ1 ジーコンボ古墳群』

平成18年4月3日から6月30日の期間で開催した。ジーコンボ古墳群は、山口県萩市の方北方約40kmの日本海中に位置する見島に所在する古代の墳墓遺跡であり、国の指定史跡となっている。当館は山口県内の著名遺跡出土資料を多数所蔵しているが、昭和35年（1960）から昭和37年（1962）にかけて「見島総合学術調査」の一環として実施されたジーコンボ古墳群発掘調査出土資料も部分的に収蔵している。今回の展示では、古墳の築造時期を知る上で貴重な土器資料とともに、鉄製武器類、刀装具、腰帯飾りなどを公開した。

第3回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『山口県遺跡めぐりシリーズ2 美濃ヶ浜遺跡』

平成18年7月3日から11月3日の期間で開催した。美濃ヶ浜遺跡は、山口市の南端部、秋穂二島地区に所在する遺跡である。遺跡の発見は古く大正14年（1925）に遡る。当時は山口県初の縄文土器発見地として考古学界にその名をとどろかせた美濃ヶ浜遺跡であるが、その後長期間放置され、追加調査が実施されることになった。その状況が一変したのは昭和35年（1960）に「山口県美濃ヶ浜遺跡学術調査団」により実施された発掘調査である。この調査において古墳時代の住居跡とともに県内初の製塩炉が発見されたため、製塩遺跡として再評価されるに至った。また同時に多数出土した製塩土器は「美濃ヶ浜式土器」という名称が付され、その後の山口県製塩土器研究の基礎資料となっている。当館は昭和35年調査時に出土した資料の一部を所蔵しているが、今回の展示では実物の製塩土器とともに土器製塩模型を配し、当時の製塩方法の解説を行った。その他、子持勾玉、石製模造品「盾」、紡錘車などの滑石製品も公開した。

第4回大学情報機構埋蔵文化財特別展示『あしもとの遺跡シリーズ2 古墳時代の吉田遺跡』

平成18年11月6日から平成19年3月30日の期間で開催した。本学吉田キャンパスが所在する吉田遺跡は、姫山・今山から派生した低丘陵部にあたる東地区と、沖積平地である西地区に大きく区分される。古墳時代前期の集落は、弥生時代に引き続き沖積平地部に形成されるが、その後低丘陵部に移動することが確認されており、後期に至ると丘陵部に古墳が築造されたものと推測される。今回の展示では、土器資料とともに滑石製模造品、円筒埴輪片などを公開し、吉田遺跡の古墳時代における土地活用の変遷を解説した。



写真 156 第3回埋蔵文化財特別展の模様



写真 157 第4回埋蔵文化財特別展の模様

姫山祭にて『幕末期の吉田キャンパス展』を開催

昨年度より、当館とメディア基盤センター、図書館で組織される大学情報機構は、姫山祭（吉田キャンパス大学祭）にイベント参加を行っている。本年度も引き続き姫山祭（平成18年12月2日開催）にて「大学情報機構2006」と題する各組織の特徴を生かしたイベントを開催した。

当館の今回の企画は、図書館のイベント展示『オープンライブラリー2006 長州ファイブ』に合わせ、長州五傑（井上馨、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤博文、井上勝）が活躍した時期の吉田キャンパスの歴史景観の復元を目的に、総合図書館2階一般閲覧室にて『幕末期の吉田キャンパス展』を開催した。

近世以降の現吉田キャンパス所在地の状況については、近世文書および絵図、さらには山口大学移転前、昭和40年頃に撮影された航空写真などにより、丘陵部には棚田が、平地部には比較的区画の大きい水田が設けられ、集落は現在の大学本部から共通教育棟周辺、農学部附属農場建物南側の2ヶ所に数軒からなる小規模集落が存在し続けていたものと推定される。当館が実施している吉田キャンパス内での発掘調査においても、大学本部周辺からは室町時代から江戸時代以降まで存続する建物跡が確認されており、キャンパス各地において各時期の水田用水路、暗渠等が検出されるなど、諸史料の示す状況を裏付けている。

イベントでは、土師器、瓦質土器、陶磁器などの実物展示とともに、現在の吉田キャンパスと近世末期の環境との対比展示を行った。本年度の姫山祭が例年よりも1ヶ月遅い開催であり、悪天候も重なったためか、参加者は極めて疎らであった。当館のイベントコーナーへも、総合図書館まで暖を求めるに来た人々がついでに立ち寄るといった状況であったが、足を止めて熱心に見学する方も多く見られた。「大学祭」という華やいだ雰囲気の中でどのように学術資料展示を行うか、その目的も含めて今後の検討課題となるであろう。

大学情報機構 2006 墓碑文化財企画展示

幕末期の 吉田キャンパス



会場場所 山口大学松山記念館 1階開鑑室
開催日時 プラスチックモデル展(12月1日)、クリスマス会(12月2日)

プレゼントのお知らせ



先着100名の方に、『手づくり毎日折りり』
をプレゼントします。
ご来場の方はお早めにご来館ください!!

写真 158 展示ポスター



写真 159 展示の模様①



写真 160 展示の模様②

第2節 資料館における社会貢献活動

第6回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－』を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第6回目となる平成18年度の公開授業は日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回の公開授業は山口大学教育学部と共に開催され、山口市大内御堀苔内にある山口大学教育学部実習農場で延べ5回に渡って行い、小学生4人、保護者・一般11人と教育学部学生に参加していただいた。以下で授業内容を報告する。

5月27日（土）一田植え－

あいにくの雨の中、教育学部の徳永技術専門職員に代かきをしていただいた約53m²の水田に豊作を願いつつ心を込めて田植えを行った。

6月24日（土）、8月26日（土）一草取り－

稲の成長は予想以上に早く、6月24日には長さ約40cm、8月26日には約100cmに成長していた。また、成長具合がまちまちであることも観察できた。昨年まで畠だったためか、水田にはほとんど雑草が生えなかつたが、畦には雑草が生い茂っており、参加者全員で協力して除草を行った。

10月7日（土）一収穫－

稲は9月17日の台風13号でかなり倒れてしまったが、秋晴れの晴天の中、無事に収穫を迎えることができた。最終的に稲は長さ約120cmにまで成長した。収穫には参加者が製作した木包丁などを使って穂摘みをし、残りは鎌で根刈りをしてはぜ架けをした。

10月21日（土）一脱穀・糲すり・赤米を食べる－

前回同様、秋晴れの晴天の中、公開授業最終日を迎えることができた。昭和30年代頃まで行われていた足踏み脱穀機による脱穀や唐箕による選別を体験した後、箸こぎ、臼と杵による糲すり、てみどザルによる選別を体験した。この作業は大変手間がかかったが、手分けして根気強く行った。なお、今回のお米の収穫量は玄米で約10kgであった。台風の影響もあり、収穫量は現在のお米の約1/3にとどまった。お昼には土器や羽釜で赤米入りご飯を炊いたほか、ヤマメの塩焼きや猪鍋をつくった。赤米は現在のお米よりもやや硬かったものの、ほのかに甘い味であった。ヤマメの塩焼きや猪鍋も大変美味しく大好評であった。

公開授業を終えて

今回の公開授業について、参加者からは「楽しかった」「お米を食べるまでにどれだけ大変かよくわかりました」「簡単にものが食べられる時代こそ、こういう体験は大切と思いました」「もみがらをむくのが大変だった」などの声が寄せられた。参加者の皆様には、実際体験することによって楽しんでいただくとともに、米作りの歴史や大変さ、お米の大切さを感じていただき、自分なりの発見をしていただくことができたと感じている。受講者はじめ、教育学部の関係者など多くの方々に支えられて、盛況のうちに公開授業を終了することができ、館員一同心より御礼申し上げたい。なお、平成19年度も今年度の授業内容を踏まえて、赤米をつくる公開授業を行うこととなった。



写真161 田植え（5月27日）



写真162 除草（6月24日）



写真163 稲の観察（8月26日）



写真164 穂摘み（10月7日）

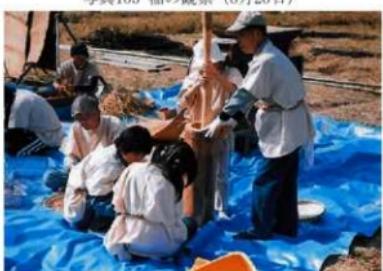


写真165 初入り（10月21日）

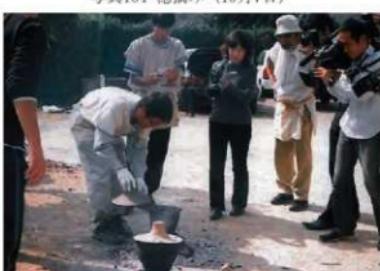


写真166 土器による炊飯（10月21日）

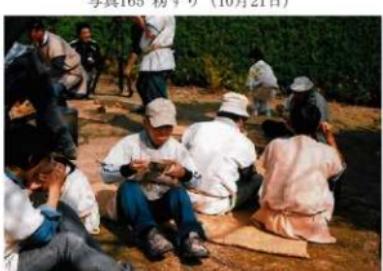


写真167 食事の模様(10月21日)



写真168 参加者の皆さん（10月21日）

山口市立平川小学校児童による集団見学

平成18年5月中旬、山口市立平川小学校より当館への集団見学の依頼があった。本学吉田キャンパスは山口市平川地区に所在しており、平成15年度以降山口市立平川小学校より継続的に同様の依頼が寄せられている。今年度は6年生児童による集団見学の依頼であったが、同小学校は山口県内でも最大規模の児童数を誇るマンモス校であることから、5月29日、6月1日、6月5日の3回に分散して来館いただくよう調整した。それでも各回が50名以上の集団となるため、展示見学と火おこし体験の2グループに分割し、交互に解説と体験学習を実施した。

展示見学については、当館展示室で開催中の常設展『山口大学の遺跡～吉田遺跡展～』の説明を行った。この展示は吉田遺跡の旧石器時代から江戸時代までを通じて解説したものであるが、6年生児童は現在奈良時代を学習中のことであり、やはりそれまでに学習した時代（弥生時代から奈良時代）の出土資料に興味を示していた。また館員の立ち会いの下、実際に出土品に触れてもらう試みは非常に好評であった。

火おこし体験は、当館が平成17年度に実施した公開授業「古代人に挑戦！－弥生土器をつくってみよう2－」から取り入れた体験学習である。道具（舞きり式）の数に限りがあるため、3人程度のグループに分かれてもらい実施した。約30分という短い時間であったが、全児童が火おこしに夢中になっていた。

平川地区は遺跡が密に分布している地域であるが、それはあくまでも私たち埋蔵文化財調査に携わる者の認識である。児童は自分たちの生活空間の地下に貴重な歴史資料が眠っているという事実を新鮮な驚きとして受け止めていた。今後とも内容ある地域連携活動を実施していきたい。



写真 169 火おこし体験の模様①



写真 170 火おこし体験の模様②



写真 171 展示見学の模様①



写真 172 展示見学の模様②

付篇

小野田皿山の硫酸瓶と石見焼・堀越焼の大甕づくり

－硫酸瓶の研究①－

田畠 直彦

1. はじめに

筆者は先に山口県防府市の佐野焼ならびに堀越焼の大物づくりについて、若干の考察を行った。^{註1} その際、石見焼及び堀越焼・末田焼と明治中頃から昭和30年代まで硫酸瓶に代表される耐酸瓶を盛んに生産していた山陽小野田市小野田の窯業とは密接な関連が存在したことを知るに至った。そこで、本稿では石見焼、堀越焼・末田焼と小野田の窯業について概要を述べた後に、成形技法を中心とした関連について検討し、要点をまとめておきたい。

2. 石見焼について

石見焼は島根県西部、特に浜田市・江津市・大田市（温泉津町）を中心とする地域で18世紀前半頃から生産されている陶器・炻器の総称である。^{註2} 備前焼や唐津焼の影響により成立した可能性が指摘されているが、その起源は不明な点が多い。現在確認されている最古の製品は島根県邑智郡川本町谷戸経塚（文政2年（1819）造営）出土の甕2点である。生産品は甕、捕鉢などの生活雑器である「丸物」と、「瓦」に大別される。「丸物」を製作する陶工は「丸物師」、「瓦」を製作する陶工は「瓦師」と呼ばれていた。丸物には小物と荒物（大物）があり、荒物は太い粘土紐を使用した「しのづくり」による「はんど」（大甕）が主力製品であった。なお、小物は主に白土を使用し、温泉津長石釉を施釉するのに対して、荒物は赤土を使用し、来往釉を施釉する。施釉（葉掛け）は素焼きをせずに乾燥した状態で掛ける「なま掛け」である。幌轆は蹴幌轆であったが、第二次大戦後は主に電動幌轆を使用している。荒物の場合、窯は連房式登窯（通常10～15室程度）で、13室の場合、焼成時間は5昼夜（約120時間）であった。なお、登窯の最上室は「ふかせ」といい、素焼き製品のみを焼成していた。近年はガス窯を使用することが多く、焼成温度は1250℃から1320℃である。^{註3} 製品は当初北前船により東北・北陸・九州にまで運ばれ、大正期に鉄道が開通した後はさらに全国に運ばれた。昭和12・3年頃の窯数は103に達したという。

明治末期から第二次大戦前においては、職人が増加したことと需要の多い地域からの招きや呼びかけもあったことから、石見焼の陶工は全国各地に出稼ぎに出ていた。今回取り上げる小野田の硫酸瓶関係以外にも山口県との関わりは深く、明治頃より県内各地に石見焼の陶工による瓦工場が多く存在し、瓦を焼く合間に甕、壺、鉢、素焼品などを焼成することもあったという。現在でも山口県内では石州瓦葺きの古民家が数多く見られる。

第2次大戦後しばらくは好景気に沸いたが、昭和30年代後半以降はプラスチック製品・水道の普及で大甕の需要が激減し、大きな打撃を受けた。^{註4} その後、民芸品ブームで再び注目され、平成6年に国（現：経済産業大臣）指定の伝統的工芸品に認定された。現在、石見陶器工業協同組合（島根県江津市）には11軒の窯元が加盟しており、花器・茶器・食器などの民芸品のほか、「しのづくり」による傘立て、睡蓮鉢などを生産している。

3. 堀越焼・末田焼について（田畠2008）

堀越焼・末田焼は天明8年（1788）、もしくは寛政2年（1790）に佐野の陶工である内田善右衛門が、徒弟の林治右衛門、宮本亀次郎を連れて開窯したことに始まるとしてされる。最盛期は明治・大正年間で、

堀越では窯元数が38に及んだという。製品は「丸物」と総称され、小物・荒物に大別される。荒物は輥轆成形による蓋覆壺・半挿・便壺などで、壺(窯)には佐野焼由来の叩き技法を使用していた。輥轆は蹴輥轆(蹴り車)であったが、昭和10年頃からは電動輥轆を使用している。製品は施釉し、連房式登窯(通常4房)で焼成していた。また、製品は汽車や船により中・四国・九州方面を中心に運ばれていた。しかし、昭和30年代以降衰退した。現在堀越窯(安沢窯)がガス窯で民芸品を生産しているほか、末田では蛸壺や民芸品などを生産する3軒の窯元がある。

4. 小野田皿山について

小野田では、窯場及び製陶所群のことを「皿山」、「小野田の皿山」と呼称していた。しかし、九州から山口にかけては窯場のことを「皿山」と呼ぶことが多いので、本稿では、小野田で江戸時代末期から昭和30年代まで、硫酸瓶をはじめとする各種炻器生産を行っていた窯場、及び製陶所群の総称を「小野田皿山」と定義しておく。

小野田における本格的な窯業の始まりは須恵器生産を嚆矢とする。昭和30年代まで多くの製陶所があった旧小野田市の中心部から約7km南に位置する龍王山の山麓には後～終末期古墳と小野田松山窯をはじめとする須恵器窓跡が多数存在し、同山周辺では「須恵」・「焼野」の地名が存在する。海岸に近い立地や燃料に恵まれていたことはもちろんのこと、良質な陶土に恵まれていたことが、後の硫酸瓶生産にも共通する利点であった。

しかし、その後窯業は絶断してしまい、再び行われるようになつたのは江戸時代末期である。小野田皿山は、1840年代に都濃郡富田（現在の周南市新南陽富田）出身の陶工甚吉が山陽小野田市小野田且西で壺や擂鉢、片口、皿などの日用品の焼成を行つたのがその始まりである。日用品の生産を行つてゐたこ

しかし、それは甚吉とその家族のみが携わる小規模なものであり、甚吉は約10年後の安政五年（1858）、不遇のうちに病没した。一方、安政元年（1854）に久野彦左衛門が東旦に開窯した。久野は甚吉の指導を受けたと推測されている。この窯は幾多の経営者の変遷の後、明治元年（1869）には姫井伊三郎に経営が引き継がれた。この頃には、壺・擂鉢・片口・半脳寒などを生産しており、特に擂

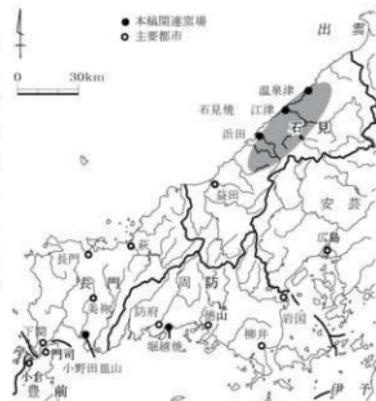


図69 関連諸窓位置図



図70 小野田岬山と周辺位置図

鉢は耐酸性・耐久性に優れていたため、寒さの厳しい北海道において需要が多かったという。このため、他にも窯が開かれるなどして皿山は活気づいた。なお、小野田ではこの頃から堀越焼の陶工が関わっており、明治時代前半には播鉢とともに、堀越焼の陶工によりつくられた1~4斗入りの甕（叩きはんどう）が北海道へ送られていた。

明治10年代以降になると、小野田の窯業は近代工業の発展により大きな変革を遂げることとなった。明治13年（1880）、日本における民間初のセメント会社である小野田セメント株式会社（明治14年設立 現：太平洋セメント株式会社小野田事務所）の工場設立にあたり、徳利窯4基に使用する赤煉瓦が焼成された。その後、明治22年（1889）に日本舎密製造株式会社小野田工場（現：日産化学工業株式会社小野田工場）が設立され、同24年に硫酸、曹達、晒し粉などの生産を開始した。生産の主体となつた硫酸は肥料や薬品、火薬の生産などに必要不可欠な化学薬品であり、これに伴い運搬・保管容器として大量の硫酸瓶が生産されることになった。詳細は後述する。また、大正3年（1914）に北九州市門司所在の日本酒類醸造株式会社により焼酎瓶の生産が開始され、大正7年（1918）には同社により小野田に閑門窯業（昭和10年に帝国窯業株式会社に社名を変更）が設立された。

以後、小野田の窯業は景気の動向に左右されつつも、第一次、第二次世界大戦時、同終戦直後の昭和20年代前半を中心で栄えた。特に戦前までの生産数量は全国生産数の約70%を占めていた。大正～昭和初期の最盛期には、市内で26工場、登窯約30基があり、年間百数十万個の硫酸瓶を生産していた。³¹ 硫酸瓶以外にも煉瓦、土管から日常雑器に至るまで約90種類の製品を生産していた。

しかし、高度経済成長期が始まる昭和30年（1955）以降になると、硫酸の容器はタンクローリーやボリエチレン製へ、焼酎瓶はガラス製一升瓶に変化していったため、硫酸瓶や焼酎瓶は不要となり、多くの製陶所が廃業に追い込まれた。³² 現在では、松井製陶所のみが梅小鉢・洋酒瓶などを製造している。

平成6年（1994）、山陽小野田市歴史民俗資料館所蔵の「小野田の皿山用具」「小野田の皿山製品」が市指定有形民俗文化財に指定されるとともに、同資料館によって、研究叢書『小野田の窯業、皿山とその変遷』が刊行された。また、平成19年（2007）には経済産業省の「近代化産業遺産群」に山陽小野田市の窯業（耐酸炻器製造）関連遺産として、且の登り窯、泥灘し場・バッック・オロ跡（原料陶土処理工程の一部）、三好邸瓶垣、山陽小野田市歴史民俗資料館の所蔵物が認定された。また、且の登り窯は小野田皿山関係では唯一「且窯跡」の名称で埋蔵文化財包蔵地として認定されている。なお、小野田皿山の「近代化産業遺産群」は「産業観光」における山口県の代表的なスポットとして注目を集めしており、多方面での活用が期待されている。³³



写真173 小野田皿山の製品
(小野田市歴史民俗資料館1994)

5. 硫酸瓶製造の経緯

明治5年（1872）、大阪造幣局で、貨幣の材料となる金銀の精製に大量の硫酸が必要であったため、日本で最初に硫酸の製造が行われた。工場内の硫酸の運搬にはスイスから輸入したガラス瓶を使用し、明治8年（1875）に上海へ硫酸を輸出した際は、信楽産の硫酸瓶を使用したという。以後、明治12年（1879）には大阪でも硫酸製造会社が設立され、明治20年（1887）頃には別子銅山、明治22年（1889）には日本舎密製造会社が設立され、硫酸の製造は

民間が主体で行われることとなった。

一方、硫酸の製造が進展するとともにその容器を大量に確保する必要が生じた。このため、明治15年（1881）、大阪では硫酸瓶の不足を補うために硫酸瓶製造会社が設立された。この会社の設立にはすでに京都で理化学用陶磁器の製造を行っていた高山耕山氏も関わっていた。時期は不詳であるが、同氏は硫酸瓶製造会社設立以前に硫酸瓶の製造に成功しており、『明治工業史』には「製品容器も初めは皆舶來硝子瓶を用ひたりしも、造幣局硫酸研究所の依頼により、京都の陶器師陶山、幾多研究の結果、遂に磁器製の甕を以て之に代用するに至れり」との記述がある。

硫酸瓶製造会社の設立趣意書によると、大阪では同社設立以前に信楽産の硫酸瓶が使用されていた。「堺港」「山口縣下某」のものもあったが、製品が粗悪で量も少なかったため、使用できなかったという。また、信楽から大阪までの運搬が極めて不便であったため、しばしば硫酸瓶が品薄になっていたと述べられている。しかし、同社が硫酸瓶の製造を開始したものの、硫酸瓶の需要は振るわなかつた。一方で副業としていた赤煉瓦の需要が増したために、明治20年（1886）に同社は社名を大阪窯業株式会社に変更して赤煉瓦、耐火煉瓦を主に製造するようになり、明治26年（1893）には硫酸瓶の製造を中止した。

小野田では明治24年（1891）に日本舎密製造株式会社が硫酸の生産を開始したが、当初、硫酸瓶はドイツや信楽から取り寄せており、ドイツから取り寄せた瓶は「ドイツ瓶」と呼ばれていた。この依頼を受けて窯元で研究・試作した結果、瓶の製造に成功し、明治26年（1893）には6ヶ所の窯元で硫酸瓶の製造を開始した。しかし、大量生産を前提とした工業製品である硫酸瓶の製造にあたっては、多くの陶工が必要であった。そのため、必要な陶工の大半を石見焼の本場である島根県江津市附近から呼び寄せた。当初、石見焼の陶工達は春に小野田へやってきて、秋に帰郷していたが、明治末年には妻子を呼び寄せ、あるいは小野田で婚姻して定住するようになった。この他、小野田皿山には堀越焼、末田焼の陶工、常滑焼の陶工などがあった。また、小野田の製品には格子目の叩き痕を持つ唐津系の甕（市指定文化財45）も存在することから唐津焼の陶工もいた可能性がある。

明治37年（1904）に日露戦争が開戦すると、硫酸の需要が高まり、日本舎密製造株式会社は明治40年（1907）に硫酸を製造する硫酸鉛室を増築したほか、硫化銅を自給するため銅鉱山と硫酸瓶を自給するために製陶所の買い入れを行った。『明治工業史』には、「硫酸瓶は明治の中頃、信楽製と長門須恵焼と互に競争して遂に後者の勝利に帰したるが、その他にも、伊部、常滑等で之を試製せしことあり」との記述があり、小野田における硫酸瓶製造の隆盛ぶりをうかがうことができる。以後、大正に入ると組合も整備され、材料の入手から販売までを組合で共同で行い、製品は全国の化学工場をはじめ、中国東北部・朝鮮半島にも販売された。

なお、第1次世界大戦に伴う好景気により、大正4年（1915）には硫酸瓶の需要が小野田産のものだけでは間に合わなくなり、信楽や常滑にも大量の硫酸瓶の注文が入るに至った。常滑で硫酸瓶の製造が開始されたのはこれに先立つ明治35年（1902）からであった。しかし、多くの窯元は焼酎瓶の製造は行っていたものの硫酸瓶の製造経験がなかったため、大量の注文に戸惑ったという。常滑では大正7年（1918）に土管機が導入された後には木型（リュウサンビンキガタ）を使用して硫酸瓶を製造していた。なお、このほかに益子（栃木）、丹波（兵庫）、堀越などでも硫酸瓶が製造されていた。

6. 初期の硫酸瓶について

まず、典型的な硫酸瓶が製造される前の硫酸瓶の形態についてみてみたい。なお、硫酸瓶の各部位

の名称については、図72に基づき記述する。小野田の硫酸瓶の祖形となった「ドイツ瓶」(図73-1・写真174-1)をみると、胴部は垂直に立ち上がるが、やや歪みが見られるため、輪轤により成形されたと考えられる。底部はやや上げ底である。「こうもり」には縦方向に把手がついており、成人男性の指3本で握ることができるが、大正～昭和の硫酸瓶と異なり、指4本で握ることは困難である。口の内面にはねじ切りが施されており、外面には黄緑色の灰釉がかかっている。

これに対して、この瓶を模して造られた初期の硫酸瓶(図73-2・写真174-2)は法量・上半部の形態が「ドイツ瓶」と近似している。しかし、底部から胴部下半がやや膨んでいる点が異なる。これは後の硫酸瓶と異なり、輪轤で「ひじり」から「中継ぎ」まで一度に成形されたためと推測される。^{註7} 外面全体には「ドイツ瓶」よりも青・もしくは黄色味を帯びた灰釉がかかっており、小野田皿山における硫酸瓶製造以前の製品と共通する。

なお、前述のように小野田で硫酸瓶が製造される前に、京都で高山耕山氏が硫酸瓶の製造に成功していたほか、大阪、信楽で硫酸瓶が製造されていた。今回、これらの硫酸瓶について実物を確認できなかった。このため、今後の検討が必要であるが、高山耕山氏が硫酸瓶を製造するにあたって「幾多研究」を行ったこと、大阪では硫酸瓶が特異な形態のため、当時の陶工がとまどったという記録があること、小野田における硫酸瓶の製造が「ドイツ瓶」の模倣から始まっていることからしても、これらの硫酸瓶は単なる甕ではなく、「ドイツ瓶」に代表されるヨーロッパ製の瓶を模倣したものであった可能性が高い。

7. 大正～昭和の硫酸瓶について

大正～昭和にかけて製造された硫酸瓶(図73-3・写真175)の製造から出荷までの工程について、主に註7文献に基づき、以下に概略を記す。

(1) 粘土の採取と素地づくり

小野田で使用された粘土は古第三紀層宇部灰岩層中に存在するもので、かつては旦の周辺各所で露頭していたという。これらは色調や感触の違いから、ネバ、鬼ショウドロ、マサショウドロ、モンドロ、アオ、アズキなどと呼ばれていた。このうち主に用いられたのは、ネバ、マサ、アオであり、その配合比率はネバ7：アオ2：マサ1であった。実験により乾燥収縮はネバ、アオ、マサの順に大きいこと、乾燥速度はマサ、アオが類似し、ネバが遅いことが明らかにされている。^{註8}

当初、粘土は露頭箇所から鎌で削りとっていたが、大量生産に伴い、広範囲で粘土を掘削するようになったため、泥漬しが行われるようになった。泥漬しはまず粘土に水を加えて攪拌して沈殿させ、下に溜まった濃い泥水を「おろ」(素焼の土管か竹で開いたをつくり、内側に筵を張ったもの)に流し込む。「おろ」で天日で乾燥させた後、さらに盛鉢に盛って成形に適した固さになるまで乾燥させて泥入れ場に貯えた。次にアラコシと呼ばれる職人が土踏みにより粘土を練った。なお、昭和に入ると泥漬し、土練りは機械化された。

(2) 成形

成形に先立ち、荒ごね台で粘土をこねた後、円盤状の底、「ひじり」にあたる「玉」と太めの粘土紐「しの」をつくる。普通は助手(多くは奥さん)があらかじめ何十個と造っていた。成形は以下の「ひじり」「中継ぎ」「こうもり」「口つけ」の4段階に分けられる。

①「ひじりづくり」(写真176)

蹴輪轤の上に粘土をおき、その上にひじり台を載せて固定させる。続いてひじり台の上に「玉」を載せて、玉をよく手で叩いて縮める。この作業をよくしておかなければ割れことが多いといった。

この後、「しの」を積み上げるが、この作業は「練りつけ」と呼ばれていた。次にやや内傾した円筒状に「しの」を練りつけた後に蹴轆轤を廻しながら、縁皮をあてて水引きをして上に延ばす。その後、籠をつかって形を整え、最後に縁皮で縁を整えて仕上げる。

できあがった「ひじり」は5個ずつ「ひじり板」に載せ、2~3日後に少し乾いたら堀越焼の叩き締め道具（当て具）である「リュウズ」（図75・写真177）で叩いて底をあげた。この作業は「底上げ」と呼ばれていた。この後、籠の上に5枚重ねて伏せて置きにして乾燥させた。

②「中継ぎづくり」

詳細は不明である。当初は轆轤で成形されていたようであるが、昭和に入ると製瓶機で円筒状の中継ぎを抜くようになった。

③「こうもりづくり」

詳細は不明である。別個に轆轤で成形し、それを轆轤を廻しながら付けたようである。

④「口つけ」

「こうもり」同様、別個につくられた。轆轤の上に粘土を置き、しっかり叩いて締めた後、轆轤を足で蹴り水引きをし、口をつくる。その後、できあがった口は紐で切り離す。できあがった口は大きい亀板に5段重ねを9箇所に置いた。

口を付ける際は中指を中に入れ、片方の中指を外に当て、轆轤を廻しながら付ける。また、このときに事前につけておいた把手もつけた。把手は口の高さよりも2分（約6mm）下に付けた。これは、口より把手の位置が高いと折れるためであったという。ただし、製品には、口よりも高い位置に把手をつけるもの（図73-3・写真175）が少なからず見られる。これらは時期的にやや古く位置づけられる可能性があり、今後の検討が必要である。

⑤「ひとしあげ」

口の付いた硫酸瓶に「ねじきり」と呼ばれる道具（図71）でねじ切りを行う。この際、「ひとしあげ」といって、100~110本の瓶の口のねじ切りを行った。この際、道具の手前には職人が、向こう側に奥さんがおり、ねじ切りを終えた瓶の把手を「しめなおす」もしくは「しめる」といって、手で押さえ直していた。

⑥成形技法の変遷

硫酸瓶の成形の概要は上記の通りであるが、先述の通り、中継ぎは昭和に入ると製瓶機を使用するようになり、戦後になると、「ひじり」から「こうもり」までの成形は石膏型を主に使用していた。また、轆轤は当初は蹴轆轤を使用していたが、戦後には電動轆轤が多く使用された。

(3) 乾燥

口を付けた瓶を抱いて運び、庭の地板で乾かした。釉薬を掛けるまでの瓶は職人自身が回し乾かした。ここまでが職人の手の内（職人がする仕事）であった。

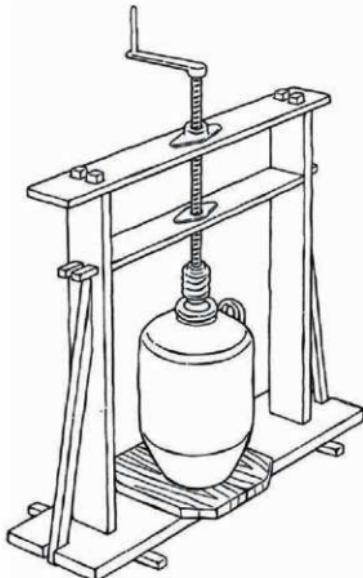


図71 硫酸瓶のねじ切り
(小野田市歴史民俗資料館1994)

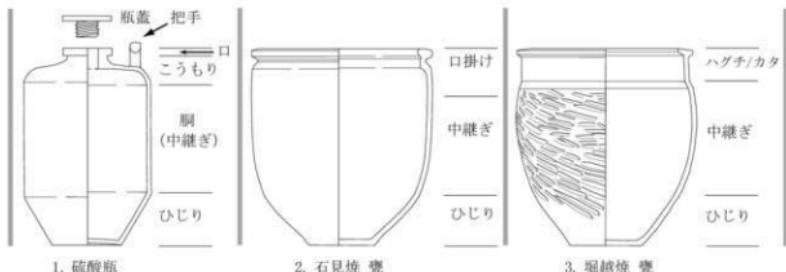


図 72 硫酸瓶・石見焼甕・堀越焼甕模式図（縮尺不同）
(硫酸瓶は小野田市歴史民俗資料館1994より作図)

(4) くすり掛け

多くの皿山では、セメントでパックを造っており、「ふね」を漕ぐといって、権ににた道具で来待軸を搔き混ぜ、それを網戸ぐらいの目の篩で通した。くすり掛けは半乾きの「半白地（はんしらじ）」の状態で掛けていた。まず、女性が内側をかけたのち（内ぐすり）、男性が外側に掛けた（外ぐすり）。

(5) 焼成

窯は10室前後の登り窯を使用し、一度に硫酸瓶を1000本程度焼成していた。窯焚き師は2人おり、交代制であった。窯積みの方法には台（「ぬけ」）に下の瓶を倒立させて置き、その上に上の瓶を正立させることにより、底と底を合わせて積む「2丁積み」と高・低の「ぬけ」に1個の瓶を正立させて置く「千鳥積み」があった。燃料には石炭と松の割木を使用し、焼成時間は10室ある窯であれば、約4昼夜程度を要した。焼成温度は約1200～1300度である。

(6) 検査・出荷

焼成された瓶は組合の検査手により、以下の手順で検査を受けた。瓶の口をゴムで栓をし、検瓶機（ポンプ）で圧縮空気を入れる。その瓶を水を張った桶に沈めると不良品からは泡が出るのでこれを基準に識別した。等級には上等、中（等）、2号瓶があり、上級には硝酸、中（等）には硫酸、2号瓶には塩酸を入れた。また、「こうもり」には上等に黒、中（等）に青、2号瓶に桃色のラベルを貼った。製品は有帆川経由で船積みされることが多く、沖合で帆船に積み替えていた。積み替える際にも、瓶が割れていないかどうか、木槌で叩いて検査をしていた。

8. 硫酸瓶の形態・規格について

(1) 初期の硫酸瓶と大正～昭和の硫酸瓶との比較

初期の硫酸瓶と大正～昭和の硫酸瓶の形態を比較すると、下記の相違点がある。これらのいわば典型的な硫酸瓶が成立したのは、初期の硫酸瓶が製造されてからしばらく後の明治30年前後ではないかと推測される。詳細は不明であるが、石見焼・堀越焼の陶工がその成立に深く関わっていた。

①「ひじり」が外へ開き、「中継ぎ」が直立するという独特の形態となる

これは石見焼、堀越焼の工程の影響と考えられる。輪軸では筒状の底部が成形しにくいことと、底部は外に広がりやすいことから、大甕と共に直立する形態が選択されたのであろう。硫酸瓶を観察すると、「中継ぎ」にはやや歪みが見られるものと直立するものがある。前者は「ひじり」から「中継ぎ」にかけて輪軸痕が顕著で、全体にやや丸みを帯びた形状をしている。以上により、前者は太い粘土紐「しの」

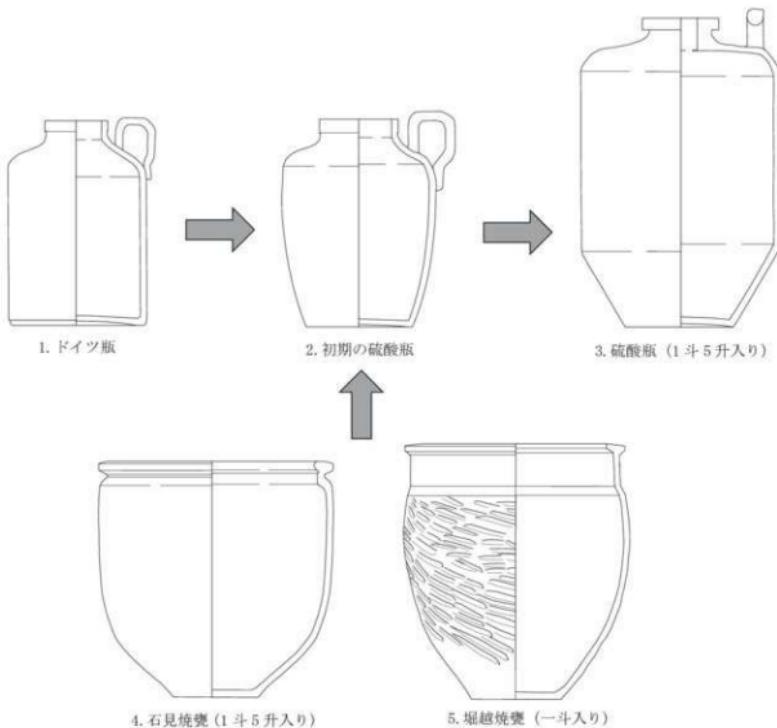


図73 硫酸瓶の変遷模式図（縮尺約1/8）
（ドイツ瓶・初期の硫酸瓶・硫酸瓶は小野田市歴史民俗資料館1994より作図）



を使用し、輥轆成形されたものと考えられる。これに対して後者は輥轆痕が顕著ではなく、「ひじり」と「中継ぎ」の境界が明瞭であるほか、「中継ぎ」に縦方向の線状痕を持つ。以上により、後者は「中継ぎ」に製瓶機を使用したものであり、線状痕は継目もしくは製瓶機の痕跡と考えられる。図75-3・写真175は後者のタイプである。

②把手が縦方向から横方向に変化する

運搬・使用にあたり、縦方向よりも横方向の方が上から容易に握ることができるためと考えられる。また、把手はドイツ瓶・初期の硫酸瓶と異なり、指4本で握れる大きさとなり持ちやすくなっている。

③口がすぼまり、ねじりが深くなる

硫酸等の内容物を洩れにくくするためと考えられる。

④大型化し、容量が一斗5升（約27L）となる

瓶が規格品であり、容量が定められていたためであるが、1斗5升入りは石見焼・堀越焼の甕にも存在した規格である。石見焼・堀越焼では大型品になるほど中継ぎの工程が増えるが、石見焼の場合、硫酸瓶と同じ容量である1斗5升入りまでは「二つぎ物」（3段階）で成形するのに対し、2斗入りからは「三つぎ物」（4段階）の成形となるので、工程を増やさないためにも1斗5升は最適な大きさであったと考えられる。

⑤灰釉から来特釉への変化

小野田では硫酸瓶製造以前には灰釉を使用していた関係で、初期の硫酸瓶には灰釉を使用していた。しかし、硫酸瓶の生産量の増大に比例して大量の釉薬が必要となつたため来特釉を使用するようになり、市内の釉薬工場、広島、島根県から仕入れていた。

（2）日本工業規格（J I S）による耐酸陶瓶規格

硫酸瓶の最終段階に近い昭和33年（1955）に制定された日本工業規格（J I S）「耐酸陶ビン」（昭和53年（1973）廃止）^{※2}には1形（常滑形）と2形（小野田形）が存在した。1形はその形態から小野田の硫酸瓶が祖形と考えられる。2形は1形と器高は同じだが、1形よりも口径が小さく、ねじも短いほか、胴径・底径もやや小さい。また、ひじりの位置がやや下に下がって丸みを帯び、底部は明瞭な上底である。今回実物を確認することができなかつたが、図で比較する限り、1形が古く、2形が新しい傾向を持つと考えられる。常滑よりも小野田の方が硫酸瓶製造の歴史が古いため、石膏型の使用により簡略化が進んだ結果ではないだろうか。今後実物により検討したい。

9. 硫酸瓶の製造に生かされた大甕づくりの技術

硫酸瓶の製造には主に石見焼・堀越焼の陶工が深く関与していたが、各工程における関連について述べたい。

（1）成形の工程

石見焼の成形工程は①「下継ぎ（ひじり）づくり」、②「中継ぎづくり」③「口掛け」の3段階、堀越焼においても①「ヒジリづくり」、②「中継ぎづくり」③「ハグチ/カタづくり」の3段階であり、硫酸瓶の「口つけ」を除いた工程と基本的に同じである（図72）。

（2）太い粘土紐の使用

太い粘土紐「しの」を内傾させて積み上げた後に水引きして成形する点は石見焼・堀越焼と共通する。これらの粘土紐積み上げは、粘土紐をあまり変形させずに太い状態で積み上げ、その後の水引きによる変形度が大きいのが特徴であり、輥轆轆を使用するが、積み上げ時に粘土紐を板状に変形させ

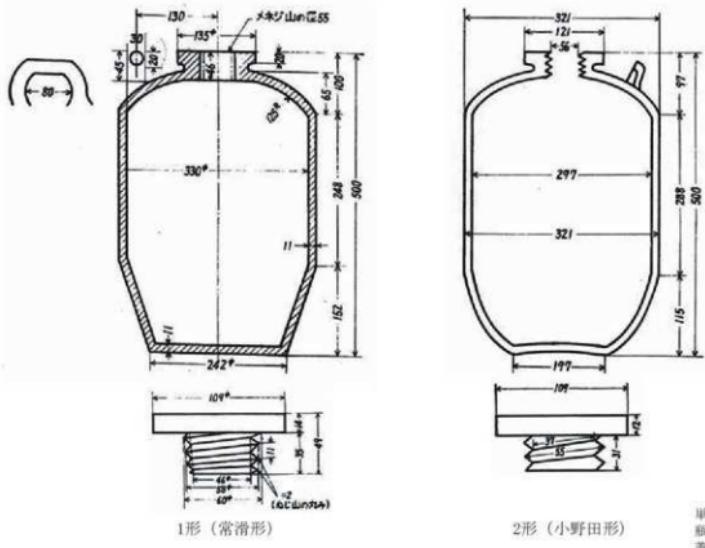


図74 日本工業規格 耐酸陶ビン JIS R-1550-1955 (1961年確認・1978年廃止)
(日本規格協会1963を一部改変)

る唐津焼とは異なる。ただし、石見焼と堀越焼は蹴轆轤の回転方向が異なっており、小野田においても前者は右回り、後者は左回りであり、厳密に区別されていた。つまり、小野田では陶工により、蹴轆轤の回転方向は異なっていた。なお、師匠が三田尻（堀越焼・末田焼）出身であったという元陶工・植木善氏は蹴轆轤は左回りを修得したと述べているが、同氏による製作写真（写真176-③）を見る限り、「し」の積み上げ作業である「練り付け」は石見焼と同じ右回りであり、「し」には反時計回りのねじりが加わっていたと考えられる。

(3) 「底上げ」

硫酸瓶の「底上げ」の工程は当て具である「リュウズ」を使用する点を含め、堀越焼に同じ工程が存在した。また、小野田皿山の製品には外面に叩きを持つ甕が存在することから、硫酸瓶の製造開始後も堀越系の陶工により甕が製作されていたことがわかる（図75・76・写真177・178）。なお、石見焼の陶工も「リュウズ」を使用して、硫酸瓶の「底上げ」を行っていたようである。²²

(4) 施釉

施釉は素焼をせず、半乾燥させた状態で来待釉を掛ける「生掛け」である点は石見焼と共通している。堀越焼も生掛けである。

(5) 烧成

詳細は省略するが、登り窯の構造、各部位の名称、窯焚きの方法は石見焼とほぼ共通する。石見焼同様、登り窯の最上室「ふかせ」では素焼き製品のみを焼成していたという。

10. おわりに

以上、山陽小野田市小野田の硫酸瓶と石見焼・堀越焼の成形技法を中心とした関連について、検討し、要点をまとめた。硫酸は日本の近代化促進に大きな役割を果たしたが、その運搬・保管容器として製造された小野田の硫酸瓶は単に欧米の技術を模倣して製造されたわけではなく、恵まれた陶土と立地を生かし、江戸時代（18世紀前半～後半）を起源とする石見焼・堀越焼の大甕づくりの技術を応用・改良することにより、工業製品として大量生産が可能となったのである。こうした点からも小野田皿山の産業遺産は日本の近代化の経過と実態を考える上で極めて重要であることを改めて強調しておきたい。

前述のように硫酸瓶は小野田のほか、常滑をはじめとして全国各地で製造されていた。今後、そうした他地域との関係や製品についての検討が必要であろう。また、硫酸瓶のみならず、小野田の窯業全般について工程・形態の変遷、流通等についてさらなる整理・検討が必要と考える。現在、小野田皿山の産業遺産は遺構を中心として劣化が急速に進行しつつある。小野田皿山の製品・遺構の調査をさらに進めると共に、早急に適切な保存・修復を行うことが望まれる。

謝辞

本稿執筆にあたっては、下記の個人・機関に便宜をはかりていただき、有益なご教示を受けた。末筆ながら記して感謝いたします。

河野豊彦、柳原博英、松井智、松永保美、山陽小野田市青年の家、山陽小野田市歴史民俗資料館、日本規格協会

【註】

- 1) 田畠直彦（2008）『佐野焼の「荒物づくり」一人間輪轆と叩き技法』『山口考古』第28号、山口 なお、堀越焼と末田焼については区別が困難な場合があるため、以下では「堀越焼」と表記する場合でも「末田焼」を含むものとする。
- 2) 平田正典（1979）『石見粗陶器史考』石見地方史研究会、江津（島根）による。
- 3) 江津市文化財研究会（1988）『石見窯』第13号 石見焼（丸物と瓦）、松江（島根）、有限会社エイティ・フォーラム（2006）『技を極める石見焼の匠』松江（島根）
- 4) 今岡稔・三宅博士（1987）『邑智郡川本町谷戸経塚・木谷石塔発掘調査報告書』島根県邑智郡川本町教育委員会、川本町（島根）
- 5) 石見陶器工業協同組合『大がめづくり 伝統的工芸品』（ビデオ）、江津（島根）
- 6) 以上、石見焼については別註の箇所を除き、註2平田正典（1979）による。
- 7) 小野田市歴史民俗資料館（1994）『小野田の窯業 皿山・その変遷』小野田（山口）
- 8) 木岡義清・三宅洋（1965）『対談筆記 小野田における硫酸瓶の盛衰 対談者伊藤作一・松井勘一』『小野田風土記2』小野田（山口）で、松井勘一氏は下記のように述べている。
「北海道には櫛輪以外に水はんどう、叩きはんどうを送っていたが、この叩きはんどうというのは、三田尻の職人でなければ、よう作らなかった。そのため、三田尻から職人が来て作っていたが、その種類は一斗、二斗、三斗、四斗までは作っていた」中略「作り方である。輪轆で作っておいてリウズといって、木をくくったものでバーン、バーン叩き、それで格好をとる。」
- 9) 小野田市史編集委員会（1962）『工業 第2章窯業』『小野田市史（通史篇）』小野田（山口）
- 10) 以上、小野田皿山については前掲註7・9文献、伊藤作一（1938）『且部落誌（三）』『小野田郷土研究』第七号、小野田（山口）、伊藤作一（1965）『硫酸瓶』『小野田風土記2』小野田（山口）、小野田市史編集委員会（1958）『小野田市史資料編下巻』小野田（山口）、小野田市史編集委員会（1962）『工場鉱山第一章工場篇』『小野田市史（通史篇）』小野田（山口）、小野田市史編集委員会（1987）『第4編近世第4節商工業 製陶業のおこり』『第5編近代第二章産業の近代化第三節鉱工業』『小野田市史通史』

- 小野田（山口）による。なお、註2文献によれば、小野田では高千穂製陶所が昭和40年代も耐酸瓶を製造しており、昭和45年まで耐酸瓶を宇部興産に納めていたという。
- 11)経済産業省（2007）『近代化産業遺産群33～近代化産業遺産が紹介する先人達の物語～』東京
- 12)宇部・美称・山陽小野田産業観光推進協議会により企画されている産業観光バズツアーのうち、小野田の窯業をテーマとした『窓のまち小野田』は平成20年度に開催された「第1回地旅大賞特別賞」を受賞した。
- 13)日本科学振興財団（1984）『産業技術の歴史的展開調査研究』東京
- 14)前掲註10小野田市史編集委員会（1987）『第5編近代第二章産業の近代化第三節鉱工業』『小野田市史通史』小野田（山口）、柿田富造（2000）『焼酎瓶・硫酸瓶の変遷－常滑焼を中心にして－』『産業遺産研究』7、中部産業遺産研究会、豊橋（愛知）
- 15)日本工業会（1994）『明治工業史学工業編』原書房、東京（1925年発行の復刻）
- 16)江村恒一（1935）『大阪窯業株式会社五十年史』大阪窯業株式会社、大阪、前掲註14柿田（2000）
- 17)大日本人造肥料株式会社（1936）『大日本人造肥料株式会社50年史』東京
日本合資製造株式会社は社名変更を経て大正12年（1923）に大日本人造肥料株式会社と合併した。同50年史には「初め當工場使用的硫酸瓶は江州信楽より取り寄せてみた（以下中略）」との記述がある。
- 18)前掲註8
- 19)前掲註2平田（1979）によれば、石見においても硫酸瓶製造が試みられたが、土質が違うためか水漏れが多く、ほとんど失敗に終わったという。
- 20)神崎宣武（1976）『やきもの風土記』マツノ書店、徳山（山口）
- 21)前掲註15、前掲註14柿田（2000）
- 22)大正2年（1913）に産業組合法に基づき、無限責任須恵高千穂陶器信用組合が組織された。この組合は大正末年に本山陶器信用組合と名称変更し、昭和20年末に解散した（前掲註7）。
- 23)常滑では明治末年から焼酎瓶の本格的な製造が開始された。その器形は底～胴部が筒状（切立）であるのが通常であった。一方、小野田では硫酸瓶と近似した器形の焼酎瓶が多いが、これは小野田では先に硫酸瓶が製造されていたことに由来すると推測される。これに対して、常滑では硫酸瓶は小野田と同様な形態に造り分けており、その祖形は小野田の硫酸瓶に求められる。なお、昭和前半になると焼酎瓶の主要産地は小野田と常滑の2ヵ所となり、昭和11年からは小野田と常滑は相互に組合員を派遣して、価格のダンピングがないように監視していた（前掲註14柿田（2000）・前掲註7）。
- 24)以上、信楽、常滑の状況については前掲註14柿田（2000）による。
- 25)前掲註20
- 26)前掲註8で伊藤作一氏が指摘している。
- 27)前掲註16
- 28)中村八助・田辺澄生（1978）「小野田粘土の性状と製品物性に関する基礎的研究」『研究報告』第10号、山口県商工指導センター、山口
- 29)松永保美氏のご教示による。
- 30)松永保美氏のご教示による。
- 31)前掲註2
- 32)日本規格協会（1963）『日本工業規格 耐酸陶ビンR1550-1955（1961確認）』東京（1978年廃止）
- 33)前掲註20によると、石見焼の開工は本来玉造りであったが、小野田の土が成形するのに粘りがありなく玉造りに向いていないため、紐造りの方法を習得するようになったという。しかし、平田正典氏（前掲註2）によれば、石見焼では8升入りまでの甕は玉造りで、8升入り以上の甕は紙造りであったとされる。また、同氏によれば小物職人は玉造りにより成形を行っていたので、上記で神崎氏が述べているのは石見焼の小物職人についての記述であった可能性がある。

小野田豊山の硫酸瓶と石見後・廢錫後の大甕づくり－硫酸瓶の研究①－

34) 横山浩一（1982）「佐賀県横枕における大甕の成形技術－現存する叩き技法の調査」『九州文化史研究所紀要』第27号；九州

文化史研究所、福岡

35) 前掲註7・8・20

36) 前掲註7

37) 前掲註1

38) 前掲註3江津市文化財研究会（1988）には、名称は記されていないものの、「硫酸瓶の底をたゝくとき使つた」道具として「リ

ュウズ」の写真が掲載されている。



①「しの」と「玉」



②「練りつけ」底の上に「しの」を練りつける



③やや内傾させて「しの」を積み上げる



④「水引き」の開始



⑤適当に引き上げてから荒漉を使用する



⑥仕上げた後、「手漉」で切り離す



⑦柔らかいため、「受け輪」(補助具)を入れる



⑧「ひじり板」に移し、「受け輪」を取り除く

写真 176 硫酸瓶の「ひじりづくり」工程概略（小野田市歴史民俗資料館 1994、一部改変）

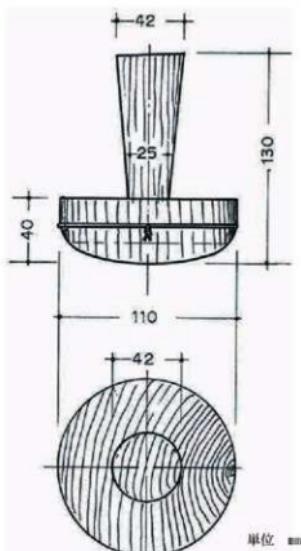


図 75 リュウズ実測図（縮尺約 1/3）

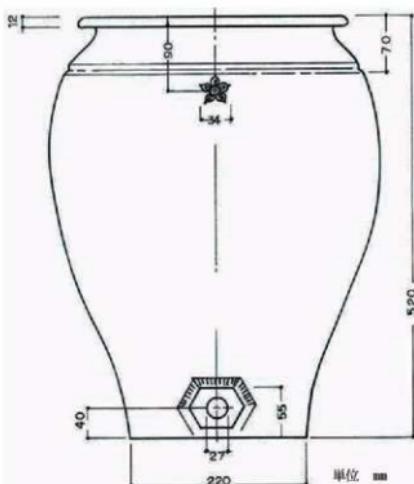


図 76 堀越系甕（半胸甕）実測図（縮尺約 1/6）



写真 177 リュウズ



写真 178 堀越系甕

図 75・76、写真 177・178
(小野田市歴史民俗資料館 1994 より引用
一部改変)

報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぽう
署名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	一平成18年度-
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	4
編著者名	田畠直彦 横山成己
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 Tel083-933-5035
発行年月日	西暦2010年(平成22年)2月26日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 34秒	131度 28分 29秒	20060424- 20060428	36m ²	農学部附属家畜病院 改修Ⅰ期工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 34秒	131度 28分 29秒	20060612- 20080811	225m ²	農学部附属家畜病院 改修Ⅰ期工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 41秒	131度 28分 14秒	20060612- 20040808	84m ²	教育総合研究センター 改修Ⅱ期工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		33度 08分 34秒	131度 28分 14秒	20061205- 20070110	100m ²	資料館(東亞経済研究所) 新営工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落跡	奈良～平安	埋没谷	土師器・須恵器 製塙土器	
吉田遺跡	集落跡	奈良～平安	掘立柱建物跡・溝・土壤	土師器・須恵器 縄袖陶器・木製品	
吉田遺跡	集落跡	繩文～古墳	ピット・河川・杭列	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器	
吉田遺跡	集落跡		土壤・落ち込み・河川		

山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成18年度－

平成22年2月26日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

